女鑑

第十六年
第壹號

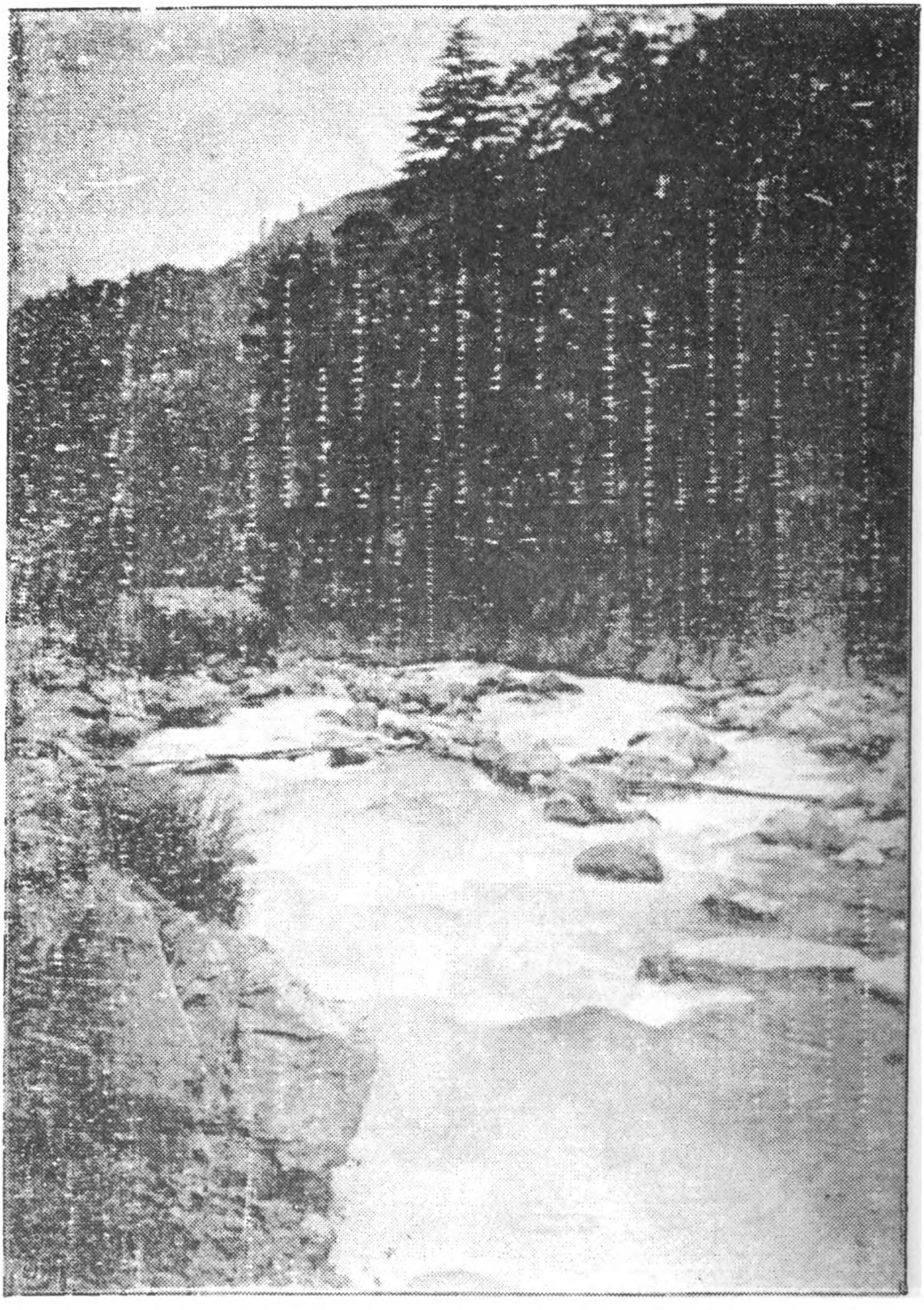

東京日本橋駿河町
恭賀
新年
三越呉服店
みつこしごふくてん
電話本局
五二五番
一二一七番
一八五六番
一八六〇番
二二二二番

女鑑

第十六年第一號目次

謹賀新年

新年河

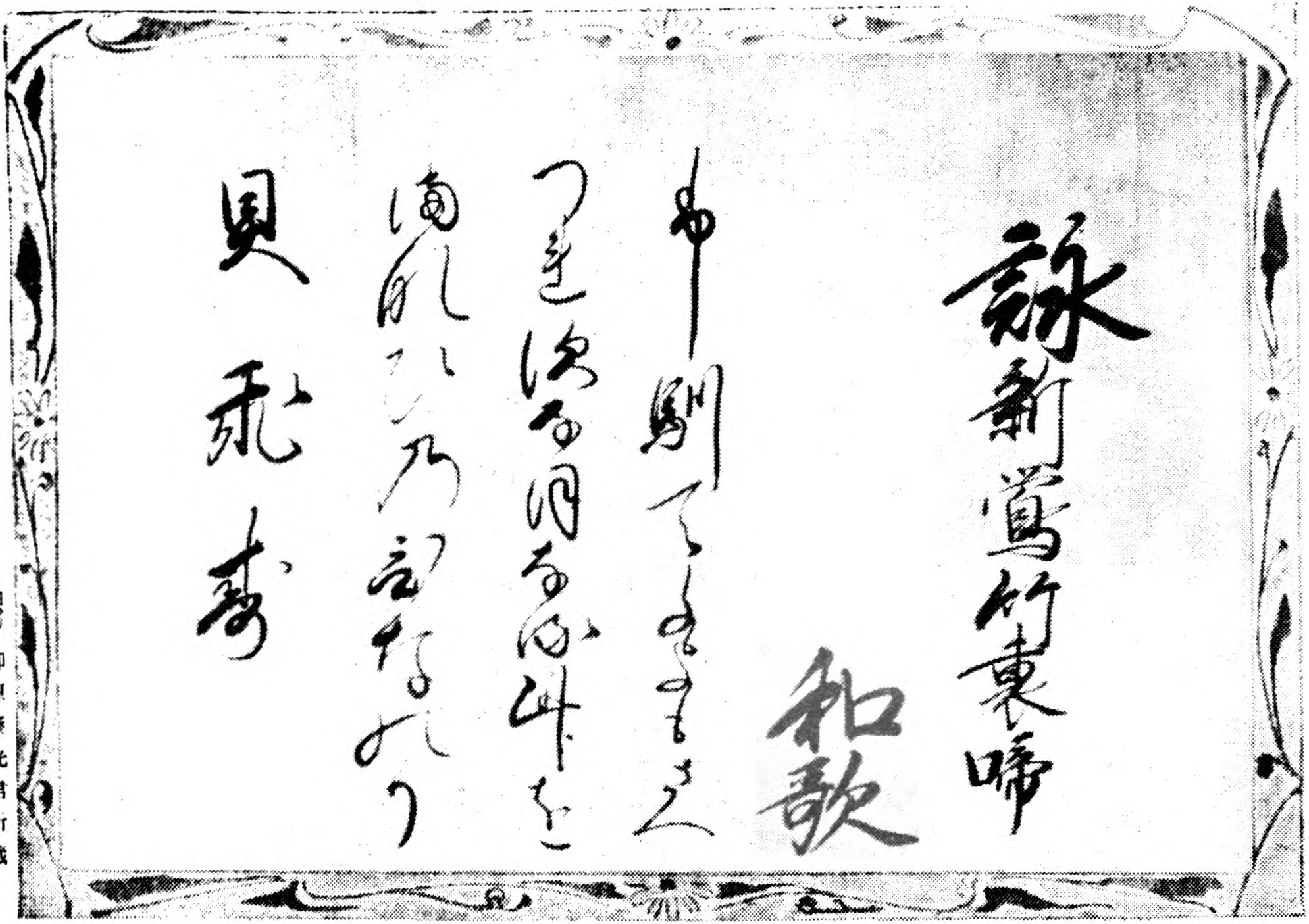


明正天皇御宸翰



伯爵柳原義光君所藏

孝明天皇御宸翰



伯爵柳原義光君所藏

徳川公爵家の繁榮



追羽子







男爵 徳川厚君撮影

謹賀新年

各國皇室及ビ王家御用

ネッスレスミルクフウド



歐洲諸國及本邦名醫ノ讚辭ヲ辱フセル者ナリ。小兒、病者又平素不消化ニ苦ム者ニ適當ナル最良滋養食物ナリ。

最モ盛カンニ藥舖洋酒食料品店ニ於テ販賣ス

謹賀新年

恭賀　新年の贈答品　新年

外務大臣官邸厨房主管 宇野彌太郎
華族會館厨房主任 渡邊鎌吉 共著
（新刊）

模範的料理書

家庭西洋料理

洋裝頗美麗 全壹冊
正價金九拾五錢
郵稅金八錢

●彩色石版畫＝及びアートタイプ數葉入

本書は西洋料理界に有名なる渡邊宇野兩先生が特に我家庭に適するやう親切叮嚀に説明せられたるものにしてスープ、ソース、卵理、鳥料理、魚料理、菓子、サンドウイツチの二十二部品目三百四十餘に別ち又附錄として食事の心得食卓の飾付盛り花、花束の造り方諸種の献立等凡て食事に關する事項を漏れなく掲げ多くの圖解を挿みて説明を助けたれば如何なる素人と雖もこの書一本を厨房に備へおきなば師につくの要なく如何なる料理にても隨意に調理する事を得べし

赤堀峰翁
赤堀峰吉 共著
赤堀菊子

第四版

即席惣菜料理

洋裝美麗 全一冊
正價金參拾五錢
郵稅金四錢

小野鵞堂書

● 増訂 **女子手紙文** 和裝全一冊

正價金四拾錢
郵稅金四錢

赤堀峰翁
赤堀峰吉 共著
赤堀菊子

● 家庭 **十二ヶ月料理法** 和裝全二冊

上卷正價金五拾錢
下卷正價金五拾錢
一冊郵稅金八錢

齋藤圓子編

● 女子敎科 **包結之栞** 和裝全二冊

正價金九十五錢
郵稅金十錢

未蓄庵
嬌菓著

第三版

實驗和洋菓子製造法

洋裝美麗 全一冊
正價金六拾五錢
郵稅金六錢

發行所　東京日本橋區通一丁目　電話本局四一四一番　大倉書店

謹賀新年





定價●金五十錢●金廿五錢●金十五錢●金十二錢

謹賀新年



ヒゲタ印醬油

家庭の六景



鏑木清方氏筆

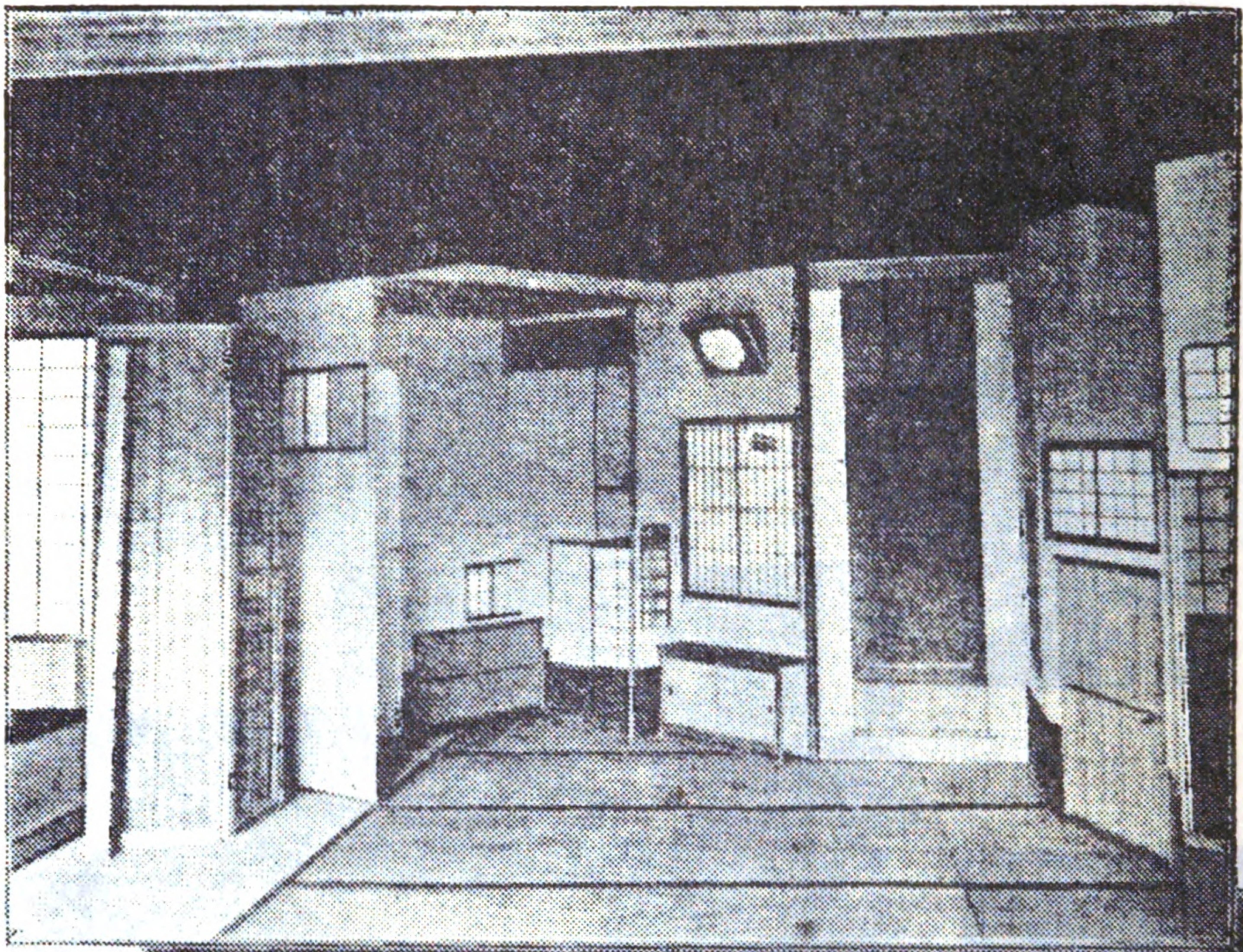
歌がるた

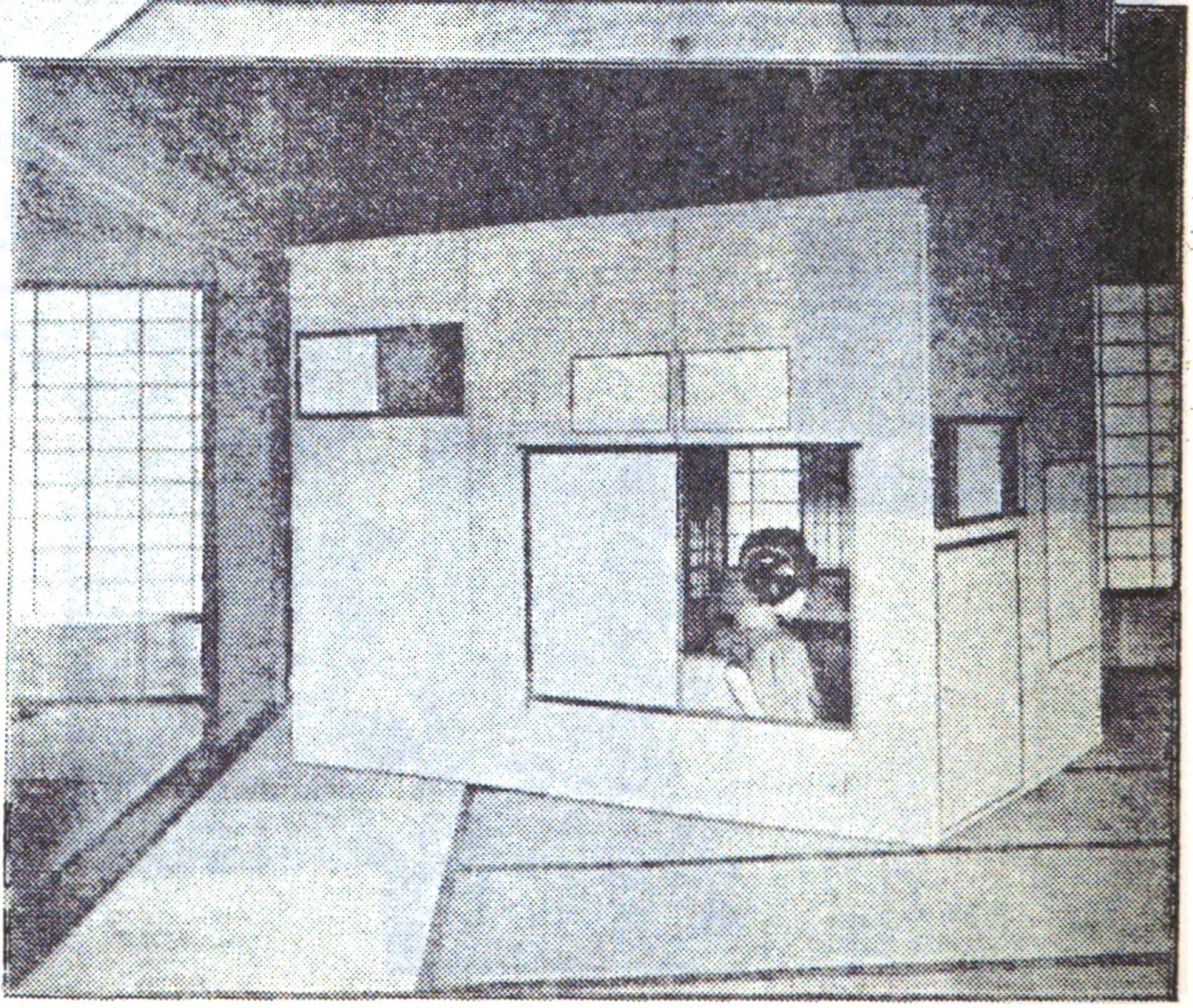




徳川男爵撮影

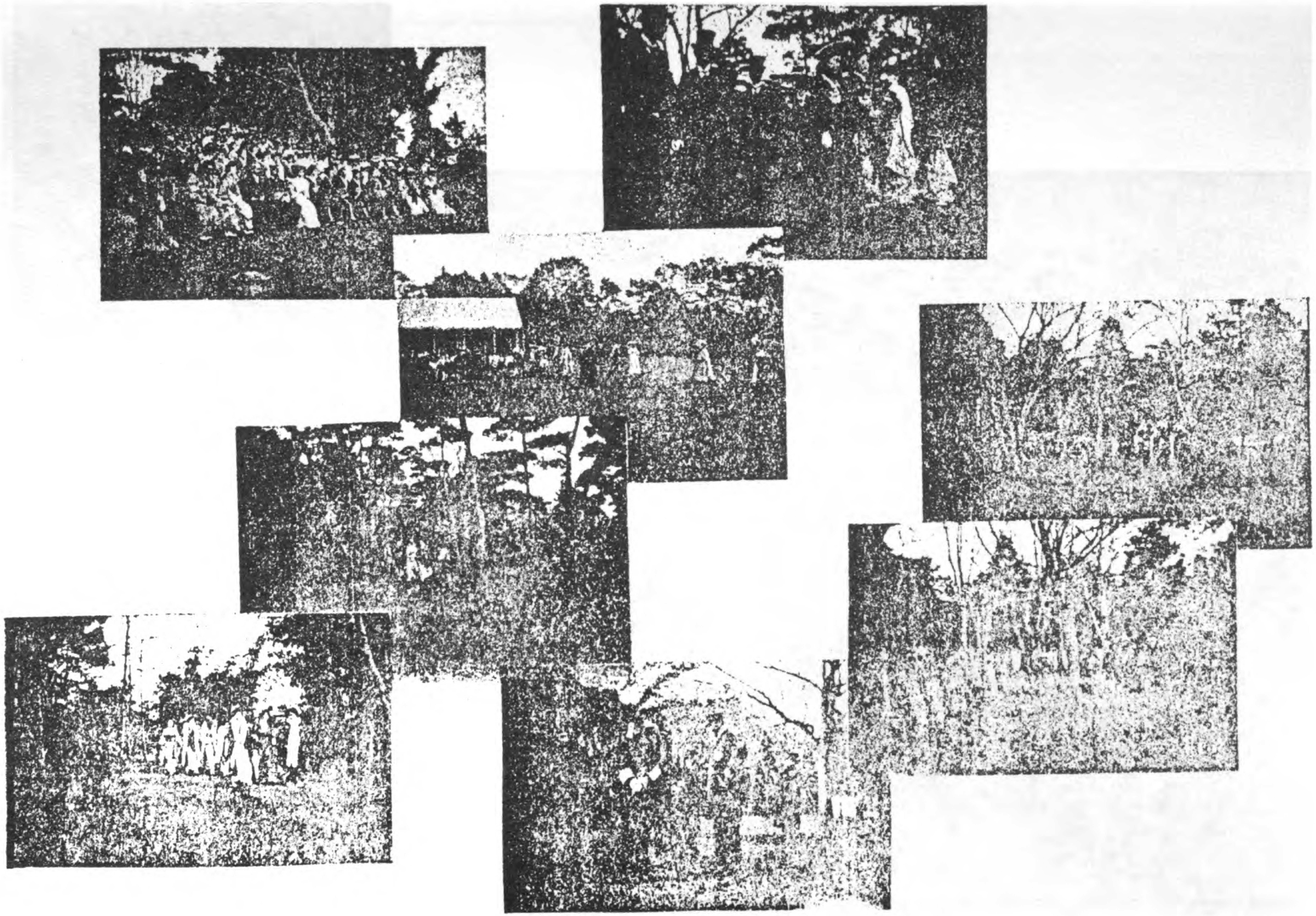
風流紙部屋





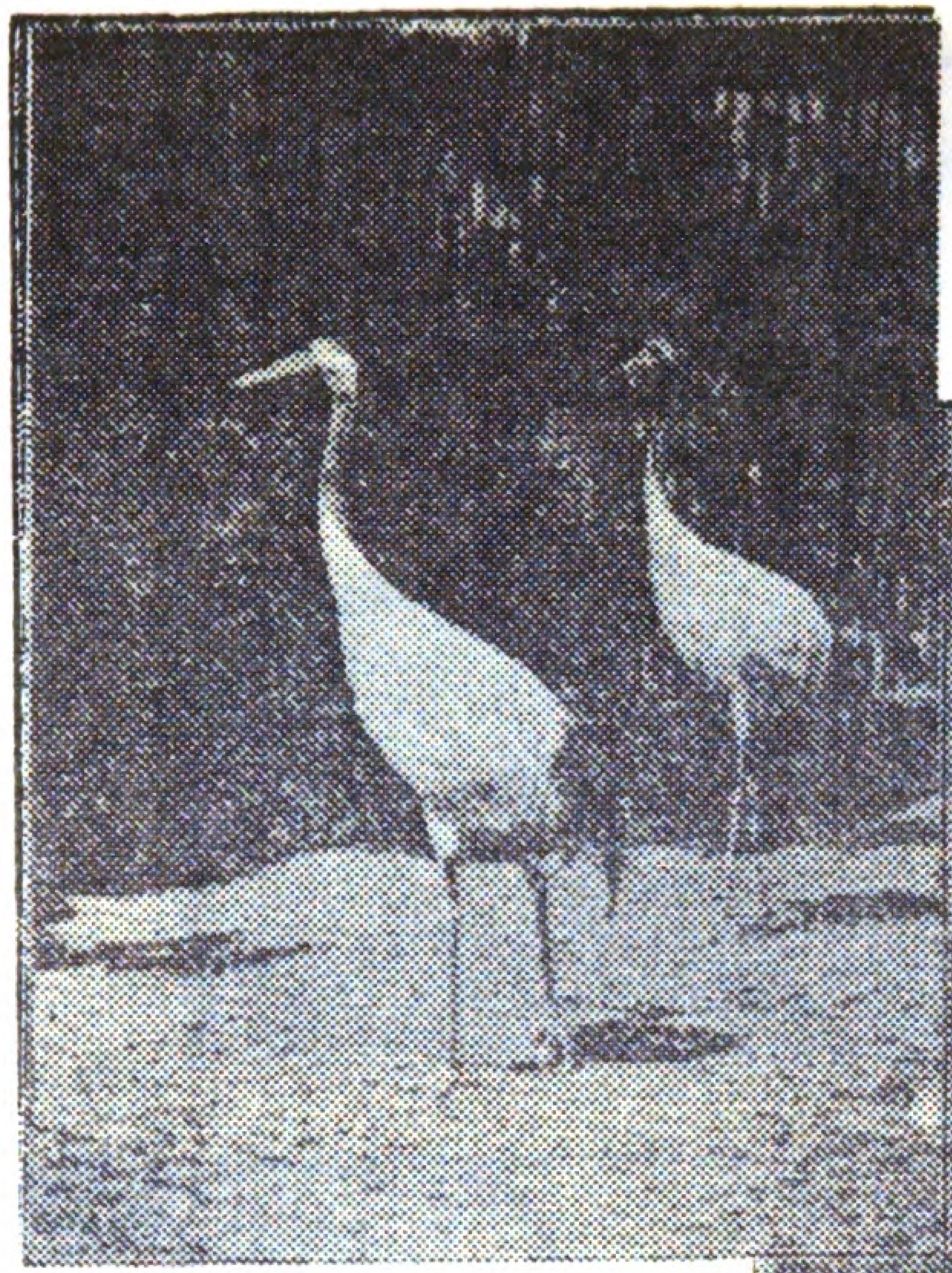
徳川男爵撮影

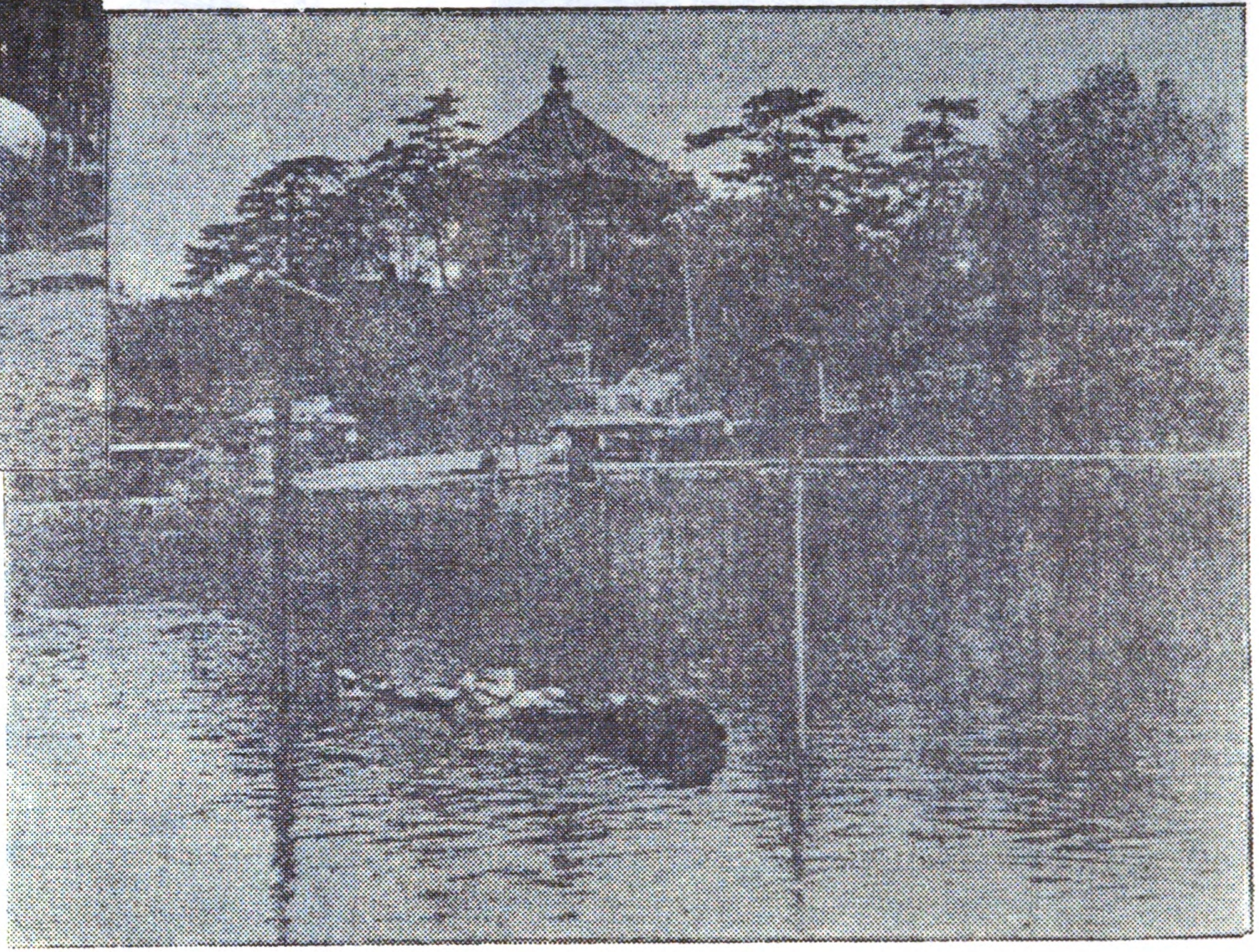
園田邸の園遊會



德川男爵撮影

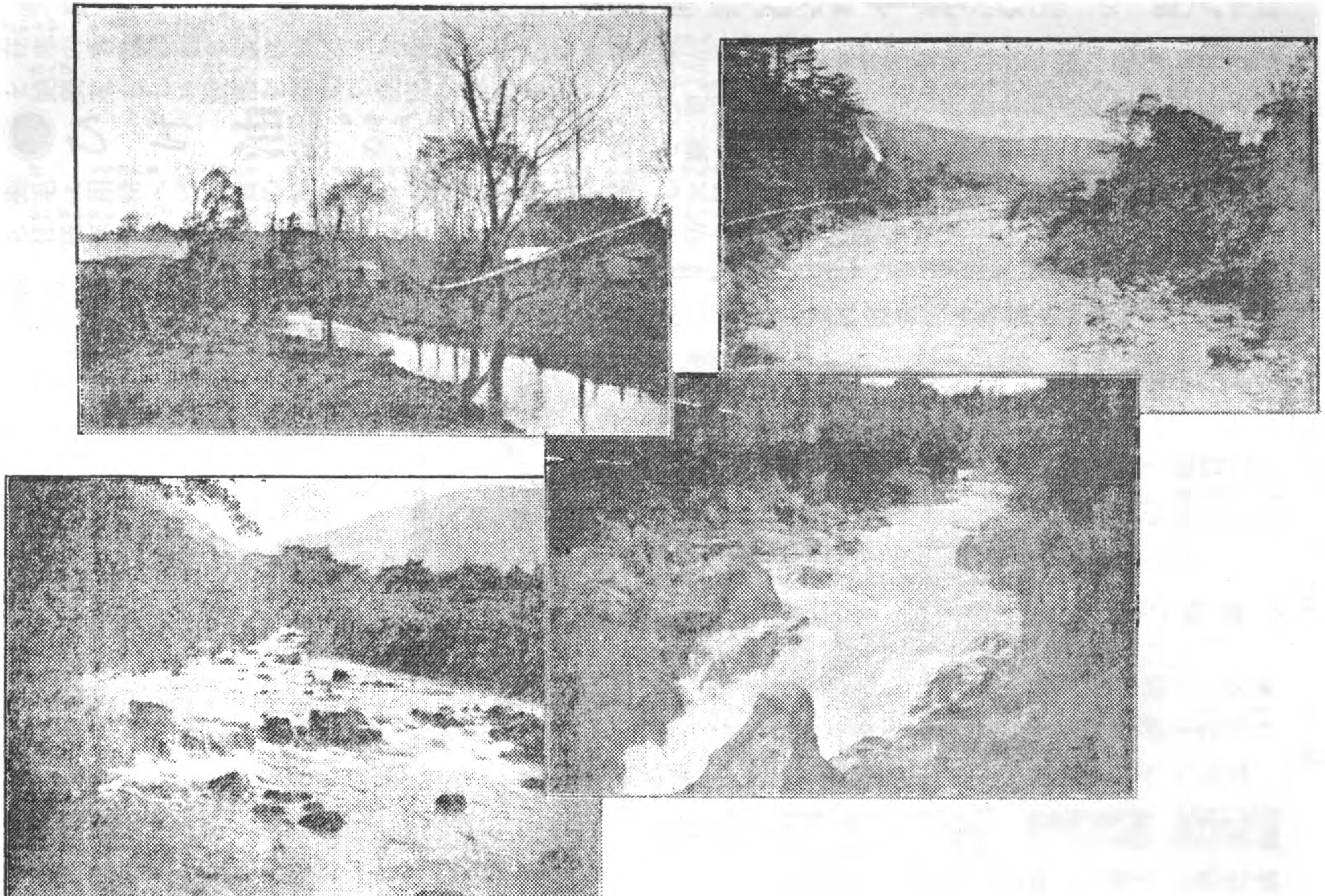
鶴　龜





德川男爵撮影

名所河



徳川男爵撮影

謹賀新年

◉改良 **水油**（オイトリキシン）（花かつら） 三個箱入 一圓二十錢

在來の香油の如き髪にねばりを生せず毛髪の光澤を艶美ならしめ脱落を制止し疾患を豫防す

◉ **ひげ油**（プロチミン）（住の江） 三個箱入 九十錢

髭毛に用給へば適當の粘力を生じ隨意の形狀を保ち且在來の品とは異り洗去ること容易なり

◉改良 **びん付**（コラキン）（玉椿） 三個箱入 金六十錢

高等化粧料

◉改良 **すき油**（メラセーン）（柳糸香） 三個箱入 一圓五十錢

◉ ふけとり **香水**（ラウリン）（花たちばな） 三個箱入 一圓八十錢

本品を常に御用ひたまわらば第一剛き毛髪を柔軟ならしめ且つ汚れを淨め永く清潔の狀を保たしむ

◉ わかとり **香油**（アチモシン）（春風油） 三個箱入 一圓二十錢

頭髪の汚れを容易に梳き去るが故に髪を洗ふの煩勞なし故に病中病後御使用には至極好適の良品也

本品は高等化粧料中の化粧品なれば貴婦人令孃方の御常用に適し皮膚を艶美滑澤ならしむる効あり

高等化粧水

ヲイテルミン



三個箱入 七十五錢

◉新製 **洗浴化粧液**（エリノイン）（花の露） 一瓶八十錢

本品は高尚なる芳香藥及び軟和劑の配伍し有は朝夕盥嗽及び洗浴に際し此液を用ゆれば如何なる水と雖も皮膚をあらし肌色を損することなく色を白くし天性よりも麗わしき色つやを生ず殊に殺菌消毒の効力を有せば當季衛生上缺く可からざる逸品也

◉凡て美麗なる箱入としたれば御進物用には至極適當の良品なり

◉取次販賣店は全國化粧品店小間物店藥店に販賣致居候

◉ **うがひ水**（エオチン）（しのゝめ） 三個箱入 九十錢

第一口腔を清潔にし粘液を去り臭氣を防止し黴菌を撲滅し虫齒を豫防し出血しやすき齒齦を固め且つ咽喉加答兒を豫防す一名水はみがきとも云ふ

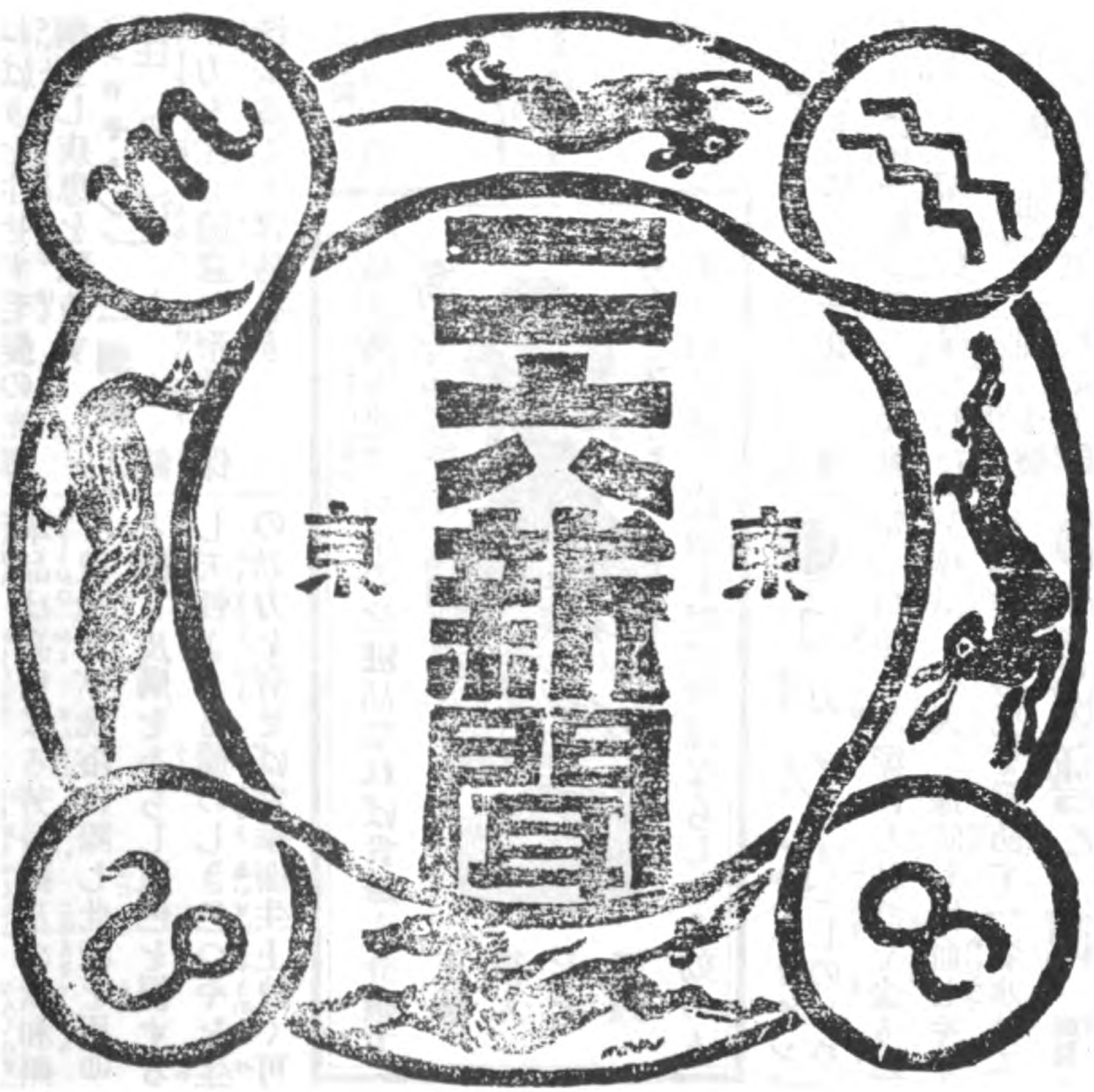
◉ 福原衛生 **齒磨石鹸** 煉製大廿五錢 同小十五錢 粉製十五錢 袋入三錢

◉新製 **旅行携帶用衛生齒磨** ゴム器入 一個三十錢

處方調劑・藥品器械・衛生材料・化粧品問屋

本舗 東京市新橋出雲町角 電話新橋二三四番 **資生堂 福原有信**

謹賀新年




恭賀新年
本年も相変らす御贔屓のほど奉希上候
御題新年の河に因みて
新案模様年玉用
帛紗半衿其他好種
陳列致置候
東京日本橋
白木屋呉服洋服店
大福喜禮
一月二日三日
賣出し申候

第十六年　女鑑　第一號

新年を迎ふ

元日や神代の事も思はるゝ、實に人の心も改まる年のはじめとなれり、門には千歳の松竹を飾り、家には延年の屠蘇を酌む、めでたさの是や始なるらむ、

仰ぐも尊し千代田の宮は、いよ〳〵おん榮えまし〳〵、大内山に舞ふ鶴の、君が代うたふ聲も長閑に、都大路は幾萬の子女衣着飾りて、往さ來るさの中に、まだ新しき凱旋門の、何をか語り顔に立てるも、ついに知らぬめでたさなりけり、さればけふ日出づる國の光りを、外つ國々の人も仰ぐなるべし、いでや諸孃とゝもに謠はむ、

君が代は千代に八千代にさゞれ石の巖となりて苔のむす迄

新年雑感

◎年賀狀　相變らずの文字も活版摺にて、多くは刷毛序の年賀狀も、受けたる時の心は嬉しきものなり、事繁き身に、一年の不沙汰の詫も改まつて改まらず、兼て無事と現住所とを知する方便にもなれば、端書といふものの出來て後の年賀狀は、まことに都合よきものとなれり、これを廢しては抔いふ人の心きゝたし

◎床飾り　裏に城あり、代々この所に住みて、子孫にゆづるの義に始まりたる、世俗の所謂延喜語より撰びたる品々を、今の時に、今の智識ある人も、一月の床飾として用う、考へて見れば儀式といふも滑稽也されど多くの儀式は滑稽の美裝したるものにて、かゝる儀式の行はるゝ間が、眞に人間の世の中らしき也

◎松の内　智慧も分別も、齷齪しては出ぬものなり、世間の美裝され、人の心の長閑になつた、所謂一月の松の内は、氣をのびやかにして、一年の作戰計畫をする日なり、されば松の後に追掛られたる仕事は、大晦日まで逃遂されず、かくて一年を忙がしきのみにして終り、この例におし行がば、一生も同じことなり

◎この心　若水を酌みて手わらひ、口そゝぎ、うらゝかなる初日の影を迎へたる時は、きのふ迄の穢き心を消められたるやうに覺ゆ、この時、この心、いつまでも保ちたきものにて、すべて改善の實の擧がるやうにしたきもの也、この改善の好動機を、たゞ喜ばしさと樂しさに忘れて、取逃さぬやうしたきものなり

◎女の世　一月は婦人の世界也、否婦人の采配をふるべき家庭の、尤もうるはしかるべき時也、婦人は此時を善用して、家庭の團欒を睦まじく續くることに一工夫あるべきなり、たゞ一家の平和が、門松と床飾によれるものにあらざることを思へば、平時家庭の不和は、いづれより起れるかを容易く了解するを得ん

◎不相變　維新前の制度は、箱に物を入れたる如きものにて、すべて相變らぬをもてめでたしとし、年頭

の挨拶もこのめでたき言葉を用ひたりしが、現今我國の婦人の有様は、少し相變つて貰ひたきもの也、流行を趁ふこと、談話熟語を新らしくすること、羞まずして人の前に出らるゝ位の事では、物足らぬやう也

◎裏と表　新年は人の心を樂ましむるか、樂しげに見するものなるか、新年を迎ふる場所身分はさま〴〵なるべし、されど云はず語らず樂しくする方針をとりて、皆樂しげにも見ゆるなり、されど十中の八九は後者の方なるべし、車引く人の威勢よきを、樂しげにも見らるゝは、乘りたる人の心なき眼より見れば也

歌骨牌と追羽子

女子の一月は、歌骨牌と追羽子の世界なり、之を見るのみにても、實に好個の畫題とも思はれ、如何にも女子の遊戯らしく、極めて優美にその趣味を感じらるゝなり、

日の暮るゝをも知らず、心も空に羽子突きかはして遊ぶ、その雙の袂よりは春風通ふやうにも思はれて、いかにも長閑に、いと興ふかく、あまり廣からぬ庭のうちにも樂しまれ、四肢ともに働かせて、どこまでも女らしき態度を失はず、實に戸外の遊戯として、一月ならでも勸めたく思はるゝなり、

夜の更くるをも知らず、傾くまでの月を見しかな、などと興じて遊ぶ、歌骨牌はそもいかなる人の思付きたるにや、文學を加味する遊戯に、これ以上のものありとも思へず、今少し歌意のよき作を撰ばゞ、更に申分なかるべし、されどこの遊びは、定家卿の選びたる百人一首によりて、人の感興を深くするものにて唯高潔なりと稱する位のものにては、更に賞翫せられぬなり、定家の選びて、少しは加筆もしたるこの歌集は、一讀千載の記憶に殘り、幾度繰返すも飽くことを知らず、極端なる戀を歌ひたるものあれど、之を讀んで劣情起らず、其の調飽くまでも高ければなり、百首の歌千歲に萬戸に賑はす、又盛ならずや（愛氷）

論説

家庭に於ける文藝趣味

伯爵 柳原義光君談

氣候はいつも春ばかりにすることは出來ぬが、家庭には絶えず春風を通はせることが出來る、花咲き鳥歌ふ如き樂み深きものとすることが出來る、これは家庭を處理する妻の心術と注意の如何による事である、されば妻たるものが、一般世間の注文する如く、臺所より戸締りの用心に至るまで、或は經濟のこと、或は看病のこと、其他一切一家に起れることを、遺漏なく處理して、身分相當に心をも働かせ、身體をも働かせ、誰が目にも行屆けるやうに映じて、樂しき家庭は作り出されるのであらう、以上は樂しき家庭を作るべき要素で、家庭に於ける妻の務として間然する所はない、されど娛樂の方法をも講じて、一家は花の如き美しきものたると同時に、鳥の歌ふ如き長閑なる樂しきものにせねばならぬ。

娛樂の方法に就ては、種々なる考案もあらう、されど文藝の趣味を解して、家庭を調和する聯鎖とする如きは、娛樂の最上乘であらうと思ふ、この趣味は妻ばかりでなく主人たるものも、職業の如何を問はず、先づ一通り文藝の趣味を解し得るやうでなければならぬ、たゞ働くことをのみ、金を貯へることをのみ能事としては、家庭は實に綿を舐る如き無意味のものになつて終ふ、

單に文藝といへば範圍の廣い話で、或は詩歌、或は繪畫なりで、有髯男子が一生を通じて研究の價あるべきもので、世渡りの片手間には六かしいかも知れぬ、去ながら一通りの趣味は持つて貰いたいものである、物質的の快樂には限りがあるが、文藝的の樂みは無盡藏である、西洋などで然るべき家庭では、一日を快く働いて、二時間なり三時間なり、家族は卓を圍んで、邪氣のない文藝談をなし、頭を休め、團欒の實を擧ぐるやうにして居る、

それ等の趣味を解せぬ話になると、たとへば婦人の最も數を增したがる衣服にしても、本人は價の外に撰ぶ所のある積りであるが、趣味を有てる目からは、それが價さへよければ宜いものにして居るとしか見えぬ、帶に對する色合であるとか、縞柄の身柄に似合ふとか似合はぬとか縱のものがよいか横のがよいか、晝見てよいか、夜見てよいか、その邊の事は更に要領を得て居らぬ、彼の團十郞が左までよくない衣裳を着た場合にも、それが綺麗に見えたのは、着物の着工合、帶の結びやうばかりではなく、その物の色合なり模樣なり、すべてに調和がよく、例へば晝薄暗い舞臺に着て出て見得がよいとか、夜電氣の光に照らしてよく見らるゝとか、その邊に深く趣味を有つて居るからである、

近時衣服の流行に就て、その流行の中心が變遷し、從來下流より遡つたのが源を上流中流より發するに至つたのは、自然の道理でもあらうが、大に喜ぶべきことである、これは趣味を解するものゝ多くなつた結果であらう、決して長く頭腦のない醜業婦などが、流行を支配し得べきものではない、就ては趣味の養成がます〲必要である、

次に家庭に採用すべき小說である、これは藝術の美と倫理問題とを混線せぬやうにせねばならぬ、或場合に於ては、藝術と倫理は全く見地を異にして居る、演劇も家庭を牽ゐて見せるに、同じ事でも、倫理に抵

觸せざる範圍内で、趣味のあるものを撰ばねばならぬ、西鶴やゾラなどの、極端なる寫實の小説は、其時その物を彷彿たらしむべく、その文章は妙域に入つて居るが、これは藝術の美を味ひ得る力のあるものより見れば差支ないことで、猶一歩進んだ寫實でも、藝術の美に於て得る所があれば構はぬ、されど一般の眼はそこ迄には容易に進まぬ、或は百年千年を待つても、望まれぬ事かもしれぬ、されば家庭には、是非倫理問題と相談をして、倫理と藝術の衝突しない作物を採用せねばならぬ、近頃有名なる小説家の著はした小説中、美術の立脚地より見れば、傑作と見ゆる者も、倫理的方面より見れば往々不都合なものがある。演劇も或は言ふべくして行ふ可らざるものかもしれぬが、美術を味ふべき頭腦ある人を、二百人なり三百人なりといふやうに限つて、それに見せるものにしたならば、倫理には距離の遠き演劇でも、更に觀客に危險はないのであるが、世に所謂盲目千人であるから、公衆に見せるには、同く倫理問題と衝突せぬものを撰ばねばならぬ、繪畫も同じことで、藝術の美を味ふ力のないものが、多數を占めて居るのであるから。風俗にも餘程の注意を拂はねばならぬ、藝術に遊んで居る人が自己を標準

家庭と文學

◎日本女學の困難　私は女子教育の衝に當つてより、日本女子教育の不十分のことを考へて居りますので、能ふ丈け外國の書物も取寄せ又實地に就ても研究して居ります、例へば校舍で養ッて居る生徒の現在將來に就て、種々心配も致して見ましたが、何分日本では、西洋と比較にならない困難があります、それは誰も言ふ所の讀書と云ふことさへも、西洋よりは困難で、西洋でペンで書くのとは違ひまして、楷書、行書、草書と云ふ樣に種々書く丈でも困難があるので厶います、それから讀むと云ふことも……先づ文章から申しましても、叙記體、消息文體、男の文章と女の文章との區別、又交互體と云ふ風に、讀書の仕方も大變多いので厶います。

◎家政の煩務　加之ならず、西洋の家庭では、中以下では自分の衣服を仕立ないでも、料理をしないでもありませぬけれども、日本の樣に、下から上までの事を悉く女子一手で遣る樣なことはない、即ち

として、一般の社會を十把一束に見ては困る、此點に於て、美術を喜ぶ予が、黑金警視の方針の如きも、其職に在るもの丶所置として誠に其の當を得たものと思ふのである、

次に家庭に於ける第一の娛樂とも見るべき音樂も、趣味は同じことで、作歌、作譜に注意せねばならぬ、たとへば長唄の如きも、其譜節を上品なものとして聽けば、それ以上の妙味はないやうに覺え、上品なと云ふと面白いといふのが別問題になる、上品で面白いといふものも出來ぬではあるまい、然らば日本音樂では何であらう、それは他日推選することヽして、この長唄の文句でも、唄ふ本人兎角夢中のやうであるが道成寺の『誰に見しよとて、紅湼漿つける、みんなぬしへの心中立』の所などは日本婦人の特性である、優しいしをらしい、美德を世話に言現はして居るが、越後獅子の『小千谷縮のどこやらが、見えすく國のならひにや』等は、あまり見えすかぬ方がよくて、訂正せぬ以上は家庭に採用することは出來ぬ、これからは戰勝國の民として、高潔な雄大なものを歌ふやうにしたいもので、意味のない空想に耽るとか、死んで丶も仕舞ひたくなるとか、星がどうしたの、菫がどうしたの、といふやうな愚にもつかぬものは當分豫戒令

御飯を炊く樣なことはない、パン燒場の設備のある所は、餘程の大家でありますそれから洗濯などにしてもさうです、必らず家でしなければならんと云ふとはないのであります、夫故に家政を持つ丈でも、日本に非常に困難です、

◎女子と職業　女子に健全なる職業を授けることの必要は私の持論でムいまして、女學校の修業年限を六年とすれば、中以下の人はそれで澤山でありますそれから先は金の取れる樣に仕向けたら、一家の爲にも國家の爲にも可からうと思ひます、殊に日本の女子は器用でムいますから、手工藝は尤も捷徑でありまして、速記の如きは適當の技術であらうと思ひまして、私の關係ある學校に隨意科を設けまして、二人計り成功しましたが、何分之を應用するには、學校教員位の學問が伴はなければならんのと、もう一ツには女子の速記者としての用途が、今日の日本の社會では、狹隘いものですから希望者が少なうムいます（下田歌子氏談）

を執行したいものである、

要之するに、以上の如き文藝の趣味を中心として、家庭の調和に及ぼす聯鎖とし、眞に和氣藹々たる、美しき、樂しき團欒を見るやうにしたいものである（文責在記者）

女子の實用的敎育

文學博士　建部遯吾

近來女子敎育の聲が賑やかになつて、各種の學校が續々設立せられたが、兎角非實用敎育が多いやうに思はれる、單に實用敎育とのみ云へば、物質的になつて、精神的に遠かると非難するものもあらう、されど自分が唱へる實用敎育は物質的を擔出すのではない、そこで實用敎育の意義を定めて置きたいが、抑敎育の目的は道德と職業の修養にあるので、被敎育者をして、道德を備へ國家に有用の人たらしむるならば、それでよいのである、職業といふのは下は紙屑拾より上は總理大臣に至るまで、その職に堪能なるものを造出すのが目的である、されば漢學流の敎育を施して、道德だけ立派な人物が出來ても、職業の出來ぬものに仕立て〻「賣家と唐様で書く三代目」といふやうでは仕方がない、文官登用試驗、科擧に及第して、文章と道德とが立派であつても、時計や蝙蝠傘を修繕する工夫さへ付かぬやうでも困る、

人の此世に在る間は、衣食住より始まつて、必要品が數へ盡されぬほどであるが、それが天から降つて來ぬ以上は、國民一般、その必要品を職業の上から、求めねばならぬ、故に社會民衆、一國民たるものは、職業を輕蔑してはならぬ、去ながら職業のみを重んじて、道德を眼中より去らば、算盤を取つては、素町人となり、鋤鍬を取つては土百姓となるのである、素町人土百姓を作るには、敎育も何も入つたものでない

故に教育は道德と職業兩面の修養、此二大職能を全うせねばならぬもので、其一を缺いでは道德の爲にもまた職業の爲にもならない、故に自分の主張する實用教育は、物質的教授と非難さるべき性質のものではないのである、

我々の觀察は或は狹い區域であらう、されど既にしかくの事實がありとすれば、今の教育は全く缺點がないとは云はれぬ學校で目に觸れるものがそれであるから、多くの家庭に於ける、目の屆かぬ所にも不實用教育が頗る跋扈して居る事であらうと思ふ、今自分等が素通り同樣に見ても、三つや四つの例は忽ち擧げることが出來るのである



徳川慶喜公爵令孃　英子

花の姿　月の影

門地高き家に生れ、風姿花の如く、而も才學衆に秀でたる本誌に掲載する諸令孃の如き、女子としての最幸福を有せるものなるべし、

先づ一般に女子の學問として重きを措かる、裁縫からいふならば、秩序も系統もなく、たゞ功よりは勞多からしむる仕立屋教授は除外として、小學校の教授にしても、何を目的にして此科目があるかを無視したるものが多い、例令は小學校を卒業して、學んだ裁縫を役に立てやうと思うても、新調といふ事より補綴が多い、補綴は學校で教へられたか、否學校では覺束なくも袴、羽織、蚊帳等の裁縫を學んだのである、所謂帶には短かし襷には長い不實用教育を受けて居るのであ

るから、家庭から却て學校の敎育を非難されることになるのである、初等工藝學校、青山邊に建てられて居る某女學校の如き、生徒は高尙優美なる非實用的藝術を學ぶには頗る適當なのが多いのであるが、敎へる方では更に頓着して居らぬやうである、さてその影響が隨分各地方に及ぼし競うて非實用敎育を盛ならしめて居る、敎育に身分は入らぬ筈であるが、あまり身分を懸隔すると往々滑稽に陷る事になる、軍人にしても飄輕な大將や、尊大振つた兵卒は見よくないと同じ事で、學問が人を氣取らせるものとなッては困る、殊に九尺二間の中で、琴や生花で氣取つてすまして居るやうでは實に沙汰の限りと云はねばならぬ、



三條公爵令孃　千代子

それから讀書にしても、氣まぐれな敎師かさう仕立てるのもあらうが、手紙一本滿足に書けぬ生徒が、歌を詠んで得々たるものがある、それが段々進んで行くに隨ひ、學問はます〳〵上走つて來る、それと同時に世事には極めて不着實になる、

同じ學問でも地理であるとか、歷史であるとか、理科、また數學などは學問の性質が着實であるから、それを學ぶものに、不着實なのは少ないやうである、然らば自分は音樂繪畫の如き學科はあまり喜ばぬ考へかといへば、これ等は品性陶冶上必要であつて、道德修養の一科目と見て差支ないものと信ずる、されど

あまり樂器の詮鑿に耽つたり、高尚なる詮議立をしたり、聯想して風紀を害するやうな境に至るならば、甚だ不感服の事で一層高じて音樂家がり、繪畫家ぶるやうになつては鼻持のならぬ骨頂である、近來當局者の眼も、大分實用主義に向いたやうで、教授法もます〳〵進んで行くやうであるが、然も其成績は多く不實用に終り、骨折つて教育をし、十のもの九まで培養したものを殘りの一つで枯らすといふのも少なくはない、これは教育の目的がいつも留守になつて居るからである、視學官の費用も教育の目的よりは、その形式に向つて支出するといふても差支ないのもないではない、

凡て右の如きは、之を詮じて見ると、秩序といふ觀念に乏しいが原由の一であると思ふ、其秩序を立るにも封建時代と今日とは大なる相違がある、秩序に二樣あつて、隊長の命令によつて行進する如き他律的と、懷中時計を見て自ら行進する如き自律的とがある、



德大寺侯爵令孃　治子

今日は各郡各藩といふ狹い範圍内に生息した封建時代と違うて、日本全體更に進んで世界といふ廣い範圍内に働かねばならぬやうになつたのであるから、仕事はます〳〵多端になる、隨つて複雜になる、到底緻密な頭腦がなければ、旨く此間に處する事が出來ぬ、即ち緻密な自律的秩序を嚴にせねばならぬ、

この自律的秩序は幼少の時より養成せねばならぬ、その任に當るべきものは女子である、人間も幼少の時は案外野蠻で、素より禮儀も、撙節も知らぬのであるから、それを新時代の大國民に仕立てるやうに、目的を立てゝ、秩序を蹈んで、上走つた、不實用な人物にならぬやう、まづ家庭に於て注意する必要がある、家庭では野生同樣に育て、學校では形式にばかり重きを措くやうであつて、それで人物を得やうとするのは、木に緣つて魚を求むると同じことである、故に家庭の主人公となるべき女子を養成するには、造花や刺繡より、この方に注意を要するのである、教育の要は、道德と職業に貢獻する所ある實用的でなければならぬのであるから、この目的の成功するやう自律的秩序の習性を養成するやう、教育の功果を收めたいものである、殊に他日家庭教育の任に當るべき女子に向つて切に實用的教育を希望するのである、（文責在記者）



池田公爵令孃　殿子

◎妻に必要なる條件　本誌は此題によつて、あらゆる學者の說を聽き、每號本欄を賑はすべし、十目の視る所、大に妻となれる人の注意すべきものあらん

次號には　松崎法學博士外二三氏の高說を掲ぐべし

妻として必要の條件（一）

中等社會を標準として

文學博士　村上專精

近時女子問題が勃興して居ることであるが、序に男子問題をも勃興したいものである、歐米の風俗を瞥見して、兎角女子の方に問題を向けて居るのは、學生にしても男生より女學生の方に花が咲き、家庭に於ても婦人の方が多く引合に出されるのを見ても明らかである、

併し女子ばかりを責めて、男子は何うでもよいと云ふのでは甚不都合な話で、男子は上流の人にでも、蓄妾をする、蓄妾せねば遊廓へ行くとか、茶屋待合に遊ぶとか、社會の表面に立つ男子の行爲とも思はれぬことが、往々あるやうであるが、立派な上流社會にかやうなことが平氣で行はれて、女子ばかり如何に氣を揉んでも詮ないことであるから、女子を責めると同時に男子をも責めねばならぬ、



山内侯爵令妹　壽子

然るに昨今女子問題がやかましくなつたのは二三の事情がある、

其一としては、從來東洋の人は、女子を輕蔑して、女子は殆んど人格を備へて居らぬやうに見て居る、社

會といふものは男子で持つて居るものとして、女子を社會の一員と見て居らぬ、その反動として、この問題がやかましくなつたものであらう、

其二としては、歐米の風俗を輸入する時代となつて、政治なり、風俗なり、一般の事々物々、日本は歐米風と違つて、大に劣つた點があるといふより此問題が盛んに提出せらるゝ事であらうと思ふ、



伊東子爵令孃　千代子

其三としては、日本人が將來國是を慮る思想が發展した現在に於て、洋風を模擬するのでなく、將來の國民の爲に考へて、ます〳〵立派な國民を造らねばならぬ、その任務に當るべきものは女子である、といふで此問題も女子に注がるゝやうになつたのであらう、

以上の如く、過去現在、及將來に就て、女子の負擔を重くせねばならぬといふので、女子の方が勢ひ社會の問題の中心になつて來たのである、そこで妻たる女子に就ては、良妻賢母が近頃の問題になつて居るが、良妻賢母主義は、或は女子に高等教育を授くるの必要がないといふのもある、或は女子を男子が機械的に取扱はんが爲であるといふのもある、されど自分の考はさうでない、

そこで男女ともに結婚すべきものであるか、結婚すべきものでないかといふことが先決問題である、少數

の人は昔も今も獨身生活をして居る、されと多數の上に於ては、過去現在且つ將來ともに、結婚すべきものになつて居る、既に男女結婚すると極つた以上は、男子は良夫とならねばならぬ、女子は良妻とならねばならぬは、殊更に喋々を要せぬことで、良夫たるべき教育が必要なると同時に、良妻となるべき教育が必要である、

併しながら、良妻といふにも程度がある、それは生活の程度によらねばならぬので、社會最下層の貧民の妻の考で、上流の妻たる譯には行かぬ、社會上流の妻の行爲が下流の妻たる標準とはならぬ、試に社會の生活に、上下中の三等あると假定すれば、即ち斯うである、

下層社會の生活は、男女共稼ぎて、男子が車を挽けば、女子は子を負ふて後から押して行かねばならぬ、即ち一家の生活を男子に讓つて置く譯には行かぬ、さういふものに向つて、家政の交際のと云ふて見た所で追付く話ではない、故に下等人民の妻たるものは、適當の職業を覺えて、夫と共に一家の生活を助くることが入用で、夫には歌も文字も入つたものではない、金儲の手傳の出來るものを良妻といふべきである、



福羽子爵令孃　文子

次に中等の生活になると、下等社會とは違つて、生活費は男子の力で官途に就くなり、實業家となるなり



徳川（厚）男爵令孃　喜久子

社會を起すなりして、他から得來るのであるから、女子が男子と共に他に生活費を得ねばならぬといふことはないであるから、子女の教育より、家事全體の事を處理して、老人の世話、夫の出入に怠なき注意を要する等、なか〳〵仕事が多い、即ち一家内で充分に働く餘地があるのであるから、交際といふ事は、それ程必要ではない否必要でないといふことはないが、餘力あつてすることならば、誠に結構なことであるが、中々そこ迄は手が廻はらぬであらう、

更に進んで上等社會になると、大分前二者とは趣が違つてすべてに餘裕がある、下女なり下男なり、その他色々の人が使へるから、家政も監督さへすればよい、病人があつても、すぐに看護婦を呼び入れる等の事も出來、子があつても乳母が置ける、すべて監督の任に當つて、自分が直接に子供の辨當の世話することも入らぬのであるから、外に向つて交際する時間の餘裕と、經濟の餘裕があるから、社會事業なり、國家事業に手を出して、大に公益を圖つて貰ひたい、それの立派に出來て、家聲を揚ぐる事が出來たならば、これまた上等社會の良妻といふ事が出來るのである、

それを中流以下の人が眞似て、夫が爲に家政に異狀を來すやうになる、かくて戸々別々の破綻は、延いて社會の不幸になるのである、

そこで中等社會を標準として三つの希望がある、

第一夫と同心協力する智識能力を有するものであること、これは女子が夫を助くること、夫に對する注意を缺くやうでは、情が通せぬものであるから、社會の發達に伴ふて、女子の夫に同心協力の智識能力を得るやう教育すべきである、

第二には、家庭の經濟に就て周到の考のあるものでなければならぬ、女子にいかに智識能力があつても、經濟の考がなくては駄目な話で、男子に經濟思想の必要なるは勿論、家政成立の根本は經濟であるから、家政の執權者となるべき女子は、大に經濟思想を養はねばならぬ、

第三には、育兒教育に就て周到なる考のあるもの、教育は男子も與らねばならぬが、家庭にあつては、初等教育時代は男子より女子の方が、七八分も關係を多く有つて居る、而して育兒はといへば、これは女子の專有で、女子が大責任を擔はねばならぬ、

以上の考の乏しき人は、將來妻たる資格のないもので、相當の教育智識が必要である、然らばその教育智識があれば、實際注文通り行はれるかといへば、又さうもゆかぬものである、その注文に應じ得ることが妻たるもの丶必要なる條件であらうと思ふ、

女學生教育

今日の舍監を撰ぶを見るに、撰擇の標準に於て欠けたる處なき能はず、女子高等師範の卒業生などにして、直ちに地方高等女學校や女子師範などの舍監になる人もあれど、自分の考にては舍監は、如何なる人にもせよ、結婚したる人なる事は一の要件なりと考ふ、何となれば未婚者は家庭的の思慮と想察の念に乏しきの恐れあればなり▽女學生教育の要件としては、常に家庭的觀念を失はしめざる等の必要あるに就ても、舍監が家庭の經驗ある人を要するは當然なり、自身が高師の舍監たりし間は冬夏の休暇の如きは、成るべく歸省せしめ、成るべく各自の家庭と聯絡を失することなからしむべく勸め、廿歳以上に及べば、家庭に歸るを五月蠅く感ずる者等なきにあらねど、是等は宜ろしからざる考にして、充分矯正するの必要あり▽自分の家庭の如きは誠に貧なるが、其れにも拘はらず、成るべく勞働の念を養ふ爲め、朝から晩まで追使ふやうにしつゝあり、學問をしたからとて、妙に氣取り、雜役仕事を嫌ふが如きは、誠に情なき次第と云ふべし。(安達安子氏談)

一家に於ける義務の一つ

醫學博士　岡田和一郎

婦人が妻となつては、一家團欒の中樞となるのである、故に妻たるものが其本分を充分に盡すことが出來たならば、極めて一家幸福なる團欒を見ることが出來るのである、諸大家は種々の方面から妻に必要の條件に就て、論述せらるゝ筈であるから、予は予の立場の上から、衞生の點より妻の一家內に於て盡すべき義務を述べて見よう、

妻が一家內に於ける義務は、無論、夫に對する貞節、子供に對する慈愛、父母に對する孝道等は言ふまでもないことである、けれども眞の貞節、慈愛、孝道は衞生上の注意に於て缺くる所のないものでなければならぬ、妻にして夫に貞節を盡さうと思うても、知らず識らず予等の眼より見る時は、不貞操に終ることがないでもない、小兒や老人に對しても同じことである、今その一二の要件を述べて見やう、

氣候の變遷、寒暑の往來につれて、世に感冒といふ病氣の絕える時はない、もし一家內に感冒にかゝるものがあつた時には、その一家內は、決して愉快な團欒を結ぶことは出來ぬ、そこで妻はこの感冒

女子と高等教育

高等教育を受けたる女子は、槪して體質が軟弱であるから、婚嫁しても強健な子を產むことが出來ず、隨つて家庭の健全なる母となるに適せずといふ論は、近頃西洋の教育社會、殊に米國で中々盛んになつて來たやうであるが、右につき紐育なる某女學校長は、其反證を擧げん爲に、同校卒業生の中で、既に嫁して母となつてゐる年若き婦人三百人から、乳兒の寫眞を蒐集して、其健康と發育如何を取調べて見たら、三百人の幼兒中、病身らしい者は一人も無い斗りか、孰れも強健に、美しく愛らしく育つてゐた、ソコデ校長先生は大得意になり件の寫眞を學校に陳列し、生徒一同を呼集めて『女子の高等教育は女子の

を防がんが爲に衛生を心得ずして、其義務を盡さんと思うたならば、夫や小供や老人に向つて、無闇に厚き着物を着せ、又室を暖くすることを勸めるのであらう然しこれを衛生學の上より見れば、着物を厚くすることが感冒豫防の道ではない又室を暖むることばかりが感冒に對する衛生ではない健康なる人に向つては適度の着物を着せ適度の温度を得ることが必要である、又夫や小供は、或は職業の爲、常に戸外にありて、寒き風に當り、或は雨に浴すべきことも屡あることであるから、これらの夫や小兒に對する妻は、務めて夫や小兒の皮膚を錬磨し、戸外に出て、荒き風に當るも、これに抵抗し得る如く、心を用うるやうにせねばならぬ、

天性を害するといふ説が、近頃頻りに唱へられて來たが、然るに高等教育を施す此學校卒業生の方々が、斯く強健美麗なる愛兒を設けられたことは、右の説を打消すに最も有力なる反證である、思ふに高等教育を受けた女子の多くは、普通の女子の如く過度なる舞踏や、カルタ遊びをして、有害なるコルセツトの爲に、身体を痛める場合が少ないのみならず、絶えず体操的運動を行つて、身體を強壯に保つてゐる、則彼等は智識の發達とゝもに健康も發達してゐるのである、故に彼等は普通の婦人よりも、一層勇氣と智識と健康とを以て誇つて、家庭の母となる可き、見事なる資格を備へてゐる結果として、此の如き最も強健な美麗な而して最も肥滿せる愛兒を擧ことが出來る」云々と、氣焔を吐いたさうだ、敢て我が式部諸君の參考に供する(中央)

それであるから、着物を厚く襲ねること、室を温くすることより、夫や小供に注意して、毎日冷水にて身體を摩擦し、或は種々の運動を勸むる等が、却つて妻が夫や小兒に對する本分である、そこで温度に於けることでも、室内と戸外と衣服を異にし、室内に於てはあまり厚くせず、戸外に出る時は身體の各部を掩うて、室内に在りし時と、大差なき温度を保つやうにするが肝要である、これはたゞ單に感冒に對する注意であるが、其他凡ての病氣豫防に於ても概して斯くの如き注意を要するのである、そ

れを一々述べるは煩に堪へぬ、

又一家内に病人のあつた時には、妻の考一つでよい結果も惡しき結果も見らるゝのである、往々見受けることであるが、妻が種々の迷信に陷り或は祈禱、呪咀、灸點などの如き、無益の方法を以て病人を治療せんことをばかり、爲に全癒すべき病氣も適當の醫治を仰ぐべき時期を失ひ、遂に不幸の終りを見るやうになることも、決して少くない例である、

妻は一家團欒の中樞なるが故に、一家内に病人のあつた時は、先づ第一に、最も健全なる精神を以て、その看護に當り、最も嶄新なる知識を蓄へたる醫師に乞うて、時期を失せぬやうに、直ちに適當なる治療を受け、健全なる團欒を見ることに勉めるのが、尤も必要なことである、

又不幸にして虎列拉、チブス、疱瘡、或はペスト等の如き急性傳染する病人のあつた時には、世の教育なき妻であれば、夫や小兒に對する愛に溺れて、世に知らせることをいなみ、遂に傳染病隱蔽といふ罪に陷るものもないではない、これ等は、その罪を犯すことの大なるのみではない、隱蔽したる結果、一人の病氣ですむものが、延いて數人に傳染し、又早く醫師に診察されて、適當なる治療を受くれば、先の一人も治癒することを得たかも知れぬのである、隱蔽の爲に、其一人のみならず、他の傳染したものも倶に不幸の終りを見ねばならぬといふ、悲慘な出來事が演じられるのである、

此點に於ても、一家に妻たるものは、最も健全なる精神を以て、此間に立ち、大に處決する處がなければならぬ、醫士を撰び、その指圖に從うて、豫防と治療の道を講ずることが妻たる義務の一要件と心得ねばならぬ、

其他予の専門の耳鼻咽喉科の上から見て、小兒の病氣と小兒の教育の關係、夫の病氣と動作の關係等に就

て、猶述べて見たいと思ふのであるが、紙面に限りある事であるから、次號に於て述べることにしよう、そこで今一度前言を繰返して、局を結ぶことゝせう、一家團欒の希望は誰も云ふことで。一家團欒の第一の資本は、無病人である、その無病人にはそれ〲の注意がなければならぬ、病には聖人でも罹れるのであるから、必ずこれを豫防し得、治療し得るものではないが、注意如何によつて其度を大に減ずることが出來る、團欒の資格を多く作ることが出來る、その注意の大責任者は妻たるものであるから、妻はこの點に於て大に注意を拂はれたいと思ふのである、（文責任記者）

美術教育に就て

現今の日本畫界には畫家を養成する學校として、東京美術學校、京都美術工藝學校及び東京女子美術學校等ありて、表面より見る時は、施設備はれるが如しと雖も、實際の我國家の體面にもかゝはる計りの不完全極まる機關にして、專門技術家に要する高等の研究所すらなく、唯だ普通小中學校に於ける繪畫教員、或は工藝家の下職人の養成と共に、專門家たらんとする者に、初等教育を施すものたるに過ぎず、而かも之とて世間入學志望者の半をも容るゝ能はざる小規模のものなれは、畫學生の多數は、勢ひ任意の私塾について、冷淡と云はんより、寧ろ放任主義の面白からざる境遇に學ばざる可からざるなり元來技術の練習には多年の時日を要するが故に、畫學生たらんとする者は、晩くとも十八九歲より二十歲迄は普通學科を修め得んも、其後實技を學ぶに至りては、複雜なる日課に逐はれ、思想の培養に必要なる文書を涉獵するの時間甚だ少なく稍もすれば世間文明の潮流に後るゝの憾あり、又少年時代の思慮深密ならざるに方りては、往々放縱に流れ、空論の間に時間を徒費するの弊を生ずるものなれば、眞に自己の使命をして完からしめん事を期せば、非常なる精力を以て孜々として學ばざる可からざるなり、二十歲前後まで普通教育を受けたる者にして然り、況んや我が畫壇從來の風習たる幼年の時代より冷酷にして、秩序なき私塾に入門せしむるに至りては、假令其運筆は幾分早く熟練すべからんも、智能の發育其法を得ざるが故に、無意識の中に筆を弄するに外ならず、

今日の日本畫壇に傑作出でず、有爲の作家現はれざるは、一は固より作家自身の素養乏しきに由るに相違なしといへども、一は教育法の餘りに不完全にして、學生勉學の道其法を得ざるに由る、吾人は今の所謂繪はかき屋商人の徒の已設の學校にすら入る素養なくして放縱なる私塾に學びたる者に多きを見るにつけ、一層教育機關改善の急務なるを叫ばざるを得ざるなり、然れども今日國事多端に加へ、當路にあるもの美術の權威尊嚴を顧みず、我國唯一の美術學校の改築すら、容易に出來能はざる場合、進んで高等研究所の設立を唱ふるも、到底其實現を期すべくもあらず、此故に吾人は先づ第一に模範的社團を起し、最も着實なる步調を取りて、互に智識の啓發品性の修養等に力め、將來發展の基礎を築くと共に、一方私塾の弊害を矯正せざるべからず、而して此社團に於ては、彼の酒色の間に浩然の氣を養ふと云ふが如き、或は花柳の巷に實地寫生を試むと云ふが如き、眞面目ならざる徒を包含すべからざるは勿論の事なりとす、（京堂）



衣服に就て

三輪田高等女學校長　三輪田眞佐子

衣服に就ての注文は、質素にするとか、形を改良するとか云ふことは、もはや明瞭なる解答であつて、今更事新しく喋々するを要せぬことである、殊に質素にするといふ事に就ては、國民のいづれの時代に於ても要求したることであつて、況して戰後大經營の時であるから、大に注意すべきはいふまでもないことである、又衞生、運動、或は活動上、日本今日の常服では不適當であるから、一工夫せねばならぬといふことも、略輿論となつて居る、そこで質素にする、改良する、至極結構なことであるが、質素にするといふ事も程度問題で、改良するといふことも如何なる改良案が出たかといへば、今日の所首肯するほどのものはない、即ち改良すべしといふ問題のみ提出せられて、立派な答案は出て居ぬのである、改良といふことは、大に愼重を要することであるが兎角輕率に走つて、却つて弊害の加はゝる方が多いやうである、そこで私は改良の方案より、先づ在來の衣服に就ての注意を促がしたいと思ふ、

かく質素問題の起れるなかに、近頃元祿模樣といふものが流行して居るやうである、其物が善盡し美盡したものであるか、其事が强ち惡いとも限らぬのであるが、風俗を華美に導くものであるといふことは動かすべからざる事で、或人の憂ふる所によれば、かゝるものゝ流行は、兎角淫美に流れて、精神上少からぬ影響を來すことであるから、大に注意せねばならぬことであつて、模樣のあまり華美な衣服を着けると氣風もそれに一致して、自然奢侈に流るゝやうになる、併しこれは果して眞であらうか、故に元

祿時代の研究は必要である、親しくする或西洋婦人の話に、日本は實に妙な國である、食物にしても、滋養美味といふより、その色を食ひ、料理は色を研究するといふ如く、衣服も色に重きを置いて色を着て居るやうである、さればいかに質素なといふ衣服にでも色の三つや四つは配合して少し華美なとなれば、五色も十色もといふ事になる、と笑うたことである、そこで西洋婦人といへば、なか／＼華美の衣服を着て居るやうであるが、色が單純であつて、決して多くの色を集めては居らぬ、即ち色を着て居るとはいへぬ、この色を着て居ることの善惡は、また大に研究すべきことで、強ち色を着たと評判さるゝが惡いといふことはないのであるが色を着る、即ち華美な衣服を着るといふことは、風俗を奢侈にする道である、その上に元祿時代の華美を加へるといふ現時の有様であるから、質素にと希望する事實は反對になつて、此まゝに押行かば、如何なる傾向を來すかも知れぬ、識者、教育家は、この標準の色を示すことが必要であらうと思ふ、由來世の教育家は、消極的に趣いて、極端に質素を主張する、これに反して美術家はすべて美といふ點より割出して、教育家とは反對の説を唱へる、併しながら事物は中庸に眞理が存するのであるから所謂道學者流にも又藝術家流にも偏らず、多方面に向つて服裝の研究を要するのである、

いろは道歌（一）

いやな事つとめてなすもできな事　氣儘にせぬも義理の世の中

ろんすきな人に實義のひとはなし　いはでおこなふ人ぞ人なる

母おやに我まゝいはでうやまへよ　これ德孝のはじめなりけり

にこ／＼と笑ふは神のすがたにて　にがみし顔は鬼とこそ見れ

私が茲に注意したいのは、多くの色を配合したる衣服を纏ふ場合に反對の色のあまり著しいものは俗に見えるものであるから、白と黑との如き反對の色の模樣の目に立つやうなものはよくない、そこでよく似合ふとか似合はぬといふは、色の關係から來るもので色が調和的に配合された場合である、といふて美術を無視するのではないが、有情の人に裝飾するに、物品に裝飾する考がよくないと思ふので、身體の裝飾によつて、氣風も一變するものであるから、全體の日本婦人の風采を、高尙にするやうしたいものである、衣服の色に就ては飽くまでも注意したいものである、

次に袴であるが、これは運動服として成功したやうである、體操などには是非必要である、併し着方がよくない、外見上、小兒時代から、乳のあたりより高く穿いて、筋肉の上を紐で結ぶものであるから、筋肉の發育を妨げ、將來の國民の體格にも關係するこれは是非下の方へ穿かせたいと思ひ、且つ奬勵をもして居るのであるが、上の方へ穿けば、丈が高く見える、風姿がよくなるといふので、なか／＼この注文は容易に行はれぬ、或は紐でなくて、ヅボン釣の如きものでつり下げ、その上にそれを覆ふものを工夫するか、たゞ外見ばかりでなく、體育の上からも考へて、何とか改良策があらうと思はれるのである、改良策があつて、識者敎育家がこれならばと云ふことになつても、國民一般之を用ひてくれねば仕方のないことで、匹夫も志を奪ふべからずであるから、眞に改良の實を擧ぐるといふことは、なか／＼容易な話ではない、

現今の女服を、實用に不適當、即ち働くに邪魔なればとて、これを筒袖にしたいと思うても、衣服の中で美の潜む所は袖であつて、模樣の苦心も袖より始まる位であるから衣服の中よりこの袖を引去るといふことは、女子に美の生命を捨てよといふ事になつて、勞働の外は、なか／＼袖を思切ることが出來ぬやうである、

又帶も幅の狹い方が衛生に適するといふので、また之を狹めて貰ふ話にすれば、これまた反對の意見を聞かねばならぬ、帶は婦人唯一の裝飾で、また婦人の體温はこの帶によつて保たれて居る、即ち身體の重なる保護をして居るのであるから今日の服裝で帶を省くは實に意味のない事である、

以上の次第で、衣服の改良といふことは容易なことではない、よつて多方面から研究して、いづれの方面から見るも衣服の目的に叶ふやうに、改良案の通過するやうな、大改良がしたいものであつて、ある一局部の偏見に陷るやうな改良は甚だ好ましくないことである（文責在記者）

◎鳥肉料理　もこれからは別してよいが、兎角すると小鴨、水禽肉などには臭氣がするので困る。食べては、大層旨いのでも、臭くては、爲めに旨味を殺がれるものであるが、それを除くべき方法は先づ鳥の腸を取り去りて、よく冷水で洗ひ、一ト晩陰干して置けば大抵は拔ける、一番よいのは氷か雪かの中に一ト晩中冷やすのである。

食物に就て

成女學校學監　嘉悦孝子

人の此世に在つては、衣食住の三つ、何れも缺ぐことの出來ぬ大切なものであることは、云ふまでもないことであるが、就中食物は一段の注意を要することゝ思ふ、

一家の平和は、食物に始まると見て差支ないので、姑と嫁との不和、夫と妻との折合のよろしくないなど、食物に原因することが多い、食物のことは、主婦の責任として、これに苦情の起らぬ樣にせねばならぬ、主婦が食物に於ける丹精によつて、一家喜んで膳に就き、三度の食事を無上の樂とするやうになる、即ち一家團欒して、和氣此間より起るやうになる、これは必ずしも山海の珍味によるのではなく他より其の供給を受けず、主婦自ら馳走して、云はゞ物を掛けずして手を掛け、旨くないものでも旨く食はする工夫と其心入である、これは家人にばかり

ではなく、來客に對しても、自家の調理品を供するやうにせねばならぬ、

そこで第一に注意すべきは經濟問題で、肉食がよいからと云ふても、日本のやうな富まない國では、一列一體に肉食を勸めるといふとも出來ぬ、昨今の經驗によると、肉食でも支那料理にして、豚を用うることにすれば、材料も廉く、料理も手輕であるから否手重なものもあるが、就中費用と手數の掛らぬもので、この支那料理を家庭に入れたいと思ふ、かくて、三度の食事ばかりでなく、お茶受の菓子でも、自家で製造するやうにしたい、

間食といふことは、一般によくないことゝしてあるが、間食を強ちに捨てることの出來ぬは、小兒の退屈した時ばかりでなく、大人でも骨を折つた揚句などには、大にお茶受即ち間食の必要がある、このお茶受によつて三度の食事に顔を合はすことの出來ぬ家人を、一室に集める機會を得ることがある、これによつて一家の平和を增すことも出來る、されば胃をのみを損じ、時間のみをつぶす間食にならぬやうにしたいものである、

右の如くすべて食物は、自家で調理することにしたいもので、さすればその間に食品以上の味が加はるものである、よつてます／＼自家料理に工夫を積まねばならぬ、他より供給を受くることを馬鹿らしく感じるやうにならねばならぬ、他人を饗應するにも他よりの供給料理を出すは、或る場合には、金錢を饗應するも同じことになつて、料理屋の取次をするばかり、まことに無手數な、無趣味な沙汰となることになる、料理屋の製品でなくば客への馳走にならぬといふは、自家料理のあまりに不手際より起ることで、これは寧ろ耻かしきものに思はねばならぬ、又少々料理が不手際であつても、自分の馳走に誠さへこもつて居れば、極めて快く箸をとらるゝものである、この誠といふことは、何れの場合にも伴はねばならぬ、

食物の事といへば、意地ぎたなしにも聞ゆるが、主

婦は大にこの食物にうき身をやつさねばならぬ、否心づくしの食物をつくつて、一家を樂ましむるやうにせねばならぬ、食物に箸をとらせると同時に、誠をも味はせねばならぬ、されば主人が他にて日の暮るゝ場合にも、御馳走が待つて居るとなると、自然足が我家に向ふやうになつて、他の山海の珍味は目にとまらぬやうになる、

これは何でもなきことのやうであるが、毎日の事で經濟に限りがあつて、しかも飽きさせぬやうにせねばならぬのであるから、大に注意せねばならぬ、女の仕事としては、其重なるもので、大なる責任を帶て居るのである、されば臺所に忠實なる女は、女として大なる資格あるもので、臺所より常に一家の和氣を求め得るとなれば、女の仕事の大部分を成功したものと云うても差支ない、よつて、女は臺所を完全にして、始めて他に著手したいものである、食物の料理は、西洋式であらうが、日本料理の折衷であらうが、それはいづれでも、要するに會計と相談をして、其範圍内で、一家を滿足せしむるやう、それ以上の御馳走をするやうに、工夫をし料理をして貰ひたいのである(文責在記者)

支那料理の一例

『清湯丸子』 これは百目の豚肉で、四五人前の料理が出來る、料理法は、肉をたゝき、葱と生姜を微塵に切つて交ぜ、それに鹽を少し加へ、丸めてよきほどの玉にし、一人に四つ五つ位の割合にて、ソップを用うれば上等であるが、煮汁でもよろしい、その汁の煮立つた中へ入れて、二十分ばかり火にかけ汁の上に沸上つた泡をすくひ取つて汁を清し、青味には、ほうれん草のやうなものを刻んで、パッとはなし、鹽、胡椒、醬油少許で加減をするのである、

『醬肉』 百五十目の豚肉で、五人前位の材料となるので、これは髓肉の廉價なものでよいのである、料理法は、肉を三つ位に大切にし、二合位の煮立つたる湯に入れ、三十分ばかりゆでゝ、よく煮えた所で汁をすて汁は茶碗に一ぱい位を鍋にのこして、更

に葱二本ばかりと、ひね生姜のたゝきつぶしたものを加へ醤油五勺ばかり加へて汁のなくなるまで煮、それを取出して薄く切り、西洋の辛子をつけて食するのである、

同　菓子の製法の一例

『炸麻花』　鶏卵を三つばかりつぶし、黄味白味ともかきまぜ、これに砂糖三十目にめりけん粉百目の割合で、この三つをよくまぜてこね、板の上に薄くのばし、幅三分長さ一寸五分位に切り、形はそれを結びても、又手綱蒟蒻のやうにねじるかして、豚の油、又は胡麻の油で揚げる、

『鶏蛋糕』　鶏卵を四つ位に砂糖五十匁の割合で、一時間ばかり泡立て泡を立てさせ、その泡のたつ迄に、一方には蒸籠を仕掛け、めりけん粉五十目ほど丼に入れて、三十分ばかり蒸し、それを泡のよく立ちたる鶏卵砂糖に加へ、徐かにかき交せ、蒸籠に布帛を敷きて、其上に入れ、二十分ばかり蒸せば、カステーラの如きものが出來上るのである

住居に就て

東京高等女學校長　棚橋絢子

住居に就ての注文は、其の身分、財産、職業の差等によることで、衣服は成るべく質素にして、木綿着にせよといふやうに、家の事は廣くしてはならぬともいへず、また狹くする方がよいともいへぬ、されど自分の許す限りは、日常必要の設備だけは欲しいものである、假令へば小供の遊び場所をつくる、廣い浴場をつくる、乾燥室をつくる、瓦斯をひく、水道をひく、と斯ういふやうに、なか〳〵設備を要する、

以上の例に就ても、此設備を或は贅澤と云ふ人もあらう、又贅澤とは思はぬまでも、出來ぬ人があらうされど既に住居の事を云ふ以上は、必要なだけの設備を並べねばならぬ、小供の天地は家庭であるから小供が遊び興ずるだけの場所は、一軒に少くも一室

はほしいものである、戸外へ出し放しであると、自然よい事は覺えぬから、監督の上からも必要である

廣い浴場をつくる、これも湯屋へ連れて行くとなると、人數の上に、仕事の上に、知らず〳〵面倒なからと云ふことになる、すると家族は少しの時間でも餘計に垢をつけて居らねばならぬ、そこで廣いといふのも、小さな兄弟で先を爭ふやうな場合に、親ぐるみ一しよに浴びられるからである、これ等は何でもなきやうなれど、大に考へねばならぬことである

又乾燥室をつくること、これも今の季節には最も入用で、雨が降る日でも、繦緥の濡れたのがない、といふ事になるから、幼兒のない家には何うでもの室であるが、いや外に使ひ途は澤山あるが、幼兒のある家では是非ほしいものである、瓦斯と水道をひく

水道は市内では近來大抵引いて居るやうであるが、山の手ではまだ井戸車をがら〳〵やつて居るのもある、さういふ向に水道をひく、また瓦斯を引くにしても、贅澤なやうに聞えるが、火と水の世話には、人一人附切でまだ小言を聞くこともある位であるから、一人の下婢を省き得るとすると、收支償うて餘りがあらうと思ふ、さすれば人に氣兼が入らずして、そのあたりがいつも淸潔な譯になるであらう、

以上は手近な一例で、それ以上の注文は何程でも限りのない事であるが、それ以下とすれば、家を建てるにしても、借りるにしても、成るべく便利のよいのを撰ばねばならぬ、便利といへば、物置なり押入の多いこと、次は棚の多い事、これが第一の要件であらう、ところが借家建には、地面の儉約からして押入や棚をつる場所が少い、しかし少し位は起臥する所が狹くても、かういふもの丶多い方が、却つて廣くつかへて、室内の整頓も出來て、仕事の上にも少からぬ利益がある、

併し如何ほど押入があつても、棚があつても、物を取片付けることを知らぬ人にあつては、却つて邪魔になる位であるから、どこまでも押入や棚を利用して、物の亂雜にならぬやうに、置忘れることのない

やうに、隨つて棚や押入の外に、足にひツかゝるものがないやうに、よく物に次第を付けて、整理を行屆かさねばならぬ、

室内の裝飾、これも日本建と西洋建とも違ひ、いろ〳〵家屋によつて、種々の趣向もあるが、日本式ならば床の間に閑雅に掛物一軸に香爐一つ、違い棚に料紙硯など置いた所位が奥床しい、あまり勸工塲のやうに無闇に物を並べぬ方がよい、額なども理髮床にならぬやうに、これも取合せよく、品のよいものを掛けるがよい、學者などが書物を床の間一ぱいに積んである如きは例外で、そんなのは無造作で却つてよい、要するに輕薄の裝飾は謹むやうにしたいものである、

床の間も押入も棚もないやうな家はどうするか、といふに、私とも時々髮結女を時間の都合で待つて居る事が出來ぬ所から、押掛けて行く事がある、すると髮結女の家には床の間はさて置いて、押入らしいものも棚らしいものもない、併し髮結女などゝいふものは存外氣の利いたもので、日々忙がしい仕事を持つて居るから、室内をよく整理して居る、押入や棚がなくてどう整理して居るかと云へば、室内のぐるりに釘を打つて、それへ器用に物を引掛けて、下には物を取散してないから、三疊か四疊かの家に、三四人の客を待たして置くことが出來る、

要するに、住居に就ては、狹い家を廣く住まはるゝやう、及ぶ限り奇麗に住はるゝやう、器具の整頓と掃除の行屆くことが第一である、(文責在記者)

家庭の教師

文學士　久保萍水

夫れ初生兒は、明を悦び、音に紛れ、沈默して、稍ふる所あるが如く、慈母其調子を失へば、呱々として啼く。蓋固有の良知が、耳目の官能の發育するを待ちて、將に、其作用を顯はさんとすればなり、此の哺乳期に當り、赤子が心靈の開發趣向の如何は、

吾人の尤も注意すべき所にあらずや、彼は、怜悧敏捷なる感動の能力を以て今新世界に出で、其耳目に觸るゝ千種萬態の寫眞を、日々其記憶てふ藏に收めて、他年善惡の行爲の因素となす。故に嬰兒の周圍に居る者、殊に之に接近せる慈母乳母等は、其言行をもて、造次顚沛にも、彼が敎師たらざるなし。愼まざるべけんや。

西人赤子を指して、怖るべき活日記と云ふ、良とに以あるなり。彼既に兒童期に及び、己の自由を得るに至りては、積年記載せる所を、詳に朗讀履行し、其惡癖醜態至らざる所なし。是の時に當り、嘗て木偶視せし父母(殊に慈母)は愕然として驚き、爲に涕泣せざる者、殆ど稀なり、將た誰をか怨み、誰をか咎めんや。視よや、怠惰の婦は、己の夙夜勞苦するを厭ひ、或は生活上の便利を計りて、朝夕乳兒の熟睡するを僥倖す。かくして、他日學齡期に及び、直に之を矯正せんと欲するも、豈得べけんや。

又世間、往々、利口の婦は偶來客のその子女を褒むるあらんに、蔽ふべき愛兒の惡癖過失を喋々吐露して、謙遜なる挨拶と誤解し、遂に其子女を戕ひ、後に憂を貽すに至る。何ぞ其愚なるや。不幸なる子女は、屢客前に羞しめられ、時に悔悟の念の良心に浮ぶことあるも、再三此の如きことありては、遂に恬然として、悔改の機會を失へり。他年破廉耻の原因を釀すも、亦此時にある乎。

又其子女を呵責するや、動もすれば怒氣を含み、擅に之を惡口打擲し、徒に之を詛ふに過ぎず。憐むべし、其子女、果して剛愎固執となり、他人の規勸を聞かず。遂に自暴自棄の惡漢奴たらざるを以て幸と爲す。何ぞ無情なるや。

稍見識ある者も、時に或は罵詈暴言し、所謂言語の鞭を以て、之を壓抑鉗制し、更に匡正訓迪の功能なし、以て自己を羞かしむるを知らず、畢竟子女を禽獸視するにあらずや。聖人は、牛馬を役するに鞭撻と用ふるすら之を恥づ。況して至愛なる其子女をや

=春雨やれんれこさるゝ夢ごゝろ=

家庭の監督

法學士　安藤文溪

世界の富を身に集つめ、學術の奧義を究め、人よりはあがめらるゝ地位に立ち、傍より觀る者の羨みの中心となるの外、何不自由なきが如き結構なる身分となるも、若し不幸にして大切なる一物を缺ぐときは、持てる凡べての寶も寶の功を爲さず、凡べての學問、地位も殆ど無益の有樣となるものなり、大切なる一物とは即ち斷定の力なり、

非常に記臆に富める人も、之なくしては記臆を利用すること能はず、大なる想像に富める人も、之なくしては反て失敗の基となり、事の正邪も思ひ別くること能はず、物の眞僞を明にするを得ず、少しの難事に打ち勝つの力なきが故に、正道を知りて、歩むを得ず、邪道と思ひても、避くること能はざるべし斷定の力は諸々の能力の中、諸々の寶の中、凡べての人の持つものゝ中、大切にして貴き寶なりと知るべし、されば、子女を持ちて、其の子の行末を幸ひならしめんと望み給ふ親等は、何よりも先きにこの斷定の力を彼に養はしめ、此の力を得ば、ます／＼強固とならしむることに力を盡くすこそ、眞に子女を愛して、最も好き送りものをなせしものと云ふべし

或る家に當年三才になれる男子あり、今や漸やく言語を語たるの初めにて、可愛らしきこと云はんことなし、父母は元より身寄りのものども、面白半分に種々のことを敎へけるが、或る日その子の叔母に當たれる一人の淑女、英語にて母と云ふことをマヽと敎へたり、以來母のことはと問へば、マヽ／＼と答へしが、一日その子病のために打ち臥したるために食事は凡べて柔かき物を用ゆることゝなり、飯も其日より粥となせり、數日の後病も癒えたれば、再び母の事は何と云ふやと問ひければ、こたびはマヽにあらずカユなりと答へたり、傍らにありし人々、餘りに可愛くも亦おかしければ、聲を限りに笑ひたり

ければ、その笑ひに恥じたりけん、以後は何と問ふも、決してマ、ともカユとも答へずなりけり、かゝる事は有りがちの談にして、小供の言語や考への、おかしくおもしろく、間違ふことにより、子を持てる父母が、一日には幾度か抱腹に堪へざることもあり、されども、かゝる時は、たゞ一個の玩弄物か、面白き狂言をなしたりと思ひて、笑ひ興ずるが如きことをせず、親切にその過りし以所を敎へ、眞面目に眞實のことを敎へ聞かしむべし、もし不幸にして小供の間違を面白がり、反て之を操り返して云はしむるが如きことあらば、その子は將來輕率浮薄となり、おしやべりと、滑稽ずきとなりて、何とても使ひ方のなき人となるべし、

いろは道歌（二）

ほどのよき人のこゝろに油斷すな　はては眞實のなき人と知れ

返事ぶり速やかなるはいさぎよし　これ孝弟のこゝろなりけり

ときどきにこゝろの垢を洗へかし　清きまことを湯や水にして

智や才をはなにかけたる高まんは　不德を招くえせものと知れ

されども若し餘りに嚴しくして、子供が少しの間違を爲し、或は云ふことある時、めんどうを忍びず、丁寧に敎へずして、一言に叱付くることあらば、その子はもへ出たる新芽の、霜に遇ひてちゞれたるが如く卑屈に落ちいりて、所謂いぢけたる臆病者と成りはつべし、殊に大切なる斷定力を養ふに方りては卑屈と云ふことは最も避くべきの敵にして、一たび自由を失ひ卑屈に流るゝことあらば、活潑なる斷定力は失せて跡なきに至るべし、然らば斷定力を敎ゆるに方り、最初に決定すべきは、小供を無暗に叱り、もしくは笑ひて卑屈にせざることゝ、小供の過りをおもしろがりて、之を繰り返し腦髓を亂だれ

口に入るもの　身に纏ふもの　足に履くもの

新年の重詰料理

▽羽子板蒲鉾　魚の肉を蒲鉾の摺身になし四寸許りの杉の羽子板へ附けて蒸すべし、而して其上に、紅にて色々の模様を附するなり。

▽羽子の小鴨　小鴨の作身を細く叩きて丸め、醤油味淋の煮立てたるへ、鴨の皮を入れて、更に能く煮、それより皮を取出して先の丸めたる肉を入れて煮、これを冷まして、小羽を三本づゝ羽子のやうに指して出すべし、

▽松風細魚　細魚を腹より開き、骨を去りて鹽水にて洗ひ、能く水を切りてうねらせ竪に串を刺して燒き、これにダリを敷き芥子を振掛けて用ゆ、

▽雪の梅　長芋を一寸に切りて五角とし、梅の花形に剝き、茹でゝ味淋・砂糖鹽にて味を附け、別に長芋を茹でゝ、コシコにしてウキ粉を少し混ぜ、それにて梅の花を包みて、蒸籠に掛け蒸すべし、

▽末廣筍　筍の子の皮を剝ぎ、これを茹でゝ軟い方を一寸五分位に切り、それより四分位づゝの切掛にして開けば、末廣の形の如くなるべし、それを味淋、砂糖、酢と合せたるものにて煮附け、唐辛子の味を加へて、能く附きたるを出して盛り合すべし、

以上は重一個に見積りたるものなれど献立の都合にて羽子板と羽子と松風細魚と雪の梅とを各一重となし、末廣筍を一重となし、凡て三重とするも便なり（石井泰次郎氏工夫）

婦人の春衣

新調の衆には十萬の感なきにあらねど、この季節の流行をしろ一助にもと▽紋付の種類は縮緬紋羽二重、羽二重等にて色合は人々の好みもあれど、新柄ものは藍氣を帶びたるが多し、尤も年若の向きには、小豆色葡萄色、栗梅色の類なり、裾模樣は近來は好淵になりと冷評されたる松竹梅など、矢張り品格ありて、初春の晴衣には好し、下着は白の襲ねと對の三枚襲ねとあり、裾は塑り裾は少なく、八掛付が多し▽小紋縮緬大方婦人の年始衣は小紋縮緬にて色合は縹色、桔梗色の類、地質は縮緬なり、價十三圓、羽二重、斜子は價十二圓、紬ならば、六圓前後たり、また小紋の形は頗る多く、中にはまだ名も呼ばぬ柄も大分見えたり△縞物の類、縞御召の中にて、錆柳茶に共色の横筋、紺臙脂丹の細縞、紺縞に淡紫紺の棒縞派手にして、錆鼠に黒出の辨慶は意氣向なり、價十三圓より十八圓、同焦茶地に黒の經緯濃お納戸の柄は上品にして、好み人多し、價十六圓五十錢、總て縞物の色合は澁味を帶びたるもの、又縞柄は色の爛みたるが引立つる爲め、派手になり行きたり、尚縞柄は何とも名の付け樣なきもの多し、

風織御召、縫御召、壁御召の類は横に太き糸を交へ又は撚りのかゝらぬ生糸を加へて變化を現はし、經縞格子縞は趣きを異にせり△羽織地 黒縮緬の紋付は、次第に衰へて色ものに限る様になりたり、地質は縮緬紋羽二重、山繭入縮緬なり、また縞の羽織地は縞御召、紋御召の二種にて、小紋縮緬は少し古びたる傾きなり、色合矢張澁き藍氣のもの多し▽羽織の裏地類 裏地は相變らず緞子、繻子地の柔かなるものと八橋地など地色は薄小豆、鳩色、白茶地等にて一體に色合は薄くなりたり▽壁銘仙 近頃現はれたる壁銘仙は一見風織御召に似て、光澤無く、撚繩の柄なども一寸見分の付かぬ所に味ひあり、地質は普通の銘仙の如く柔かならずして妙なり、價十圓▽丸帯地 帯地の中には唐織の錆茶地に源氏の御幸模様色合の配合も宜しく上品の柄なり、價百十圓、厚板地の菅原模様松竹梅織出しの三筋ものは物好きに過ぎたり、一筋の價三十五圓、唐織錦の栗色地に扇面散し色糸の織出しは優美なり價六十五圓▽繻珍織 世間七分通りは繻珍にて賣行の廣きよります〳〵新柄を出せり、價は十圓臺より三百圓位のもの、地色は白茶お納戸色の類廢れ、幽淡の茶色にて持切りたる様なり、帯の色合は衣裳の色に配合よきものを擇ぶ習ひなれば其品定めには思ひ〳〵なれど、多くの中にて見受けたる黒地、黒に模様などは質素にして趣味あり、片側物の帯地は博多織が全盛にて近來著しく進歩したり（三越吳服店標準）

婦人の下駄

▽平和克復の影響 先づ第一に戰爭で職人の少なかつたのと、肝腎の南部表が竹の皮の落ちる時分に、雨天續きのため外れて上物の不足、且つは織物税の課税などが騰貴して居る處へ、戰爭中景氣の沈んだ居たるがため、何れも手控へて居たのが、平和克復凱旋と云ふので、俄かに仕入れに掛つたゝめ一層景氣付いて、又幾分か騰貴したやうな形で、昨年に比べると總じて三四割高である、

▽一般の流行 一般に社會が贅澤になつたのが安い物よりは上物の賣行きが宜いやうで、徳用よりは履き宜いのと云ふ好みの方が多く、臺は益す低くなつて、一寸四五分と云ふ處が專ら流行し、鼻緒は又少し太めになつたやうで昨年の今頃は五分と云ふのが專ら流行したが、今年は六分が最も出るやうで、是れは低い下駄には、餘り細くない鼻緒の方が反つて履き宜からであらう、

△奥様向き 奥様向は、塗臺の元祿小町の光澤消しか、或は鐵色で高さは一寸七八分是に繻珍厚板模様の鼻緒、地色は灰色、錆茶オリーブなどが專ら流行し、夫れ等をすげて、表は何れも本南部で三圓以上、四圓五十錢位である。

△令嬢向き 品の能いのは、矢張張臺で、鼻緒は繻珍の元祿模様が宜しいが、美術那織と云ふて一寸緞子のやうなもので、金泥銀泥を以て元祿模様を出したのが、最新流行である、色氣は元祿茶・茶の赤味を持たもの、或は茜色が流行で、相變らず出るのは、梅鼠小豆等の繻珍である、價格は前同様三圓から四圓五十錢、（香取屋標準）其外種々なる贅澤品もあれど略す

しめざるにありと知らるべし、何の考もなき、蛙の卵の如き脳髄が、漸々考へを起し、斷定力を養ひ來るには、最初は人の考へたる事の眞似を爲すより初まるが故に、小供の考を養ふに方りて、明瞭に了解し得べき手本を顯はすべきは勿論なれども、これと共に、小供をして能く注意して物事を斷定せしむることを敎へざるべからず、注意なくして輕ろ〳〵しく間違ひたる斷定をなし、もしくは知らざることを無暗に斷定する等の習慣を作るときは、一生輕率にして誤りたる思想に、己れを支配せらるゝに至るべし、故に小供が七八つの頃にも至りて、少しく物事を解する樣になりたらば、見しもの、聞きしことを直ちに口にてしやべるの輕はづみなる饒舌を禁じて、少しくその言ふ所を省りみ考へて後、語ることに慣れしむべし、これをたゞしくして、思慮ある斷定力を養なふに最も大切なる方法なり、凡て小供は、見しもの聞きしものに付きて、直ちに斷定を爲さんと試るむものにして、昨日運動の途すがら、川の水は山より流れ來ると敎へしにより、今日の雨を以ても天に山ある由ならんと斷定するが如き、誤り少なからざれば、斷定を下すに先だちて、充分に考へ、充分に明らかになりたる上、能く注意する習慣を付くべし、而してその力を明らかに爲すには、敎育の任に當れる父母敎師が相類似したるものを並べ示して、その異なる所を示し、或は小供をして其類似せる物を擧げしめて、自ら其脳を明らかにならしむるを以て、最良の方法とす、

一人の娘い子あり、兼て母が嘲弄半ばに、その子に向ひて、お前はおたふくよと云ひ聞かしめければ、其子は、毎度鏡に向ひて、己が顔を寫し、或る時夜店に行き、おたふくの面ありければ、是は眞のおたふくなりと云ひきかしめしに、子供は早速家に歸りて再び鏡に向ひて、能く〳〵己が顔を寫し比べて見しにおたふくとは、全く異りければ、早速母の元に行き、私の顔はおたふくとは異なりて候と云ひけりされどもその子供は、大人となる迄、己れはおたふ

くと思ひつめたりき、かゝることは少事なりとはいへども、一時の嘲弄の語によりて其子が長き間の斷定力の間違ひを生ぜしむることは、往々にしてあり、去れば少さき事として、見捨るべからざる事也、凡て小供の教育は、精密に、眞じめに、丁寧に、細心するを要する中に、特に斷定力を養ふには、一層之等のものを要するが故に、教育の任ある母は、一しほ心を用ゆべし

花嫁に望む

花影女史

くらぶの山の山おろし、あたりつよきにちりもうせず、海人のやく鹽のからき世の、うきせに沈みもはてず、幾千代の春日のかげに、おふしたてられし、窈窕たる花の乙女子なる、齢にかずそひて、夭々たる桃花のかたちあざやかに薫りゆかしきその葉の、蓁々たるよそほひに、霞こめし春のあけぼの、匂ひふかき風情なり、この子こゝに歸ぎて、その家人によろしとは、うべるなるかな、あまつみ神のさだめ給ひし、男女の禮はにこゝに行はれ、人倫の道はこれよりぞはじまりける、きのふまで、世なれぬうひ／＼しかりし、乙女衣はぬぎかへて、こがねのかんざしめもあやに、玉のかんばせ



いろそひて、にしきの袂かをりふかき、花嫁のすがたぞたふとかりける、けふぞ、高砂の松の相生に、幾千代の契をかけて、聲もゆたかに鳴きかはしける友鶴は、天にありては、翼をならぶる鳥となり、地にありては、枝をかはす木となり、偕老同穴の契を結ばれて、榮えゆく末こそ目出度けれ、ちゝは嚴かに膝下にいましめを垂れて、つとによはに、つゝしみて舅姑の命にたがふなよとの給ふ、母はやはらかに門におくりつゝ、汝が家にゆき、つとめて姑家の中ののりをあやまつなかれと敎へ給ふ、いでや、今よりは、こひしき親兄弟に離れ、なつかしき、故郷を跡に見て、これよりは、いかなる風にさそはれ、世の浪にたゞよはされんかと思ふ心ぼそさに、袖に時雨をつゝみしも、あはれことわりぞかし、ゆく川の流れはたえずして、しかももとの水にあらず、げにこそ、世は手のうらかへすごと、雲となり、雨となりて、定れるすがたなきは、ぜひもなき事なれ、むかし見し、玉臺翠帳に、裝ゆたかに眠りし夢は、露けき伏屋すまひとさめはてゝ、匂ひ濃やかなりし錦のたもとは垢づき、こがねのかんざしは朝げの煙たえ〳〵に、夕の飢をしのぐ糧にかへられ、あるは、松風かよふ軒ばに、琴の音のやはらげるたのしみは、秋の夜の露をよすがになく虫の音につれて、燈の下に物思ふたねとかはりゆくも、これ皆人間の榮枯盛衰、世にまぬかれぬことわりぞかし、されば、淺香山あさからぬえにしは、かひもなきさの捨小舟、賴む夫にわかれ、うきにやつれて、いかに山風はげしく、吹きおろすとも、麓の花紅葉、うつらふいろなく、心しづかに、その節操をかへずして國家の基たる花を咲せつゝ、良妻賢母の道をあやまたざることそしゆ勝なれや、

本朝烈女傳楠母の頌に曰く、嚴父惟作、賢母惟敎と、げにしかり、古も今も、人倫にことなる所なければ、偶楠母のごとき地位にいたらずとも、不時の心そなへこそあらまほしけれ、されど、人の心の花は色見えて、うつらふ習なれば、哀むとも、樂むと

も、深く沈みてはなかく〳〵に、もしほの烟思はぬ方になびく者なれば、かの太公望の妻が、覆水盆にかへらずとうたはれしあさ間しさを、味ふことなからずやは、あゝ花嫁よ、かつて母は門におくりつゝ汝が家に歸れとのたまひし、あたゝかきそのみ言葉を忘れ給ふまじ、世のさまは棊を見るごと、始終うつくしく渡りうるものにあらざるを、常に警醒し、心の油をそなへて、いかなる淵瀬に遇ふとも、あはつるなき覺悟こそあらまほしけれ、人はたゞ朧にひとしき、限りなき慾の海にまよはで、涼しき心をもちて世に在らんには、なべての浮雲は晴れゆきて、世わたるすべのいかに樂しからまし、

小兒の胃擴張に就て

小兒科、專門醫學士某氏の談に曰く、時節柄最も注意すべきは、小兒の胃擴張なり元來冬季には往々風邪に罹るもの多く、殊に彼の流行性感冒に襲はるゝ事さへありて、嚴冬に入るに隨ひ、其病勢漸々猖獗となるより、世の母親が心を用ひて警戒するは、左る事なれど、唯だ成るべく小兒をして外出せしめざらんが爲め、其慣用手段として、種々の間食を與へ、又乳兒には屢々乳房を含ますを常とする爲、其結果胃擴張を生じ、消化不良加答兒、貧血狀態に大腦神經衰弱等を發し、之が爲に、二年間も繼續して、全身強壯法を行はざる可らざるに至る、而して此病症は、概して上流社會の小兒に最も多し、醫學上の原因として論ずる時は、全く過食の爲に胃中にて醱酵を來し、又瓦斯を生ずる等にて胃の官能を害し遂に自體の中毒を惹起するものにして本症に就ては一般の世人は固より、醫師さへも、充分の注意をなすもの尠く、獨佛英の醫界にも、從來其研究の成績に乏しきは、甚だ遺憾の事なり、兎に角之が原因となりて、往々不測の重病に陷る者あれば、兒童を愛育せんとする母親は、風雨の際にても、其外出を防止せんとするには、必ず間食等に依らずして、適宜の遊戲を授けざるべからずと云々（時事）



歐米と日本の婦人

華族女學校學監　下田歌子

歐米の婦女子は、其學生時代にありては容貌も擧動も殆ど男子同樣で、實に活潑なものである、而して其學校を了へたる後は、母や敎師に伴はれて交際場裡に出入する事となる、此時代に移れば學生時代と異り、容儀を修飾し、言語も、擧動も、凡て都雅に優美に、艶麗に、頭髮の結び方、衣服の着方なども注意に注意を加へ、前の時期とは別種の人となる、ところが我國抔はさうは往かぬ、例へば衣服にしても、歐米にありては女學生は決して絹服を纏はず、予が巡遊中僅に伊太利の或學校に絹服の學生があつた白粉や紅なども決して用ゐざるに、我にありては學校に在る間こそ制規上致方なく綿服を用ふれ、家庭にありては縮緬も羽二重も、貴重なる織物は彼等の體に纏れて居るといふ有樣である、婦女子は美の化身ともいふべきもので、婦女子といへばスグに美なる觀念を起すのである、彼は家庭にありても平和の中心で、交際場裡にありては花といふべきものである、而も是は婦女子の特色で且つ天賦である、ソレで婦女子の生活は孰れの場合にありても、容儀を端麗にし親しむべく、而かも狎るべからざるだけの心掛が肝要と思ふ、

我邦の婦女子が久しき積弊で、精神も肉體も不健全であるのは、遺憾ながら事實であると共に、男子が放縱で品格に乏しく、操守の堅固ならざるも事實である、今日社會の程度が下劣なるも全く之が爲である、故に今日婦女子の改良を行ふと同時に、男子の改良も充分に試みねばならぬ、

今日婦女子の權利を擴張し、男子の放縱を制せしむ

るの道は多々なるも、女子の容姿を修飾し、極めて優美なる容姿を具へしむるも、其有力なる方法と思ふ、露骨に言へば男子たるものは、我妻としたる婦女子の容貌及び擧動が、何の缺點もなきに於ては、放縱不品行 自然に制せらるゝものである、此時になれば歐米人が千萬里の波濤を越えて、殖民地に清福なる家庭を形作る如く、我邦人亦炎天熱地も、南洋も、北海も、優しき妻の手を拉して遠征を試むる事となるのは必至の譯である、要するに婦女子が容姿を飾るは自然の理で、我邦にても支那にても歐米にても一の教訓となつて居る、予に取りては先生とも親ともいふべき税所刀自の如き、年七十の上になられても、淡き口紅と白粉を用ひ、亡くなられるまで止められなかつた、決して年が寄つても顏容を構はぬといふ事でなかつた、今日我邦にて慈善や公共の事業に從ふ或婦人の如く、女性と見られぬやうな亂暴な風采をして居ることは決して見做ふべき者でない、アンナ方は一種の物好でいな一種のハイカラ的で、更に之を外國の有力なる婦人に例へて見るも、女權擴張の女傑といはれたフォーセット夫人なども、一見すれば如何にも温和に貞淑に普通の婦人と異ならぬ、其他有名なる婦人等に予は一人もアンナ異樣な神經に異狀ある如き人を見出したことはない、夫人の内助といふものは決して言葉のみではい、賢良貞淑なる妻が、夫の事業を助くるのは如何許り

いろは道歌《三》

律義なる人はたのみになるものぞ　世事よきひとに心ゆるすな

盗人のおほく出來るをうれひなば　かみなる人の慾をとゞめよ

留守ばんは德實ものをゑらぶべし　おほやけ事も斯はありたし

惜し欲しと怒り妬みのあらざれば　心ゆたかに世をや經ぬらん

であるか、我國にも支那にも烈女傳中の人を見れば思半ばに過ぎん、又ビスマークの夫人も、グラッドストンの夫人も、其他歐米近世人物の傳記を飾るものは、婉容なる其夫人であることを記憶せねばならぬ、我邦人も願くば、かく進歩させ、發達させたき考である、是れ予が身を女子教育に委ね、上は畏多くも宮樣方より、華族紳士の女子教育に及び、更に苦心經營して、社會最下層の婦女子にまで教育を試みつゝある次第である、

女子と看護

赤十字社病院醫長　岩井禎三

看護は婦人に適して居るといへば、婦人は或は有難迷惑に感ずるかも知れぬが、やさしき心を持てる婦人の同情は、看護に於ける第一の資格である、ことに戰時に於ける傷病者の看護は、是非婦人の手を煩はさねばならぬのである、聊自分が從來關係し、經驗したことに就て話さうと思ふ、

自分は多年赤十字事業に從ふて、征露の役を加へて三回、いつも海上救護の任に當つた、船の設備に、それから看護人が入用である、船も初は陸軍の御用船の歸り掛、小さな船に傷病者を積込む、それに設備がなし、看護人といふほど行渡つたものがないのであるから、病氣は傳染する、負傷者は益々苦痛を感じさせるといふ有樣であるから、必要上病院船を造ることになつた、先づ看護人を募らねばならぬその看護人は婦人に限ると思ふので、之を實行したいと思ふたが、十人十色で、疊の上の病人と違ひ、彈丸雨飛の間を往來した傷病勇士を看護するのであるから、氣の弱い、働きの薄い女では事を辨せぬ男でなければならぬといふ說が多い、そこで醫師一人看護者幾人といふ割合にて、赤十字社支部に割當て、陸軍の看護卒であつたものやら、醫師の書生などを集め、茲に救護員の編制が出來た、そこで船は初め郵船會社の所有から採用したのであつたが、そ

れでは自由が利かぬ所から　世間には反對を唱へるものもあつたが、百萬圓の資金を投じて、各二千餘噸の弘濟、博愛の二船を造つて病院船とした、歐洲にても病院船を新たに造つたといふ歴史がないから、殊に英國などでは評判が宜しかつた、初め郵船會社の船を用ひた時には、戰時には病院船とし、平常には客船に用ひて居たが、病院船であつたのは、清潔法其他の設備が行屆いて居るので、夏期などに廻遊船として乘客が多かつたとのことである、そこで赤十字社が病院船を設けたのは古い事であるが、赤十字社の所有として造つたのは、明治三十二年であつた、すると其翌年聯合軍の戰役があつたので、折角博愛丸、弘濟丸の二船が新造されて間もない所であるから、陸軍の加勢でもしたいものと、云はゞ仕事半分、遊び半分で、出掛ける話を持出した、赤十字社の方では、社長もそれは宜からう、併し御苦勞など丶は云はぬ、役目のつもりでなく務めて貰ひたいものであるといふ、自分も役目とか何とか云ふのではなく、艤裝して、兎に角に役に立つか立たぬかやつて見たいといふのであるから、よろしい、と仕度をして出掛けたが、さう大した仕事もあるまいと思ひの外、着清匆々、間もなく天津の大戰爭が初まつて、引も切らぬ傷病者が出た、所が陸軍でも手廻り難ねた所であつたから、野戰病院と同じやうに盛んに傷病者を取扱ふ事になつた、殊に佛蘭西の軍人に怪我人が多かつたので、同司令官より話があつて、百名餘りも引受けたが、存分の好成績であつたから、始め新造の時の反對說も何處へやら、日本許りではなく、右の次第であるから、外國でも持囃されるといふ有樣であつた、この好成績は看護の二字が與つて大に力のあつた所で、その看護者は前言ふ通りで始め男の方が多かつたのであつたが、此際男の方も都合で陸上の勤務をすることになつたので船内は女で引受けた、即ち期せずして、我理想通り女の看護者で引受けて、傷病兵に當る事になつた、經驗によると、男は兎角に横着心のあるのが多い、

女はあつてもそれが邪魔になるといふ事はない、第一船の仕事で、男のはすぐ船に醉うて倒れて仕舞ふのなどもあるが、女に却つてそれがない、重いものを大して力の入る事は出來ぬが、不潔物の取扱ひを初め、事に當つて忍耐力があり、信切心があつて熟練すれば、技能も充分發達する、殊に一擧手一投足女は何所までも女らしい所があつて、やさしみのあり情ぶかい所があるから、ダルニーの司令官などは、看護婦に接したばかりでも、大さう心丈夫に成ると云はれたが、女の看護者即ち看護婦の慰問を受けた時は、何れも涙を以て迎へるといふ有様、誤解されては困るが、實際右の次第で、この看護は婦人に限ることを實驗したものであるから、又成績も宜しかつたのであるから、これからは我注文通り、始めから女のみに看護を引受けさせることが出來るであらうと思ふ、斯の如く、弘濟、博愛の二船が、新造匆々働いた第一期は、三十二年の二月より五月迄で、なか〳〵遊び半分どころではなく、仕切れぬ位仕事もあり、成績も擧つたので、その五月には病院船の必要を感じて横濱丸が出來る、爾來引續いて二十餘艘の多きに及んだのである、この船中に働く第一は看護者で、その看護者は婦人に限るやうに思はれる、然るに始めは看護婦など云へば、一般から何となく輕蔑を受けるやうであつたが、近時は其職分の重い尊い事が解るやうになつたは、篤志看護婦會の盛大なのを見ても明らかで、大に喜ばしい事である（文責在記者）

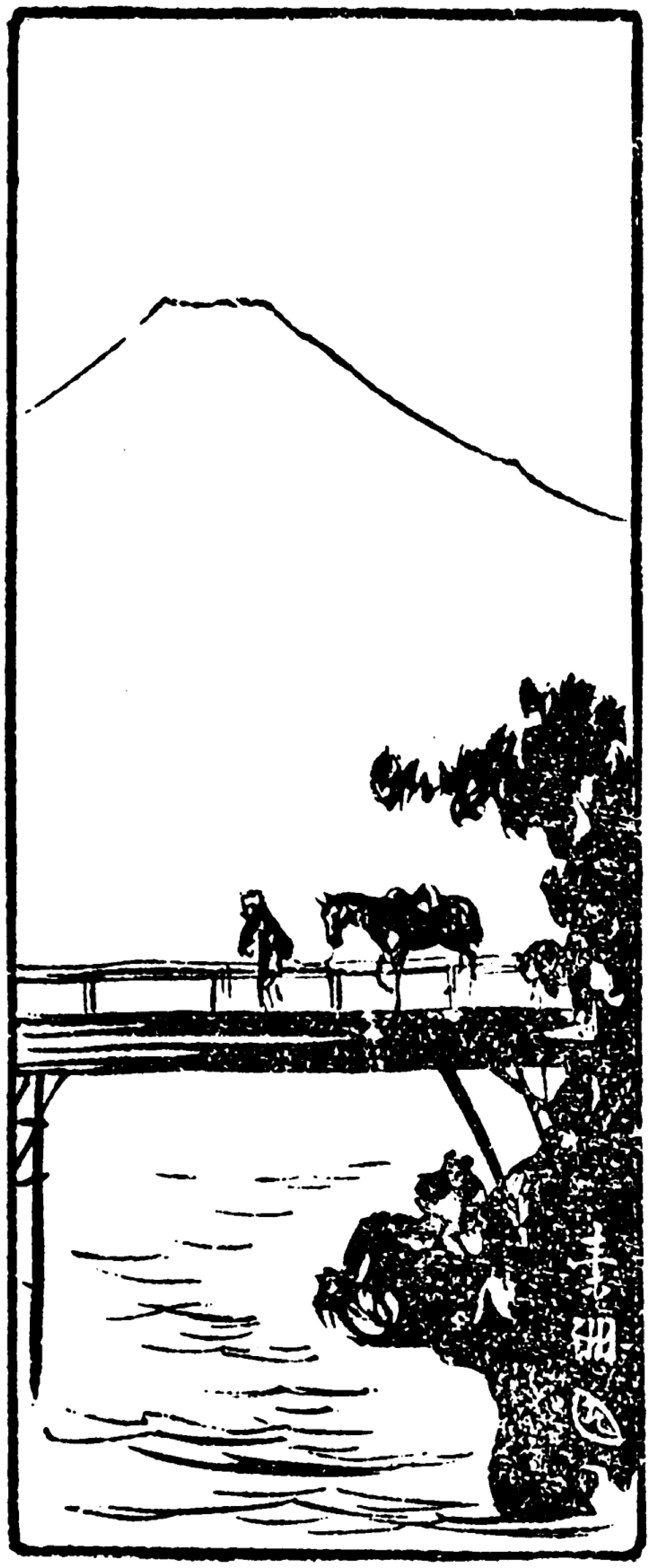
顏と心

文學士　井上如水

容貌のあしきこと、人として不仕合せのことなるべし、殊に女にとりては、別て此感を深からしむべし、とは好ましからぬ言種にて、この言種を取消さんが爲に、いさゝか思ふことを記さん、

ロージャーズといへる詩人は、蒼白き醜き顏の人に

して、不斷其醜貌を氣にしたるが、殊更に其の苦悶を隱さんがため、不斷其醜貌を冗談の種にして、友人をして容貌には全く無頓着よと思はしめたり、會て某所に於て友人シドニー、スミッスに向ひて、此醜貌を畫にしたきが如何なる風にしたらばよからんと問ひしに、頓智に富みたるスミッスは、もし君にして世界の人を助けんと思はゞ、祈禱せる時こそよけれ、斯る風に手の中に顏を埋めてと答へぬ、斯と聞きゝたるロージャースは同席の人々に向ひては大笑ひに笑ひたるが、スミッスに對してはジロリと怒りの眼を注ぎ、かくて身を終るまで之を銜みたりと云ふ、



こは醜貌の人の不仕合せと思ふ例を引きたるにて、斯くては其品性の醜きをも加へられて、容貌のあしきよりは數倍の上塗とも謂ふべし、

ヘイデッカーといふランダーの音樂家は容貌の醜き點に於ては、四十年間英國無比と稱せられき、されど品格高き人にして、ジョージ第二世の寵を受け、遂には巨萬の富をつくり、九十餘年の天壽を終るまで、宮庭に奉仕したり、

スタール夫人も、シャルロットブロンテも、女性の美麗と云ふ點は全く缺きたる婦人なりしが、其の容貌に無頓着なりしがため、却つて世の美人と云はる

見しこと　聞きしこと　善きこと　惡しきこと

姉妹の音樂家

蝦茶と云へば刎つ返りに縁あり、廂髮と云ば蓮葉者と、口善惡なき京童に後指差さるゝ女學生多き中に、天晴見上げた姉妹現はれぬ、偖此殊勝なる婦人は本郷區弓町二丁目二十二番地に住む天野初子(二十二年)と其妹愛子(十九年)と云へる者にて郷里は愛知縣三河國豐橋町にありとか、姉の初子は去三十年四月寶飯郡富士見小學校を卒業して、其年九月東京音樂學校に入り、三十四年同校を卒業したる當時、ヴァイオリンの名手として、將才色兼ね備へたる淑女として校中の評判者なりしが、其後某なる婿を迎へて長男博方(三年)を擧げしも、程なく父なる人、商業に失敗して、家産傾き今まで何不自由なき身の、俄かに物思のみ増るさへ憐れなるに、如何なる都合ありてか、可愛い兒まで出來し良人は離縁となりて、鴛鴦の片羽の霜置く夜半に、紅の涙も凍りて、身の薄命を歎ちしが、何時までも斯くて果つべきにあらずと、心を取り直し、音樂の嗜好あるこそ幸なれ、これをもて獨立の道を立んと思ひ起しぬ、これより先妹の愛子も、姉と同じく富士見小學校を卒業して今や音樂學校に學びつゝあるが、初子は我決心の程を説き示し、爾來心を一つにして恩師幸田女史の姉妹にあやかるやうにと、再び音樂學校の研究生となり、丹精を凝したる効ありて、名聲人々に知られければ、女子美術學校及び埼玉の高等女學校より講師を囑托せられ、同時に伯爵夫人酒井夏子よりも、家庭の音樂講師たらんことを望まれ、更に桂總理大臣よりも令孃潔子(九年)の教授を托されしにぞ、初子は勿論兩親も、此年頃憂き事のみ打續きて、曇り勝なる愁の眉を開き、春來ぬ先から、一家の和氣靄々として、花咲き鳥歌ふ有樣なり、されば初子も年來の夙願こゝに酬ひたりと自宅にて音樂の私塾を開き、ピヤノ、ヴァイオリン、聲學の三科を限り、毎日午後より敎授することゝなりて、通ひ來る門人も少なからぬやうになりしが、妹の愛子もピヤノ專攻にて學校を卒業し、姉を助けて敎鞭を執り、兩人にて毎月の收入百五十圓に餘るとぞ、彼のイーストレーキの遺子と共に、近頃一對の美談と云ふべし、

婦人と襟卷

婦人連も女學生までが、此頃は手袋はまだしも、郡司大尉がエトロフでゞも卷きそうなる、襟卷をなし居るが、こは衞生上大に害あるのみならず、風致上にも奢侈の部類に屬する物なりとて、是等の矯正法に關し責任ある女學校にては、苦心中の由

博言博士の遺子

イーストレーキと云へば日本全國に門弟を有する博言博士なりしが、其死後の實況に付て、博士未亡人の語らるゝ所によれば▽

家族▽未亡人の外に長女マリー(十九)次女コンスタンス(十三)三女ベリル(十二)四女クララ(十)及長男パスカル(十七)次男ローイ(十四)三男レヂナルド(五)の三男を合せて母子とも八人家族の外書生二名、女中一名都合十一人あり▽活計 奈何にして博士生存當時と變りなく暮し居らるゝか、是第一の疑問なり、パスカル及マリーの姉弟は毎週十八時間兩人にて齋藤秀三郎氏の正則英語學校に英語の教鞭を執て、兩人にて毎月一百圓の報酬を受け、又家庭にては兩人にて初等、豫科、本科の男女學生に英語を教授し、尚ほ他に家庭教師など勤めつゝあれば、十九歳の乙女と十七歳の少年とは能く父の遺志を繼ぎて、月々三百圓以上の收入を缺かさず、其上マリー孃は殆ど毎日上野美術學校に通學しつゝあり▽孃等の行末 西洋の習慣に習は長男を家督となし、男子は總て別家せしめ、マリー孃外の姉は悉く嫁にやる筈なれど、現況如上の次第なるより今に夫れと定まらずとは、未亡人の繰言なり▽博士の遺産 とも見る可きもの更になく、博士の父は藥と歯科醫にて、嘗て支那にある頃は、一日に千圓以上も稼ぎ、博士に至りては、月僅かに七百圓を稼ぎたるまでにて、更に是と云ふて金錢を遺せしにはあらず、全く右姉弟の兩人にて、家計を立て居るとは、若き乙女や少年の身に取りては、洵に感心の外なく、マリー孃が四方八方自轉車にて驅け廻るのも是れが爲なりと▽未亡人と英語 夫人は博士と結婚して、約二十五年間にもなれど、更に英語を學ばざりし、否博士は其夫人に對つて、英語を語る可く教へざりしかど、聽き取るをならば、如何なる難語にても差支へなく聞き取り得ると語られたり▽博士と貨幣 博士は生前能く貨幣を蒐められたる由にて其中最も珍らしきものに限りて、今後は誰人にも縱覽せしむる筈なりとて、博士未亡人が示されたるもの〻二三を記せば、

▲ローマのコンスタンチン王時代のものにて千七百年前の貨幣

▲グリークアレキサンドル大王時代の貨幣にて二千二百四十年前のもの

▲ローマ共和政事時代のものにて二千三百五十年前のもの

▲四十年前のシヤムロの銀貨最も珍品

▲印度のモンク帝、第一曲アウラングゼヘ時代のもの

▲ペルシヤ帝國バビロンが首府たりし當時のもの約三千四百年前の貨幣

▲アラビヤなる回々教マホメット當時の物

右の外夥多ある中に、千九百五十八年前ローマたる、彼のシーザー大王が、英國に打勝ちし當時の紀念貨幣の如きは、溫古家の最も珍とす可きものにて、此程この種の道樂家の會合を仰ぎて、時に歴史的に攻究したる結果、最後のものは一千圓の價額を附せられたりと云ふ

閨秀音樂隊の清國應招

四川省成都なる女學堂主幹周翔氏は、此度の日本遊歴を期し、下谷區谷中眞島町東京女子體操音樂學校より、同校卒業生加藤ミ子を、向ふ三年間の約束にて招聘し、同女學堂に、西洋音樂料を設くべしと、支那も大分開けて來るやう也

ゝ婦人よりも、多く人の親愛を惹きたり、

ブラウニング夫人は、世にも小さき女なりき、鳥の如き顔に、漆の如き黒髪戴きたる、實に二目と見られぬ程なり、されど夫人はその幼時より、美人となると云ふ望は絶えてなかりしを以て、容貌には極めて無頓着に、極めて世を幸福に送りたり、

容貌の美しきものは、却つて世に立つて弱點あり、身をあやまる基にして、容貌の美しいと思ひたる時身は既に墮落せんとし、美しいと言はれたる時、既に大に墮落したるものと思ひ、頗る用心を加ふべきものにして、容貌のあしき人はこの點に於て大に安心なり、

されば容貌あしく生れたる人は、たゞ飽くまでも無頓着なれ、容貌如何に醜きもそれに無頓着にして、快活に親切に慇懃ならしめば、單に顔の美しきばかりの人よりは多く世間の愛敬を受くべし、ロシヤのオルガ王女は有名の醜婦なりしも、世界第一の愛すべき婦人と呼ばれしにあらずや、

米國娘氣質

工學士　草野公羽

亞米利加の娘達が、本國は猶更のこと、どこへ行つても評判が好くて、誰からも持囃さるゝは、どういふわけであらうか、

なるほど亞米利加の娘たちは、娘としては最も快活で最も健全で、又最も温和である、それに傲慢の分子がなくて、所謂歐洲娘に能くある、何にでも屁理屈を云つて見たり、少しのことに感情を激して、狂人の二の舞をする樣なことがない好いものなら何でも來い、美しいものなら何んでも見逃がさぬといふ風で、つまり此世の中が面白いのだ、だから樂が多く喜が滿ち充ちて、顔容態度聲色までに、其心がおのづから表はれて來る、常に活き〳〵として動いて居るのだもの、誰が目にも惡い筈はあるまい、評判の好いのも持囃さるゝのも全く之が爲である、

もし極々批評的の眼で研究したらば、英吉利や佛蘭

西の娘より美しいとはいはれぬかもしれん、が、亞米利加の娘はどことなく愛らしく仕立てられて居る樣だ、それはまたどうしてといはれても、恐らく之に明答するものがあるまい、第一驚くべきは、亞米利加の娘が場所を見立てゝ之に能く適合することだ散歩なら散歩、遊戯なら遊戯、食事夜會なら食事夜會相當の服裝を着けて、どこの場所でもチヤント一番釣合ふ樣な身拵らへをするから、丸で場所が變ると見違へる程變てしまう、實に周圍の關係を見拔くことはすばらしいものである、亞米利加娘の氣受の好いのも一つは之であらう、併し之とて想像力やら敎育やら、又一種の天才がなくては出來ぬことである、

どうして亞米利加の娘が、ソウ上手に着物を着るかといふと、之は腰元を持たぬわけではあるまいが、たとへ持つても決して腰元の趣向を借りないで、どこまでも自分の工風を用ゆるわけではあるまいか、英吉利では上流の娘が、ソレハ〳〵妙な配合を得意がつて着て居るのを常に見受けるし、佛蘭西でも娘の服裝は少しも感服が出來ない、何といつても大體人の目を奪ふチヤームを缺いて居る、次に獨乙と來ては一向お話にならない、勿論頭の先から足の端まで着飾つては居るが、只着飾つたといふ丈で其趣向の百性臭ひのに呆るゝ計りである、能く考へて見ると其筈である、皆百性育の腰元にたよつて居るのであるから、

亞米利加娘の髮や、髮飾に念を入るゝことは、また一通りではない、尤も之は美を添へる一つの種子であらう、頭とて頭相應の花を持たせねばならぬわけである、折角女の名譽の冠といはるゝ髮を、投放しにしたり輪廓を亂したり、冠の飾を無視したりするのは、まづ考へある女とはいはれまい、幾度か結直して尚ほ足らざるの感を懷けるは、一見洒落者のそしりを免かれざるも、人の前へ出でたるときは、整然として一毫の亂るゝところなき米孃の心掛、實に喜すべしといはねばなるまい、

であるが、第一稱すべき點は獨立の氣質であらう、敢て苦んで養成せずとも、天然に、無意識に此氣質があるから、誠に羨ましいことである、第二は夫を求むるにも、戰場に於ける印度人の如く、無二無三只一方へ走らうとしないことである、之を英吉利の結婚市場に於て老若の婦人が盡す嚴しい兵法と對比せば質に非常な相違である、或人が云はれた詞に只面白いものを面白いとし、可笑しいものを可笑しいとし、輕く舞ふ手の掌には幸福の玉ころげ、眼に物いはする罪もなければ、心にも胸にも一點の曇がさゝず、透明澄み渡る秋の月にも例へたき亞米利加の娘と、歌舞散歩する程樂しきものはないと、之は尤ものことである、日本の婦女子には、此消息の一端たも了解が出來るかどうであるか、

それから殆ど一般に笑ふことが好きである、でも其態度から見ても下品でない事と、人生を樂む事が明かにわかる、同じものでも、面白い可笑しい方面を見る事は、やはり一つの德でなければならぬ、不愉快の時も失望の時も、相變らず能く語り、能く笑ふから、周圍のものに惡感情を起させない計りか、うらゝかな日に脊を干す樣な思ひをさせる、

かういふ風で時期が來ると家を持つのだ、丁度自分位の妹のある年頃で、母親も自分位の時は自分の樣な氣質であつて、而して些細な事をがみ〳〵いはぬ人に嫁ぐから、隨分ノンビリと幸福に暮して居るやうである、

また特長として云はねばならぬのは、亞米利加の娘たちは各自の本領が明かで、その上精神が確固として居る事である、何にが好きで、何にが足らぬか、何を嫌ひ何を拒むべきかをチャント承知で、會食などして何が好きかと尋ねたとき、何卒アナタの御勝手のものでと不得要領の返事されては、甚だ心持の惡いものである、食ふべきもの、着るべきもの、讀むべきものを知り、又散歩なり、騎馬なり、ポートなり、自分の好めるは好むと云ひ、好まざるを好まずとキッパリ告ぐる習である、此等も慣例の違ふ

國から見れば、お轉婆の極と判斷せらるゝやも知れんが、愛の眉を開かしめ、悲しみの雲を散らし、日なきに日を與へ、到る所に幸福と歡喜の母となる、其氣風を思合さば、大概は合點が行くことであらう然らば仕事はどうであるかと云ふに、ナカ〳〵働き手で、一家のうちでは、穢れた臺所の事から、裁縫や買物までかひ〳〵しく立廻り其外自分の園庭、音樂、讀書、文通、訪問、教會の仕事等を着々やつてのける、之がたゞのお轉婆や、出過者の出來る業であらうか、從つて正直で飾りがない、信用するに足り、言葉擧措ハッキリとして快活にもなり、健全にもなり、溫和にもなれるのである、青年男女の間もかう云ふ工合であれば面倒の起るいはれはない、斯うして歐洲娘や、まして日本の娘などが、夢にも知らぬ愛情自由、束縛なき教育、父母兄弟親友間の親睦を學ぶのも理の當然である、行けば笑を伴ひ、歸れば喜を連れ、人生を愛で、光線を望み、和樂を求め、出でゝは好客としてもてなされ、入りては女皇として許され、之を仰げば雲間をかける天使の如く、之と共に在りては世の苦痛を忘るゝといつても過稱ではあるまい、イヤ今では萬國亞米利加娘の氣質を稱揚しない所がない、ナニモ米國風に媚びるといふわけではないが、米國娘の特長を記して、一寸其氣質を紹介するまでゝあるから、讀者は其積りで、讀んで貰ひたい、

いろは道歌（四）

わたくしをなさで主人のためによき　ことをはかるはしんの忠臣

かみほとけ如何に信心するとても　眞なければまもりたまはず

よきことをなす人あらば千早なる　神のまもりは有とこそしれ

たれもみな不忠不孝はよからじと　知りて不忠や不孝するとは

女髪結

豫見道人

湯屋に髪結、人を奇麗に仕立てる營業者が、世間からは下職業として卑しめらる、それは仕事が不潔なからであらうか、不潔なと云うて肥取屋のやうでもないが、盆正月におべこべこにお客様に心づけを貰ふ、普通料金以外のものを當込む、當込んで居るからくれねばいやな顔をする、その癖大抵は吳れるから自然頭は餘計に下る、そこで女髪結の多くは、斯の如くにして得た金を、不品行の種に費消して終ふ、そこらの點から割出されて、女髪結風情がと一口に云はるゝやうになるのであらうか、

女にも職業を營めといふ事になれば、其職に甲乙のある譯はなく、少しでも收入の多い方がよいといふのでなければならぬ、されば女の職業として、その收入の點に於ては、先づ上の部に屬すれは、これには學問が入るでもなければ、大した修業を要するでもない、

そこで女髪結になつて居る多くのものが、初めからよき職業と思うて成つたのであらうか、一般より下等の職業としてあるものに從事せる人は、まさかに斯んな稼業をしやうとは思はなんだ、といふことをよく言ふやうであるが、女髪結になつて居るものもそれが多からうと思ふ、

第一自分で自分を營まねばならぬやうになつて、これぞといふ職はなし、緣談もおもしろからぬといふ時、小供の時に髪を結ふのが好で、手ごゝろのあるものなどが、これなら出來ぬことはあるまいと看板を下げる、それを見掛けてぼつ〳〵人が來る、始めての稼業はおもしろいもので、氣を付けて念を入れて結ふて歸す、喜んでまた來る、一方では日錢が這入る、晩の事を朝から心配するにも及ばぬやうになる、存外金を容易く得らるゝので勵みが出る、されど此時に於ても、餘義なく女髪結になつたので、外に見付のよき仕事があれば轉じたいと思ふ、この社

會の多くの理想は、煙草店が出して見たいとか、荒物屋を始めたいとかである、それには資本が入る、資本の出來るまで辛抱して働かねばならぬ、然る所資本の入らぬ仕事で日幾度となく錢の顔を見るものであるから、その金を貯蓄するより、ツイ手が出したくなる、上の部で眞砂座の一幕でも見て來やうといふのであるが、一口はしいとなる、惡い事を覺える、貯金するよりは、算段するやうになる、盆正月のおひねりは三月も前に書入れるといふ事になつて、存外世間體は氣の利いた生活に見ゆる、次にこの稼業にな



らうと云ふのは、この皮相を見て、金を得るといふより、金を使ふことを得る目的にて、これが『すき手』といふものになつて、おひ〳〵本職になるのである、次には親讓りでなるのもあるそこで此の稼業に從事する當初は、十中の八九、娘であるか、寡婦であるか、いづれ獨身者である、獨身で其口を器用に糊して行かれるのであるから、下手な夫を持つて、それに素直に服從するといふことが、馬鹿々々しく感じらるゝやうになる、然らば獨身で終るかと云ふに、さうでもなく、終局夫妻位置を轉じたやうな夫を持つ

夫が留守番をする飯を炊く、これがまた男といふものので、痩我慢にも素直にして居らぬ、何かよからぬことの一つや二つは覺える、かゝる中に女髪結の家庭は作られる、甚だおもしろからぬことになるのである、

然るに以上の如きことも、今日までの狀態で、今後はこの社會も一變するであらうと思ふ、第一は近來廂髪などの流行につれて、女髪結を煩はすことが少くなり、その反對に女髪結は至る所目をつく如くに出來る、以前のやうに思はしい收入はない、自然墮落の資本が乏しくなる、風儀が大分よくなつて來たやうである、

そこで女髪結の曰く、氣質のわからぬ色々の人の髪をいぢるのであるから、手間に合ふ位では出來る仕事でない、ちゞれ毛の人で、どうにも手の付けやうのないのを、やつと工夫して見られるやうに結うても、當人はやれ前髪がねじれて居るの、鬢が出ないの、こゝを締てくれ、かしこを緩めてくれ、と言てむつかしい事を言ふのもあれば、毛がよい人でも、前髪の取りやうがわるい、こゝは何うなつて居るのと、さん〳〵小言を言ふ、こんな事なら、少し位の錢には代へられぬと思ふて行かずに居ると、過日のはよく出來たから、あのやうに結うてくれといふやうな事で、何が何やら更に分らず、それを氣兼しながら結うて廻はるのであるから、あまり好ましい事ではない、さればとて外の商賣を始めて見ても、馴れた方が間違がないものであるから、つい足を洗ふことも出來ずに、橙の數を重ねて終ふ、

東京で女髪結のよき客種として居るのは、山の手の奧樣と、下町の藝妓である、奧樣の方は戰爭の影響で大分女髪結の手を省くやうになつて來たが、藝妓は依然として盛んに結はせる、結賃は五錢位より始まつて、島田丸髷の上等客になると、三十錢位まである、それ以下と以上は例外である、

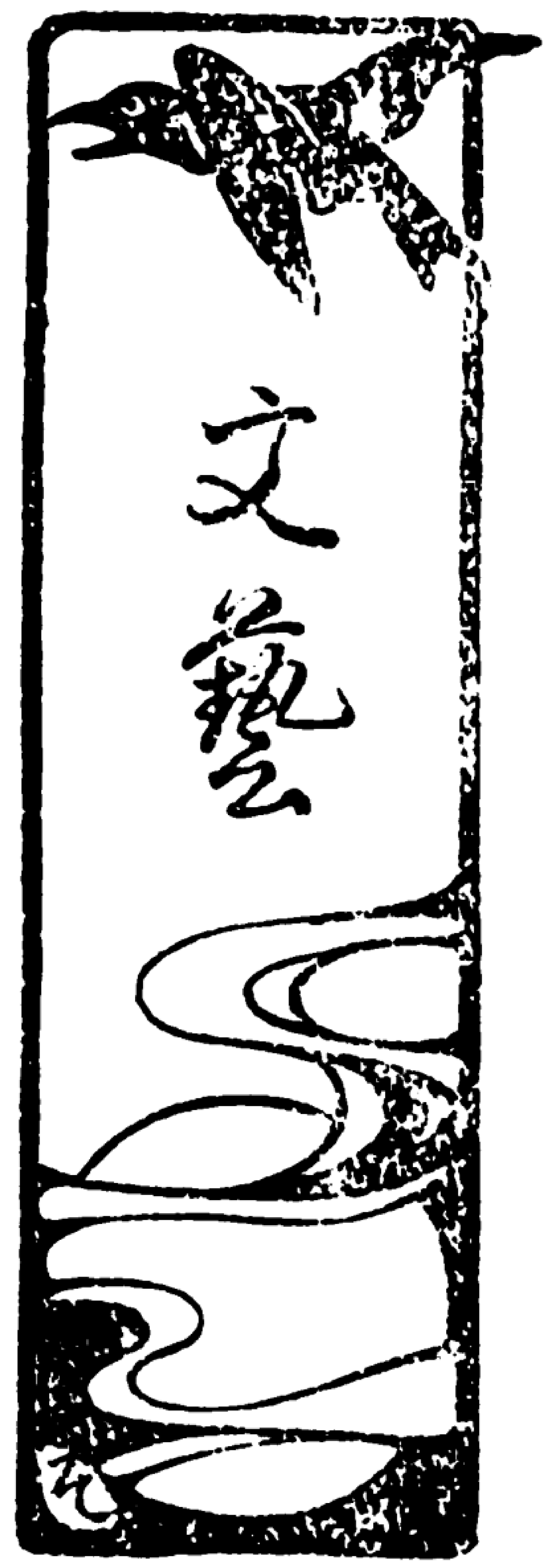
女髪結の一年の心づかひ、これが爲と稱する盆正月の祝儀なるものは、これは甚差等のあるもので、結

賃に十五錢か二十錢位添へて出すのもあれば、次第に上つて、今でも十圓に反物位を添へるのもあるとの事、女髪結に禁物なのは、何にでもであるが、怠けて間を缺かすことである、相手は間が缺けるものであるから、一度ぎりに他の女髪結を頼む、それが下手であればよいが、もし氣に入つたとなると、その人の株を後者にとられる譯であるから如才のないのは、差支へる時があつても、豫めさうひふ心配のないやうにして置くのである、

近來二つ三つ目につくことがある、自轉車に乘つて華族邸などを結ひ廻つて居るのと、鬘で結方を教へて二三ヶ月に速習をさせること、五六人共同で男の理髪床のやうに、來客を手早く結うて歸す方法にして居る等の文明式なのがある、頓て斯う云ふのが盛んになつて、機嫌氣褄の御祝儀のといふこと、惡口の取次、下手の媒介といふことが此社會から取去らるゝやうになるであらう、本年あたりはその期に入るべきであらうと思ひ、こゝに從來の女髪結の一消息を傳へることにしたのである

川村醫學士の夜泣談

寒季に入りて最も注意すべき、小兒の夜泣につきて同學士の談を聞くに、小兒の夜泣は種々の原因あるべきも、一つには母親若しくは乳母などが、自分の睡たきより、自然襁衣の尿にてしと〳〵に濡れ居るを取り換へず、然れば夜寒の折柄とて、小兒は一層不快の感深く、爲に安眠をなす能はずして、遂には不安の念起り、この夜驚症に移るが多かるべく、本症には安眠を妨ぐるといふこと最も大なる原因をなせり、故に夜間ランプを點じて就眠するは、最も禁ぜざる可らずして、其止むを得ざるに於ては、寢室の外に之を置き、障子越しに朧氣なる光りを取るに止め、出來得べくんば蠟燭行燈等光線強烈ならずして、且炭素を生ずること多からざる者に換ゆるをよしとす、元來夜間に燈火を點ずるは、覺醒時起居動作の上に、暗黑にては不便少からざるより止むを得ず其明を取るものにして、睡眠中には何等の用なきものなり、故に寢室を煌々たるまで明かになし置かば、小兒は神經の刺戟を受け、屢破眠して、是こそ夜驚症に陷るものにて、要は自然の命ずる如く、夜は暗きものなれば、成るべく精神の安靜を保たしめ、尚襁衣に對する注意をも、忘れざるやう心掛くべし、(東朝)



越路の旅

文學博士　横井時冬

七尾は、古へ國府のありし所にて、仁和寛平のころ源順朝臣國守として、この所に駐在せられしときけば、何となく懐しく覺ゆ、又室町將軍のとき、應永五年、畠山滿則の城を築きしより、義春に至るまで、八世この所に居住せしに、天正五年、上杉謙信俄に攻め來りて、此城を陷れ、其屬城となしぬ、其後織田信長公、この城を前田利家に與へて、居住せしめられき、七尾の名は元山足の名にて、菊の尾、竹の尾、梅の尾、松の尾、龜の尾、虎の尾、龍の尾といふ七尾ありしによれり併し、總名は松の尾山といへり、さればこの浦邊をも松の尾浦と呼べりとぞ

三十日

朝六時、旅裝をとゝのへて、七時出帆の汽船に乘らんとて港へいでしに、風浪船を搖し、危險甚し、和倉までいでゝ、船を待つこそよけれと、此よしを車夫につげて、車輪を轉じ、和倉に赴き、和歌崎屋某方にやどりをとれり、この間二里ばかり磯邊に沿へる山道にて、吹き來る風、肌を裂くが如く、其さむさいはん方なかりき、やがて宿の主人のすゝめにてまづ温泉に浴せしに、湯清潔にして微温なれば、頗る已が身體に適したるを覺えていとうれし、

和倉は、元涌浦とかきしよしにて、磯より一町餘も離れたる海中に、湯の島といふ小島ありて、常に熱湯をふきいだしゝとぞ、そのころは温泉の宿とてもなく、只和倉といふ一軒の宿屋あるのみにて、一回一人に付湯錢四十文づゝとりしといふ、さるを王政維新後温泉場の繁昌することになりしより、今の樣に大きなる温泉宿をあまた造りなしゝかば、七尾、

穴水わたりより集り來りて、つひに八十餘戶になれりとぞ、

午餐を喫し、磯邊をそゞろありきして、つひに辨財天の社にまうづ、この社は磯を少しく離れたる島にまつれるものにて、風景頗るよろし、又其道のほとりに、和倉燒とかきたる暖簾をかけたる店ありしかば、例のすきのことゝて立寄りてみれば、京燒ともいはまほしきもの棚に陳列しありければ、杯やうのもの二三箇購ひ、この陶器は數年前、穴水鄕よりこゝに支店をいだし、樋口某といふ人、和倉の溫泉にして名產のなきを憂へ、京都并に加賀より陶工を聘して燒かしめしとぞ、されども其費多くして償はざるより、今はつひに廢窯せりといふ、この外に鑛泉餅といふものあるよしなれど、買はざりき、ことしはつねになき不景氣のよしにて、いづれの宿も客人少きよし、あたら一日を空しくこの溫泉場にて費したるは、遺憾の極みにこそ、

三十一日

ゆふべよりの風雨漸く晴れしかば、朝六時旅裝をとゝのへて、七時當地寄港の船に乘らんとて、磯邊にいでしに、風浪なほやまず、昨日の如く出帆覺束なしといひあへりしかば、宿に戾りて待つほどに、やがて八時といふに、第一能登丸汽笛をならして來りしかば、之に乘りて十時に穴水に上陸せり、この間の風光瀨戶內海に似たる所ありていとおもしろし、新谷某といふ旅店に息ひ、こゝより車を傭うて輪島へといでたつ、ゆくこと三里程にして、三枝村字長澤といふ所に、二茶店あり、これに息ひ、それより又三里程にして輪島につきぬ、やがて廣谷某方に至り、やどりを約して、直に漆器問屋加藤孫右衞門の店に至り、漆器數種を見、一少童をかりて案內者となし、新樣工場を一覽し、それより小峯山にのぼりて、地の粉を堀る穴をみ、歸路河井町なる舟掛宗四郞を訪ひ、象眼漆器盆數枚を購へり、宗四郞は孤立と號し、元沈金彫の名工にて、明治三十年十一月、象眼漆器に對し專賣特許を得たりといふ

新樣工塲は、先年加藤孫右衛門等の有志者にて設立せし工塲にて、六臺の轆轤を蒸氣力に仕懸けて、椀木地を挽く所なり、監督者の語る所によれば、午前八時より午後五時まで、就業することにて、日々十一貫目入の石炭十俵を要すといふ（輪島は一臺には二人挽なり）一日朝より晩まで就業して一足半（一足は十三枚）なるに、新式の轆轤にては一臺に付四足（もしつぼなれば一足、つぼの一足は三十枚をいふ）は、優に挽き得るとぞ、この新樣工塲の轆轤は、福島縣の若松にて、鈴木次三郎が發明せしものを用ゐ居れり、この新式轆轤にて完全のものを挽きいだし〻は、去る三十五年十二月ごろの事なりといふ、當時三臺の轆轤を据付居れり、されば九臺にて椀木地をひくに至るは近き事なるべし、

輪島は、千八百九十二戸、一萬百二十六人を有する市街にして、漆器製造家二十戸、關係職工八百八十九人、徒弟四百五十人あり、漆器の產額一年三十萬圓を超ゆ、凡て櫸等の樣材に富み、漆液も鳳至、珠洲二郡より採取するものにて、六分は供給せらるといふ、現今漆器製造にとりては、とにかく屈指の產地なり、元輪島の名は、總名にして鳳至町、河合町海士町、輪島崎の四ヶ所を合せて呼る名なりき、和名抄などにある大屋莊小屋湊といふは、この所にして、鎌府のとき長谷部信連の領地なり、輪島の漆器は、應永のころ土人福造といふもの、紀伊根來より傳習し來り、初めて製造せしといふ、其後百三十年を經たる、享保四年の重藏宮神輿再興記を閲するに地家三百戸、塗師二十餘戸とあり、其や〻漆工の增加せしをしるべし、重藏宮は、即ち鳳至比古神社なりといふもあれど、とにかく重藏宮も古し、この外に漆工に關する史料とすべきものなければ、詳ならされども、降りて寛文のころ、重藏宮の前山、字小峰山において、地の粉を發見し、ついてあての木（あすはの木）を伐採して樣に用ゐることをはじむ、地の粉は一種の粘土にて器物を堅牢ならしむるより、漸く世人に知られ、漆工も增加せしが、元祿正德の

ころより松木屋佐平が、販路を畿内に開くに及びてや、製造品も改良せられき、其後明和のころ、沈金平蒔繪の類を製出して、漆業大に進歩せり、天明のころ松木屋佐平治、笠原次右衛門等の商估協同して大黒講を起し、資金を融通せしが如き、又文化文政のころ、松屋佐平、小西庄五郎等畿内を行商して、講椀を設けしが如きは、輪島の漆業にとりては、少からざる利益を與へたり、天保の初に至り、漆工も又協同して遐福講を起し、大に漆器の改良を圖りしかば、輪島の漆業一層振へり、遐福の名は、貫名海屋が偶この地に來遊せしとき、天降遐福といふ四字を書きて與へしによれりとぞ、このごろ前田家よりも年行司をおかれ、他國へ輸出する行李數を計り、一行李に付き若干金と定め、毎年無利子にて貸渡し、十二月返金せしむる制度を設けて保護せられしといふ、これらの保護も明治四年廢藩の合いづるに及びて、全く廢せられしも、別段此といふ影響をうけざりしかば、此地の爲に幸福といはんか、斯て同じき十年、遐福講を改めて遐福となし第一回、並に第二回の内國勸業博覧會に出品して、大に世人の注意を惹きしも其後絶えて改良を圖らず、僅に同じき二十九年九月、輪島漆器六職挽物師、指物師、曲物師、塗師、描金師、沈金師、共進會を開き、明くる三十年九月、第二回共進會を開きしが如きことあるのみ、

いろは道歌（五）

禮儀ある人こそ見るもゆかしけれ　不禮な人とまじはるなゆめ
麁相せばまけをしみなく詫をせよ　いひわけするは罪の上ぬり
つゝしみがあれば心にゆだんなし　油斷なければ手落すくなし
ねんごろにすれば物ごと麁相なし　そさうは念の入らぬ故なり

世路吟

文學士　三輪田元道

其一

玉の臺に住めばとて
ホームに荒き風吹かば
埴生の宿に居ながらも
清く靜けく暮らすこそ
心の塵にうづもれて
人生の價値幾ばくぞ
俯仰天地に耻ぢずして
此世ながらの淨土なれ

其二

斧もて木こる樵夫と
賤しきものと罵りて
彼等は世をば益すなり
貴きものは我なりと
めかり鹽やく海士の子を
無爲逸樂の人よりも
あはれ榮華を貪りて
誇る人こそ罪なれや

其三

まして榮華は長へに
これを恃みて生立ちし
朝の露の如くなり
無常の風の吹かぬ間に
傳はる物にあらざるを
兒等の運命は宛らに
されば疾くより心して
世路の難を觀ずべし

其四

宇内茫漠廣くとも
影なきことは黄昏に
一羽の鳥と異ならで
撓まず止まず進みなば
汝が身の外に恃むべき
あはれを告げて空渡る
されど翼のある限り
今宵の夢や安からん

其五

天は誰をか助くらん
助くる物と知りねかし
清きホームを作りつゝ
幸も惠も來るらん
我を助くるものゝみを
いでや誠の心もて
汝が天職をつとめなば
わざと求むる事なくも

三保の松原

前田曙山

駿河路を花橘の香にきゝほれて、清水の湊より舟を艤へば、描ける松の長汀曲浦相連なり、鏡の如き海原の上に、颯々の調べを奏で、鼕々の音を傳へつゝ近く富士見村の郷舍に裟を曳きて、遠く奥津の蜑村

に泛べるは、音に聞えたる三保の松原なり、御穗の御社に禮拜して、姫宮が御手栽の松の惠みの露に濕ひ、羽衣の松はと問へば、漁人南を指して敎ゆるに、水明かに砂淸き、碧の傘を擴げて空を蔽ひたるが如く、幹古り枝繁きが夫ぞとよ、踵を埋むる斗り、砂を踏みて、松の下なる羽衣の碑探れども幾年月の潮に打たれて、文字の跡朧にして、また讀むべくもあらず、

暫しの名殘とて、我が幹に脊を寄せて憩へば、千古不滅の冠を戴きたる芙蓉の峯は、八面玲瓏として一點の翳を止めず、春の日の朗かにして、天長地久の間に千歲を壽く葦田鶴の、垂天の翼を張りて、淸見潟の浪の上に舞へるは、孀娥が羽衣の昔ならねど我伯良の心地せられぬ、

　羽衣のかゝると見れば松の鶴

月落ちて星闌干たる淸水の沖は靜かにして、舷滌ふ浪の音さへ聞へねども、主を定めぬ欸乃の斷れつ續きつ、喞々として誰か哀れを催さんとやする、點々たる漁火の動かずして、しかも走れるは夜と共に待ち暮す苫尾の妻子のいとしきに、櫓拍子さへももどかしう思ふなるべし、

　白魚や三保に落ちつく一つ星

擇捉島

新名直和

春は來りぬ、思ひ出さるゝは擇捉島にある彼の老人の身の上なり、沍寒骨を透す絕海の孤島に如何なる歲を迎へし、

去年の六月余れ或る用務を帶びて、北海道巡遊の途に上れり、函館に五稜廓を訪ひ、小樽札幌に開拓使の遺功を仰ぎ・海に浮みては濃霧の襲來に驚き、山に攀ぢては羆熊の巨跡に恐れ、アイヌの風俗、義經の傳說などを探りつゝ、一ヶ月余りの後根室と云ふ地に着きぬ、地圖を展れば爰根室の國とカムサッカとの間に、庭の飛石に似たる千島列島の撒布するを

見む、千島の中群司大尉の住む占守島を除けば、擇捉と云ふ島こそ、人の住む最端の小島なりけれ、我が用務は此の擇捉にもありければ、八月の十三日十勝丸と云ふに搭じて東に向ひぬ、北海の浪高く國後の水道の風荒れて、千島へは再び來ましきなど、思ふ程、紗那へ着くまで二日間の海上は辛かりき、紗那は擇捉島の首邑なり、人家八九十もあるべきか三分の一はアイヌにて、其他は奥州あたりの移住民なり、我が用事は一日にて了へたれど、一ヶ月三回定期汽船の來港するのみなれば、末の二十六日まで此島に滯留するの余義無き此の身を持て余して、或る夕暮、裏の山に上り、遙に眥を決して西方を望むに、水や空、空行く雲のあなたは何方ぞ、白浪の立ち騒く外陸地らしきもの影だにも無し、我がふる里は伊豫の國、山河千里を隔てゝ、噫遠くも來にけるかな、オコック海より吹き送る夕風外套の襟に寒く、アイヌの小供の歌聲も哀れげに聞えて、游子の情緒亂れたりければ、やがて山を降りて旅宿に歸り暗燈の下、夢に入りぬ、

語らんとするは此の翌日の出來事なり、宿の主人の許に來り談らふ某の言葉の中に、折々『西條々々』と云ふ聲の耳に入りぬ、我が生地は伊豫の西條なり、耳寄りの事なれば、主人を呼びて訊ぬるに、そは朋輩のなにがしが事なり、其男は西條と云ふ四國の產にて、名高き國思ひの者なれば、あだ名して斯く呼ぶと答へぬ、

吾が懷きは奈何なりしぞ、直ちに其人の勤むると云ふ去る役所の長に會ひて、その身元を記したる書類を借覽せしに、同縣同郡同町の而も同じ字名の我が同鄉者は、眞に此離れ島に住むなるを知れり、其夜我は使もて彼の同鄉者を旅宿に招きぬ、やがて入り來れるその人を見るに、齡傾ける老人にして顏に寄する年波は北海の荒風に苦しみたりし名殘なるべし、我先づ云ひぬ、卿は伊豫西條の人なりと聞く、我は卿が同鄉者なりと、西條とか、君は伊豫のあの西條とか、彼く云ひし老人は驚くよりも寧ろ呆

るゝ狀にて暫く我が顔を注視したる眼より、やがてはら／＼と露滴りぬ、

名にし負ふ千島の果の離れ島なれば、八月の中旬と云ふに東京の十二月頃の氣候にて、室内には圍爐裏を焼きぬ、夕方の濛霧は雨になりて、旅宿と云ふも名のみなる板小屋の屋根庇に蕭々と降注ぐ夜の奇遇の會談に、此の老人の語りしまゝを記さむ、

此の人は越智某と呼び、長鎗取りては天晴れ剛の者なりしが、維新の嵐に武器を奪はれ、馴れぬ牙籌は取るも懶く、漂ふ浮世の風に流されて、ラッコ密漁船の監守人に傭はるゝ身となり、此の千島に來りしは今より二十六年の前なりき、今こそ擇捉と人も知れど、未だ其頃は熊とアイヌとのみにして、さながらの鬼界が島に十五年余りを送りし内、衣食を節して貯へたる小金の出來しかば、それを資本として鮭漁に手を出しけるに、折惡く其年は不漁にて、十年の苦心を一網に投棄てゝ、殘るは落膽の裸一貫、詮方無くて住み馴れし此の島を立去り、飾る錦衣は有らずとも、生立ちし故里の偲るゝ儘、二十年振に遙々西條へ立ち歸りぬ、昔に變らぬ石槌の峯の姿、今も同じき燧灘の波の色、去れど今の西條は昔のそれにあらず、我が住家なりし邸の跡は取毀されて畠となり麥青々と秀でゝ鳥など啼くめり、路行く人も見知らぬ顔のみにて、余所乍ら友なりし人々の事を問ふに或は故人となり、或は他國へ出で、今は便るべきものも無し、此處にも身一つを置き兼ねて、又もや擇捉の島に立ち戻り、淋しき春秋の幾度か去來するに任しつゝ、稼げども／＼、不運の何時迄も身を離れず、妻には死なれ我身は病らひ、今尚去る役所の傭人となりて營々と働けども貧乏に追付かれ、詫しき朝夕を暮すとかや、

聞けば氣の毒なる身の上なりけり、去れど此老人が故國を懐ふ念一日も去やらず、春來れば故國の花を想ひ、秋去れば南天の雁を羨み、只『西條』の二字に依りて其果敢なき境遇に堪得らるゝなりき、

我は問ひぬ、妻君も小供も無き、卿の樂みは何なり

やと、老人答ふらく、旅費の外に百兩の錢を得て故郷に歸り、余生を送らむ事の外、現世に我が願ひなし、故里にだに歸り得なば、我望はや足りぬ、噫現世に慰藉なく將來に希望なく、唯だ有るは過去半生の悲慘なる歴史ばかり、思へば倩々此世厭はしくなれど、只故里の事思ひ浮ぶる其際のみ、心は昔の我に歸りて、花も咲き鳥も歌ふ心地すると、

我は慰むべき言葉を知らで、唯だ何呉と故郷の事共語り合ひて別れしが、次の夜も其の次の夜も老人は我を訪れ來りて、考へ出しては尋ね、思ひ起しては問ひ、故里の噂に飽く事を知らず、告げて云ひけり此の數日の嬉しさ何に譬へむと、

余が滯在の期日も迫りて明日は迎ひの船の來るべき筈なり、今宵も老人の來りしかば、名殘の盃を交しつゝ、我が腦中にある凡ての『故郷』を彼に語れり、若し我をして冷に語らしめんには、我は老人に歸國を思止まらしめむ、西條と云ふ故郷は老人の想像するが如き平和の天地にはあらず、生存競爭の渦き激しき今の世に、半世を天涯に朽ちしめたる老の身を投じても、何を安らけく過ごし得べきや夫よりも住馴れし靜なる島に、此の儘余生を樂むこそ遙に幸福と云ふべけれ、去れど思へば『西條』の二字は此の人の生命なり、故里の追想に慰藉を得、歸國の希望に勇氣を繋ける老人の心より西條てふ看想を奪ひ去らば、そは其生命を奪ふに同じ、我は其勇氣を持たざりき、

老人は言ひぬ、歸國の願は山々ながら、年老ひし身の何時までも健かなる筈なければ、それも空しき望となるやらんも知らず、それも好し、只だ一目今一度西條を見て死したしと思ひ居しに、此度君に遭ひて、さながら故國に歸りし心地しぬ、其儘不幸にして此島の土となる事のありとも我が望は既に足れりと、

冬の毛衣を作るべく飼はるゝ島犬の、やがて露と消ぬべき運命と知るや知らずや、二匹三匹遠吠の聲も物哀に聞えて、此夜の物語は涙のみさしくまれつ、

明くれば八月廿六日、此憐なる老人を殘して、我は汽船に乘らむとす、身を健かにして錢を貯へ、國に歸りて老後を樂しくし玉へと告げて其顏を見るに、老人は打萎れて、之ぞ故郷の人の見納めよ、願くば君、國に歸らむ日、北海の空に漂泊ふものゝありと人に告げてよとて、涙は雨の如し、國を去りて三巴遠しと詠じけん古へならねど、旅路にゆくり無くも故郷の人と會ひて、泣きて別るゝ今日の船出、浦に一聲の名殘を止めて、心なく動き初むる十勝丸の甲板に立ちて眺むれば、老いてやつれし姿痛々しきに手を擧げて彼は別れを惜みぬ、家も山も漸うに薄くなりゆきて、岸邊に立てる人も見えず、擇捉の島の影、遂に地平線下に落ちけり、越智老人よさらば、斯くて根室に歸り、北見天鹽を經廻りて東京に歸り着きしは九月の末なりき、其後も擇捉の事忘れ難くて、十一月の末、同郷者の寄り集ひたる席上にて此の一條を語りしに、何れも天涯の孤老に同情の念を寄せ各自持合せる財嚢を傾けて即座に幾干の金員を集め、會の名をもて慰問狀を認め發しぬ、擇捉島は十二月より翌年五月までは航海も絶ゆるなるに、此の同郷者の温き贈物の彼が手に落つるは明年の夏ならむ、今年の冬の千島は取り別け堪へ難かるべきを、北海の離れ小島に、神よ庇護の御手を垂れ給へ、

背面美人

小川直子

大方の世のあり樣よ、物事はうるはしき事を、内にひめつゝあらはに見えぬこそいみしうゆかしけれ、ながめくらしゝ程のつれ〳〵をわびけるまゝに、昨日は雲間まちいでゝ、そこととも定めずそゞろありきしけるが、ある片山陰の靜なる所に、さるべき人のなり所にやとおぼしくて、みやびたる一つの家ありけり、めぐりはすいがきしわたしたれば、ひまもとめてかいまみたるに、前栽なども心あるさまにしな

して、いと見所多きに、年のほどいさよひの頃にやとおぼしき、たをや女の水もたるばかりに見ゆる黒髮を、いまめかしう結びあげて、かしらのかざりなどは、こちたからずなまめかしきさまにさうぞきたり、地を拂ふばかりなるふり袖の、三重かさねなるを小つまとりつゝ、あなたざまに歩み行く、うしろではもえそむる春の柳の打なびくより、げにたをやぎたる姿なれば、面やうをも見、名をも問はまほしうおぼえつれど、かひなかりけり、されどさだかにまほに見たらましかば如何ありけん、いひもてゆけば、人の世にふる程も、萬の業にまれ、財にまれ、ある限りを人に見えむは、ねんなきわざにて、なつかしからず、このたをやめもまほならぬにより、中く々にゆかしさも深うおぼえたりけんとこそ、

◎女子短歌研究會　小石川區松ヶ枝町の同會は、新舊兩派を問はず、短歌研究の爲に起り、本月二十日より機關雜誌を發行して、廣く短歌を募集し、また時々小集或は大會を開く由

清少納言

仁科まき子

桓武のみかど、山河の清き山城なる平安に宮柱たゝせまし給ひてより、學の道もやう〳〵すゝみ、吉備眞備、弘法大師のめぐみをくみて、各が思をあらはにのぶるしをりも開け、さすがに望月のかげたる事のなきまでに、いみしうさかえし、

藤原氏も漸く文弱に流れ、うつゝにかすむ春のあした、くまなくてらす秋の夕、連歌よ、歌合よときそひあらそひ、ざえをてらふをこよなき樂しみと、雨にまざゐし風につどひて日を送りぬ、されば和歌にすぐれしをのこも出で、和文にすぐれしをみなもあらはれぬ、

一條天皇の御代には、ことに名たゝる才媛の多くいでたるぞいともめでたき、世に紫式部とならべたゝへらるゝ清少納言も、そが一人にぞありける、

清少納言は梨壺の一人なる清原元輔卿の女なり、性

いとさかしく生れながらをのこのたちにて、いとけなきよりいたく書をめで、和歌をよくし、もろこしの白氏文集、經書などに至るまで、よまざるはなく一條帝の皇后(御名定子)に仕へまつれり、后はめしつかひ玉ふものいと多かる中に、とりわけ清女をばこゝろにくきものにおほしめし、御おほえもいとめでたかりき、皇后雪のいみじうふり積りたる朝、侍女等が才をみそなはさんとおぼし給ひ、香爐峯の雪はいかにとのたまはしゝ御言葉に、やをら御前の玉だれたかくかゝげゝり、あはれめでたうも振舞たるかな、あゝそがいみじき心ばえは、香爐峯にもましてうるはしき光をそへたるぞたふとき、

香ばしき峰の白雪消えぬとも
きみがほまれは千代も絶えせじ

紫女が光源氏の物語に、われおとらじと疊藤氏てふ作をものしぬ、また朝夕徒然なるをり、おのが經歴九重の御垣のうちにて見聞きし事どもかいしるし、一卷の書とはなしける、これぞ世にもてはやさるゝ枕の草紙になむ、文中に『枕にこそはし待らめ』とかける詞より、後人のさるかたに名づけしものにてふるくは清少納言記などゝいひしといふ、隨筆文はこれぞはじめなる、よくよみもてゆけば、當時の政體、風俗、人情はたやう／＼みだれて、王朝のおとろへゆくべき端をもしられて、いとゝあはれふかし后の宮かくれさせ給ひてより、世をいとひ、いつこをはてとしらくもの、西に東にさすらひてはかなき終を遂げしとなむ、

あはれいみじき才をそなへ、あまつさへ世にもめでたき書をあらはし、かぎりもしられぬいく多の人に露のめぐみをうるほしゝ清女の『人はじめあらざるはなし』と、古人のゝたまひし言の葉にもれざる身となりつるは、無念の極にてぞありけん、あはれ清女おのが才にざえかり、われはと思ひあからずば、いかで『草の庵の誰かたづねん』と詠じけむ、なまめかしき浮世のにごりにもそまであらましかばなど『千里をかけるとつ國の駒の、骨もとめたる遠

きむかしの人をしろしめさすや」と、までにはおところへざらましをと、口惜しうおもふも、今更やうなき繰言にぞありける、たゞわれどもなきが如くす、てふ教のいとゞ身にしみわたりてなん、

納豆賣

簪花女史

花の姫ぎみくろぬりの　車にのせてゆふかせの
鞭うちふるふ駒ぞめの　ちまたに駒は嘶ふなり
ちいさき籃を肩にかけ　路次を縫ひ行く女の童
降くる雪を脊に浴びて　呼ぶや納豆泣聲ましる
駒はひだりに童は右に　曲らむとする巷のかど
きしる車の輪にふれて　籠は飛び去り童は倒る
むち執る男こゝろなく　又うちふるふ音たかく
去らむとするを後より　袖止めたまふ姫の御聲
まちね童はたほれたり　如何はせんとの玉ふに
馭者驚きて見かへれば　あなた此方に藁のつと
矢庭にくるま飛降りて　倒れたる子を抱き起し
怪我はなきかと眺れば、　袂破れて血汐はにじむ
駒は聲無く靜かに止り　雪は益々ふり來る中を
童答へず恨めしげにも　くろぬり車打ちながめ
砕けしかごを拾ひ來て　散りたる苞を掻き集む
どろにまみれし納豆は　市に呼ぶとも人買はじ
捨てゝ拾ふな一かごの　苞のあたへは僅かなり
細き糸引くなつとうも　父と母とのいのちなり
賣らで空しく歸りなば　父は餓なん母は痩なむ
姫はあはれと袖とりて　傷はいづこと手を探り
うす紅ゐのハンカチに　あけの血汐を拭き給ふ
傷はいさゝか痛からず　泣かじ手足は折ぬとも
たゞ父母のいのちなる　籠と苞とをいかにせむ
泣くな童よ痛きところ　右の肘より外には莫や
いざや我家につれ來れ　父にはかりて詫びむ
否み泣く子の袖とりて　いだき上げたる車の上へ
一むちかろく鞭うてば　たて髮白く雪はら〳〵
泣て降むとあせる子の　袂おさへてかたはらの

綾のしとねに坐らせて　慰め尋ぬる身の上語り
手にも觸ねば美しくも　思はで過し黒塗くるま
姫と列ぶるひざがしら　今さら羞る衣服の補綴
隱す共なく双手を乘て　こぼるゝ涙拭きもせず
父はと云ひて鼻つまり　母はと云ひて口こもり
父はいかにと姫ぎみに　かさね問はれて漸くに
瞼ふさぎて涙をかくし　ちゝはひと夏脚を病む
母はいかにと又姫君に　問ひ詰られて目を閉き
千つぶの涙ひとゝきに　母は盲目ひに三年まへ
盲目の母と病めるちゝ　兄も無ければ姉も無く
廣きみやこに賴むべき　やからもあらぬ渡り鳥
ちゝとはゝとの故鄕は　歌にきゝたる佐渡が島
行くに行れぬ四十九里　波のかなたの國とやら
妾は知らぬ十年あまり　三とせのむかし父母は
黄金つきにし故さとを　見すてゝのぼる都路や
われ行く里の住うさに　花の吾妻に來て見れば
家も財產も持たぬ身は　都も佐渡もことならず
ちゝは巷にくるま挽き　はゝは裏家に衣わらひ

はるを二年はなも見ぬ　路次の片すみ妾は生る
衣を洗ひて車を挽きて　ちゝと母との淚の汗に
育てられたる此からだ　少しの傷に血汐は出ず
雨のあしたも風の夜も　一つのかごを肩にして
ちまた〳〵に賣わるく　納豆納豆千粒のなみだ
納豆買へ共淚をつゝむ　苞の中見るひとは無く
重き一かご賣り盡くし　かへる袂はいとかるし
遲きわらはを父問へば　見えぬ眼の母立出でゝ
手をさし伸す門ぐちに　今宵も雪を泣くならむ
かゝる車に乘せられて　花のやかたに往んより
たゞ一時も疾くかへり　泣て我待つ父母見たし
ゆるし玉へとひめ君の　手を振拂ひ立んと爲を
又ひき止めて待て暫し　妾のいへはもはや其處
指ざしたまふ姫ぎみの　玉手の指環かゞやきて
かどにはな咲く電氣燈　童女は羞ぢて身を隱す
歸り遲しとまちわびて　母伸びいづる門ぐちに
女わらべをさき立てゝ　姫にしたがふ從者二人
父は懇ろき蔀のそとに　滑り下りて身をかゞめ

頭下ぐるを見たまひて　姫は父かと問ひたまふ
聞も馴れざる優しき聲を　母は怪しみながめやる
眼には見えねど衣の音　えならぬ袖の香は著し
つき添ふ從者は姫君に　代りて車のあやまちを
わびて藥とかごのしろ　合せて黄金ひとつゝみ
子は受取りて父の前に　姫のなさけを物がたり
しらゆふ卷ける右の肱　傷はこゝぞと袖まくる
父は見遣て斯ばかりの　傷は其まゝ癒ゆべきに
醫師の手當たまはりて　尚その上にくすりの料
わざ〳〵たまの御車を　賤の伏屋に寄せたまひ
いとねもごろの御詞は　衣にあふれ身にあまる
黄金のつゝみ子に渡し　これをば返し參らせよ
嬉しきひめの御なさけ　あまり過たり賤が身に
姫ぎみかくと聞たまひ　返す子の手を推留めて
こは我父のこゝろざし　いかで受てよ納めてよ
わらはの思は路すがら　車のうへにかたりたり
明日は再びおとづれて　此子の傷を見舞ふ可し
さらばと言葉柔らかに　立出でたまふひめ君を
留むる由なく子は門に　かへる三人の影を追ふ
影うす暗き燈のもとに　包ひらきてちゝ驚きて
三人六月の養ひ扶持と　妻に語れば盲目は泣ぬ
冬の夕の雪おとも無く　親子三人が世をかたる
うれし涙をしぼるそで　ひめの移香のこるなり
あくるあしたに黒塗車　とまる路次口人集りて
狹き長屋のかたすみに　立寄りたまふ姫を見る
盲者跛者二人を乘せて　走る車の行く先おへば
ほど遠からぬ愛宕した　名さへうれしき慈惠院
隅の長屋の戸は閉ぢて　日掛あつむる人は來ず
小さきかごを肩にして　またたち出る童女無し

祝大山元帥凱旋歌

○　子爵　田中光顯

もろこしの野にも山にもおきあまる
つゆうちはらひかへる君かな

○　伯爵　佐々木高行

大山の峰にむかひて富士よりも
高きいさをゝあふぐ今日かな

侯爵　蜂須賀茂昭

○

たぐひなき君の勳功をことほぎて
内外にひびくかちどきのこゑ

男爵　渡邊千秋

○

千萬のほまれをうけてかへります
君がほまれぞ世にたぐひなき

侯爵　鍋島直大

○

我國のわたうちはらひたちかへる
いさをはたかし大山のごと

侯爵　鍋島榮子

○

内外人みはたうちふりおほやまの
たかきいさをゝあふぐ今日かな

男爵　千家尊福

○

砲の音のとゞろく君がいさをしを
くぬちゆすりて歌ふ今日かな

本居豊穎

○

よろこびの聲も物かはあめのした
とゞろきわたる勳功おもへば

公爵母堂　毛利安子

○

日の本のみいづを四方にかゝやかし
いさをの山をつみし君かな

下田歌子

○

から國の大野の草木なびかせて
かへすみはたの風ののどけさ

阪正臣

○

おしなべて仇野の草はなびきけり
大山つみの神のいぶきに

千葉胤明

○

さゞれ石の巖とならん末の世も
語りつぐべしかぐはしき名は

佐々木信綱

○

昨日海のますらを迎へ今日陸の
ますらを君をむかへまつらん

‖——羽子一つよくして二つ見出しけり——‖

新年の歌（折柴園小集）

○　山本八重子

新らしき年のはじめの花ごよみ
　ひらけばひらく軒の梅ヶ枝

門ごとにたてゝ飾れる常盤木に
　ひかりかゞやくはつ日かげかな

○　佐藤多摩子

あらたまる年のはじめのはつ日影
　またるゝものはうぐひすの聲

○　澁谷貞子

住の江の岸の姫松色そひて
　千代のどかにも年やたつらむ

和田の原春を迎ふる浪間より
　のぼる初日の影ぞのどけき

○　八幡貴與子

あたらしき年のはじめはさしいづる
　日影もいとゞのどけかりけり

おきつ風あら磯なみも靜かにて
　をさまる御代の年ぞたちける

○　砂押美與子

あら玉のとしのはじめの長閑さよ
　大内やまにつるのはつこゑ

改まるとしたつけさのめでたさを
　よろこびいはふ君が御代かな

○　長倉富子

あらたまの年たちかへるわしたこそ
　人のこゝろもあらたまりけれ

○　富田近子

新らしき年のはじめのことほきに
　雲井の鶴の千代よばふらむ

○　松柴園主人

君を祝ひ身をことほきてうたふらん
　としたつ門のまつかせのこゑ

いはふなり年のはじめを千はやふる
　神代もいまもひとつこゝろに

謹賀新年

最新流行の帽子



禮帽
自金八圓
至金拾五圓

中折帽
自金参圓
至金八圓五拾錢

山高帽
自金参圓五拾錢
至金八圓五拾錢

鳥打帽
自金壹圓貳拾錢
至金五圓五拾錢

帽子御注文の節は寸法委しく御申越可被下候

駝鳥ボア（羽根襟掛）
自金五圓五拾錢
至金四拾八圓

白。黑。鼠。
黑白。鼠白。
茶白。其他



東京日本橋區通三丁目

丸善株式會社洋物店



恭賀新年

各女學校御用

附屬品並ニ造花器械類一式

營業目錄御入用ナレバ往復端書
ニテ御申越被下度候

東京市日本橋區横山町一丁目拾六番地

天野卯兵衛

電話(特)浪花一六四三番

謹賀新年

高等女學通信教授

△二ケ年卒業△講義錄月刊一冊參百頁△講義平易懇切△講師は專門の名家△會費低廉

大日本淑女學會

目下**入學の好機**

詳細なる**規則**は申込次第進呈す

本會講義錄之批評

△報知新聞評　高等女學校の全學科をば知名の女子教育家が講述せるもの也、平易と懇切とを主とせるものなれば、何人も難解の處なかる可く、各科皆聯絡を保ちて其程度を一にせるなど、講述者の苦心を見るに足る、且つ有益なる科外講話の外に『姫百合』と題する五十頁の附錄あり、博士學士の婦人に關する評義史傳衛生家庭等の文字を掲載して、一面雜誌の觀を備ふ、卷末更に田口掬汀の『學者の妻』といへる面白き小說あり。凡そ天下講義錄多しと雖も實益と趣味とを併せ有する事斯くの如きは稀なりと云ふ可し。

△中央新聞評　講述何れも平易にして親切を極めたれば初學の講習に最も可也

△每日新聞評　米國の通信教授法を參酌せる者、文字平明說明懇篤を盡くせり

△朝日新聞評　女生獨習の便を圖り平易懇切を旨とせる女學講義錄を發行せり

△二六新聞評　高等女學校の全課程を講了すべく各講述者の態度頗る着實なり

△日々新聞評　講義はすべて平易と親切とを勉めて毫も難解の憂なきに似たり

△都　新聞評　講義平明用意親切なれば數多き女學雜誌中一領域を拓き得可し

△貿易新聞評　從來の講義錄中最も進歩したるものゝ一、三百頁の大冊子なり

◎ 東京神田南甲賀町十番地（電話本局三千四番） 大日本淑女學會 ◎

謹賀新年

謹賀新年

第五回博覽會褒賞受領

定價 壹袋壱錢 罐詰五錢



此名題洗粉は皆々樣の御引立に依り益々盛大に相成難有仕合に奉存候然るに近來諸方に名題洗粉の摸造品澤山顯はれ候に付弊舖製造品には袋の裏面に芝居櫓形の登録商標を相印し御座候間何卒御求の節は篤と御熟覽の上多少に不限御用向の程偏に奉希上候也

登録商標
せいざう元
むいそてい

東京淺草區黒船町
梅素亭謹製
電話 下谷 二三四

帝國貯蓄銀行

東京銀座一丁目河岸通り
（電話 新橋 八一六 二八〇八）

本郷一丁目 本郷支店
飯倉三丁目 飯倉支店
赤坂表一丁目 赤坂支店
四谷大通り 四谷支店
南品川一丁目 品川支店
横濱吉田町 横濱支店

牛込神樂坂 神樂坂支店
神田須田町 須田町支店
兩國米澤町 米澤町支店
淺草雷門前 吾妻橋支店

代理店
日本橋坂本町 田中銀行

●一錢以上何程にても御預り最も御便利に取扱申候
●毎月五日迄の御預け金は全月分の利子を付け申候

謹賀新年



ピンポン改良室内テニス（旅行用）

一號一箱 一、〇三〇
二號同 一、二三〇
三號同 一、三五〇
四號同 一、五一〇
同用テーブル 上等一臺 拾參圓 並等一臺 九圓半
一號大人用

ピンポン室內テニス

一號一箱 一、二二〇
二號同 一、五〇〇
三號同 一、六八〇
四號同 一、八三〇
號外同 〇、八八〇
其他各種御注文に應じ製造可仕候

御用 體操器械







テニス用ラケット一組

一號大人用 一三、〇〇〇
二號同 一一、〇〇〇
三號同 八、八〇〇
四號同 七、四〇〇
五號同 六、七〇〇
六號同 五、七〇〇
七號同（小學用） 四、七〇〇
婦人用（一號） 六圓
同二號 七圓

改良櫻二重枠ラケット一組

一號 拾參圓參拾錢
二號 拾壹圓七拾錢
三號 九圓五拾錢
四號 八圓貳拾錢
五號 七圓貳拾錢
六號 六圓貳拾錢
テニス組一張 一、七五〇 [illegible]
〇此外各種あり升

東京神田裏神保町五 **安藤商店** 電話本局四百八十四



一月の儀式

中川愛氷

人が此世に生れ出でた時に、分別があるものとすれば、その時は五十年の大希望を持つて居る譯であるから、大に愉快に感ずることであらうが、たゞ無意識に泣くに始まつて、いつ要領を得るともなく、成人するのであるから、此世に今日から生れたといふやうな心を持つ時はないのである、さりながら新年を迎へた時の心は、人生に一句頭を打つた、物が改つたやうな氣がして、その晴々した心は、實に何とも形容のしやうのない、不思議な感を持つもので、此時が此世に生れ出でた樣にも思はれるのである、

社會は上中下の階級があつて、巷に車を曳わぶる人があるかと思へば、高樓に酒をあたゝめて、それを愛づるものもあり、一方には喜の世界を現じ、一方には哀の娑婆となるのであるが、新年を迎へた時の心は、上下おしなべて眉を開き、大なる喜びを胸に溢らすのである、それにつけても思ふに世の中はいつも新年のやうに、樂もしく生々として暮し



松平（直亮）伯爵令孃　貞子

たいものである、このめでたき新年には、きのふの鬼が禮に來るといふ位で、行儀知らぬ家人も、互に喜びを述べ合ふ樣になり、いつかゝる心が輸入されたかと思はるゝばかり、年といふ空漠なものでなく、纏つた或物を得たやうな、新しき世界へ轉籍したやうな心がする、その美しい心が何時まで繼續することであらうぞ、門松の取除らるゝ時を限りてはあるまいか、然しは喜びの心を潤飾する門松の功能も大したものである、されば新年を迎ふる家には、眞似事と見るほどでも、それ〳〵分に應じて飾りものをする、雜煮を祝ふ、それ〳〵一趣向あるものである、やう〳〵その日を暮すほどの家にても、新年には新年らしき設があるから、上流の家々には如何なる儀式があつて、いかに嚴しい、いかに美しいものであるか、それは一般の想像する所であらうと思ふ、



子毛男爵令孃　亮子

そこで岩倉公爵家などでは、昔の朝廷の例に倣うて、雉子酒が出る、柳澤伯爵家などでは『おかん雜煮』などいふ献立がある、岡部子爵家などては、元旦兎狩をして、それが御馳走の材料になるといふやうに、料理にもそれ〳〵變つた趣向があり、儀式もいろ〳〵であつて、東京中でもお國風なるものが幾つあるか知れぬが、近頃は一の東京風とでも云ふものになつたのが多いやうである、

玆に記者は二三名家の新年をいかにして迎へられた

るかの一部を記述し、その消息を傳へたいと思ふ。

九條公爵家

關白家として、東宮妃殿下御生家として、家門並ぶものなく。偶々新聞雜誌の口繪に、公爵が冠衣束帶の態を見ても、いかに嚴しき儀式、いかに手數のかゝりたる裝飾と、いかに善盡し美盡したる獻立によつて、新年を迎へらるゝかといふことは、誰しも疑を容れぬ所であらう、然るに以前は兎に角に、今日は極めて質素なものである、

元日のまだ東天さへほの暗き午前五時、邸内に祀れる、鎭守春日明神と歴代の神前に神々しく點燈して、公爵はじめ家族一同、家職の方々も參拜し、終つてそれ〳〵公爵に祝辭を述べられるのである、

引續いて公爵の家族一同、座敷に團欒せられ、まづ大福茶とて梅ぼしに昆布と茶を加へたるものを召上られ、次に屠蘇を酌み、雜煮を祝はるゝのである、雜煮の材料も東京流で、菜と餅位なものである、床には其時によりて、めでたき軸物を掛け、蓬萊山を飾るのである、蓬萊山とは三方に蜜柑を積上げ、その上に熨斗昆布を置いた物である、此團欒の家族は公爵道孝、世嗣道實、同夫人憲子、令孃紝子、道實氏の長男道秀、長女兼子、次に豊子、充子、繁子の方々（九名）である、



中村將軍令孃　稔子

それから公爵は參内せらるゝ、やがて正午となる、

この晝の献立は、平素より御馳走があるので、これが二汁五菜との定めである、その細目は年々これと定まつたものはない、其時の都合次第とのことである、

門松をはじめ各部屋に鏡餅を備へらる、

などは云ふまでもないことで、現住家職の家令一人、家從四人、家從補二人は一室に、又老女女中等はそれぞれ部屋に元旦の雜煮は、殆んど同時刻位に前後して祝ふのである、さでこの雜煮を祝ふといふ事は、前記の如くで、眞



村上浦子

に雜煮ばかりであつて、此雜煮は元日だけとの事である、是は極て物足らぬやうな、さうであるまいと云ふ氣がするが、實際はそれであるとのこと、

普通年賀の客は一日より引受けられ、公爵が舊臣に面會せられて、祝辭を受けられるのは、六日と定められてある、

九條家の一同に於て、平素よりかはれるものを記すれば斯んなことである、その他の内事に就ては、頗る多く聞かんと思ふこともあらんが、それは問題外として、次は

鍋島侯爵家

舊佐賀大藩の主人として門地高く、あらゆる公共事業に力を致される、上流社交界に名聲赫々たる侯爵、同令夫人を戴ける鍋島家の一月は如何であるか、

極めて東京式で、所謂お國風と云ふ所はない、此藩では島原の役に、草鞋ばきで雜煮を祝ひ、戰場に赴

いて大功を現はしたいふので、草鞋穿のまゝ祝ふのが今も例になつて居るもあり、一度出掛けて引かへし、さて雑煮を祝ふのもあるが、同家ではさやうな事をせられやう筈もなければ、又せられぬのである

元旦の献立に曰く、若水、喰積、年餅、茶、菓子（柿、蜜柑）屠蘇、三方、長柄、加、白木、折（栗熨斗）吸物（昆布、鯛ひれ、盃付）銚子、押、銚子、重引（卷玉子）銚子、雑煮、とかういふ次第になつて、次は二汁五菜の膳、即ち鱠、小蕪の汁、小皿、香物、鹽鯛の平、鮒の小氷の向詰、飯の御馳走がある、晝は吸物、銚子、押、銚子、重引、銚子、膳が平常の通り、

七日の晝は、元日の晝と同じことで、十一日の晝、鎧大小鏡餅開きがあつて、その他は元日七日と同じこと、十四日の朝、ほたれ菜といふ献立に外は變りなく、十五日の朝は猪口、砂糖、小皿、香の物と小豆粥といふ膳部である、以上の外はすべて平常の通りである、

此献立の前に團欒せらるゝは、侯爵直大、令夫人榮子、長男直映、令夫人禎子、令嬢茂子、信子、尚子敏子、令息哲雄の方々（九名）で、九條家と同じ人數である、



女鑑懸題當選者　大澤小松子

侯爵は元日の朝の食事を終へて間もなく宮内省へ出頭せらる、その出掛に、家職の方々は立禮で新年の祝賀を述べるのである、

松の内は十四日迄で、三四日迄のうちに新聞へ、侯

爵面會の日取を廣告し、舊藩士の年賀を受けられる事になつて居る、併し大藩であるから、來賀者が多く、自然邸內に小園遊會が開かれ、燒肴、蜜柑、鱈、昆布などの折詰が出る

先づ記すべき事はこんなものである、次は



女鑑懸題當選者　里田代音子

宗伯爵家

書に巧に畫を能くし、風流韻事に富まる、星石宗伯爵家は、大に儀式も變つて珍しい、何れの家にも立てる門松は、同家にも立てられるのであるが、それが一風變つて、門內に玄關へ向けて立てられるので立てるのは前年の暮の二十八日と定まつて居る、それから玄關、通用門、庭先の口等に松薪を二つに割り、それを元のまゝに合したるものに讓り葉、裏白の七五三をなして左右から立かける

室內には床飾りが、奧のは狩野の筆にて鶴龜、壽老の三幅對、松竹梅に柳の花生、御供は八寸一對、三方に熨斗、昆布、讓り葉裏白は通例である、違棚には三方に米を盛り、その上に橙を置き、橙の上に椿の葉をさし、米のぐるりには、するめ、やぶかうじほんだはら、串柿を入合せる、

表坐の床飾りは、二幅對の掛物青地に一幅は壽の字を一幅は福の字を白く拔きたるに、その白字の中に琴棋書畫の圖がある明畫を掛け、奧と同じやうな生花を挿すのが例となつて居る、

さて元日の膳には、家族とても伯爵重望、令夫人尚子の二方のみであるから、家職の方々も同じ席に列せられ、第一に梅ぼし、次に薄茶、それから雌蝶雄蝶の銚子で、初献は、八寸の膳に、豆に葛のきぬかけ、するめ、蜜柑の皮、これは皆花包の紙の上に置き、第二献に、雑煮、これは丸餅一つと、菜にするめの取合せである、第三献には、鯛の鰭の煮物、それから一汁三菜の飯、これが三ケ日、七日の朝は、平なます、汁、香の物、飯、晝はなづな粥、ぜんざい、鮑のつの和、大根短冊切の黒胡麻かけ、夜は三献で元日通り、これに年の豆、熨斗、昆布が付く、

十一日はなしで、十四日は鏡開きをし、門松を撤る、

十五日は朝あづき粥、鮑のつの和、大根短冊切の胡麻和、晝は七日の朝と同じである、かざり箸は葭で作つたものであるが、これは飾るのみで、一月は栗剝箸を用うる、この箸は栗の枝の箸の大きさに切り中ほどを皮のまゝにして、兩端を削つたものである

まづ聞き得た所以上の如きもので、これは近來極めて略したものであるとのこと、

以上記する所の如く、さて大に變つたといふこともないか、變つて居るであらうと思うて、變らぬのが、大に變つた所であるまいか、この三家の外猶數家の儀式を調べることを得たのであるが、それは鬼の笑ふなる來年の話としやう。



澤柳政太郎氏令孃　信子

色の配合に就て

理學士 田中三四郎

室内の装飾といふことは、殊に婦人の重きを置くべきものとなつて居る、種々の装飾法のうちで色の配合といふことについて、いさゝか述べやうと思ふ、

諸嬢が御承知の通り、太陽の光り即ち白色の光は、赤、橙、黄、緑、青、藍、菫の、七つの色から成立つて居るものである、さて物體が、或は赤だの、或は青だの、種々樣々の色を現はすのは、この太陽の七色のうち、青だの赤だの、特殊の色だけを反射する所から、個様に種々の色に見えるのである、



郷田壽子

室内装飾に於て、此等の色合の物を秩序なく、亂雜に配合する時は、譬へ色その物の個々別々としては鮮やかなものであつても一向引立つて見えぬ、其理由は、七色のうち、或色と或色とは互に助けあつて、色の艶を増すのであるが、又或色と或色とは、互に艶を消し合ふやうな作用があるからである、

然らばどんな色が互に助け合ふかといへば、今白紙に赤いインキで丸を描いて、これを強き日光に曝して見た後、眼を白い所へ轉ずると、赤い丸の餘地なる白い所に、青い丸き形が現はれる、それと同樣に青い丸い形を描いたものを見た後白い所を見ると、

赤い丸いものが見える、斯樣な譯で、赤を見た眼は白い所をも青く感じ、青を見た眼は白い所をも、赤く感ずるやうであるから、赤と青とを並べて置くと其艶がます〳〵鮮かに見ゆるのである、

この赤と青との二色を餘色と名けて居る、この外橙色と藍色、黄色と菫色なども、同じ關係の色で、同じく餘色である、かやうな譯であるから、青色の絨氈に赤色の窓掛を用うるといふことにすれば、室内の有樣は誠に鮮かで、生々として感じられるのである、もし之に反して餘色でない二つの色を並べて用うると、折角の色も艶を失なうて、何となく陰氣に感ずる次第である、彼の萬緑叢中紅一點などゝいふのも、矢張餘色の關係で、一種の快感を與ふるのである、

そこで室内に用うる裝飾品の色合は、成るべく餘色の關係を持たせるやうにせば、一層引立つて見ゆるやうになる、この餘色の應用は、繪畫に於ても、最も大切なことであつて、色彩の生きて見えるのも、死んで見えるのも、矢張この餘色の關係である、

生兵法の注意

醫學士　眞鍋嘉一郎

生兵法大怪我の基といふことは、まことに面白い言葉で、古いが中々味がある、世間には隨分書物や人に聞いて、いろ〳〵病氣の名を覺える器用な人で、往々失敗するものがある、物を覺えて惡いと云ふことは一つもないが、充分に覺えぬものを、覺えたつもりになるから、物が間違うて來るのである、そこで病氣の事を少し覺えたが爲に、少し身體がわるいとなると、自分の知つた病氣に考寄せる、

假令ば腹が痛むと、腹膜炎ではあるまいか、痰が出る、肺病ではあるまいか、といふやうに、さなきだに人は病の器といふ位であるものを、無暗に役にたゝぬ心配をするものが多い、

殊に婦人に於ては、近來子宮病などいふ言葉が流行

して、此患者が多くなるにつれて、婦人が子宮病などいふことを、大膽で話すを憚らぬやうになつた、これも生かじりに子宮の事を覺えたのがわるい、却つて物を半分知つた爲に神經を起して、疾煩うて居るのが多い、それに比べると、病の事も何も知らぬ田夫野人の方が、却つて病にかゝるものが少い、否病にかゝるは少い譯はないが、少しの病を氣にしていろ〳〵に丁重に考へて、自ら骨折つて病を重らせるといふことがないから、病以上の病を感ずることはない、存外安樂に丈夫に育つて居るやうである、殊に婦人は男子に比して、一般に氣が小い、物を樂觀するより、悲觀する方が多いから、我から病勢を増すやうなことになるのである、依つて衞生、生理の事を根本に立入つて研究し、それ相當の所置をすることならば、極めて嘉すべきことであるが、唯表面的や又極めて範圍の狹い衞生生理の智識は、下手に振廻はすと、極めて危險な事になる、

そこで自分の希望する所は、衞生生理の事を、深く知らぬまでも、よく筋路をつけて、本當に覺えて貰ひたい、さうして病を氣遣ふにしても、當つた氣遣ひをして貰いたい、心配せずとものことを無暗に心配したりすることは、まことにつまらぬことであるこの區別の立つやうには、専門家でなければ出來ぬことであるが、その方に少しでも距離の近いやうにしたいものである、たゞ病の名を覺えたり、藥の名を覺えた位の淺薄な事で、大切な自體をあやまらぬやうにせねばならぬ、そこで衞生生理の事を覺るといふより、間違へぬ事に大に注意を拂はねばならぬかやうに云へば病氣を侮れといふやうにも聞えるであらう、侮れとは云はぬが、買被らぬやうにせねばならぬ、そこで如何にせばよいかと云ふに、病氣の事は専門の大家さへ、時々診斷を間違へることがある位であるから、病を間違へて手重にし、侮つて手重にすることもよくないことであるから、それは萬一間違ふまでも、相當に信用ある人に診察を乞ふより外に道はないのである（文責在記者）

結膜炎の療法

眼科醫　増野　豊

結膜炎は俗にやんめ、はやり眼と稱へ、四季何れの時を選ばず、又其土地を問はずして流行し來り、一家殘らずこの病に罹ることがある、殊に春秋の二季の如き、逆せ氣候の時に、見舞はれる病であるから、その用心をせねばならぬ、流行の狀態から云へば、恐らくはこの病は傳染性の一に加入すべきものであらう、ウイリス氏、モラ氏の如きも、檢鏡の結果、或る黴菌を發見したと報告されて居る、

室内戸外を問はず空氣の不潔なる所、顏面の皮膚病人、又は不潔なる職業等が大に此病氣を誘起するの原因となるものであるから、眼の鏡の曇らぬやう、眼には常に清潔なる空氣を滋養とすべきである、

此病に急性と慢性との二種あつて、其急性のものは、眼球結膜（白目）が赤色を現はし、稍々腫脹し、涙液眼脂の多量に分泌するばかりでなく、患者は自ら灼くが如く、刺すが如き痛みを覺え、常に眼の内には塵埃の這入つて居る如く、コロ〳〵する感じを覺え、物を見るにまぶしくして明瞭でない、實にその當初極めて不快を感ずる病症である、それが追々進んで慢性となるに及ぶ、習慣的に凌ぎ易くなるのであるが、之に反して治療は倍々困難となり、自然黑目には種々の病症を惹起し、進んで盲目になるのも往々見る處である、

又この病は、常にトラホーム、風眼等の恐るべき病に轉籍し易き性質を有つて居るから、必ず輕視してはならぬ、

そこで此豫防法には、眼の分泌物に注意し、他人の眼脂及び眼脂の附着したる器物布片等を直接に觸れぬやうにし、もし過つて觸れた場合には、石炭酸水又は石鹼等で、充分手指を洗滌せねばならぬ、又室内を清潔にして、空氣の流通をよくし、寢具等は時時日光に爆露し、及ぶべきだけ乾燥せしむやうにし殊にこの病に罹り易き性質を有する人は平時より勉

めて、身體の强壯を計り、適度の運動、每朝皮膚の冷水摩擦法等を行ふやうにして、この病に見舞はれないやうにせねばならぬ、

既にこの病に犯された時は、殺菌したる冷水又は、稀薄なる食鹽水、硼酸水等で眼を洗ふが第一である尙ほこれで病症增進する時は、速に醫治を受くることが肝要である、

猶常に不潔なる職業に從事する人は、殊に眼を大切にして、時々前記の洗眼液で洗眼するやうにせられたきものである、

◎蕪蒸の調理法　大きな蕪の皮を剝き、微塵に庖丁して煮出汁と醬油で程よく煮、玉子を溶いてそれへ混じ、少々醬油を加へて醬油へ浸した鳥肉など四五片入れ、蒸籠へかけて茶碗蒸の手續に蒸し口にに揉海苔を入れる尤も蕪蒸の割合は微塵切りにした蕪一〇、玉子一〇、醬油二の見當でよろしい

◎空也豆腐の製法　白豆腐を二つにそいで二寸四方位に庖丁し淡い葛湯でざつと茹で稍や上らんとする所を網杓子で掬つて、玉子一盃、煮出汁一盃、醬油少々を溶き合せた蒸茶碗の中へ取り上に鳥そぼろ、三葉芹丹後獄などをのせ、蒸籠へかけて十分程蒸し、軈て取出して葛餡をかけ、生姜の絞汁を加へて出す

西洋作法の一ふし

竹街山人

◎常に身體の清潔に注意するが第一である、ちよッと見るとさうも思はれないが、實際は清潔を等閑にする人が多いやうである、

◎汚れたるシャツは、殊更に氣を注けて着ない樣にするがよい、

◎何事にも無精するはよくない、清潔と云ふ事も人道の片割と思はねばならぬ、

◎化粧するにも、細かな注意を要するのである、他の處は清潔でも、爪の間を眞黑にして居るなどは、見よくないことであるから、

◎鼻及び耳の小毛は務めて取去るがよし、

◎他人の目前で、耳または鼻を掻き、又爪の間を掃除するなどは失禮である、總ていやなものを清潔にするのはよい事であるが、他人の居ない場所でするのが當然である、

◎いくら頭髪が赤くなつても、髪染などすることはやめた方がよい、染めた髪はどうしても色が自然でないから、

◎靴は能く磨き上げたのを穿くべきである、

◎帽子を戴くに、眼を蓋ふ程まで目深に被つたり、後部へ斜に被つたりするはよくない事である、一つは亂暴に見え、他は粗野に見える、

◎小飾り物、指輪等、何の實用を爲さず、單に飾にとゞまるものは成るべく避くる方が宜しい、然しカフス、ボタン、衿卷止、時計の鎖等、實用的のものであるから、之を避くる必要はない、これとても可成あつさりした方が宜しい、



◎衣服を飾り、樣子ぶるなど、浮薄なる眞似には遠ざかることが必要である、

◎寐卷姿のまゝにて寐室外に出るものではない、殊に膳に就く時の如きは、此の服裝にて居るは下賤の極である、

◎歩容は人の性質を表すものであるから樣子よく歩むものである、頭を垂れて歩むは無用です、固苦しくするには及ばぬが、體を眞直にのばし、威厳を以て歩むべきで、膝を曲げたり、足を内輪に運んだり、

風邪ひかぬ用意　一月の御馳走　婦人の身つくろひ

赤兒の衣服

生まれて始めて衣服をきせる時には、種々注意しなければならぬ事がありますが、第一に臍の緒のたれないやうにする事と、つけ紐をあまりにかたくしめない様に注意する事です、つけ紐をかたくしめますと、小兒の呼吸をするのにさまたげになる恐れがあります、若しつゝ袖の着物をきせるならば、出來るだけ廣く手の自由に動かす事の出來るやうに作らないと、肉體の發達をさまたげます、それからつけ紐の附け方は、二ケ所にして一は上まへの通常の處、一は下まへの左の縫目の處につける樣にしますと、誠に裕くりとして、哺乳兒のためによい樣で厶います、近頃小兒に厚着させるのは、皮膚を弱くすると云ふ說から、あまり極端に生れたての哺乳兒にまで厚着をさせるのは宜しくないと考へて、薄衣をさせゝゐる方などもある相ですが、勿論悪い事ではありませぬが、生れてまもない小兒には、却て感冒をひかせたり、氣管枝加答兒や、氣管枝肺炎などに罹る事がございます冬期に生れた小兒などは、凡そ三ケ月位は決して戸外に出さないで、厚着をさせる方が危險が少なう厶います、(弘田博士談)

少女の防寒具

一兩年此方婦人社會に流行愛用せらるゝは彼のボーアなるが、丸ボーアは諸鳥の羽毛を以て製せられ、寧ろ實用より装飾を主とし、外國にては既婚者若しくは可婚者のみに用ひられ、日本の如く十二三歳の少女に用ふることを、皆無の姿なり、殊に吾々の頸部には、無數の血管往來して、温熱の放散を防ぎ、且つ頸部は皮膚と衣服の間に生ぜる温暖の氣を散失せしむる處なれば、寧ろ斯かる物を用ひざるこそ望ましき次第なり、況して年少の婦女子に之を用ふるは早くより皮膚の抵抗力を弱くし、随つて感冒に罹る習慣を作る者なれば、成るべく用ひざるを好しとす、又次はマッフなるが、之も時の流行より、何人も用ひ居る傾きあれど、外國にては貴婦人が夜會に赴く時などにあらざれば用ひざる、所謂禮式用なるのみならず、同じく筋肉で運動を妨ぐること多ければ、單に保温の爲めならば、他の品を用ひ、斯る品を用ひざる様注意すべく、尙ほ他に一ッ穿き違ひ居れるは、踵の小さき靴なり、元來踵の小さき靴は、装飾用にして専ら舞踏などに用ふる品故、若し常用するに於ては、足の運動自由ならずして、健康を害すること多大なるを以て、世の母親たる者に須らく注意すべきことなりとす云々(三浦博士談)

一月の重詰

◎吸物　(國旗半ペン)半ペンを四ッ切りとし、中央に赤の摺身にて日の丸を出して蒸し(蒸のり)半日ほど水に浸し、松竹梅の

抜形にて抜く、上等の煮汁を作りて味を附け、木の芽を落して椀に盛るべし、

◎初重　（朝日蒲鉾）のし形の蒲鉾の上面に、赤の擂身にて日の出を描き、之を蒸籠に掛けて蒸し、小口切として用ふ、（末廣海老）車海老を湯煮し頭と尻と附目より眞直に皮を剝去りて、縦に庖丁を入れ、背の開かざるやう注意し、伏身にして鍋蓋にて押へ、之を鉄葉の箱に並べ、別に寒天一本に水二合砂糖及び鹽を少しく入れ、之を裏漉して前の海老の周圍に注ぎ入れて冷し、扇形に庖丁し青竹にて骨を附けるなり、（梅花卵子）を卵子を堅く湯煮し、大根の切口に箸五本を梅花の形に立て、其中に卵子を挾みて、小口切とすべし、（筍慈姑）慈姑を小口より手に鹽を附けて、横さまに剝き、筍の如くクル〳〵巻込みて、楊枝にて止め、之へ卵子の白身を泡立てゝ詰め、蒸籠に掛けて蒸したる後、縦二ツ切となすべし、（松茸甘酢）罐詰の松茸を針にて、足の方を細く裂き、之を半切として鹽酢に漬込み、暫時にして取上げて絞り、味淋と砂糖を溶きたる中に漬けて用ゆ、

◎二重　（ロールスウイーツミート）牛肉の挽肉を、豚の腹脂にて巻き、之を蒸したる後、小口切として用ゆ（ドレッシングチスタール）牡蠣をザツト湯煮し、ドレッシングソースにてパンを薄く三角形に切りたる上に載せ、パセリを振り掛く（ポリカードエッグス）茹卵子の黄身と白身を別々に裏漉とし、ホワツトソースを製して白身を交ぜ、前同様のパンに載せ、上面に黄身を振り掛く、

◎三重　（比目魚の光琳作）比目魚を四枚に剝ぎ、庖丁にてこそげ、裏漉として其盛の半分を食紅にて色を附け、他の半分を其儘庖丁の先にて紙に附け、上より又紙にて掩ひ、鹽を振りたる後、熱湯を掛け、夫より清水にて冷し、之を細引として白と赤とを段々に並べ、四角に小口より切る、（細魚の菊花作）細魚を三枚に卸して細作とし、之を裏漉したる卵子の黄身に抹して、菊花の形に巻込み、其心に山葵を擂りて置く、

◎四重　（チツプスケーキ）カステラを大賽の目に切り、セリ酒にて砂糖を溶きて和へ其上にソリームを泡立てゝ一面に被せ、罐詰のフルーツを種々に切りて、ソリームの上に程好く彩り置くべし（秋穂料理教授）

婦人の髪飾り

櫛笄は若き婦人なれば、操形、中年は都形派手社會なれば、新橋形、元祿形なるべく模様は光琳風の月に夜梅、寒牡丹又は金の切金研出を入れたる元祿模様等なるべく、又金地へ銀磨出しにて、春の玉川を描き、勅題新年の河に因みたる模様にて、形は元祿形笄は黒鼈甲を用ゐたるものなど、三十歳前後の婦人に適すべし、價は二十圓位又黒鼈甲地に高蒔繪にて光琳の梅を現はし、青金にて半月を入れたるなど、二十歳前後向なるべく、此れ亦面白き意匠にて價二十五六圓△簪は珊瑚を除くの外、コ類全く廢に、年配に拘らず平打大に流行し、二十金の五分丸を日の出に見立て、赤銅にて鳥二羽三羽を高彫象嵌したるものなど、善き思付なるべく、又同様の大さにて、表に白金象嵌の片彫にて櫻花を現し裏に男駒を片切彫し今春の干支に因みたるもの等二十歳以上三十七八歳位の向にて價は廿圓より廿五六圓

地面へ唾をすつたりしないで、品よく歩む様にするがよい、

◎手を衣袋の中へ入れて居るものではない、又拇指を中着の袖孔へ挾んで居るは見苦しい、小楊枝は唯歯に物のはさまりたるを取除く爲に用るを許さるゝのみで、之を他人の目前で噛んだり弄んだりするものではない、近頃は隨分立派な人々が大道にくはへ楊枝をして歩行したり、楊枝を使用しながら客と對話したりして居るものがある様に見受けるが、これは云ふまでもないよくない事である、

◎咳を爲し、痰を吐くは失禮な行爲である、健全なる體軀を有る人が、屢ば痰を吐く筈がないのである若し其人が常に痰を吐くとせば、其は一種の癖で、直せは直るものである、勿論氣管枝肺病等の患者は已むを得ざる事であるが、之とても痰吐の置れたる場所の外、何處にも唾く事は許さない、路傍に吐く事も謹むべき事で、若し吐く必要があらば、溝に行きて之を爲す方がよろしい、火鉢の中だの、絨氈の上に痰をはくは、不潔の極である、故に英國にてはハンケチへ吐く事として居る、

◎大聲を擧げて笑ふはよくない事である、笑ふ時心より笑ふは障りなけれども、心より笑ふに、大聲を擧げる必要はないのである、

◎何事もないのに微笑したり、歯を露して笑ふたりする習慣はよくない、笑ふべき場合に笑ふはよけれど其他は、口を閉いて居るもので、常に能く笑ふ者は、何の役にもたゝない人である、

◎客と對坐せる時などに、欠伸や嚔等をしない様に注意せねばならぬ、若し嚔だのがしたくなつた場合は、暫時の間呼吸を止めて耐へて居れば直にとまるである、

◎常に口をあけて居る癖は、成べく注意し直す様にせねばならぬ、或博士が『汝の口を閉よ』と題せる書を著し、口をあけて居る事に就て、喧しく論した位である、口で呼吸しないで、鼻でする樣にして、眠て居る時も、口を閉て居る樣に習慣を附けるがよ

い、口を常にあけて居るのは、性質の痴鈍を表し、又一方には齒にも身躰にも害がある、

◎他人の前にて手で頭髪を整へたり、指で頭を掻いたりするは、成べく避ける方がよい、

◎友人に餘り心安く爲過ぎて狎るゝはよくない事で設ひ水魚の交を結ぶ友でも、脊を衝たり袖を引張つたり、其他親密の度を樣子に表はすはよろしくない己に親しき者に心を配つて、他人を顧みざる如き我儘は、大に謹むべき事である、

◎案内もなく、或は戸を叩かずに、人の部屋に入るものではない、いかほど親しく交り居る友人の間柄にも、禮儀を重んじ、互に私行をさぐるが如きはよろしくない事である、

◎戸口を出入する場合に、若し戸が閉ぢてあつたなれば、之をもとの樣に閉ぢて置くものである、又あいて居れば其儘にして置くもので、又閉づる時大きな音をさせぬ樣に注意するがよい、

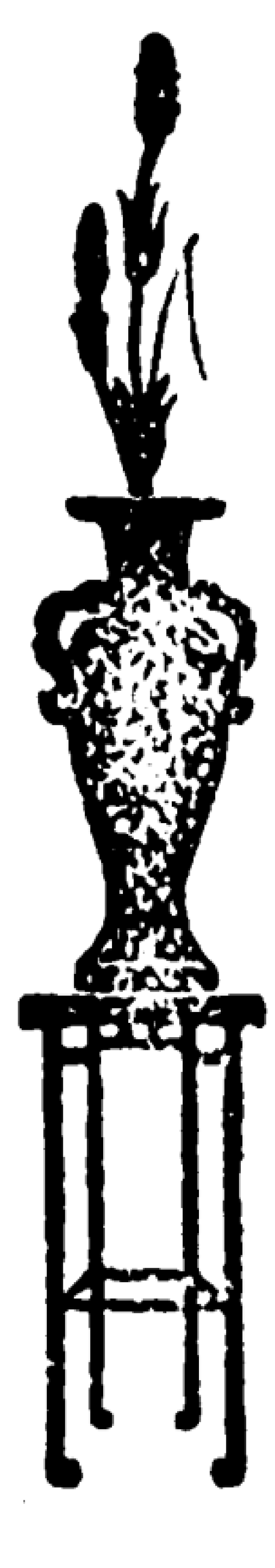
◎諸官省の外何處に至るも、室内にて帽子を戴いて居ることはよくない、客間などにも帽を脫せざるは以ての外の事である、

◎他人の机の上などに置いてある、手紙書付等總て秘密に屬する樣な品物に、手を觸れることはならぬ又他人が讀み書きして居る時、伸上つてのぞき込むのは甚だ失禮である、

◎他人が話をして居る時に、椅子などを動かしてはならぬ、斯の如きことを爲す人は隨分多いやうですがどうもよくない事である、

◎公衆の面前、或は他人の迷惑になる樣な處で、足を以て床を打鳴したり、指を以て机椅子硝子窓等を叩いてはならぬ、又口の内で歌を唄ふなどよくないことである、

長者に對して、媚びず、自己の威嚴自尊を保ち、眼下の者に傲慢な擧動をせずに、親切にすべきである



料理の材料

土岐榮子

煎汁の取り方

一本又は二本にてもよし、三十目位の鰹節を上削し、血合等をけづれば、正味二十目あまりとなる、其二十目の鰹節には、水一升の割合にして、湯を沸騰せしめ、先の二十目のかつをぶしを薄くかきたるを入れ、夏ならば直ちに火より下し、其他の時にはさらに煮たゝしめ、上に浮き上りし泡を金杓子にてすくひ出し、火より下して暫く置きて、水嚢にて漉す、之を一番煮汁と云ひ、椀盛其他種々の吸物の汁となり、次に一番をこせしかすに、又水を入れて能く煮立て、前の如く水嚢にて漉せしものを二番汁と云ふ、此は煮物に用ゆ、

砂糖わく引

料理に用ゆるわく引にする砂糖は、第一ザラメ、次に三盆が宜しうございますが、其方法は砂糖五百目に、水一舛位玉子の白味ばかり一個位を入れてよくかきまはし、底にはこげつかぬ様に底より上へ上へとかきまはし、煎上りし時茶呑茶碗に水を一杯ばかり二三度入れて、火より下して沈ませると、わくばかり鼠色になつて泡と共に浮び上る、其時それをすくひあげて、鍋を下して其上に半紙をはり、暫くして靜に紙をとり去ればわくは半紙につきて、殘る汁は蜜の如くになる、此れは煮物に使用するのです

鹽のわく引仕方

鹽のわくも砂糖と同じ事にて、やはり玉子の白味にてわくを抜きますが、前の砂糖の分量及び方法も大凡同じ事ですが、鹽もわくをとり、さりて透きとほりたる時、上の汁ばかりを器物に入れ、殘りの鹽を下に紙をしきて、其上にあげ、暫く置きますと、やきしほと同じ様になります、さきの汁と共に、此れも料理に缺くべからざるものなり、

煮切りの仕方

煮切りと申しますは、白味淋一舛を鍋に入れて五合

位に煮つめて、酒の香りのなきを度といたして、火より下します、之れは上等の煮物、又はてり燒の汁其他いろ〳〵に使用いたします、

五もくの玉子豆腐仕方

玉子豆腐には鷄卵凡一人一個（小にて）あてにて、鷄卵五個につき、煮汁一合五勺煮切り、二勺鹽醤油少々を加へてよくまぜるのです、

又五もくにするには海老、椎茸、三つ葉かしわ、きくらげ、其他いろ〳〵のものを細かにきりて、少しあぢをつけて下煮をするのですもし普通の玉子豆腐なれば、此の五もくはいりません、



前の玉子のときし中へ、五もくを入れて、よくかきまはし、鉢にても又ブリキの箱にても、先きの五もくの玉子を入れて、蒸籠に入れて蒸し、五分間の後蓋を少しずらし息のぬける様にして、又二三十分間蒸てその上りを見るには、箸を玉子の鉢中にさし、汁のたれなき時は蒸上りしなり後いだして金杓子にてよきほどにすくひ又きりて盛るなり、

あんくずの汁の仕方

前の煮汁のとり方をして、水六合に鰹節十匁鹽三匁あまり、醤油三勺半煎切り、二勺あまりを入れ、葛五匁を水にて解き、右の汁鍋を火より下して、其中に少しつゝ注ぎ入れ、さらに

又火にかけて宜く掻きまぜるなり、
これはなかなかうまいものです、

牛肉のくず引き

牛肉のヒレ(赤味)の處を半斤ばかりとりて、薄くきりてまな板の上にのせて、庖丁の背にて輕くたゝきて上等の片栗粉にてまむし、二三度つけてはたゝきするなり、
汁は前の如くにして煮たちし時、鹽または、醤油少しつゝ入れてあぢをからめにつけ、一度煮たちし時前の牛肉を一枚づゝ入れて煮たゝしめ、其時豆腐を角なりに切りて、其中に入れ、一寸煮立ちし時卸すなり、附合せには先の汁を宜しとす、

柳澤伯爵家一月の獻立

◎一日　△朝　祝膳、△晝　鴨のつゆ、燒肴△茶、洋菓子△夕　刺身、玉子燒、
◎二日　△朝　祝膳△晝　茶碗蒸、刺身△茶　握りずし△夕　散し玉子　煮肴
◎三日　△朝　祝膳△晝　海老と菜のつゆ　牛肉の刻み煮△茶　カステイラ△夕　鯛南蠻、蒲鉾、
◎四日　△朝　あさりの汁、煎湯葉△晝　玉子のつゆ△茶　燒餅△夕　寄せ鍋、燒鳥、
◎五日　△朝　薩摩芋汁、海苔△晝　鳥と菜のつゆ鯛の味噌燒△茶　ビスケット△夕　海老と菜の露、親子丼、
◎六日　△朝　千六本の汁、鹽鮭△晝　鱈昆布のつゆ、玉子燒△茶　阿部川海苔卷餅△夕　豆腐と海苔のつゆ、鯛のケンチン蒸、
◎七日　△朝　ごまめ、數の子、煮豆、七种粥餅△晝　鯛の鹽燒　鱠△茶　洋菓子△夕　パン、トマトウツップ、魚フライ、チキンライス、菓子、紅茶
◎八日　△朝　海苔、薩摩芋汁△晝　がんもどき、推茸、ゆば、豆腐推茸汁△茶　有合(到來の品にて)△夕　刺身　鴨とせりの露、
◎九日　△朝　わかめ味噌汁、五分玉子△晝　落し

玉子のつゆ、煮肴△茶　燒たる餅△夕　鯛のつゆ、鳥の丸燒、

◎十日　△朝　刺身の味噌汁、煎湯葉△晝　しらすと海苔のつゆ　燒肴△茶　握ずし△夕　自製洋食、

◎十一日　△朝　千六本の味噌汁、たゝみ鰯△晝　洋食(但し注文)△茶　有合(到來の品にて)△夕　かき玉子のつゆ、刺身、

◎十二日　△朝　葱の味噌汁　鮭の鹽引△晝　玉子と鳥のつゆ、蒲鉾△茶　鹽餡汁粉△夕　かき玉子のつゆ、刺身、

◎十三日　△朝　豆腐の味噌汁、鱈煮付△晝　玉子つゆ、刺身△茶　ビスケット△夕　鳥と菜のつゆ、

◎十四日　△朝　千六本の味噌汁　つくだに△晝　海苔、しらすのつゆ△茶　燒芋△夕　落し玉子のつゆ、牛肉の味噌煮、

◎十五日　△朝　芋のつゆ、海苔△晝　さしみ、玉子のつゆ△茶　有合の物△夕　ふわ〳〵玉子の露、

◎十六日　△朝　薩摩芋の味噌汁　しひたけ煮付△晝　燒鳥　野菜雜煮△茶　カステーラ△夕　海老と菜のつゆ、魚の味噌燒、

◎十七日　△朝　千六本の味噌汁、鮭△晝　鳥と菜のつゆ、蒲鉾△茶　稻荷ずし△夕　見計ひ、

◎十八日　△朝　あさりのつゆ、海苔の佃煮△晝　燒牛　魚の汁△茶　到來の菓子△夕　しらすと海苔のつゆ、刺身、

◎十九日　△朝　葱の味噌汁、五分玉子△晝　玉子のつゆ、さし身△茶　きりざんしよ△夕　茶碗蒸、

◎二十日　△朝　豆腐の味噌汁、ヲムレツ△晝　鳥と菜のつゆ、燒肴△茶　安部川△夕　鯛なんばん、燒鳥、

◎二十一日　△朝　芋の味噌汁　うづら豆　のり△晝　オムレツ　鳥のつゆ△茶　やきいも△夕　よせ鍋、玉子燒、

◎二十二日　△朝　千六本の味噌汁　煎ゆば△晝　玉子のつゆ、すのもの(貝の柱、赤貝)△茶　クリームケーク△夕　玉子と菜のつゆ、刺身、

◎二十三日　△朝　薩摩芋の汁、豆と昆布煮付△晝　玉子のふわ〳〵つゆ、さしみ△茶　鹽餡の汁粉△夕　海老と菜のつゆ、燒肴、

◎二十四日　△朝　あさりの味噌汁、五分玉子△晝　鳥と菜のつゆ、はしらの玉子とぢ△茶　にぎりずし△夕　しらすと海苔のつゆ、親子丼

◎二十五日　△朝　千六本の味噌汁、いんげんのきんとん、のり△晝　洋食△茶　カステーラ△夕　玉子と菜のつゆ、てりやき、

◎二十六日　△朝　豆腐の味噌汁、ヲムレツ△晝　はんぺんのつゆ、煮鳥△茶　きりざんしよ△夕　茶碗蒸、鯛の味噌漬、

◎二十七日　△朝　蕪の味噌汁、たゝみ鰯△晝　寄鍋、刺身△茶　稻荷ずし△夕　かき玉子のつゆ　天ぷら、

◎二十八日　△朝　薩摩芋の味噌汁　しらたけ△晝　玉子のつゆ、燒蒲鉾△茶　ちらしずし△夕　牡蠣のつゆ、親子煮、

◎二十九日　△朝　八頭のつゆ、海苔、佃煮△晝　貝柱の玉子とぢ、さし身△茶　鹽せんべい、ビスケット△夕　鳥鍋、ねぎ、豆腐、

◎三十日　△朝　ねぎの汁、煎豆腐△晝　野菜鳥入のつゆ、魚照燒△茶　燒團子△夕　鰻どんぶり、

◎三十一日　△朝　里芋と豆腐の汁、煮豆△晝　牛肉の味噌煮、海苔のつゆ△茶　紅茶、牛乳、洋菓子△夕　親子丼、しらすのつゆ、

附て曰ふ、當家の献立は平素家庭教師嶋女史を議長として六人の弟妹（十二才より十七才迄）の君だち各意見を述べ、議長は多數決に由り採擇せらる、家長伯爵の君も此献立によりて食事せられ他を撰ばれず平常食事の際は酒類を用ふる事なし來客の時は例外の事

前記献立のうち、祝膳とあるは、後記の如く、又『おかん雜煮』なるものは當家の故實に由り、毎年一月三ケ日の祝には、普通の雜煮の外、何之を用ふるを例とせらる此の『おかん雜煮』とは、その

昔、一月元旦、當家の祖先出仕の際、時間切迫せしため、定例の雜煮間に合はず、其際召仕女おかんと云ふもの、氣轉にて芋大根の皮をもむかず、これを有合せの味噌汁に入れ、餅を加へ、眞の雜煮を製しすゝめたるに、其際立身せられたるを以て以後例となり、今に至るも、必ず祝膳の數に加ふるに至り、おかん雜煮と呼ばしむるよし、

祝膳

○屠蘇 ○肴 數の子、ごまめ 煮豆○吸物 たら昆布○おかん雜煮、湯餅衣かつぎ、五分切午蒡輪切大根○雜煮、燒餅、里いも、小菜、六角大根昆布、花ぶし○膾 大根、人參、蠣、鯛○汁 つみいれ、青菜○平 鯛、ちくわ、長芋、くわい、青菜○燒物 鯛○飯○香の物

△十日 自製洋食は、ソツプ、魚フライ、ライスカレー、サラダとハム、菓子

▽十一日 洋食は、トマトウソツプ、ボイルド魚、獨逸ビステキ、サラタとハム、菓子、

▽二十五日 洋食は、コンソメー、ジユリアンス、海老フライ、鳥肉入ライスカレー、ハムサラダ、洋菓子、菓物、

朝飯の際、玉子料理なき時は、必ず生玉子を添ふ

夕飯の際には、毎日食後必ず菓物を口にすることゝなつて居る、さて一月中の菓物は林檎、蜜柑、ころ柿、バナ、を順次日をかへて用ひられるのである、

一月料理の割烹法

雜煮(大阪元日)まづ小芋をよき程に切り、龜甲形に切りたる大根とを湯煮にし、昆布のだし汁にて白みそをときて煮るその中に、燒小餅と先に湯煮にしたる小芋と大根とを入れ、終りに燒豆腐を入れ、椀に盛りたる後花かつをかけて出す

組重(組肴)(一)(松)松形のかまぼこを用ふ

(竹)雛詰の筍をうま煮にして、それに小笹を添ふ

(梅)湯煮したる卵子の殼を去り酢、食紅、及び小量の明礬とをまぜたるものをゆせんにし、その中へ卵を入れて染めるなり、別に板に五本の塗箸をさし、その間に卵をはさみ、箸の先をゆるくくゝる、十分程の後、取り出して兩端を切りとり、二つに横に切る、かくする時は外は紅、中は白、蕋は黄味に、美し

(鶴)白昆布を鶴形に折り、蜜、砂糖の煮たるをかけ、乾くまで火にあぶるなり、頭に食紅をぬる、

(龜)道明寺ようかんを、龜甲形に切りたるものを用

右五種をよき樣に皿に盛るなり



大笑ひ

伊原青々園

座敷の眞中に團欒して、是から骨牌を始めやうと云ふ様子、その中にて此家の娘お竹

『兄さん、早くお始めなさいてばよう、お隣のお梅ちゃんまでお呼び申して、御自分は新聞なんか夢中で讀んでさ、御客様に失禮だわ、チーお梅ちゃん、

隣の娘お梅

『妾は左様に急ぎは致しません、新聞を御覧遊ばした後で、仲間に入れて戴けばよう御座いますよ、

お竹の兄松太郎

『竹ちゃん、それ見ろ、お梅さんは何時でも宜いと仰るぢやないか、お客様を口實につかつて、私をせびるなんて、汝こそ餘程失禮だわ、チーお梅さん、

お竹『オヤ嫌な兄さんだよ、本當に家の兄さん程人の惡い方つちやないわ、人が右つてば御自分は左つていふんだもの、ハイ能うございますよ、お梅ちゃん、汝と二人ッきりで双六をいたしませうね、兄さんには最う賴みません、

松太郎『ワハヽ恐ろしい權幕だね、イヤ兄さんが過るから堪忍しておくれ、其の埋合せにこれから直と始めませう、しかし三人では點取ッきや出來ないから、今一人居なくちや面白くない、

お竹『それぢや權助でも呼びませう、（臺所の方へ向ひて）權助エ〳〵、

下男の權助は一盃機嫌でヒヨロ〳〵と出てくる、

『ヘイなんでがんす、骨牌なら此方も望む相手だ、尋常に勝負しろ、

お竹『その口は何だよ、勝負しろなんて、權助の癖に生意氣だわ、

松太郎『これ權助、汝も仲間に入れてやらうと思つたが、大層酔うて居るぢやないか、それで札が打てるかえ、

權助『憚りながら其處に至つちや大丈夫さ、私ア若旦那と組になつてお孃方を散々負かしてやるべい、

お竹『そんな高慢な事を言はないで、早くおやりよ』これから權助は松太郎と組になり、お竹はお梅と組になつて札を打ち、權助は酔うた紛れに何時しかガクリ〳〵居眠を始める、

松太郎『權助め、到頭寢て仕舞つた樣子だ』と鼻を摘んだり、耳をいぢつたりすれど、矢張寢て居る、松太郎はお竹に何か囁く、お竹はお梅に耳語する、三人顏を見合せて莞爾と笑ふ、松太郎は洋燈を吹消す、跡は眞の闇、

松太郎大きな聲で『これ權助、はやくおやり、

お竹これも大きな聲で『これ權助、はやくおやり、

お梅『權助さん早くおやりよ、

權助、寢惚聲で『ナ、なんでがんす』と眼をこすりながら、闇の中で札を探らうとする、

松太郎『サッ早くおやり、
權助『漸く眼を覺まして『やれと云はつしやるが一體何をするのかね、
松太郎『それダイヤモンドを打つのさ、オヤお前は眼が見えないのかえ、ソレお竹ダイヤモンドを打つて來たじやないか、
權助『何だ、ダイヤだ、
松太郎『左樣さ、オヤマア如何したんだ、汝は巫山戲て居るのかえ、
權助『私にや何だか少とも見えましねエ、
松太郎『サヽ最早巫山戲ッこなしでおやり、今が一番大事な所ぢやないか、ダイヤが手になきや切る事さ、
お竹わざと怒つた振で『アラ兄さんは嫌だよ、權助と組んでるもんだから、切れなんて助言を遊すわ、
權助『だつて若旦那が私に切れと言はつしやるに無理はねい筈だ（と本當に怒る）然し何故だか、私には何にも見えましねえ、
松太郎『何だと、見えない、其ア何の事だ、





權助『見えましねえから見えましねえと言ふ事だ、お前樣方は權助が冗談で言ふ事だと思はつしやるか知んねえが、實の所何にも見えましねえ、一體私ア居眠りをして居つたのか知ら、

松太郎『居眠りをした、馬鹿々々しい事をいふもんぢやない、今夜は汝大變旨く打つぢやないか、それで居眠りをして居たと云ふのかえ、何だ、それ氣味の惡い程キ

ヨロ付て居る癖に、チーお竹、權助のあのキョロ付きやうは何と言つたら宜いんだらう、』とサモ見たやうにいふ、

權助『イヤお前樣方が何と言はつしやつても、私ア居眠りしたのだ現在今頃も寢て居るんで、御互に寢言に斯樣な事を言つて居るのに違ひ御座りましねえ、

松太郎『フヽ、寢言にいつて居る、オイ〳〵權助、冗談も大概にして早く札を出しなさい、

權助『札を出せッたつて、見えねえものは出せましねえ、

松太郎はわざと眞目面になつて『これ權助、汝はそれ程この骨牌がいやなら嫌だと、男らしく斷はるがよいぢやないか、今度の私の手は惜い程いゝが、汝が嫌なものを強つてと勸めはしないから、何時でも札を投る分の事さ、ネーお梅さん、左樣じやありませんか、

お梅『左樣ですとも、止める段には些とも申分はございません、

松太郎『しかし、これ程手が付いてゝ止めるといふは殘念だ、如何だ權助汝の手はわるいのか、フン此の鹽梅なら充分勝てる筈ぢやが、ソラお梅さん、汝の其の手は何です、點物は一つも無いぢやありませんか、

お梅『エ、汝、そんなに私の手を御覽なすつちや嫌で御座います、

松太郎『ナニ、私が見るんぢやない、汝が見せなさるんだ、ソレ今少し自分の方へ寄せて而して手をお上げなさい、他の手を見るなんて私は手を見るのは大嫌ひさ、ソレまだ見える、今少しお上げなさい、本當に氣の利かないお梅さんだよ、

權助『へヽイ、左樣ならお前樣達ア皆その札が見えるのだね、

松太郎『二人も一緒に『見えるとも〳〵、見えないで如何するものか（少し驚いた振）ヤッ成程汝は冗談

でなくて、本當に見えないのだな、アレお竹、權助がキヨロ付く風を見な、そして眼の色が變になつたぢやないか、
權助『それア本當かね、
松太郎『本當だよ、念の爲にお梅さん、其の洋燈をお見せなさい、フン成程變だ、
お竹『オヤ本當に變だわ、
松太郎『當り前の眼の色は白いと定つたものだが、權助の眼は眞赤だ、オヤ〱褐色になつた、ホラ又黑くなつた、
權助『大變だ〱、私イ盲目になりやした、何うしたらよかんべい、若旦那後生だから助けてくれさつしやい』と涙をボロリと落す、お梅もお竹も可愛さうにと涙を含んだ振をする、
松太郎『そんな氣の毒がつても、今更仕方がないから、まア靜かにしな、私も醫學の方は少し心掛があるから、癒るか癒らないかドレ診てやらう、それお竹、お前は權助が頭を確かり捕まへて、お梅さんは洋燈を此處へよこしなさい、ハ、ア是は未だ大丈夫だ、ドレ脈をお見せ、斯うつと、舌をお出し、成程權助心配には及ばぬ、これは思つたよりは輕い容體だ（と可笑しいので腹筋を押へながら）如何だ權助、少しは感へるか、
権『ハイ感へます、ア、痛い』
松『成程、それで悉皆解つた、これは神經の病とあつて、肺の臟にも少々狂ひが出來て居る、しかし心配するには及ばぬ、洗ひ藥さへ遣へば直に癒るが、其の用ひ方が尋常と違ふ、私が東京に居つた時に、或先生から聞いた秘傳で、先づ繃帶を掛けねばならぬ』と、濡手拭で權助の眼を酷く縛つて仕舞ひ、お竹

に耳語して再び洋燈を點けさせる、其間權助は『大變だ〳〵』と呼びつゞけにして居る、
松『これ〳〵靜かにしなければ癒らぬ、念の爲に醫者を呼ばう、相談相手が多ければまた好い智惠も出るだらう、
權『藥禮が多けりや身代限りも出來るだんべい、
松『さう贅口を云ッちや仕かん、私が一人で療して見せるから安心しな、何うだ氣分は變らぬか、
權『へイ繃帶のお蔭で大分心持が良くなりやした、もう手拭は除つてもよかんべい、
松『何うして〳〵、今頃手拭を取つたら、汝は生涯の盲目だ、
權『ア、若旦那、大變な事になりやしたねえ、何うぞお情で宜しく賴みやす、
松『承知だよ、ところで眼玉と向脛とは遠い樣で、此の病氣の起りは向脛の骨となか〳〵放れ難ない因緣がある、だから、先づ其の脛を汝の拳骨で續けさまに叩くのさ、そりや痛い事は痛いが、これも療治になりや仕方がない、
權『其奴は大變だが、若旦那それで癒りやすかね、
松『さう汝が疑ぐるなら廢しなさい、盲目になるのは誰でもない、汝なんだから、私は構はない、
權『過りました、過りました、何でもお前さまの言はつしやる事は聽くべいから、何卒後生だと思つて癒して呉れさつしやい（と向脛を拳骨で叩きながら）ア、痛へ、
松『痛けりや盲目になるまでだ、
權『いや仰せには背きましねえ』と續けさまにたゝく、暫くして十二時の時計が鳴る、
權『若旦那まだ叩くのかね、脛も痛いが腕ももげるやうだ』と言ひながら、矢張り神妙に叩いて居る、

松『もう止めてよからう、今度は最後の療治だから、是れぎりだと我慢しなくちやなりませんよ』と、お竹に言付けて銅盥と水差とを持つて來さし銅盥の上へ權助の首を差延べさせて首筋からザンブと水を浴びさせる、

權『オ、冷てい』と首を縮める、

松『こゝが我慢の仕處だ、（水差の水を悉皆り浴びせて）氣分は何うだ

松『ハツクシヨイ、風邪を引いたやうでござりやす、

松太郎は前の通り脈を取り舌を見て『最う大丈夫だらう』と目隱の手拭を取る、洋燈は又點いたから、權助は四方をキヨロ〳〵見廻して、

權『ア、お蔭さまで眼が見える樣に成やした、めでたい〳〵、

三人は顏見合せて、聲々に

『ア、おめでたい、

鯛獻上

酸漿女史

德川將軍家の勢ひ盛んなる、延享元年の正月、年頭の勅使として、從一位甘露寺岡長卿、德大寺大納言院使には前大納言日野資愛卿、江戸へ御下向に相成る、

御下向の公卿は和田倉御門前、傳奏屋敷へ御旅泊あり、將軍家には御馳走役を置いて、叮嚀なる取扱を

致される、其時の御馳走役は鍋島紀伊守、關大藏大輔、控役として松平壹岐守の面々、何にしても此邊の消息、實に今想像の出來ぬほどの素晴しさ、

やがて勅使には式の如く將軍に御對顏あり、年頭の詔勅を傳へられ、將軍家よりは改めて御返答がある、これで京都より將軍家への年頭が相濟む、すると御馳走役また諸大名よりして鮮鯛の献上がある、本町一丁目の御菓子司鈴木越後椽は、例によつて鮮鯛の調進方を仰付けられた、ところが恐ろしい不漁で魚河岸を漁つても献上しようと云ふ鯛が見付からぬので、越後椽は當込んだ初儲より、まづ御用が達らぬからそれは青い息と赤い息にて、この所武部源藏が思ひもよらぬ村の饗應から歸つた時の有樣である、されど干鯛で間に合はすことも出來ず、さればとて網を擔ひで房州へ走る譯にも行かず、困りに困つた、首のたが、少々ゆるんだかと思ふばかりに心配して、漸く一臺分だけを見付けたが、其美事なことは、風時の魚とも思はれぬ位、これで少々胸の虫がをさまつたが、さて一臺の鯛をどう始末してよいか解らぬ、さア腕組が始まつたが、考へればよい智惠の出るものだ、

鍋島紀伊守の勝手元に參り、鮮鯛一臺を形の如くしつらひてさし出すと、勝手元では苦心して調達したものとは思はぬから、この鮮鯛を見て、これはよく堀出して參つたとも云はぬ、云はぬからとて默つては居ず、越後椽は嵩にかゝつて、この鮮鯛を整へるに苦勞した一伍一什を物語る、物語つてえらい奴と言れたいより、お鳥目の一文でも多い方が望み、そこで此鮮鯛一臺の代價、取りも取つたり金五兩、鯛献上の先登第一は鍋島紀伊守、この風時に拘らず、美事なる鮮鯛を釣臺に乘せて、傳奏屋敷へ送込む、すると門番が鍋島紀伊守樣御使者と吐鳴る、すると御馳走役の家來で、傳奏屋敷に詰めて居るものが、玄關へ出て參つて使者から、献上の鮮鯛を受取り、京家の口へ出して相渡す、勘定奉行の下役御普請方立合にて、近侍

の者が受取つて、勅使の前に御披露に及ぶ、空釣臺は用を辨じて元の屋敷へ歸り、鮮鯛は竹椽へ下る、すると竹椽には鈴木越後椽が控えて、こゝに詰めて居る公儀の手附手代と内談、

越後椽頭を輕くいたして、わたくし事献上の鮮鯛御用達を諸大名方から仰付られましたが、此の風時でなか〳〵手に入りませぬ、そこで近頃御無心でございますが、御披露濟の鮮鯛を御拂下に相成たい、勅使の方では諸方から献上を受けることであるから、さう膳にすることも出來ぬ故、いつそ金子にした方がとの捌け方、越後椽が願ひの趣滯りなく聞屆られ、只た金五兩で買込んだ鮮鯛を一兩にて頂戴いたし、多少の鼻藥を出して送りを貰ひ、風呂敷の鯛仔細なく通用門を出で、越後椽ホッと一息、

手品の鮮鯛をつくらうて、此度は酒井備前守の勝手方へ持込み、誠に風時で魚類拂底、延引ながら唯今漸く手に入りましたと、さん〳〵能書をつけ、見事これも金五兩にて御用達、

廻しを取つた品とは氣附かず、酒井備前守殿、早速釣臺にて献上に及ぶ、手續上首尾にて、めでたく御披露濟と相成る、

鈴木越後椽早くも傳奏屋敷の竹椽へ待構へ、此度は手續簡便にて、また候一兩にて御拂下と相成る、越後椽冷汗をかきながら、何が仕合せになるか知れん、其次は關大藏大輔、用達の鮮鯛、相場金五兩と定まつてこれも首尾よく納まり、

其鯛御苦勞にも又釣臺に乘せられ、傳奏屋敷の表門から這入つて、金一兩で裏から拔ける、越後椽今生きて居れば、天一正一に名を成させぬに、時なる哉、其次は松平右近將監、これも待兼ねて居る所なれば、越後椽からさし出した鮮鯛、これも五兩で御買上げ、其鯛例によつて傳奏屋敷の通用門から拔ける、越後椽大分づう〳〵しくなつて、鯛献上は風時に限る、

その次は松平壹岐守、これも越後様から古物の鮮鯛を五兩でつかまされる、知らぬが佛、佛性でない越後様傳奏屋敷の竹椽にお下りを待つ、例によつて懐から金子壹兩、
其次は土岐美濃守、其次は田村右京太夫、その次は稲葉備中守、みな古手の鮮鯛、滞りなく献上濟と相成り、其都度越後様の懐は四兩づゝふくれる、越後様曰く、此味は一生忘られぬ、
さて今一家でお終ひの中川修理太夫の屋敷へ、裏拔の鯛が越後様から上る、この用人が洒落者で、オイ〳〵越後様、當家にてはもう鮮鯛のお買上に及ばぬ、傳奏屋敷の竹椽から金壹兩献上で用を辨ずるやうになつた
越後様この一家で重荷を卸す所であつたに、思ひもよらぬ御沙汰、もし首のやど替でもせねばよいがと、なか〳〵安い心持はせぬ、用人は笑ひながら、それともその鮮鯛一兩で御買上にしやうか、

末句拾ひ

末句拾ひ、これは外にいろ〳〵名はあるのであるが名は何でも左の如きは、文學遊戯としてなか〳〵興味がある、下手なのがまじると、猶面白い、こゝに坪井理學博士、常磐文學士、松本蕉齋、小森松風、渡邊滋、中川愛氷諸氏合作を見本として御覧に供さう

ひげが生へ人は鯰とわざけられ
わざけられ之が紳士と默つて居
默つて居手眞似せわしく啞同士
啞同士口はしいともよう云へず
よう云へず義理にもいへず廂髪
ひさし髪中が腦ならえらいもの

ベーナスも耻かつて着物を着
着物を着一しほ可笑し尾長猿
尾長猿峠の茶屋へ行つて見い
行つて見い鐘は近江が本家也
本家也僕こそ馬鹿の本家なれ
本家なれ日の本こそは東洋の

この作者は却つて云はぬのが花であらう

お誂通思切つて下手なのがあるのが一段の興であらう

小説の一材料

人情ほどおもしろいものはない、よいと思ひ出したらば、腹の中では少々のわるい事は合點しても、無理にでもよいにして仕舞ひ、わるいとなつたらば、振向くも厭になる、實に得手勝手な物になるのは、或は得手勝手には行かぬ社會の反動かもしれぬ、世の中に小説の材料とならぬものは一つもないが、これは取別け興味を覺えたので、この餘白を埋める事にした、

米國人のゼームス、ハールパットと云ふ男が、十四年前に離縁した現在の女房を、それと知らずに再び娶つて、二度目の新婚旅行として、日本へ遣つて來た奇談がある、餘り馬鹿氣た話しの樣だが、聞いて見れば無理のない事情もある、其顛末はかうである、ハールパットが廿六歳の時、ルース、エメリーと云ふ婦人と偶然或る人の紹介で相識となつて、間もなくキベックで結婚の式を擧げたが、花嫁は其時十八歳の少女であつた、未だ之れぞと定まつた收入のあるでもなく、財産とては無一物の、花聟も結婚後ハタと當惑した、併し漸と無理算段をして、形許りの新婚旅行はしたものゝ、之から先が何うしやうにも方がつかぬ、そこで夫婦相談の上、女房のルースは當分先の主人の家へ預けて置いて、自分は西岸の加州へと出稼した、そして、多少の財産が出來て呼迎へる迄、何程か生計を支へる丈の送金をすると云ふ約束であつた、之れが計らず離婚の端緒となつた、と云ふのは亭主が出立後間もなく手紙の行違ひから、双方互に感情を酷く害して、手紙は一切出すまい、貰ふまいと、賣言葉に買ひ言葉で、二三ヶ月音信不通となつたが、ルースは流石に女丈に心細い所から、詫状を出したが、一向返事が來ない、能く〳〵調べて見ると、其手紙は本人の手へは這入ないので、頭到ハールパットの行衛は不明となつた、日夜案じながら、四五年を經過したが、何の音信もない、多分何所かで死んだのであらうとは思つたが、扨て別に之れぞと云ふ確かな證跡もない、さうかと云つて、何時までも歸へるか歸らぬか分らぬ人を待つても居られぬので、仕方なしに裁判所へ出頭して、離婚の請求をした所が、置去にしたと云ふ廉で、首尾能く許可になつて、獨身となつたので、ベレスホードと云ふ老人に、或人の周旋で嫁したが、二年目に其老人はメキシコで死だ、然し多の資産を殘して行たので、頗る有福な後家となつた、其遺產中にモンタナの鑛山があるので、檢分の爲に出掛けて居つて、偶と其所の宿屋で懇意となつた男がある、年こそ老たれ、容貌から風采まで、前の亭主であつた、ハールパットに酷似なので、之は不思議と早速宿帳を檢べて見れば、似たも道理、死んだと思つた現在の前の亭主であつたので、飛び付きたい程に思つたが、さて別れた事情は兎も角、其後の自分の身に付ても、多少後めたい點もあろし、自分が何程思つても、今のハールパットの意も解らず、若しや二度目の女房もあれば、それこそ能い恥を曝す譯と、ヂット我慢をして、暫らく名乘らなかつた、幸にして男は毫も氣付かぬので、それより交際を續けて居たが、何時しか二人の新らしき戀に落ちて、新らしからぬ二度目の新婚旅行をする事になつたのだ、とは變つた話ではないか。

流石に國が廣いと色々の事があるめでたし〳〵



婦人服装の美

久保田米仙

近來二百三高地の束髪であるとか、蝦茶袴に靴といふ扮装が、大そう流行して居るやうであるが、この流行も突如として起つたものではない、矢張種々の歴史を閲した結果である、この事を述ぶる前に、上代より婦人服装に就ての事を話さう、

我國婦人の装飾は、上代には、頭には何をも施さゞつたもので、唯後に下げて居つた位の事である、衣服は衣と裳との二つに分つて、衣は帶の上までの着物で、裳は今の行燈袴の如きものである、肩には今の肩掛の如きものをかけて、それが魚の鰭に似て居る所から、ヒレと稱へた、衣の方は袖が短かつた所へ、肩へ領巾が掛つて居るので、拜禮などする時には鰭がヒラリと重なるので、ひれふすといふ事も之から始まつたのである、彼の歴史で名高い、松浦佐代姫が夫と別れを惜んで領巾をふつたとあるのもこれである、今ならばハンカチーフでも振る所であらう、これに加ふる装飾は、手に玉をつける、これを手結の玉といひ、足に玉をつける、これを足結の玉といひ、又は鈴をつけて、足結の鈴といひ、首にもまた玉を飾つたもので、これが最上の美装であつた神功皇后三韓征伐の後、衣服に就ても段々輸入して來て、男子は支那服装になる、女子は男子のやうに急變でなく、次第々々に支那風となつたやうである正倉院の御物の御屏風の、繍の下繪を見ると、支那化した奈良朝時代の服装が偲ばれる其服装はなかなか高尚である、髪は結髪で、其結方は解り難いが、鬢づらを出した束髪のやうである、衣裳は舊の如く裳は長く引き、衣は短かく掛り、袖は以前よりは廣

くなつたやうである、其顔には白粉を施し、額に青い繪具で梅鉢の紋を三つ置き、これを梅花裝と稱し足には繡靴を穿いて居る、この服裝と同じやうなものが、法隆寺の五重塔の下段に、釋迦涅槃の土偶のうちに、婦人のが二三あるそれに似て居る、此塔を作つたのは、聖德太子の時であるから、此時代の服裝であつた事を證明し得られるのである、又顔の裝飾に、兩頰に頰紅を施したもので菅公の歌に、美しき紅にも似たる梅の花、吾子が顔にもさしたくぞある」と讀まれたるが、果して菅公の神詠であるか否やは疑問としても、風俗史上取るべき歌である、此時代には、男の兒も幼時は女裝して、女に見紛ふやうに仕上げたもので、元服して男女服裝が區別するやうになつ

いろは道歌（六）

なさけありて惡み深かる人ならば
　神やほとけのこゝろ也けり

亂をなし亂をこのめるひとならば
　道にそむきし人とこそしれ

むつまじく家の和合をねがひなば
　わが儘するな不足なりとも

運は寐てまてといふこそよき事を
　つみ積ねよといふ敎へなれ

たのである、此風俗足利時代まで殘つて、今も坊間の玩具屋で見受ける、お福の面、おかめの面、上代の風俗の面影とも見るべきである、享保の頃、賀茂の社人が、神道の事を話して諸國を遍歷し、九州の宇佐八幡の近傍まで來て、神道の話をしたのであつたが、何にしろ京洛賀茂の社人が、神道の話をするといふのであるから、男女數多打集ふたが、其來た婦人を見ると、顔に白粉を塗つて頰紅をさして居る、件の社人は上代の事を思ひ出して、尊く感じたといふことである、この頰紅は婦人の人の前で談話をする折、顔に紅葉を散らすのを羞ぢて、かく紅をさしてそれを豫防したと云習はして居る、

それから平安朝になつて服裝が高尙優雅になり、小袖に袴を着し、衣に代へて上に袙を着した、或は正裝には五つ衣と稱して、衣五を重ね、上の衣ともいひ、女官はこの五つ衣の上に袴を着し、その上に後だけ裳を附けたものである、この裳は袴にも代はるべきもので、色は紅、紫等である、その上に袖のない唐衣といふものを着する、それから平安朝以後上流の婦人は檜扇を持つ、この扇を袙扇とも稱へた、其理由は五つ衣を重ねにし、氣候によつて色をかへる、これをかさねいろめといひ、その色彩の調和が面白い、扇に雲間を施し、袙の色と同じやうに赤の色を用ひ、次に白、次を紅梅、次を薄紅梅、次を紫といふやうにし、模樣は薄茶である、これに五色の打紐に、橘の造花をつける、下流になると小袖を着し、かゝへ帶を締め、他出する時は上に必ず襖を被つて出る、その襖は下は褄を取り、たくしあげたのを頭にかぶる、即ち被着となる、これに紐をつけておる、今でも能樂では着やうの一つとなつて居る、これが後に裲となり、引いたまゝ着用する、遊所では『しかけ』と稱する、これは貴族がこゝに遊んだ所から、此風が押移つたのである、この襖を面に被るは女が途中顏を見らるゝのを羞ぢて、あらはに見られぬやうにしたもので、その上から又笠を冠る、其笠には種々あるが、總稱して市女笠といふたもので、容儀上塗笠やら、いろ／＼風流な物を拵へるやうになつた、それは元祿時代迄續いたのである、德川氏の初め被衣と稱して、別に新衣服が出來た、維新頃までは京都公卿の室、息女などの他行には之を着用し來つた、

それから繡、摺箔繡模樣の裲を搔取り、上帶をしめる、これが松川菱に菊松竹梅などを置き、上下を紺にして中を熨斗目にしたものである、これを被く時は額際で前を持つて行く、それに女中が紺天の日傘をさしかける、能樂の女裝には今も用ひて居る道成寺の如きは、小袖を着し、裲を着、裲の肩を脱ぎ、帶の所へ卷付け、その上に唐織の襖を着し、襖の上

帶をとつて頭にかけ、その下に襖の肩ぬぎをつけて風流にしたものである、今でも青森、秋田、山形邊では此被衣を冠婚葬祭に用うるのを實見したが、かゝる邊土に昔風の殘つて居るのは、何となく床しいものである、それから鎌倉時代以後、女裝に鉢巻が流行した、演劇にもそれが殘つて、熊谷陣屋の藤の方は必ず髪に鉢巻をして出るやうである、

前述の如く昔は梅花裝の如き異樣な風をして男子も齒を黒め、眉墨を引く、女は齒を黒くし、眉を落す齒を黒くし眉を落すのは、今の妻君にも往々見受けられるのである、

髪は上代には結んだものであるが、奈良朝になつて婦人の結髪を禁じ、垂髪にした、これが足利の末頃迄つゞき、それから下層の婦人が勞働に不便を感ずるより、そろ〳〵肩の上の方で結ぶやうになり、それから漸次に結上げる、一般の流行は兎角下から上に及ぶもので、上流でも髪を結ぶやうになり、兩方へ形をつくつて鬢といひ、後をつとといひ、髪の中から左右に割つて結うて、それを下髪と稱へた、そこで其髪を結ぶものがなければならぬので、檀紙を用ひてそれをたけながと稱した、そのたけながが後に裝飾となつて、次に色染の切を懸けたのが、鹿の子又金銀モール、寳石等を連結するやうになり、實用には元結を用うるやうになつて、文七元結などいふものも出來た、

下髪の先を少しわがねて、それを結ひ、又切で包むといふ事が始まつた、これは上流の御前に出るには不都合であるが、部屋では差支ない事になつて居つた、その下がみを横から串で結上げて、片ばづしといふものが出來、萬治の頃勝山といふものが、串で上からとめてそれを勝山と稱した、又櫛を髪で巻つけて結ふ櫛巻などいふものもあつた、片はづし、勝山に用うる串は、これが今の笄である、

それから髪をたがねて中を結んだのが島田、それへたけながをかける、斯の如く片はづしが原になつて二つに割つて蝶々、新蝶々といふものも出來た、

女鑑新聞

紀元二千九百六十五年　西曆一千九百四年　清曆光緒三十一年
明治三十九年一月一日月曜日　きのごみ

▼投書　この新聞誌面にも和歌俳句短文を歡迎す、續々おもしろき作を投稿あれ

▽定價　○部の本務にて女鑑の讀者には自然口八て見らる、附也
▽廣告　一行十五字詰金二十錢但し四面に限る

發行人　紫式部　編輯人　清少納言　印刷人　赤染衛門

發行所　東京築地　株式會社國光社

論説

女子教育に就て

伯爵　大隈重信君談

日本は今や婦人問題に就て實に變遷の時代で、あらゆる方面の衝突を免れぬ時である、これを手近に譬れば、年長者と新智識を得た若い婦人との衝突の起るは珍からぬ狀態であるが、是は誠に面白からぬ、現象で、若い婦人の差出口は甚だ穩當を欠いたことである、元來倫理の教育を受けた人であれば、如何に西洋主義に醉ひたればとて、斯る輕躁なことはない筈である、今日は世界の文明と、我日本的文明を同化して、其粹を擧げ茲に善良なる家庭の模範を作るべき時で、日本固有の家庭は決して西洋に劣るものではない、日本には封建武士的家庭なるもの嚴然毅然として組立られ、封建武士的家庭は、實に堅實なる基礎の上に建てられ、嚴肅なる風紀を維持する賢母より成るものであるから、其遺風を根底より破壞するが如きことのある譯はない、故に斯る遺風の根據より、西洋の文明と同化し其長を採擇せらるゝ必要があらうと思ふ、

文苑

梅の花　伊藤詮子

うめの花、
折りて簪さむ　かざしてむ
春に後れず　そのはなの
かをるを　おのが心にて
うめの花
折りて簪さむ　かざしてむ
雪にも擬ふ　そのはなの
きよきを　おのが心にて

春六句　小夕大き

鳴きけは簾おくや梅の窓
梅白し月白し夜のはなれ際
心なしゝのなかに破わらじ
落る日の上に鳴けり夕雲雀
春雨やねんねこさふ、夢心
來る夢に小梅ねらすや夕霞

羽子遊　岩倉久子

美しく、粧ひたてゝ少女子が
つく追羽子の音ものどけき

題不知　鍋島榮子

新らしき文の林の奥にこそ
散る事知らぬ花は咲きけれ

新年梅　近衛貞子

新玉の年ほぎ人に愛られて
手折るもうれし梅のはつ花

門松　島津田鶴子

長閑なる春を迎も知られ鳧
けさ家ごとにたてる門まつ

新年　千家俊子

今年はと互に云てなす業は
友におくれずつとめてし哉

元旦　中山幸子

年あけて先づ神々を祈る哉
わが浦やすの國のさかえを



社頭遇友　小川直子

ゆくりなく昔の友に逢に鳧
うぶすな神に朝まゐでして

梅　長田まさ子

賤が家の軒に咲たる白梅の
香りを道のしるべともせむ

新年　中川雪枝

乙女子が數詠歌ひ撞羽子も
治まる御代のすがたなり鳧

雜報

賀陽宮女王御作

京都市竹間學校に御在學の賀陽宮由紀子女王殿下は、本年三月を以て、尋常科の科程を終らせらるゝ筈なるが、同殿下が先頃物し給ひし御作文は『東郷大將』と申す題にて、左の如く遊ばされたり、其は殿下筆のまゝにて、教師等が一字一句も改めたるものには候はずと承りぬ、

東郷大將

去年から日露戰爭にたび〳〵てからをしてをられたと云ふ事を聞いてゐた、あの東郷大將はがいせんして、めでたく東京にかえつてをられました、この十一月二十五日、京都にこられて、天皇陛下のごせんぞのおまつりをしてある、せんざんえまいられました、そうしてしようこく寺へまいられて、それから櫻のばんばへゆかれました、京都の人はみなにぎやかにむかへました、私もみました、たいしようかいぐんのふくをきておられました、えらい、方やのに、えらさうにせんと、ていれいにれいをしられました、この日露戰爭で、名がせかい中へたかまるようになつたのでおります、唱歌にも『まはらに白き口のひげ、じあいにとめるまなざしは、かちておこらぬ大將のいともゆかしきすがたかな』といふてあります。ほんとうにこの通りでありました、

四年生　賀陽宮由紀子



◎閨秀作家の篤志

有名なる閨秀作家故ユドナ、ライアル夫人は其作品より得たる收入の大部分を慈善事業に投じ居れるが、其内著しきものは、聖ピール寺(イーストボーンの)へ六千圓、それから同所の聖セプイヤー寺へ三個の大鐘を寄附した、カルツト、ヨング孃は、同じく自己が作物の收入にて、聖バーナバス大學校を作り、其他小說より入る所得の大部分は、ノーフオーク島に於ける教育事業に投資せりと

婦人の內職

▽繪はがきの彩色　これは百枚十錢乃至十二錢にて、熟練者は一日に二百枚を仕上げ得べく、至極綺麗な內職なれば、すこし繪心のある人には持て來いの仕事である

▽足袋の甲裁　一足九厘より一錢迄にて、大抵十七八足は出來る

▽楊枝の毛つけ　百本九錢にてこれは熟練せば三百本位は仕上る

▽靴下かゞり　十足一錢九厘にて、最初は三十足位であるが、八九十足迄は仕上げ得らるゝとの事

▽狀袋貼　千枚六錢にて、通常二千枚乃至二千五百枚は仕上がる

▽婦人洋服の肩掛付　一枚十一錢にて、左右の兩肩分廿二錢なるが、之は最も熟練を要し、併しやゝ高尙の內職であるから、腕次第では立派な職業ともなるのである

▽其他　レース糸の編物、束髮用の花かんざし等、數來れば隨分ある物で、是等は綺麗な內職である

通信

北京の女學界

日本女子大學卒業生服部ます子氏は、曩に清國に渡り、北京豫敎學堂の講師として、聘せられたるが此程同窓なる某女史の許に寄せられたる手簡の一部を掲げて、彼の地の女學界の一斑を紹介せん、當學堂は小學校程度の學科を敎へ、專ら日本語、算術、編物の三科目に重きを置けり全生徒四十名中、甲組は片假名、平假名を終り、三百以下の加減算位を習ひ居り、乙組は片假名の活用五十以下の加法を稽古し居れり、隨意科として英語もあり、唱歌と體操は、共に日本式に渡り、君が代なども折々稽古せり、現在當北京に於て、寺子屋流に女學生を、集めて敎育し居る所三ヶ處あり、甲は米國婦人の設けたるものにて、傳道を目的とせるもの、乙は肅親王の私設になれるを、彼の高等女子師範學校出身の木村よし子氏が助くるもの、丙は全然日本上流婦人の手になれる當豫敎學堂にて、是れは服部宇之吉博士の盡力に依り設立され同婦人繁子氏及び、佐伯夫人によりて經營されつゝあるものなり、要するに支那婦人界は、到底昔時の夫れならず、一室に閉ぢ籠る底の往時は、日に增し消え行き、交際場裡に現はれんとする、ハイカラ婦人も太だ尠からず』云々

◎流行の少女帽　新年用の流行少女帽は▽色合　は紺、淺茶等が重にて、他は近時四五歳より十五六歳迄の少女に洋裝せしむる風漸く流行し來りたれば、大方は其服地と同一のものを用ゐ、又强て色變りをとの好みには、グリーン、プリユーなど專ら尊ばる▽地質は冬物なれば、大抵羅紗絹天の類にて、リボンには舶來の厚織絹類を用ゐ、其結び目を大きく花形にす▽形狀は四五歳間は昨年と大差なきも、十三四歳以上は昨年よりも稍々小形なるを尊び、鍔も思ひ切つて狹く、然らざれば波形に捲きあげたるもの流行し▽價格は昨年と變りなく、四五歳間の大黑帽は圓・錢より三圓位迄、十二三歳以上は四圓より十圓位迄の品捌口多しと、

◎婦人記者の會合　遠藤清子といふ人、婦人のみの新聞雜誌記者を集合して、大勢力を作るべく近々大會を催す由、舊臘の大會には發企人とも無慮貳名の盛況を呈したりと、其來會者は今井歌子女史

談片

女子と小說

津田梅子

私は女子が小說を讀むことは、餘り干涉せぬ主義である、成程西洋の書物には、ラブと云ふことが澤山である、又戀物語なども多いが、私は之に就て、矢張同一の意見である、夫れは勿論男女間の劣等な情許りを目的としたものならば、斷じて讀まして行かぬと思ふが、其他の書籍の上のラブなどゝ云ふことに對しては、決して太く干涉はせぬ、いくら止めた處が之が自然の情の發展なのであるから、惡い方面でさへなければ、敎へなくとも自ら知ることである、若しまた書籍の上のラブが惡いとならば、夫れより女子の讀んでる處へ、毎日の本國新聞の三面種には、より以上の酷いことが書いてあるではないか、たとへば、所謂ラブ物語を以て之に比べた處が、決して三面種のやうな酷いものはない、もし又其ラブ物語の爲に、青年子女が惡い方に感染して行くのを恐るとしても、夫れは姑息である、寧ろ十分に夫を鍛へて、たとへどんな物を讀んだ處が、そんな惡い方に誘なはれぬまでに訓練をする方が、更に當然ではあるまいか、

社會

童謠傳説の蒐集

京都府學務課にては、各郡市より童話、傳説、俗謠を蒐集し、普通教育上の參考に資する由、其種類は

▽童話及び傳説の種類　(一)童話、桃太郎、かち〳〵山、織子物語の類(二)巡回營業者の謠ふ傳説、覗きからくり、デロレン祭文、阿房陀羅經の類(三)俚諺、

▽俗謠の種類　(一)勞働に伴ふもの、田植、草取、稻刈、臼搗、臼挽、粉挽、米搗、茶摘、茶ひろひ、茶もみ、養蠶糸繰、絲引、絲繰、機織、餅搗、米搗、麥搗、麥打、油絞、籾摺、木挽、木やり、石搗、地搗、金搗、舟唄、大漁唄、長持唄、其他一般の勞働歌(二)盆踊の歌(三)兒女の遊戲に關するもの、子守、手鞠、羽子つき、其他一般の遊戲歌(四)地方特有の流行歌、潮來、伊勢音頭、追分、米山嶽、さんさ時雨の類、

◎僻村の慈善婦人會　府下西多摩郡西多摩村と云へば、多摩川淨水の水源地にて、山の奥の一寒村なるが、此地方にも愛國的婦人會の組織ありて、同會幹事は此程養蠶室に、約千人を容るゝに足る、バラックを加設し、去臘二日慈善婦人會を開き、伯爵の講談、從軍看護婦長秋間爲子の土産談を始め活動寫眞曲藝落語等の催しあり、三日は同郡青梅町に、四日は五日市にも、同樣の催しありて、三箇所を合すれば、來會者約三千人以上に及び、五十錢と二十錢との切符は、總て賣切となりたるよし

髪に用うる油は上代にはなかつて、美男かづら、百人一首にあるさねかづらといふものがあつた、これは水に浸すと粘着力のあるもので、又艶をも出すことが出來る、煎餅の如きものである、今でも宮中で油を好まぬ方は之を用ひて居らるゝとの事である後に支那から香油を輸入して來る、伊勢の人で白梅油といふのを發明する、段々種々の頭髪用の油が出來た、又伽羅を頭髪にたきしめる、これも伽羅油といふものになつて現はれるやうになつた、

笄は髪を留める必要品であつたが、後には装飾が九分となり、搔立てる爲の櫛も亦装飾品となつた、これに歴史がある、もと神田見付邊に鍛冶風呂といふ錢湯があつた、これには女を多く抱へて客を饗し、湯女と稱して居る、この湯女の中から有名なる勝山なども出たのである、此時の入湯は、遊山同様に辨當を持つて行つたものもあつたさうである、男子は湯に入つて湯女に髪を結はせる、そこで湯女に自分の紋を蒔繪にした櫛を與へる、湯女も客にした男子の櫛を頭にさして居つたので、多いのは數本も挿して居るといふ有様、ところが段々風紀を亂すやうになつたので、吉原へ引上げる事になつた故に、吉原の遊女も湯女上りは巾を利かしたものである、そこで遊女に湯女も倣うて三枚櫛をさすやうになり、それから一般に推及ぼして櫛が装飾品となるやうになつた、それで上方などで、廿歳位の婦人が結婚する時の正装の髪には、前ざしをさし、笄、後ざし、櫛とかう、頭に美装したものである、この外に中ざし花ぐしなど云ふものもあつた、その花櫛は今も京都島原に殘つて居る、

簪は吉野の花をかざす、といふより來たのである殿上の女中は平打、町風は寶石入のものをさし、少女は造花を挿したものである、それが段々工夫して近年迄盛んに挿したのである、

それから婦人に揚帽子を着用する事が流行した、又遡つて鎌倉時代に、下層の婦人が、垂髪を運動の邪魔にして、上に白布を纏ひ、其端を垂れた、田舎

の禮式に、手拭を右の如く被るのがある、京都の小原女は、この手拭を裝飾の一とし、紺木綿でつくり色糸を下げるといふ有樣、手拭の模樣はわしでの繍模樣がある、能狂言では女になるものが此風俗をなし、之を鬢紐と稱して、兩端を前へ垂した、職人盡七十番歌合の繪、即ち土佐光信の筆を見るに、白布で頭を纏うて居るのがある、室町風といふのであらう、天正頃迄傳はつた、後布を絹に代へ、綿をつけるやうにした、これが置綿といふものである、又角かくしと云うて、京都の公卿の下婢の他所行には置綿をし、民間にても盛裝の時、白絽製のを用ひ、天明の頃大に流行して、島田髷などには甚だ配合がよい、角かくしは淺黄の切を用ひ、これは演劇など見ると、菅原

いろは道歌（七）

田舍には律義がおほしはんぜうの
　地には實義の人ぞすくなき

のぞみあるひとの心をたづぬれば
　りつしん出世えいぐわ歡樂

おもひこみゆるみたゆます何事も
　學べは奥をきはめこそすれ

苦勞こそ樂のたれなれらくばかり
　もとむる後は苦勞とぞなる

傳授寺子屋のお千代はそれを着けて出るやうであるこれに前帶は、維新頃迄あつて、京都あたりで結婚には、この風俗をしたのであつた、

履物は草履から始まつて、金剛を履く、次第に駒下駄、それの盛付、次にポックリ、一名駒の爪と稱するもの、塗ポックリ、桐柾といふやうになり、これも種々の意匠を用ふるやうになり、近時甚贅澤を極むるやうになつた、

近時男子が洋服を盛んに着るやうになつた、この折合上婦人の衣服も大分變化して來た、そこで今の女學生より一般に用ひられて居る海老茶袴、これは初に述べた裝の復活したもので、長い袖に對してはよい風俗である、頭も

ゝつと張、鬢張を入れたのよりは今のあらひ髪を結んだもの、承れば二百三高地などゝ稱する廂髪、これも決して新規のものではない、以前には大内前髪といひ、近くは下田さんが始めて、一時下田前髪とも稱したが、前へ出た丈が新意匠と云はゞ云はれるのである、これに襖のやうなものを着すれば、上代の服装になつて、天平の屏風の下繪通りになる、又肩掛をまく、これは領巾の復活したものである、靴を穿くのも、昔にかへつたやうなもので、之に裝飾すれば甚だ美しいものになる、

服裝は何でも流行を趁はず、その人の體質により色彩、模樣の大小を考へ、丸い顔の人は大模樣、長い顔の人は小模樣を撰ぶといふやうに、それの詮鑿は大切なことである、有識者がそれ等の研究をして、服装に一工夫すれば、美玉はます〳〵美玉になり、錦上花を添ふる裝も出來るであらうと思ふ、

以上述ぶる如く、近時の服裝の流行も、既に廢つたばかりか、世間の人の多くは知り得られぬ位以前の復活である、即ち晝と夜の極端が接近する如く、流行の廢つた、その廢つたのが、忘れられて、形がなくなつて、夫がまた流行の魁となるのである、そこで流行を趁ふなどゝいふ不見識をせず、自分を標準として、自分其時に適する服裝が望ましいのである猶有識者の一考を煩はしたいと思ふ（文責在記者）

女子教育と音樂

東儀鐵笛

奈良朝時代

音樂が教育上に至大の關係を有して居ることは、今更云ふまでもなき事で、音樂を教育に用ひたと云ふ事は歐羅巴の教育法が日本に輸入して以來、即ち維新後初めて實行されたと云ふ樣に思ふて居るものもあるが、是は大なる誤謬で有る、我邦でも音樂は昔から教育的に用ひたに違ひない、けれども其音樂が完全か不完全かとの點に就ては、茲にソレは完全で

あつたとも、不完全であつたも云ふことが出來ぬ、たとへ夫が不完全にもせよ、確に敎育的音樂の古來から在つたのは事實で、外國の敎育法を輸入してから敎育的音樂の始まつたものではない、ソレならば在來の音樂が敎育と何れだけの關係があつたかといふに、吾國の敎育は、古昔彼の支那の制に倣ふて、畢竟支那から輸入して來たのであるから、支那の敎育と音樂は、何う云ふ工合であつたかを調べて見れば直ぐに吾邦のも解るわけである、支那の古代舜の時代に、夔に命じて樂を冑子に敎へしむと云ふことが有り、ソレから又周官に司樂と云ふものを置いて、樂を國子に敎へた、抑々又禮樂刑政は四道など丶いつて、最も能く行はれて居つた、而して道と樂とは必ず相俟つて往かなければならんといふことであつた、孔子が敎への道を持續するに、音樂を以てしたのも、是に外ならない、輙ち孔子が道を說いた時分に、音樂と道德とは終始相離るべからざるものであると言はれた、且つ孔子自身も音樂を學ばれ、尤も孔子自身、音樂が道德と密接の關係の有る爲に習ふたのでも有り しようか、他から音樂者として孔子を見れば、見らる丶位隨分熱心で有りました、デ支那の古代から殊の外に音樂が重ぜられたに違ひないなほ其證據と言へば彼の六藝と云ふもの丶中には、音樂も這入つて居る、又樂記と云ふ書物も元は在つた、今は禮記の中に僅か其の一部分を殘して居るが學者の說に依れば、元は別に樂記と云ふものが數卷在つたそうでゐる、今ま此の禮樂射御書數と云ふ六藝を今日の敎育の上に當嵌めて見れば、書は先づ文學歷史に屬し、數は即ち算術、禮は直接に言へば矢張り今の禮式、其他の儀式に關せしこと、樂は即ち唱歌にも關係する、射御といふことは今は重くなつた、けれども體操科と云ふものが有るから、ソレに當て嵌めて見れば、直ちに六藝と云ふものが出來る輙ち古の六藝は、今日の普通學校に於て敎育して居るのと同じである、さて斯う云ふ樣な成立であつてそれを我國に輸入した譯であるから、儒道の弘く行

はれた時分には、自ら相伴ふて音樂も盛であつた、而して三韓は既に神代の頃から交通をして居つたものかも知れませぬが、歴史に由れば崇神天皇の御代と思ふ、ソレから推古天皇の御宇までに、我國の文化は駸々と進歩して、此時に至つて遣唐使などが出來た、其外留學僧等も續々と渡唐して、其以前は三韓を經て來た學問、其他百般の事が、此時代より支那から直傳するやうになつた、丁度夫等の事は、今日の歐羅巴の文化が輸入して、彼地に洋行し、即ち留學生を送ると同じで有らう、古の留學生留學僧等が、日本に歸つて來る時分には、何うであつたかと云ふに、皆音樂を學んで、多少音樂の心得が有つて或は琵琶を奏し、或は琴を彈じ、或は笛を吹くと云ふ事を覺えて來た、輙ち彼地の教育の中に、音樂の科が有つたと云ふ事が解る、ソレで日本に歸つて來る度毎に、必ず樂が幾つか傳つて來た、其樂は一々列べることは、なか〳〵限りある紙頁に書盡されぬから、委しき事は省き、其一二を擧げて見れば、聖武天皇の御代に吉備の眞備の歸朝した時に、樂書要錄或は、律管を持ち歸り、且つ自分も音樂を學んで來た、又文武天皇の御代に、粟田の道麿は樂を眞面目に傳へて、其時に唐樂即ち五常樂、太平樂等の樂が傳つて、ソレから又音樂は宗教即ち佛法との關係が最深くして、留學僧の中に音樂を傳へた、其中には經文を音樂で傳へた、ソコで推古天皇御宇より、聖武天皇御宇までは、一體概括して音樂を稱ふるものゝ中には、勿論教育を離れた樂も有つたが、又教育に關係の音樂も有つたことは、大略以上述ぶるが如き有樣であつた、然らば此時代の女子に對する教育的の音樂があつたか何うかと云ふに、是は充分に調べることが出來ぬが、鳥渡一例を引くと、孝謙天皇が未儲位に在らせられた御時分、丁度聖武天皇の天平十五年頃、内裡に酒宴を賜ふたそのときに、孝謙天皇、五節の舞を遊ばされた、五節の舞は今は殆んど滅びてしまうたが、此舞は天武天皇の御作にして、五度袖を振る爲に五節の舞といひ、或は五つの

節のある爲に、五節の舞と言ふと、説が二つあつて今は孰れとも判然せぬ、其時に天皇は右大臣の橘諸兄に命じて、太上天皇に御奏しになつた、其勅に天下を治めて民心を一致するのは、禮樂にある、茲に今太子の五節の舞を遊ばされたのも、此に外ならないので、必しも遊興で御舞になつた譯ではないと云ふ事を奏上せられた、處で太上天皇にも勅詔を下されて、今日の太子の舞はれたを、天下太平、君臣和合の御主意で、非常に喜ばしい事であるが、此際臣下の位を進めたなら宜しからうとあつて、其時二三大臣の位を進められたと云ふ事がある、今天皇の御事を一例に引くは、甚が恐多い事ながら、斯くの如く女性に渡らせらるゝ天皇の音樂を遊ばされたのは、畢竟此時代女子の教育に音樂の有つた一斑を示すに足らうと思ふ、

次號には　平安朝時代

傘-でほたしかに來たり春の雪　折柴園

熨斗目

東京裁縫女學校教師　芳薫女史

裁縫の道に明るき時は、如何に經濟も上手になし得るかと云ふお話は、昔ある大名の家臣にて、大そう貧乏なる人がありまして、常に一枚の着物のみを附けて勤めて居りました故、終には其着物もやぶれまして、非常に困つて居りましたところが、其奥樣とでも申しましやうか、其方は大そう裁縫の上手な人でありました故に、いろ〳〵考へまして古いやぶれたる縞や、無地の着物のいたまぬ所を取り、無地の袂の先、又は腰の所等に、縞の切をばはぎに入れ、やう〳〵一枚の着物を仕立上げ、之を其夫に着せて殿樣の前に出ましたところが、其切の取合せ方、即ちうつりが、大そうよろしかりしため、非常に多くの人々にもほめられ、夫より他の人々は、わざ〳〵一反になり居る切を、小さく切りて、其通りの着物を仕立て用ゐる樣になり、遂には之を別に織物屋に

注文して織らせ、これにのしめ織と云ふ名を附け、高位の人々ならでは用ゐる事の出來ぬ樣になつたと云ふお話がありますが、實に其源を尋ねて見ますれば、右の如き所より起りしにて、つまらぬ流行の樣にお考へる人もありましようが、中々さうではありません、右の樣に多くの人々に感じさせ、其物を流行さすと云ふは、容易な事でありませぬが、つまる所は其奥樣が裁縫の道に明るきために、色の取合せ方等も上手になされたるに依りまして、今に其流行を見る樣になつて居るのでありますれば、新しき切のみならでは、着物は出來ぬ樣に考へ、古き切等を心なく、捨つる樣な事をしてはなりません、諺に禍も三年立てば、と申す事もありますれば、其心して後日用立つる樣に致さねばなりません、又如何に其心のあらく／＼しき人にても、裁縫が上手になるに從ひまして、其心も自然とおちつきまして、其人を知らぬ人にても、其仕立上ました物を見ましたのみにて、其人のしたはしく、如何にやなしき人なるか、一目見たき考の起る位の物であります、又或人の申すには、女子には裁縫は上手に出來ぬ物の樣に申ますが、夫は裁縫のうち袴、羽織、帶等の極め所がどうも女子には、男子の樣に出來ませぬのでありますが、それは昔の事、今は女子にても、男子も及ばぬ程進み居れば、尚此上とも此道の進步を謀り、研究に研究を重ね、男子には他の重要なる事に力を盡す樣に願ひ、裁縫は女子にあらざれば出來ぬと、世の人々より申さるゝ樣致したき考であります、

茶道雜記

利休流家元　黑澤宗月

茶室の時期と茶室

凡そ茶の湯には定まりたる時刻あり、午前四時を夜込と唱へ、午前七時を朝茶といひ、午前八時を飯後といひ、正午十二時を晝飯と唱なへ、午後六時を夜咄しと稱し、猶他に不時と稱へて臨時に催すことあ

り、然れども正午の茶事を以て本式とす、次に茶室は疊十二疊半以下七疊以上を廣間と唱なへ、七疊半以下四疊半以上を小ざしきといふ、外に數寄屋及四疊以下一疊以上の小室あり、又茶室の床は本床、向床、脇床、及び下座床の別ありまた五月より十月までは風爐を用ひ、十一月より翌年四月までは爐を用ふ、客の數は一客一主のこともありまた數客一主のこともあれど五客一主を普通とし、五客の中に首たるものを上客となし、茶事になれてるものを詰と稱して末席に居り主人を助けて席上に周旋するを常とす、

茶事前禮の事

まづ茶會を催すには其の催主たる主人より日時を定



め、前以て案內狀を差出すを例とす、その案內狀には定りたる文例あるゆゑ、其事は後に示すべきも、普通に來る何日何時御茶進上致すべく候、御故障なくば御來車下されたく、當日の來客はたれ〳〵、室內の飾付は何々にて、料理は何々と、詳かにかき上客より順次連名を認め、回章として持廻るものにて、案內受けたる客は各其名へ點をつけて廻し、前日中に上客の宅へ參集し、當日の衣服、扮裝幷に待合の場所を定め、其他諸事申合せの上催主の宅に赴き、明日御茶事につき御案內を賜はりし厚意を謝すべし、これを前禮といふ、もし事故あるときは使若くは郵便にて、書面を以て

前禮を述ぶるも可なれども、貴人に對するときは、前禮及會日の後にも自身に挨拶の禮に赴くべし、

當日參會のこと

さて會の當日は、豫て申合せし如く遲刻せざるやう參會し、待合の場所にて打揃ひ、主人より報知の合圖を待つべし、此待合にて相客と耳語き、または高聲にて談笑すべからず、當日穿く所の足袋は新しきを要す、帽子、手袋、外套等は茶室内へ携へ入るべからず、

迎附のこと

客の一同待合の場所に集りしとき、其所は疊なき板じきなれば、各自に圓座をしき腰をかけ、茶室の方に注意して主人の用意の整ふを待つべし、かくて主人が手水鉢の水を換へる音を聞かば、一同庭上に停立み、主人の迎附あるとき、客は總禮とて一同挨拶す、此時主人は一同に向ひ何卒室へ御入下され度しといひて一旦戻れば、客は一同これを見送して再び待合所に煙草を喫し、小用を便じ、盥嗽ぎなとして而してのち圓座をもとの如く重ね、煙草盆火桶ともにかたづけ座入りを爲すべし、若し當日雨天ならば備附ある竹の子笠を隻手にて戴き、茶室の外にて主人の用ゐたる笠と重ねておくべし、

瓶中問答

新瓢庵宗水

其の一

或る人花は習ふものにあらず、野外水邊に咲く花を手折りて、小瓶になげ入れてながむるのみと云ふ、答へて曰く習ひうかめての後、事はたりてさもあるべし、萬藝師なくてすむといはゞ、書も字形さへ出來て通用すれば足りぬ、畫も草木禽獸のかたちさへわかれば、筆意も法も入らぬにや、好まぬ人の云ふ事にて、一花一枝に風情をつけて見る人も心のとまるやうにいけなす、其内にたのしみある事を知らで口に任せて云ふなり、我このまず知らぬ事はよろず

につけてしらぬことはしらぬがよしとすべし、

其の二

或人花を挿覺えて盆は何ぞと云ふ、答へて、盆は友にするなり、老ては、なほさら寂しきをまぎれ、憂をわすれ、日々一瓶に自己を養ひたのしむ、利欲にかゝはり理窟につよくして、風流を知らぬ人は、我友にあらざれば談ずるに及ばず、

其の三

或人花は何の入用ぞや、答へて云ふ、夫花は、饗應の具なり、高家臺命には、書院廣座敷二間三間の床に立花あり、小座敷數寄屋等にはいけ花あり、大床にもいけ花似合ず、小座敷などにはいけ花相應なりみな人をもてなす道具にして、其日その席の客人終日眺めあかぬやうに心をつけるを專にするを、花の上手といふなり、

其の四

或茶を好む人挿花は重しと云ふ、答へて、茶室の投入よりくらぶれば重かるべし、茶會は座付に掛物にし後花とかや、常は掛物花とも飾りにして客を待受る、一日の眺め見所も一ところはありやうに心を添ふれば、それだけ手間も入るにや、茶室の花も今少し間もあらば一風情もありたかるべけれど、程の極りあれば寔に投入れてすまし、客も禮を失はず、花を譽れとも心ばかりの事にして面白きは稀なり、よき枝よき花自然にふりのよき花ありあふ時は、誠に輕くおもしろく出來べし、いけ花は其日花もおかにするゆゑに前方に挿置く故一風情づゝは是非あるなり、去りながら上手下手にもよるべし、茶室の投入れの言葉は昔より云ひきたれども、遣放にして馳走に不敬の詞ならずや、たゞ入れ花ともいひたきものなり、

新年　　中村げん子

あら玉の年たつけさは追羽子の
袖ふく風も春でゝちして

雜錄

思ふこと

文學士　齋藤一如

琴の音はいと妙なるものなれど、日毎に聞慣れては珍らしとも思はず、松ふく風、磯うつ波、かけひを傳ふ水の音こそ中々に興ある心地すれ、女も美しくけはひたて丶、しとやかにつくろひなしたるは、いとはえあるやうなれど、こは只ふと見し時の事のみ久しうなりもてゆけば、さしも美しきふしの消え失せ、その心根さへ知られて、はてはつきなきかど〳〵ばかり見ゆるなり、さればかざらず、つくろはず、おのづからなるまゝこそ、品位も高く人にも尊ばるゝ道なれ、あはれ世の女等心したまへ、

女の持つべきもの

裁縫しつべき針、鋏、塵清むべき箒、はたき、食物料理ふべき庖丁、はし、などは家を治めんに持つべきもの丶はじめなるべし、これは實地に行ひて、はなしにすべからずとにや、いづれにもは文字の添はりたる、いとおかし、才も優れて、金をも持てるよき男、あらず〳〵、ある時ある生學者のいへるにて吾等の云ふべき所にはあらざりき、吾等の持つべしと云ふは、才もなく、金もあらぬあしき男を夫とせむも、輕しめ易らで、よく之に事へつべき、貞節ある誠心なりけり、さては金はいかに、婦人に私の財なしといへば、こは必ずしも持たでありぬべし、必ずしも持つべきは、金にも玉にも勝らん子寶なり、此寶持ちたらむには、善く養ひ善く敎へて、あだになしぞ、みめよき顏かたち、これは生れつきなればすべもなし、た丶常はやさしくすなほにて、事あらむ曉には、君親のため、夫の爲に、劍の霜をも踏みつべき大和心は、持たでは、我國の女ならじよ、衣

服調度は、身の程にしたがひて持てよ、まづ大方の女等は、花瓶よりも水瓶、帛紗よりも雜巾、琴よりも張板、笛より吹竹、月琴三味線より鍋蓋、柄杓を持たむと心がけてよ、いやとなのたまひそ、道理なきことは言はぬに、

大晦日關所越の記

石川　殘月

世界といふものが大空に釣りさげられてこのかた幾萬遍の一回毎を一年と定められ、こゝに大晦日と云ふ厄介なる關を設けられぬ、この關門御まうけの御旨意は月日に關守なしと云ふて世をはかなく思ふ者を慰めんとの、さる聖人の御慈悲なりしや否やは、いまより知りがたきも、今になりてこれをおもへば、この關所おん設けのため、この世の旅人に取りては、いかばかりの迷惑なるか知るべからず、もし帝國議會にて、この關門廢止の案が首尾よく議決せられて、今後世の中に大晦日といふ關所をなくする事の出來るなれば、天下萬民の幸福この上なかるべけれど、今の議員方には、この事覺束なければ敢て請願もせず時節到來、殘月のやうなる錢なしのぼんやり者が、目出度出世して議員になるまで、時期を待れよと申さば、それは石橋の腐るを待つよりはるかに確かなるべし、さて今後何年生きてこの世を旅するか知れざれど、毎年々々銅貨白銅の多い少いの胸算を、禪僧がものを考へる樣に苦にやみて、この關を越えねばならぬとは、さ

いろは道歌（八）

やりぎらひもらひずきなる横着の　こまり物こそ世には多かり

まことある人のこゝろは花なれや　見てゝ聞ても見事なりけり

化粧してかほは奇麗に見ゆるとも　こゝろきたなき嫁は娶るな

不仕合ありとて世をばうらむなよ　恐れつゝしみよき事をせよ

ても面倒なる仕事なる哉、旅は道づれ、世はなさけのよの中に、あり餘るほどの金を持つて、この世を旅するなら、關所の沙汰も金次第、旅ほど面白きことのなかるべけれど、何れの道中も、兎角に、不時のものいり多く、一泊二貫とあてこめたる宿賃を二貫五百もとられて迷惑する事もあれば、道づれの者が疝氣、乃至は、頭痛などを起し、ために、滊車に乘り後れて、思はぬ散財をなして腹をいためる事もあり、これがまゝならぬ浮世じやとあきらめても、あきらめのつかぬものと、算盤の合はぬものは、例の縞の財布の中身なり、

年の暮れにこの關所あることは、始めより知れ居る事なれば、其場に及んで、鑑札がないの、なにがないのと、狼狽へぬやうにすべき事は、敢て孔明楠公の智を待つて知るほどのことならねど、人間はとかく、利のために面眩ひ、慾の爲に上げ足をとられ、我から名乘つて道德堅固、無病息災と威張つて見ても、粂の仙人と貧乏神とは昔ばかりあつたものでなければ、うつかり、深溝にはまつて、まゝならぬ事もあれば、砂泥の上に轉げて、其水に及ばざる、蓋し尋常尺寸の間のみなど〻愚痴をこぼして、泣くやうな場合もありて、先きの見えぬも理なり、もし世に元日の朝よりその年の大晦日の運命を見通すやうな千里鏡を發明する者あらば、今の世にはやる專賣特許は確かに請合なるべし、人間はこのやうなる千里鏡を發明して、さきの先きまで見通して、心配は無汰じやとあきらめて、寢てくらすか、こんな鏡がなくも、その日、其ときの近い所に目をつけ、近きを行けば遠きは遂に行かるゝものと悟りて、ゆつくりと牛の歩を進め、任重くして道遠ければ、急いではならぬと覺悟するかの一事を決するが大事なり、おのれ、こんなうまさうな講釋をしても、そんな結搆な心掛のある男なれば、どゝのつまりが大晦日の關所の御厄介、利のために貸した金は、慾のためにとられぬも、道理じやと、說き示せば、關守の債鬼は一言の答へもなし、御氣の毒じやと、この

方より申上げ、古來にためしなき大晦日の月夜をたよりに、さゝの關所もまんまと通りぬけ、この長閑なる春の世に出でぬ、さて今年の大晦日はいかに、先づ今から此の事が氣になつて、ゆふべの、初夢もどうやらあしき樣なりしは心配〳〵、

美人の境遇

黄燿女史

氏なくして瑶の輿に乘るとは、女子が其容貌のうるはしきを以て、卑しきより貴きにかしづくを云ふなり、世には、この境遇を見て、幸なることゝなし、こをうらやむ人もあれども、こはあながちにうらやむべきことにあらず、こをうらやむは、心のすぐれぬ人のなすことにて、心だけたる人より見ば、大にいやしむべきわざなり、

凡そ世には、上下尊卑の分別ありて、容易にこれを動すべからず、もし容易にこれを轉倒せば、これ世の常にたがへるなり、何事にまれ常にたがへるはあし、常にたがひても、よき位置占めんとするは、これ自ら己を危きに導けるなり、然るに世の美人と稱せらるゝものは、徒に其美を頼みて、其けぢめを知らざるもの多し、彼等の心は、常に美をもて偶像とせり、彼等の心は、驕傲をもて充滿せられたり、彼等は善をもて生き、美をもて高位を占め、美を以て愛を買ひ、美を以て幸福を得んとする外餘念なきなり、故に彼等の心は、常に浮ゝる雲の如く、確立することなくして、風のまに〳〵動搖するを以て、朝に己が榮位を占むるも、夕にこれにまさる位置あるを見ば、忽ち其心を動して他に傾くるなど、毫も貞操てふ確心なきなり、實に彼等の境遇は定めなく、彼等の精神は海月の如し、

これ色の美なるものは其心善にして、姿の醜きものは其心惡しと定むべからず、試に彼の薔薇花を見よ其馥郁たる香氣と、嬋娟たる姿容とは、人をして戀々たらしむれども、一朝これに觸れたらんには、如

MISCELLANY IN ENGLISH.

英文雜錄

津田梅子閱

THE CIRCUS BOY.

小騎士の栖（一）

Miss Ann Ryder sat at the breakfast table opening her letters. There was one postmarked "Bell's Falls, Colorado."

"Who has sent me this?" said Miss Ryder. "I don't know anyone in Colorado."

There was no one in the room but Miss Ryder and her fat pug dog, Toto; but Miss Ryder often talked to herself.

Miss Ryder put on her glasses and read:

"Bell's Falls, Colorado,
March 3rd 1895.

"Miss Ann Ryder
High St., Still Harbor,
Maine:

Madam:—

John Hall died here, the fifteenth of last month. He had one child, a boy. We have been looking for relatives to take charge of the child, and you are the only one we can find. Shall we send the boy to you, or put him in the State Orphan Asylum?

Respectfully,
Joseph Hicks."

"There must be some mistake," said Miss Ann. "I do not know any John Hall."

ミス、アンライダーは或朝食事をしながら色々な手紙を披いて居りますと、其中にコロラド州ベルスフオールスと云ふ消印のあるのが御座いました。

『ハテ何處から來たのだらう、コロラドには別に知人もないが』

部屋の中にはタトーといふ肥つた獨が居るばかり。ライダーはしきりに獨言を云つて居りましたが、

やがて眼鏡をかけ其手紙を讀み始めました。

拜啓ジョンホール君、客月十五日當地に於て死去被致候就ては其遺子(男兒)引取の爲同君の親戚搜索致居候處、やうやう貴家を搜しあてたる次第に候、右の男兒貴方にて御引取下され候か、但しは州立孤兒院に送り申す可きか、至急御回答相成度候　謹言

三月三日　　　コラロド州
ジョセフヒツクス

アン、ライダー殿

『コリヤ乾度間違だらう、ジョンホールなんてついぞ聞いた事もないから』

But there was her name, and she knew there was no other Miss Ann Ryder in Still Harbor. All her brothers and sisters had died, and now she lived alone in the large old house.

"John Hall!" she said again. "Oh, now I remember; that must be the man poor Cousin Mary married. They lost all their money and moved out west somewhere, and it is years since I heard of them. And they want to send Mary's boy to me!"

She looked around the room, and tried to think what a boy would do there. The old mahogany furniture was beautifully polished, the tablecloth was smooth and white, and the pretty blue and white cups and dishes had come from China when Miss Ann's mother was a little girl. Toto lay asleep on his own cushion in the biggest arm chair. Miss Ann sighed. Probably the boy would slam the door, and pull Toto's tail, and try to cut his name on the chairs and tables. People said boys always did such things.

"Why should they send him to me?" she thought. "He is not a very near relative, only my cousin's child. But then, he has no one but me, and I cannot let a Ryder go to the orphan asylum.

でも、手紙には現にミスアン、ライダーと書いてあり、又此のスチル、ハーバーに同名の人がほかにある筈も御座いません。一體アンは兄弟にも姉妹にも、死別れ、今は古い廣い邸にたつた一人で住んで居るのでございます。

『ハテジョンホール、ア、やうやう思ひ出した。コリヤ乾度従妹のメリーの配偶者だらう、あれは、いつか、身代限をしてどこか西國の方へ行つたが、もう永年便をきかない、アアさうだ其兒を寄越さうと云ふのだ』

アンは部屋中を見廻はし、其兒が此處で何をするであらうと考へました。古いマホガチ製の家具はテラテラと拭き込まれ、小じわ一つ無いテーブル掛は、雪の樣に純白、青や白の見事な皿コップはアンの御母さんが、小さい時支那から來た貴重なもの、

さて其傍にはタトーが一番大きい肱掛椅子で自分の蒲團の上にぬくぬくと眠て居ります、アンはこれを見て嘆息をしました、ア、乾度その兒は、戸をガタピシヤとあけたてしたりタトーの尾を引張つたり、椅子や机に自分の名を彫つたりするだらう、男の兒は、えてそんな眞似をしたがると云ふから、

『マーなぜ其兒を家へなんぞ寄越すのだらう、私と別に近い親類でもなし、タヾホンの従妹の子なのに。といつてもその兒は私の外によるべない身でありまたかりにもライダーと名のるものを孤兒院には

Dear me! I don't know what to do!" cried poor Miss Ann, so loudly that Toto waked up and wagged his tail, hoping she would give him a piece of sugar.

After breakfast she sat a long time thinking. Then she went to her desk and wrote two letters. One was to the Sheriff of Bell's Falls, and it said:—

"Mr. Joseph Hicks:

Sir:—

Please send the boy to me, and continue to look for John Hall's relations.

Respectfully,

Ann Ryder."

The other letter was to her old friend, Dr. Haven, asking him to come to tea.

"There!" said Miss Ann. "I will tell the Doctor, and I hope he will say I have done right."

But the doctor did not think so at all.

"You know nothing whatever about this child," he said. "What kind of a man was his father? I remember that your family did not like the marriage."

"No," said Miss Ann slowly. "He was not a bad man, you know; only he never seemed to know how to manage things. We thought he did not know

やられぬ、アーマーどうしたものだらう。』

アンはあまり考へ込み、しまひに思はず知らず大きな聲を出したので、タトーは、吃驚して目を醒し、なにか御馳走に預からうとしきりに尾を振りました。

御飯後もアンは永く坐つて考へて居りました、が、やがて机にむかひ二通の手紙を認めました。

一つはベルスフオルスのジヨセフヒツクス氏への手紙で

拜復其男兒當方にて引取申すべく候但しジヨンホールの親戚は引續き御捜索相願候

といふ樣な文言、

今一つのは、ごく懇意なドクトル、ヘーブン宛でこれは御茶の御招きでした。

『サー、ドクトルに一つ御話して見やう、どうか、うまく、あの方が賛成して下さればいゝが』

處がドクトルは賛成のサの字も申しません。

『第一、あなたはその兒を御承知ないぢやござらんか、まあ父親の事を考へて御らうじろ、あの御縁組には御宅でも、いかう御不滿の樣ぢやつたが』と不興顔、

『エマーさういつたものですか』アンは考へ考へ『あの人とて別に惡い人ではありませんでした。只もの事をきりもりする事が出來ないので。ホンにあの人は馬や犬の事位し

much about anything but dogs and horses."

"A lazy, good-for-nothing fellow," said the doctor, "and probably the boy will be just like him. Send him to an orphanage in Boston, where you can go to see him sometimes; and then, when you know what kind of a child he is, you can decide what to do."

"No, Doctor," said Miss Ann, "I cannot send Mary Ryder's child to an orphanage."

"Then you will be sorry," said the doctor. He talked a long time, but Miss Ann was firm; she had sent for the child, and the child should come.

か知らない樣でございましたよ』

『アリャ無性な、やくざ者ぢや。その兒もどうせ親の兒ぢやらう、まあまあ兎に角、孤兒院にやつて、折々會ひにござらしやれ、そして其子のたちを能う見てから、どうなと極めても遲うはあるまい』

『イエ、それはいけませぬ、私はどうあつてもメリー、ライダーの子を孤兒院にはやれません』

『そんなら後悔は目の前ぢや』ドクトルは長い間いろいろ止めましたが、アンの決心は堅固でいつかなきかず小供は是非引取る事にして迎を出しました、小供は不日來るでございませう。

Pug dog 面の猿に似たる小犬.
Talked to herself 彼の女が獨語せし.
Looking for 尋ねつつ.
Take charge 引受ける.
It is years since I heard of them 彼等の事を聞たは數年前の事なり.
Mahogany 熱帶に生ずる木の名にて――furniture は此の木材にて作れる家具なり.
So loudly that......... 其の聲餘り高かりし爲に.........
Good-for-nothing 役に立たぬ.
Sent for (send for の過去) 迎へる.

何なる仇をなしつるぞ、嗚呼世の美人、彼も亦此の花の如し、彼の窈窕たる姿容と、其裊々たる細腰とは、幾人をして戀慕せしむるとも、その浮雲の如き心と、海月の如き精神とは、幾人をして失望の淵に沈ましむるか、彼等は實に貌の美を餌となして、人の心を奪ふものなり、彼等は追從甘言を以て、人を欺くものなり、彼等は又、人の心を殺すものなり、然るに彼等は、此の大惡業をも意となさずして曰へらく、我の美貌は焉んぞ世の常の偶ならんやと、吁彼等は、何を頼みて斯く云へるか、それ榮枯盛衰は、世の常なり、彼等は如何に其色香を頼み、其美貌を傲るとも、其美のうつろはざるなきを如何にせん、人の生涯は蜉蝣の如し、今日ありと雖、明日は頼むべからず、今日の瓊宮瑤臺は、明日の茅屋土階なり彼の六波羅の玉殿に於て、全盛を極めし妓王すら、『もえいつるも枯るゝも同じ野邊の草』てふ歎をもらしゝにあらずや、

彼の妓王こそは瑤の輿に乘りたるものなれ、されど世の定めなきは、彼をして永く此の榮位に止ることをゆるさず、妓王すら尙然り、彼等は其美に於ても其氣品に於ても、其智に於ても、其技に於ても、妓王の指頭にも及ばざるにあらずや、然らば何の頼む所ありてか、布衣の榮華を希へる、

彼等は又、人を詛はんとして、己れ却りて幾多の人に詛はる、彼等の淺はかなる驕傲と、不堅立なる精神とは、幾多の人を傷け、幾多の人を害ふ、されど思はずや彼等の加ふる所の傷害のまさるに從ひて、彼等の詛も亦まさることを、彼等の額には永生印せられて、彼等を見る人は、これに唾し、彼等に遇ふ人は、彼等を爪彈す、然るに彼等は尙さとらず、却りて己が幸なきをうつたへて曰く、

美人は薄命なりと、彼等の言は眞に是なり、然れども、彼等をして此の薄命なる境遇に立たしめしものは、果して何人ぞ、彼等は所謂身にて身を食ふものなり、即ち彼は、好みて此の薄命なる境遇を作れるなり、彼等此の境遇を免れんと欲せば、免れられざ

るにあらず、然れども彼等の淺はかなる驕傲と不堅立なる精神とは、己が些々たる欲を制する能はずして、此の境遇に陷れるなり、吁見ずや、野にさらさる丶髑髏を、彼も亦曾て美なりしものたりしなり、如何に天成玲瓏たる美貌も一朝の嵐にさそはれて、露と消えし曉には、此髑髏のすさまじきを免れざる也。嗚呼世の美人よ、爾は何を苦みて此の果敢なき境遇を擇べるか、爾の心は天を去りて、地に向へり、爾等は姿容の美を以て大に尊きものとなし、生涯の幸福は此にありと思へど、これ大なる誤謬なり、それ貌の美は、決して尊きものにあらず、賴むべきものにあらず、貌の美はうつろひ易く、朽ち易し、爾等は、此のうつろひ易く、くち易き美をうちすて丶、其心を高尚ならしめ、永劫不朽なる眞正の美をもとめよ、謂ふ所の眞正の美とは、即ち內心の美を謂ふなり、人は內心の美を得たらんには、常に悲もなく、悶もなく、安心平氣にして生涯を送るを得るなり、然るに爾等は、此の尊き眞正の美は、念頭にも浮べず、徒に有形の美に己を依賴して安全幸福なる位置を得らる丶と思へり、されど見よ爾の境遇を、爾の境遇は、常に安寧ならず、爾の心は、常に悶へ苦めり、爾が美に依賴して世の高位置を占めんとする有樣は、饑たる狐の如く、餌を貪る獅の如く、常に滿足を得るときなし、あはれ世の美人よ、爾の此の世に於て、爾の生涯を委ねんとする所の美は、決して

いろは道歌（九）

子供とて氣まゝにさせじ其くせは
やがて親への仇とこそなれ

得手をして心がゝりにおもはねは
慾の闇路を行けばなりけり

天道をあふぎうやまひおそれつゝ
かりにもあしき心たもつな

惡人といはれてはらをたてながら
あとより惡をなすぞ悲しき

爾をして安心なる立脚地を得しめざるなり、爾は速にはかなき生涯を除去して、『人は既に草の如く、其榮は草の花の如し、草は枯れ其花は落つ』てふ聖言を服膺せよ、然らずんば、爾は生涯己の不幸なる境遇をうたへて曰はん、美人は薄命なりと、

女子の職業

鈴木其星

人生れて婦人の身となることなかれ、百年の苦樂は他人によると云ふ詩は如何にも女子の身上を穿ちた名言であると感心されて居つたが、近來は此の覺束ない支柱さへも、容易に得られなくなつて、女子は漸く獨立自營と云ふことに付て、其頭を惱さなくてはならぬことゝなつた、此必要に應じて、否此の必要を當て込みに種々の學校や傳習所が一雨々々に殖えて來た、女子職業學校とか、美術學校とか、裁縫學校とか、商業學校とか、割烹學校とか、何々講習會とか、何々傳習所とか云ふものが到る處に設けられ剰へ女子大學と云ふ樣な高等教育を授ける所さへ出來て居る、實に盛なりと云へば盛んである、併し此等の必要は女子の自覺心が高まつて、今迄の樣に婦人女子は必ずしも夫を持つて家庭の婢となり、子を生む器械となつて、一生の苦樂はたゞその夫の貧富良否にのみ由るべきではない、自分も一己の人格を備へた人間として、自分の力で衣食して往かなければならぬ、如何に立派な家に嫁しても、如何に歴々とした良人を以つても、人には不時の災難もあれば浮沈もある、早い例が今回の樣な戰爭などの爲に最愛の夫に死なれ子に先立たれることがあつた時、すぐ其翌日から路頭に迷ふ樣なことがあつてはならぬ、縦し夫迄に至らぬ所が如何に女であるからと云つて、一から十まで夫や子の厄介に計りなつて居るべきものではない、畢竟これまで婦人の位置が高まらず、一生男に頭の上がらぬと云ふものは、餘り依賴心ばかり強く其脛ばかりかぢつて居つたからであ

る、一藝を身に備へて何日何時どんな事があつても立派に獨立して往ける身分になつて居れば、假令其職業に衣食せずとも、大に心強い所があつて如何なる場合にも、婦人の品位を保つことが出來ると云ふ樣な考へからして、己が好む所の職業なり技藝なりを修めるなら差支へはない、否差支ないばかりではない、僕等も双手を擧げて贊成する所である、併しそれには十分其修むる所の職業なり、技藝なりの種類を選ばなければならぬ、一生獨身生活をやり通すといふ大決心のある者は別として、其修めた職業技藝をお土產として、他人の所へ嫁入らうとする婦人は、云ふまでも無く一家の主婦として、家政を調理し良人をして內顧の憂なく、子女あればこれが養育の任に當るのであれば、此大切な任務と衝突する樣な事があつてはならぬ、世には隨分文學の嗜が深く小說詩文を以て名高き婦人もあり、女敎員となつて學校敎育の任に當るものもあり、會計記簿に堪能で會社や商店に勤める人もあるが、三面六臂の女丈夫ならば知らぬ事、大抵の婦人は之が爲に煩雜な家庭的の仕事が嫌になり、若くは不得手になり、或は時間の都合上自分でやる事が出來ないため、下婢とか乳母とか雇女とか云ふ者にまかせて、仰事俯育の務を缺き家庭の温みを冷却するものが澤山あつて、時には人知れぬ風波を閨門の中に起す事も往々あるから、這般の事には十分周到な注意を要さなければならぬ、それから斯樣な婦人は得て精神の修養といふことを怠つて、只管目や手の先を働かせるのにばかり、熱衷して德義情操に缺陷を來すもので、自分の技術藝能を鼻にかけて、動ともすると亭主を梱の代用にしたがるものであるから、是又父母とか監督者とか云ふ者は、大に注意して德性の涵養といふ事を怠つてはならぬ、僕は先頃某女子大學の生徒が他日の獨立自營のために學校の餘暇を以て、明治大學の法科講義錄を取つて勉強するものと、商科講義錄を取つて勉強する者が共に二三十人宛あると云ふ事を聞て、是等の女子の前途について大に寒心する所が

あつた、彼等は餘りに獨立自營と云ふ事にばかり重きを措いて、女子の本分と云ふ事を顧みなすぎはしまいかと思ふ、百藝足りて一德を缺ぐ所謂女形にして、男性化したる女子の多きは決して人生の美事ではない、

汽車中の婦人

黄離女史

汽車の三等室に乘りこみて、さま〳〵なる婦人の態度を觀察するこそおもしろけれ、

いたういかめしく言少く、物おもひに耽るらむさましたるは、沈鬱なる思想家たらずんば、吾が一身或は家庭に憂ありて旅行する人なるべく、絕えずあたりを見まはして、兎に角と云ひのゝしり、笑ひさゞめくは、以而非物しりの心傲りせるものなるべく、物賣の來る每に呼び入れて、いやしげに口のみ動かせるは、片田舍に人と爲りて、見え體裁抔を一切思はぬもの、汚げなる子供あまた具して、にぶき面したる女の、それが始末にだに困じはてたるは、見るから無意無主義にして、吾が子を衣食せしむるにも堪へざるものと知らる、又男子と乘り合ひ、さかしら顏にさへづり、はた見苦しく寄りそひ抔するは不品行なる女學生の好みて演ずる醜態と見え、裝なよやかに、目のつかひざま、首のすゑ所皆故々しう、わざと笑みたゝへて、見知らぬ人にまで媚を呈ぐるは、思ふに腹黑き魔物なるべし、さすがにさま〳〵の人の行きかひ繁きこの室には、かう心なくてあらん內にも、其人の品格おのづからあらはる、かゝる怱卒の間に、誰かわざと品位を作りて高う見られんことを思はんや、畢竟汽車中の態度は、平常の態度のあらはれなり、故に教育ある女子は平常より其態度を愼まざるべからず、

賤業の婦女は人前を憚らず足投げ横臥してもありなむ、片田舍の婦女は立ながら物頰ばり笑ひ興じてもありなむ、こは今暫く論外に措くべし、只最も見ぐ

るしきは、女學生の裝したるものが、よからぬ態度をあらはさんこと也

女學生の弊風、一は驕慢の態度甚しきもの、一は男女相馴れ親しむ事の甚しきもの也、驕慢なるものは滊車中に在りても、傍若無人の言語を敢てし、之を西洋婦人の活潑なるに比するものあれど、日本婦人は猶其特有の長所を保ちて、かゝる雜踏混亂の場所にては、談話もなるべく靜肅なるを可とす、大きなる聲して傲れるさまに談りいづれば、人々とかく耳かたむけて聞くものなれば、其語に若し誤あり、或は理に叶はぬ事などありて、物知りたる人に嘲らるゝは、恥かしからぬ事かは、多く語らんと欲せば、猶他に定れる場所あり、云はざるを得ざる場所なり時をも所をも擇ばずして、只氣多きを知者の態度なりと考ふるは誤れる見解といふべし、

されど、所謂この生意氣女學生よりも、更に多く見るものは、男女學生の親愛甚しきものなり、彼等は平常監督者ある者は監督者の目を忍び、監督者なきものも猶多少衆目を憚りつゝ、互に會合して、自らは潔白なりと稱する情好を通じたるものが、一朝學校の休暇を得て歸國し、或は秋季上京する場合に至りては、何人をも憚ることなく相提携して旅行するものの幾何なるを知らず、かくて其口實に、男子は曰く彼の女子を保護せん爲なりと、女子は曰く、彼の男子に萬事を依頼して、行程の安全なるを保たん爲なりと、豈意氣地なき女學生にあらずや、かの始めて上京する女子を父母自ら送致する能はずして、之を確なる男子の同行者に托するが如き、或は十五歳未滿の女子が、同行の年長女なき爲に、父母又は監督者より青年男子の確なるに依賴せるもの、或は鄕里僻遠にありて、道中危險多き場合に全く同行者なくて相伴ふものたらば猶可なりと雖、然らぬものが此の期を利用して、男女相親近せん爲に、他に適當なる同行者あるを捨てゝ男女たゞ二人、或は多數の男子の中に、女子一人加はり、或は多數の女子の中に男子一人加はりて旅行するは、其の意いづくにあ

るかを疑はざるを得ず、かゝる旅行は、其外見に於て已に見えよき者にあらざるを、況して其間の物語と態度とが更に醜きものなるに至りては、之をしも學生といふかと、思はず嗟嘆せらるゝなり、

魚類と野菜

中島春郊

魚類は海により、野菜は土地により、其風味に甲乙が甚しくある、

第一魚類は潮の如何に因りて、產する魚を異にし又異にせざるも、潮違ひの海に栖息する魚は其の味宜しからず、是は黑潮と眞潮とに產する魚質上より來るもので、これは潮違ひに栖息するもの丶多い所から、此海には此魚が適し、彼の海には彼の魚は不味といふ事がある、これを場違ひと云ふ外はない、魚屋などでも左樣な事は辨へず、只此魚は何處の名產と云ふのみで、其他の物を場違ひと云ふのである

それで魴鮄は本場で、カナブシカは場違ひといふことになる、我等は場違ひと云ふは、十中の七八黑潮に栖むべき魚の眞潮に栖めるのを指すので、これは不味のものである、

又美味の魚はと云へば、何に限らず黑潮と眞潮の界に栖めるもので、自然其のうちにもまた優劣がある倘一層細密に云へば、潮流によらず、其方面に限りて栖む二三の魚あることを知らねばならぬ、概例を擧ぐれば、歐羅巴にては丁抹と蘇格蘭と相對する海中に於て、鯡鱈の產額多きは、黑潮の直接にさし込む事なきによるので、これが歐洲の北海で、我邦の北海道と同一に位するものである、

然るに此の北海道と離れて、越後、越中、能登、敦賀などには多少の鱈漁あり、就中寶生津の鱈は其形醜に、一見古き魚の如く、なれば味はそれに反して美なるが、能登のは見た所立派にて、皮肉とも硬く味は劣れり、故にその近縣にては、能登鱈を寶生津鱈と稱して顧客を欺くものあれど、注意すれば以上

の如き鑑別が付くのである、
一體に此海岸は潮路が黄海より沖繩を右に見て、對馬海峡以南に入り、玄海灘に沿ひ、山陰道の沿岸を通過する黒潮にそひたる眞潮の稍末流に近きものにて、まだ寒潮とならざる處に棲息する魚にて美味なるは鰈の類である、
鰈は若狭、敦賀より越中までの物にして關東筋の物は兎ても比較にならず、尤も關東筋にても自から優劣あり、而して其風味の鑑別は容易である、東北にては八戸近海の物、體大きく肉厚けれど味ひ宜しからず、
この風味の甲乙は潮違ひにもよるべけれど、一つ海濱續きにてこの等差あるは、其海岸と海底の土質によるものと判定するの外はない、我輩は多年食道樂のお蔭にて、そを煮る匂ひにて、略其產地を卜し得らるゝのである、



爰に潮質範圍外のものがある、それは鰤で、これ等は黒肉質青肌の魚類で、云ふまでもなく、黒潮魚とし か思はれん、其鰤が越中の本場とする所を見れば眞の黒肉質でなき證據で之を細説するには多少の紙頁を費すことゆゑ後日に讓らう、
鮪、鰹の類は黒潮質のものにて、これが眞潮に棲めば云ふまでもなく、不味のものたるを免れぬである、鰹漁は、遙かの沖に於てするので、これは黒潮が海岸より遠く隔てゝ西より東南へ流れて居るからで、鰈の如きも南に面する海ならでは美味のものを産せぬのである、

鯛の類も產地によつて差等があり、關東筋にては沖津が最上である、是も海土と潮の關係である、內海にては讃岐の鯛が塲違ひなれど、伊豫の大島最寄のは上種である、

鯛に見分のむづかしき魚で、眞鯛と花鯛の區別が付けば魚屋も一人前であるが、中々覺束ない、又燧灘續きの魚類は、其土地の自慢する所であるが鯛を初め海潮外海より流れ込みて滯る故に、肥大せるのみにて、肉締りを異にし、美味と限れぬのみならず、鯛の如きも、沖鯛などに比すれば、到底比較にならぬのである、

又野菜は、海邊に高山の連れる土地にては、收穫少く風味宜しからず、海邊より遙かに山を隔てたる武藏野、次では尾張其他一望萬頃の平野は、自然地肥えて、大根、蕪を初めすべて最良なれど、これに反對する土地は、其程度だけ反對の不作を見る、風味も之に伴ふのである、

夢中の草花

甲賀美能子

松の綠は色まし、梅の花は香をもらして咲き出て、鶯は長閑に春を歌ひ、若草は己がじゝもえいでて、とり〲に春を知らするを、我が宿の盆栽の福壽艸のみは、いかにしてかおそき、こを咲かせんとて、朝夕水をそゝぎて、日あたり良きかたをえらびて、育てけるが、その心づくしの程も思はぬにや、僅に一ッ二ッよりおほくは咲き出です、枯れはてたりとにはあらねど、皆打ちしほれてけり、いかにも心細くて、今日は常よりも、心入れて水そゝぎ、かくもせば、明日は幾ばかり勢付きて、花も咲き出でんと明日をたのみて伏戸に入りぬ、やがて東も白みて、夜わけはてぬれば、たのしみにたのしみしものいかにと、やをら起き出でてながむれば、うれしや、誰か新に植ゑしならんとあやしまるゝ程に、色こく艶々しきさまに、大やかなるが咲き出でたりけり、わま

りのうれしさに、片邊に臥したまへる友なる君も起して、共にながめばやと思ふ折りしも、友なる君の己が名を呼びたまふにおどろきて、目さむれば、こはいかに、つや〳〵しき花のすがたはなくて、昨日よりもからびて、仆れんばかりのすがたにてありき嗚呼、凡て世の中の物は、皆此くあらんか、夢さめたれど、さきにみし花は、まだ目のあたりをはなれず、日はうら〳〵として、近き山邊は、花か霞かわかねど、青柳の風のまに〳〵靡く、はたをやめの、緑のかみをくしけづるが如く、野には、菜の花、れんげ草など、ほころびそめたるに、麥のわきませたるは、さながら、物しきたらん如く、ゆかりの色なるすみれ、たんぽゝ、つく〳〵しなどのやさしき花は、己がじゝ染め出るなど、とり〴〵におもしろく霞かくれに飛び行く雲雀、ひら〳〵と花を尋ぬる胡蝶のあと追ひ行きなどして、此長閑なる日に、己が身の、尺あまりものびたらん心地するなど、みな夢にあらず、現にもあらぬ、この朝のおもひなりけり

菫花餘情

紫菫女史

一

わが名に由緣あるが故に、余此の花をなつかしむ歟知らず。ゆかりの色のかばかりに、深く人の心を引くらむか。知らず。如何なる由緣のゆかりにて、余此の花をなつかしむ歟、知らず、われは唯、おしなべて人皆の、此の花をらうたしとてもはやすなかにおのれわきて、此をらうたきものにおもにおもふほどの、まされるを知るのみ。

二

もえたつばかりの緋綸子の袱紗に、四季の花。こも〴〵艶麗に縫ひたるが、目眩ゆきまでに見らるゝに、あはれ、其の下つかたに葉隠れて、いと些少なる菫の花の二ッ三ッ縫はれたる、いかに嬉しく、目とまりて、優に春の心を深からしめしよ。

三

黒き裝つけ、同じ色なる皮の帶、細く綴ひ、飾りなき提籃、傍に置きて、靜かに語れる異國婦人の、今しも滊車より出でんとして、何れにか置きたる帽とりて、襟のあたり取りつくろへる見れば、濃紫の花寒麗紗もて造れる菫の花束、惜氣なく挿したる、いかに優しき心操や籠るらむと、飽かず見られて、われも共に下りんかとぞ思ひし、今も猶、其の人の懷しうてなむ。

四

あはれ、世にはさまゞゝの日を見つるかな、ゆくりなく、人に倚りて、親、兄弟もなき、かゝる異土には來てしか、とわかず、口惜しう偲ばるゝ頃。我と心を沈めて、靜かに郊外を散歩し、行くゞゝ路のべの菫花を、何心なく摘みて、持ち歸り、茶棚のほとり、小なる瓶子に挿して置きけるを見て、珍らしくも今日は外出したまひけるよ、獨にてか、など問はれける時、偶然心打たれて、見上ぐれば、その人の常よりも優しう、同情に富める面もちをぞしたる。朝の雲も、吹き拂はれて、空のうらゝかに晴れたらむこゝちせられき。

五

いつしかと待ち詫びし、垣根の小草、色づきぬればつと庭下駄のまゝ、下りたちて、そゞろ歩しけるに思ひかけざりし龍髯草の間に、ゆかしの色ほのかに見ゆるは、秋ならでも、此の花の開くにや、はた、去年の蕾の咲き返りてか、とあやしうおもはれて、寄りそひて見れば、あらず。淡紫の壺すみれ、三ッ四ッ早綻びんとして、尚、開かざるなりけり。春はまだき、と打ち誦せらるゝ折から。

六

藤の花の間なく散りしけるあたり、紫匂ふ暮春の雨も晴れて、新に庭を拂はせけるが、一際、色濃く散り殘れるは、昨夜の嵐の強いても誘へるなるべし。そをあはれと見て、腰掛の邊り立ち寄れば、遲れて咲ける菫草の一本ありけり。是ばかり、愛しの稚兒にも摘ませなと、殊更に人して、其の乳母呼ばせて

戒めたる、物狂はしとや、人の笑ひけんかし。

七

をさなき兄弟將て、近き野邊をさまよふ。兒ら捕ろ兒ら捕ろと遊び戯るゝ兒等に離れて、獨菫の花摘めば、春の使か、ふりわけ髮の里の兒が、長き、短き濃き、薄き、色さまぐに取り集めて、妾にたまひたるいかに嬉しからざらん。とみに二ッの花輪はなりぬ。こは我が姉なる君に、一はわがために、と持ち歸りて贈らせんものを、兄弟の長に生れたるわれ、さる懐しの人も在せざれば、春のあはれは、いや深くてそありけれ。

八

文にこめて、たまひつる人の情いと嬉しく、共にすみれの心地して、其の儘、讀みさしたる卷に收め置きけるを、此の程、師の君よりたまはりたる、な／＼かしきものてふ文の題に、おもひあはせて、取り出で見れば、香こそ失せたれ。色はあせず、うつろはで、打ち笑む面わのすぐれて愛たき其人の影さへ添ひて、あやしう、たゞならぬ心地せられき。

九

降り續きたる雨の餘波干もやらず、風清らかに吹きわたれる朝明、日未だ昇らぬに、脚の氣を養はんとて、朝戸出の袂輕らかに、獨出づれば、庭の芝生に露置きて、首夏尚寒し、誰か知らん、胡蝶の、夢未だ醒めず、翼は濡れて、生けりとしもなき風情にて、うなだれし菫の花に宿れる

いろは道歌（十）

酒はよき物といへどもすぎぬれば　身をも破れり家をみだせり
きみに忠おやに孝かうなきひとに　すゑ災難のあらでやはある
行ゆゑの樂をねがはゞわかきとき　苦勞いとはず勵めはたらけ
目に見えぬ心のうちのよしあしも　言葉のはしに匂ひいでなん

心を。折々風に動くをば、蝶や何を語るらん。花や何を頷づくらむとぞみる。春の名殘の夢をのせて、眠猶ふかき花菫よ、いかなる事をや夢むらん。汝が花陰にいかなる詩神の宿るらむ。其囁こそきかまほしけれ。

まことや、花の一片にこもれる眞美に、たれか、心の歌なからん。胸底おのづから聲ありて、煩悶去り轉天地の自然を解し、至上者の睿能を仰ぐ。何者かわが前途を照らす光ありて、希望の輝ける時、東天白みて、群鴉林に喧し、花の眠また醒めん。あはれ今日、またひらく花菫はたいくつぞ。

御題に因める新品製

例年の如く、御題に因める半襟、帛紗、帯止、襟飾、リボン等の新製品を聞くに、本年の御題は冠するに新年の二字あるより、正月川のもの〻みしか作らざるが多し△半襟、縮緬地の十六七歳向には元祿形の半開扇面を置き中に蛇籠と梅色を陰陽に染出せるもの七十五錢、二十錢前後向は川を色あげにして、花筏と薄紅梅を置き、匂を白色にて縫ひ、金砂子を散せる薄紫紺地のもの一圓四十錢、又同年配向にて川を飛田の白あげとし、裏印を白と草色に染上げ、金砂子を縫出したる薄紫紺地のもの八十六錢、濃葡萄地に川を白あげとし扇面の下を梅花と若竹にて見切り、松葉を置きたるもの八十六錢、薄葡萄地にローエルを白あげにし、古切に流川を藍と白にて出し、繧繝の梅花を前後左右に散らし、古切には飛出を染出したるもの八十六錢、二十五六歳向にては古代紫地に白あげの蛇籠と青い筋を斜に並べ、上に鶴、下に若竹を置きたるもの八十二錢、同年配向焦茶地に白あげに霞を置き、同じく白あげに水を置きて淡彩の若竹をあしらひし者八十二錢、二十歳より三十歳迄向の濃葡萄地に南枝を白と鼠糸にて縫出し、舟と川の縫出しある、扇面を置きたるもの二圓十八錢、同じく勝色地にて流れ絞り縫とし、上に裏白を縫出したるもの二圓八錢、三十歳向葡萄鼠地の山繭入格子縞に川と蛇籠を置き上に鶴二羽を飛ばしたるもの八十三錢、三十歳より四十歳向にて媚茶地に川を飛出にて出し、若芦二三本をあしらひしもの八十三錢、四十歳前後向き革色地に淡泊な流を置き、其前後左右に小さき羽子を白あげにしたるもの六十八錢位、

◎歌留多　百人一首の五十錢位より一圓前後の品最も賣行よく、東郷大將唱歌かるた亦評判よく、價は二十八錢、次は軍艦かるたの二十八錢、家族合せ歌留多の二十錢、教育唱歌かるたの十八錢・英語練習歌留多の二十錢等捌け口多し、

銚子紀行を讀みて地名人名の書方に關し自ら戒む

理學博士　坪井正五郎

私の書きました銚子紀行の一節が、圖らず女鑑第十五年第十二號に載る事に成りましたのは、喜ばしく思ふ所でありますが、此所彼所に振り假名の間違ひがありますので、一度は正誤として夫れ丈の事を記し送らうかと考へました、所が其間違ひと云ふものは、殆ど皆地名人名に限られて居ると云ふ事を知りましたから、畢竟地名人名の讀み方がむづかしい、否地名人名の書き方の注意が足りなかつた爲めから、斯かる事が起つたのであると悟つて、此事に關し自らも戒めとし、且は幾分か讀者の御參考にも供し度と存じ、正しい音を示すと同時に、少し許りの意見を述べる事と致しました、

先づ第一に百十八頁上段末行松村暸とある暸は『あきら』と讀むべきものです、元來一字名は音で讀むのか訓で讀むのか他からは判斷が付け難いものですから、本人が『あきら』だと云つて居られるのですから、夫れに從はなければ成りますまい、彼樣な字には私自身に假名を付けて置けば好かつたのに、左樣爲なかつたのは不注意でした、引續いて柴田當惠、これは字が違つて居る、當は常の誤りです、常惠の讀みは『つねゑ』隨分むづかしい、これも假字を添へて置かなければ成らなかつたのです、下段第一行の三好男の男は勇の誤り、讀みは『ゆう』、當と常、男と勇如何にも混れさうな字です、

文中諸所に在る余山と云ふ地名、何れも余山として有りますが、眞の讀み方は『よやま』余を『よ』といふなら山は『さん』、山を『やま』と云ふなら余は『あまり』で有りさうなものですが、どうも地名人名は理屈押しには出來ません、併し地名中に在る、山の字は通例『やま』と讀むのですから先づ疑問は余の字を何と讀むかと云ふ點にのみ在ると申しても宜いでせう、次の行と其次の行とに在る海上郡海上村の海

上の二字、共に海上として有りますが正しく云ふと『うなかみ』です、郡名は『かいしやう』でも分からぬ事は有りませんが、村名は『うなかみ』で無ければ通じません、是等の地名にも假字を付けて置くのが正當でした、

百十八頁下段五行目の信田は『しだ』と讀むのです地名の余山と同じ流義で上が音、下が訓ならまだしもですが、其音が又縮まつて居るのですから實に分かり惡い、或は『しんだ』と云ふと聞こゑが忌らしいので呼び變へたのかも知れません、『のぶだ』と云つては野に居る豚と聞こへる、矢張無理でも『しだ』と云ふのが最も好いのでせう、

百十九頁上段八行目成東と有るのは成東、これも音訓混ざりですが、上が訓で下が音、余山とは反對です、百二十頁下段七行柳堀の振り假字に『やぎほり』と有りますが實は『やなぎほり』、終りから二行目唐子の振り假字に『たうし』とあるのは『からこ』の誤り、總て正しい讀みを示して置かなかつたのは不注意でした、

編輯者に於て原稿の假字付けを監督されると云ふは困難な仕事でせう、植字も校正も容易の業では有りますまい、私は以上の誤りは皆原文に假字を付けて置かなかつたのから生じたものとして自らの手落ちを編者と讀者に謝しますが、此樣な事は隨分度々且つ諸所で起こりさうな事と思ひますから今後の爲め一二の希望を記します、

(一)執筆者は讀み惡く紛れ易い地名人名には自ら假字を振り置くこと、文中其文字の始めて書かれた時のみとしても差支へ無し、(他は其通りに讀みさへすれば宜き故)

(二)發音を示すのは假字計りでも濟むが、地圖を調べたり文通したりするには今日の所是非共文字を知つて居らなければ成らぬ故、執筆者に於ては此點にも注意すべきこと、

(三)如何に振り假字の必要が有つても當て推量は無益なるのみならず時としては混雜の基故、讀み方

の疑はしい地名には假字を振らずに置くこと
（四）他人の文章に假字を施すに當つては堅く第三條を守るべきこと、
（五）執筆者が一ヶ所にしか發音を示して置かなかつた場合にも同文字には成るべく一々其通りの假字を施すべきこと、
序でに他の誤植も此所で正して置きます、百十八頁上段終より二行目『置いて』のては、た、百二十一頁上段末行後の假字はのち、下段の六行目『歸京と聞けば』は『歸京、後で聞けば』、百二十二頁最後の行『そさつて』は『すさつて』紀行の終と同樣此文もこれで『さよなら』と致します

小兒の年中行事

一、元日　こは云ふ迄もなく一年の第一日で、何處でも祝ひます、其折小兒にも大人と同じ樣に膳を供へてやり、衣服も大人が紋の附いたのを着るならば、小兒にも木綿でよいから紋のあるのを着ぜる樣、つまり全く大人と異る所ない樣にしてやるのです、これは大人から見ればつまらぬことの樣ですが、實は小兒の自尊心と申すことに少からぬ影響を與へます、

二、雛祭と五月幟　其致し方の如何は兎も角も、家庭で之を實行せよとは我が主張であります。小兒の生れた年から實行して飾つた人形などが、後々まで殘つて「これは生れた時誰人が贈つて呉れたのである」「誰が何處で買ふたのである」とか或ば「此人形の傷は私がまだ西東も知らぬ時につけたのだ」など云ふを思ふにつけて、孩嬰當時の事を伴想し、無彊の感に入らしむるなどは中々に趣味があります。殊に東京の樣に借屋住ひが多い處では、生れた家とか室などを紀念することが出來ませんから、是非とも是等を實行したいもので……

三、誕生日の祝會　これは事新しく申述ぶる迄もなく、其小兒を中心として之を開き小兒を主人役として其友達を招がしむるなど種々の趣向が御座ひませう。爰に一つ述べたいのは小兒の物を定めることです、譬へば七夜の祝ひに鯛をつけたならば、それを以て其子の物と定め、誕生日毎に之を供へることです、斯くして太郎の物は鯛、次郎の物は鯉、花子の物は金口魚など〻定めて置くことです。僅かの事ですが隨分趣味あることであらうと思ひます。

四、天長節には　何か定まつた催をする樣にしたいのです、まあ家族の野外運動會などは良いだらうと思ひます、これも誕生日のと同樣、成るべく小兒にさせて大人は相談役となるのです、紀元節なども親睦會とか文藝會などを開かば面白からむと思ひます。猶は日曜日ことなども大概定めて置て家族の團欒を計る樣にしたいのです。其他家庭と思ひ附た事を定めて置くにしたならば小兒の敎育上にも少からざる影響を與へるであらうと思ひます。さて斯く云ふ所以は我國では一般に小兒の存在を認めぬ風のあるからで御座ひます。（野口幽香子）



東京高等女學校

舜水女史

芝三田四國町の大通りに、質素ではあるが、場所柄往來の人の目につく女學校がある、即ちこゝに讀者諸君に紹介せんとする、東京高等女學校である、

近來女學校の建つこと、雨後の筍に比するやうになつたが、なか〳〵一つの學校を建てるには容易なことではない、建てゝの後の非難は第二としても、多くは建たぬうちに非難に倒れるのであるが、同校の設立は實に無造作なものであつた、

數年前、教育に就ての考を一つにし、友として交深き棚橋一郎、小川銀次郎兩文學士の間に、偶然何か變つた學校を設立しやうでないかといふ話で起つた併し何時如何なる學校が建つものかは、兩氏にさへ豫想し得られぬ所であつた、然る所、今の校舍の前身にて、元水產講習所の水產學校が賣物に出たので棚橋氏は取敢へず買入れる事にして、先づ校舍は出來る事になつた、それは去る三十五年十二月である學校は何ういふ種類の學校にしたものであらうか、男學校とすれば、近邊に慶應義塾もあり、攻玉社もあり、正則中學もあり、競爭するやうな傾きになつて、たま〳〵生徒を得ても、申分のあるのを引受けねばならぬ事になる、それよりは女學校ならば近邊に目に當らぬやうであるから、女學校にしようではないか、近來の女學校は一體に成績が香ばしくない一つ模範になるだけの物を造らうではないか、といふ話になる、棚橋文學士の母堂絢子刀自が、私もゝはや齡も傾いて居るから、何か土產を拵へて置きたいと思うて居た所である、女學校ならば面倒を見たいものである、と贊成したので、されば一も二もな

し、女學校至極よからう、去ながら旗色の曖昧なのは妙でないから、經營上少々困難ではあるが、高等女學校として打つて立てやう、

役割は、棚橋絢子刀自は校長、といふことになつたが、刀自は德川侯爵家の家庭を預つて居るから、毎日出勤することが出來ぬ、誰か學校を處理するものがなければならぬ、と云うて、棚橋文學士は郁文館中學の校長であるから、毎日の面倒を見ることは出來ぬ、外の人といへば小川文學士のみである、小川氏も當時海軍大學校と淨土宗大學に奉職して居られたが、幸ひ受持の時間が少いので、小川氏に其任に當つて貰いたい、また住宅も本郷では不便であるから、學校附近へ引越して貰ひたいとなうた、小川氏はよろしいと受合うて、早速學校より程遠からぬ三田へ轉居した、それから善は急げで學校設立に着手し、翌年二月五日認可を得、四月十三日早くも開校の運びに至つた、式は當日修繕工事中であつたから同二十日に行うた、此の準備の早かつた事は、恐らく他に例はあるまいと思ふ、

開校當時は人が同校の價値を知らぬのと、あまり廣告といふことに骨を折らぬので、得た生徒は僅に三十六人の少數であつた、それでも門前の看版一枚を廣告として、所謂運動といふことをせず、目下三百五十二人の生徒を得るに至つたが、本年は二百五十名ばかり增加するに至るであらうとの好景氣である、

同校は技藝を主として教うる學校と違ひ、技藝さへ覺えれば夫でよいと云ふのではない、素より仕立屋上りなどゝは大に撰を異にして居る、それで一般の學校が生徒をお客樣扱にして、如才なく御機嫌取をするなかに、同校はなか〳〵嚴重に生徒に對するのであるから、生徒自身も始めは窮屈に思ふたのであつたが、だん〳〵馴れて來ると、窮屈ではない、さうせねば氣持がわるいといふやうになる、父兄の方でも喜んで來るといふので、學校ではます〳〵勵行する、決して嚴に過ても、寛に失する方ではない、

同校は生徒の入學の際、生徒なる當人、父兄及保證

人を集めて大體の心得を述ぶる事になつて居るが三十六年同校設立の際は、女學校の風儀が一般華美に流れて居たから、まづ之を矯正しようと云ふので、極めてジミな、惡く云へば頑固な位に理想を勵行し第一に何處の學校の規則を見ても、實踐躬行といふ文字があるが、その實踐躬行を實踐躬行したい、人に天性あり、家庭によつていろ〳〵變つて居るものもあるが、苟もよいと信ずる事があれば訓戒し、家庭ともよく相談して取締る、斯うすれば生徒の利益になると信ずる事があれば、どし〳〵行はせる、さうして習慣を第二の天性となし、勞せずして、善事に向ふといふ風にし、これは職員一同取締の任に當り、幹事に屆ける、家庭に相談する、斯ういふ工合にして、時々父母保證人を呼出す、この呼出すことは入學の際に約束をして置くので、呼出して何をするかと云へば、事の起つた時、若しくは、生徒が家庭に於ける注意を促すので、例へば家庭にあつても自分の物は自分が處理する、床の上げ卸し、室内の掃除、辨當の用意、着物の用意、袴をたゝむこと、家事を手傳ふこと、來客に應接をすること等、皆學校で學んだ實地演習として、どし〳〵やらせる、又手紙の代筆等をする、さういふ事を家庭に向つて勸めると同時に、家庭にても、生徒が演習の時間は必ず少しでも與へるやうにと注文する、であるから世話も世話も、甚だ立入つた話であるが、學校では立入つても世話甲斐のあるだけにはしたい、又校長が修身談の時などには、實驗談をして聞かせる等、その邊には特に注意する所から、父兄の受は甚だよろしい、其他學校に於ても、庭の掃除をさせる、敎場の机の上を整理させる、草をとらせる、袴がだら〳〵すれば裳をからげる事をも敎へる、箒の使ひ方、茶の注き方、出來得るだけは細かな所まで注意をするのである、

以上は精神的で、形式の上に於ても、衣服は何ういふものを着せるかと云へば、如何に富家の娘でも、自分に財産はないのであるから、財産家を裝ふやう

な事をさせず、質素儉約の美風を敎へ、木綿服を着せるやうにし、木綿服は洗張がきかぬ、終に永久の品でないといふので着るなら、銘仙位は差支ない、それ以上は一旦學校へ着て來ても、着替へて出直させる、さうでなければ敎場へ入れぬ、式日と雖も式服は入らぬ、式服の入用の時は、學校が段々腐敗に向つて居る時であるとして居る、

履物合羽も之に準じ、三枚重ねの草履に繻珍の花緒の附いたのなどは禁じ、頭の飾も、せい〳〵簡單なリボン位、白粉も同校では廢すことは反對であるが濃く附けることはよくない、また附けぬ方は差支ない、附けて居るか居らぬか分らぬ位、たゞ何處か奇麗なといふ位を程度とし、決して目に立つやうにはさせぬ、それは衞生上、風紀上、また風聞宜からざる男子が多いから、自衞上注意すべきである、髮の結方も、銀杏返し、ヽヽヽもゝわれ、普通の束髮位で、二百三高地など云ふのは大禁物である、流行を趁ふ如きは經濟上不都合なるばかりではなく、操節の心を薄からしむる事になるから、これ亦取締らねばならぬ、それから一行か二行か書いて、紙を團子にして仕舞ふとか、まだ捨てる程でもない筆をへし折つてしまふと云ふやうに、物を粗末にするといふ事は、嚴しく注意する、すべて學校は家庭と同じやうな監督權を家庭より借受け、學校は、それ丈の責任を負うて指導する、

又中途で學校をかへるといふ事は、それ〳〵學校によつて主義があるから、いろ〳〵の陶冶を受けるといふ事になつて、大なる弊害があるから、止むを得ぬ事情のない限りは、卒業する迄轉校をさせぬ、

敎員も普通三年も經ては、大分變るものであるが、同校は一名體操敎師を女にしたいので取替へた外には、初めより一人も出て往つたのも出て貰うたのもないとの事である、

要するに同校の目的は交際場裡の名花を造らうといふのでも、敎職員に仕立てやうといふのでもない、卒業の後は良妻賢母となつて、女子の天職を全うせ

しめたい、それに缺ぐる所のないやうにしたいと希望するのである、

以上は東京高等女學校に就ての見聞を、潤色せずして極めて露骨に記述したものである、このむつかしい、やかましい學校が却つて心安い頼もしいとして望む人が世間に尠くないとおもふのである、

文法上許容すべき事項

舊臘二日の官報文部省告示第百五十八號を以て教科書の檢定又は編纂に關し、文法上許容すべき事項を左の如く定めらる

文法上許容すべき事項

一『居リ』『恨ム』『死ヌ』を、四段活用の動詞として用ゐるも妨なし、

二『シク・シ・シキ』活用の終止言を『アシシ』『イサマシシ』など用ゐる習慣あるものは、之に從ふも妨なし、

三 過去の助動詞の『キ』の連體言の『シ』を終止言に用ゐるも妨なし、

例 火災は二時間の長きに亘りて鎭火せざりし、金融の靜謐なりし割合には、金利の引弛を見ざりし、

四『コトナリ』(異)を『コトナレリ』『コトナリテ』『コトナリタリ』と用ゐるも妨なし

五『、、セサス』といふべき場合に『セ』を略する習慣あるものは之に從ふも妨なし

例 手習さす、周旋さす、賣買さす、

六『、、セラル』といふべき場合に『、、サル』と用ゐる習慣あるものは之に從ふも妨なし、

例 罪さる、評さる、解釋さる

七『得シム』といふべき場合に『得セシム』と用ゐるも妨なし、

例 最優等者にのみ褒賞を得せしむ、上下貴賤の別なく各其地位に安んずることを得せしむべし

八 佐行四段活用の動詞を助動詞の『シ・シカ』に連ねて『暮シシ時』『過シシカバ』などいふべき場合を

『暮セシ時』『過セシカバ』などするも妨なし、
例　唯一遍の通告を爲せしに止まれり、攻撃開始より陥落まで僅に五箇月を費せしのみ、

九　テニヲハの『ノ』は動詞、助動詞の連體言を受けて、名詞に連續するも妨なし、
例　花を見るの記、學齡兒童を就學せしむるの義務を負ふ、市町村會の議決に依るの限りにあらず、

十　疑のテニヲハの『ヤ』は動詞形容詞、助動詞の連體言に連續するも妨なし
例　有るや、面白きや、父に似たるや母に似たるや、

十一　テニヲハの『トモ』の動詞、使役の助動詞、及受身の助動詞の連體言に連續する習慣あるものは之に從ふも妨なし、
例　數百年を經るとも、如何に批評せらるるとも、强ひて之を遵奉せしむるとも、

十二　テニヲハの『ト』の動詞、使役の助動詞、受身の助動詞、及、時の助動詞の連體言に連續する習慣あるものは之に從ふも妨なし
例　日出づると見えて、嘲弄せらるゝと思ひて、終日業務を取扱はしむるといふ、萬人皆非德を稱へけるとぞ

十三　語句を列擧する場合に用ゐるテニヲハの『ト』。は誤解を生ぜざるときに限り最終の語句の下に之を省くも妨なし、
例　月と花、宗教と道德の關係、京都と神戸と長

いろは道歌（十一）

身の程をよく〳〵思ひかへりみて
及ばぬ眞似をするな奢るな

死ぬことは誰も嫌ひでありながら
不養生するひとぞあさまし

ゑみ含むまことごゝろの愛さうは
にくしと思ふ人なかりけり

ひがみたる心をもてばすちみちの
わかりし人も惡くいふもの

崎へ行く、

最終の『ト』を省くときは誤解を生ずべき

例　史記と漢書の列傳を讀むべし、

史記と漢書(ト)の列傳(ト)を讀むべし、

十四　上に疑の語あるときに、下に疑のテニヲハの『ヤ』を省くも妨なし、

例　誰にや問はん、幾何なるや、如何なる故にや如何にすべきや、

十五　テニヲハの『モ』は誤解を生ぜざる限りに於て『トモ』或は『ドモ』の如く用ゐるも妨なし、

例　何等の事由あるも(アリトモ)議場に入ることを許さず、期限は今日に迫りたるも(タレトモ)準備は未だ成らず、經過は頗る良好なりしも(シカドモ)昨日より聊か疲勞の狀あり、

誤解を生ずべき例　請願書は會議に付するも(ストモ、スレドモ)之を朗讀せず、給金は低きも(クトモ、ケレドモ)應募者は多かるべし、

十六　『トイフ』といふ語の代りに『ナル』を用ゐる習慣ある場合は之に從ふも妨なし、

例　いはゆる哺乳獸なるもの、顏回なるものあり

理由書

國語文法として、今日の教育社會に承認せらるゝものは、德川時代國學者の研究に基き、專ら中古語の法則に準據したるものなり、然れども之にのみ依りて、今日の普通文を律せんは、言語變遷の理法を輕視するの嫌あるのみならず、これまで破格又は誤謬として斥けられたるものと雖も、中古語中に其用例を認め得べきもの尠しとせず、故に文部省に於ては從來破格又は誤謬と稱せられたるものゝ中、慣用最も弘きもの數件を擧げ、之を許容して在來の文法と並行せしめんことを期し、其許容如何を國語調査委員會及高等教育會議に諮問せしに、何れも審議の末許容を可とするに決せり、依て自今文部省に於ては、教科書檢定又は編纂の場合にも、之を應用せんとす、

女醫と女學生

女醫學校主監吉岡氏の談によれば、女子の職業中最も收入多きは、女醫にして、資本を要する事も女醫なりと△現今百餘名の女醫中東京に居るは二十餘名なるが、病院に奉職せるものも、俸給も四五十圓を下らず・其の他諸種の收入あり、開業者に至りては少くとも百二三十圓の收入あらざるはなく、現に日本橋大工町に開業せる高橋みつ子の如きは、五百圓以上の收入を有しつゝありと△尤もみつ子は驗定試驗及第者中の古參にして、年齢も已に五十に近き程ゆゑ、自然得意先も多く、代診の二人も使ひ居れり性質は快活放縱なれば、素行には色々の批評もあれど兎に角遣り手なり△女醫學生の學費は如何といふに、男の學生と異なり、酒色に金品を使用することなきを以て、普通の學費は十二三圓位に過ぎず、前期中は參考の書籍も廿圓内外にて足れど、後期に至れば書籍費も四五十圓を要し、其の他檢眼鏡、聽診器、驗温器の類を初め、顯微鏡に至つては、最も廉き八百倍位のものにても、八十圓を要し、尙ほ藥品等の價を積て、一ヶ月平均普通學費以外五六圓は要すべし△されば五ヶ年を千圓と思へば間違なく、其の上開業資千圓とすれば、女子大學を卒業さすよりも金がかゝる事なれども、收入も之に準ずるなり、但し生徒は大抵餘裕のある家の女子多し、父兄の職業別を見るも、農家四十五人、商人三十五人、醫家二十四人の比例にて、農家の子女に何故に志願者多きかといふに、志願する位の子女の家は、概ね富裕なるを發見したり云々。

女子と圖書館

ある教育家が女子と圖書館と云ふことを調べたが、上野、大橋、一ッ橋の三圖書館を平均して、一日の女子の觀客が五六人位に過ぎぬ、借覽の書籍は道かに小説は稀れで和文の教科書などが多いげな△早稻田の圖書館が開けた時、女子大學の學生が、毎日五六人

押懸けて來て金ピカの洋書杯を借覽する、例にもなく圖書室に男學生の觀覽者が一杯と云ふ奇觀を呈した、聊か風俗に害がゐるので、今は女學生の入館を斷はつたさうだ△娘一人では危險と心得るか、母親が付いて圖書館に來るのもゐる△之は別の話だが、寄宿舍内の女學生の袴に注意すると少い中は短いつんつんとしたのを平氣で穿いて居るが年頃になるに從つて、いつか知らず丈けを長くして了ふのは妙齡女子の心が最も良く解る、

女子大學の近況

舊臘落成したる木造家屋は幼稚園に宛てらるゝものにて、右方煉瓦建築物は、大講堂及び敎育部敎室、高等小學校敎室に宛つる豫定にて、この四月には開校する由△實業部、同部員は目下二十名にして、牧畜部に牛三頭家禽は五六十羽なり△幼稚園と陶窯、幼稚園に陶器部を設け、目下一人の學生を名古屋に派遣し、陶器製作を學ばしめ居る由なるが、將來園兒の爲手工として敎授する筈なりと△現在生徒數は英文科六十六名、國文科百八十三名、家政科三百九十七名、英文豫科八十四名、普通豫科九十七名、合計八百二十七名にして、尙附屬高等女學校在籍生は三百七十九名ありと△寄宿舍には富士水明、光風、星花、曉翠、靜明、玉成、松柏、寒光、自敬、敷島、鳳泉、責善、芙蓉、成生、扶桑、春秋、桂花、濟美、泉水等の名稱を附しあり、七百餘名の寄宿生ありと、

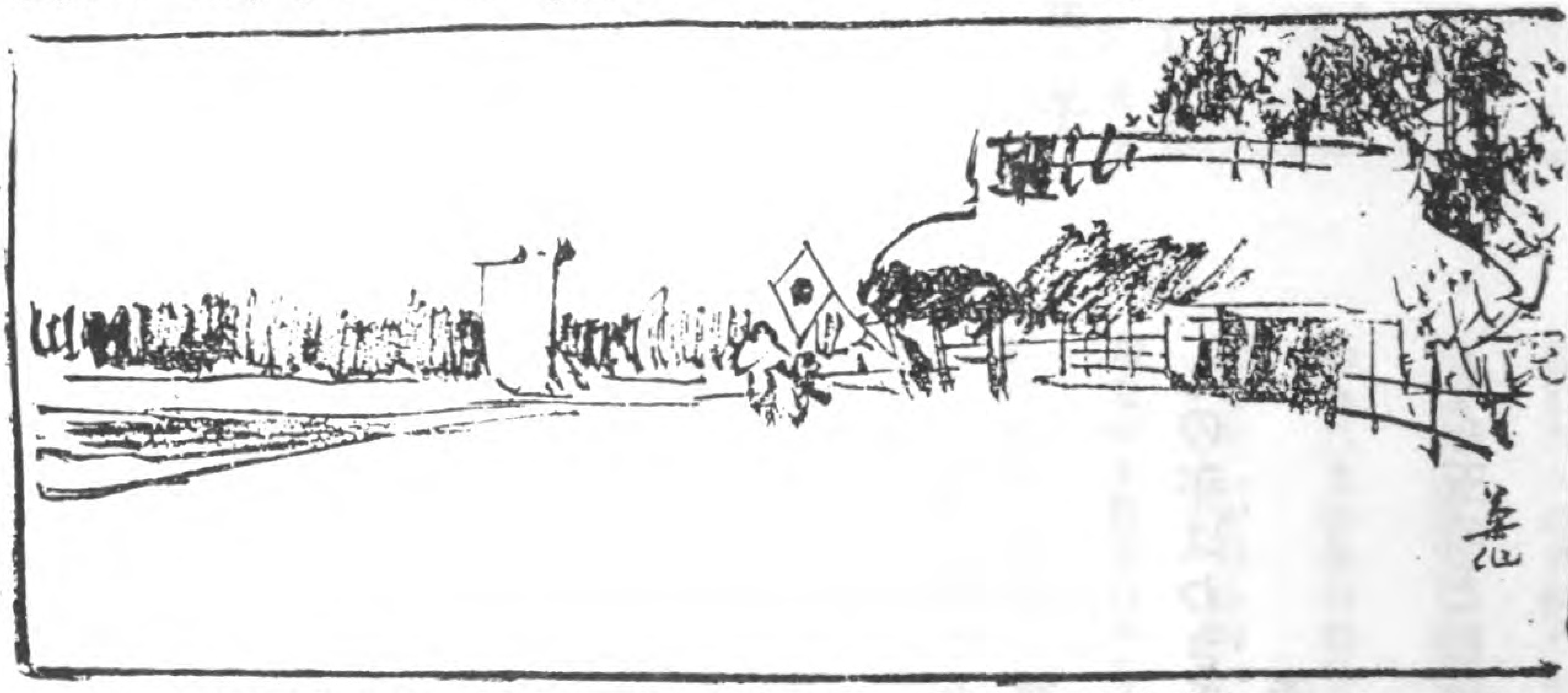
上野女學校の敎員と生徒

下谷上根岸上野新坂下なる同校は目下七十二名の生徒を收容せるが、今其家庭と學校との調査報告を聞くに、生徒中兩親の有る者五十四名、父親の無きもの十二名、母親の無きもの五名、兩親全くなきもの一名、繼母を有するものは一名もあらず、又府下に本籍を有するもの三十八名、全戸府下に寄留し居るもの二十九名、通學の爲め單身寄留し居るもの五名なりと、又敎員の側は十一名の總員中男敎師五名、

女教師六名の中男子の側は何れも有妻者にて六名の女子の中四名だけ獨身にて他は既婚者なり、更に年齢を見るに、男女の敎師とも四十八年を最長とし、二十年を最少とせるが、男子は三十五才平均にて、女子は二十八才平均なる由、因に同校にては、男敎師は獨身者を雇ひ入れぬ内規なり、

坂野女史の榮譽

金澤高等女學校の敎授坂野鈴子(三十七)は、今度其筋より皇孫光宮殿下の御敎育掛を命ぜられ、謹で御受けに及びたりと云ふ、女史は石川縣金澤市の生れにて、明治三十五年三月高等女子師範學校を卒業し、約一ヶ年間同校附屬小學校の訓導となり、次で富山縣師範學校の敎諭となりて、奉職二年の後、華族女學校幼稚園



に轉じたりしが、間もなく府下北豊島郡王子村字西原農事試驗所の技師たりし、農學士坂野初次郎氏と合巹の式を擧げ、爾來職を辭して、專ら家政に當り、一男一女を擧げて、坂野家の礎を固めたりしに、不幸初次郎氏は、去る三十六年中病に罹りて遂に歸らぬ旅に赴きければ、女史は愛兒と共に鄕里に歸りて、一昨年以來金澤高等女學校の敎鞭を取り居たるが、敎授としての成績は、云ふ迄もなく、家政及び小兒養育に就ては特に人の妻たり、母たるもの丶模範となすに足るものあり、扨こそ、今度無上の榮譽を擔ふに至りしなりとぞ、



門松

貴族院議員 伯爵柳原義光君撰

天

かたみにと植ゑにし春子は歸りきて
　そのまゝ千代とかざる門松

伊賀國上野町大字忍町　蒴山かね子

地

幾千とせかはらぬ御代の色ならん
　とし立かへるけさのかとまつ

和泉國泉北郡深井村　福原菫子

人

立かへりわかみとりなるかと松の
　ふたもと松にはるのかせふく

陸前國栗原郡若柳町　前田河千年子

秀逸

かどことに千とせかはらぬ松竹を
　たてゝぞいはふみ代のはつ春

薩摩　松原みね子

老てゆくしるしもみえずあら玉の
　年にさかゆるかとのまつたけ

岩代　菅野和子

變る世にかはらぬ色のわか松を
　たてゝそいはふけふそめ出たき

京都　奥谷登美子

二もとのたかきみさをの松こそは
　君と親とのみかげなるらん

岐阜　松岡章子

この年はわきてめてたき門松の
　千とせのいろそめてたかりける

陸前　前田河みさを子

あら玉のとしをむかへし門ことの
　にきはふとしに逢ふぞうれしき

能登　高森一子

本年和歌兼題

二月（夜梅 鶯） 三月（春の野 菅） 四月（名所花 納薬）

◎短文百字以内 ◎和歌兼題外 ◎俳句 ◎新體詩

右懸賞募集（別項投書規則に背くものは沒書）

東京 青木たま子

とし毎にめつらしとみる門まつのまつにちとせの春はきにけり

愛媛 高橋茂子

千代八千代かはらぬ松を門毎に立てゝそいはふとしのはしめを

神奈川 中山菊子

あらたまの年むかふなる門まつにふきこそわたれ春のはつかせ

大阪 田中靜子

日はうらゝみやこも鄙もおしなべて門松たてゝいはふけふかな

東京 大木光子

あら玉のとしたつかとのむかひ松いく代變らぬしるしなるらん

近江 久保治子

門松のみとりのいろはとこしへに榮ゆるみ代をいはふなりけれ

近江 久保晴子

豊かなる年のいろこそ見えにけれさかへてたてる門のまつたけ

相模 森田春子

あさ日影にほふみはたに門ことの松のみとりそふかくみえける

東京 中島茂子

この春はちもとやちもと門松のみとりさかゆくこまのはてまて

東京 岩谷淺子

あら玉の年のかと松たちそめてのとけききみも御代をいはゝむ

岡山 小山松枝子

松たてゝはき清めたる門みれはこゝろもいよゝあらたまりけり

東京 瀬藤ちよ子

門ことにたてしみとりの松か枝にまはゆく輝らす初日かけかな

肥前 藤松りか子

あらたまの年の初日のかけさして千代のいろそふかとのまつ哉

石狩 加藤篤惠子

門ことにかはらぬいろのまつたてゝ君か代いはふ年のゆたけさ

東京 岡田春子

市なかも松のはやしとみゆるまでたてつられけり年のいはひに

東京 新野仲子

しつか家も門松たてゝいはふなりをさまる御代の年のはじめを

茨城 中根とく子

門ことにたてたる松のにきはひてとしたつ今朝の長閑なるかな

東京 槇野愛子

初ひかけしつけきみ代をことほきつやちよかはらぬ門松のいろ

越後 松永しげ子

としくにたてつる門のとこ松もこ年はことにいろそえにける

東京 星野千代子

新年の門のひめまつ千代かけてさか行く御代をいはふ今日かな

陸奥 相馬冬子

君か代をときはの色にいはゝんとめてたくきのふ立てし松かな

長野 岡田千穂子

大きみのかきりなきよをいはひつゝ家ことくにたつる門松

埼玉 横田政子

日の御旗かゝくる門の松かさり君か代うたふとしのはつかせ

埼玉 横田やな子

門松にはつ日のひかりかゝやきてさかゆく御代の年やたつらん

埼玉 横田秋子

梅かほりかとのまつ竹ことほきてみやこ大路の年のはつそら

栃木 宇梶蕣子
年毎にたてつられたるかとまつもことにことしは色まさりけり

相模 芙蓉子
これやこの都ぞはるのはしめかな立ちならひたる門まつのいろ

神戸 足立淺子
門松の千とせの色に引く注連のながきや御代の例しなるらむ

津 神田みよし子
をさまれる大御代いはふ門松のいろもひとしほまさるとしかな

津 茨木みす子
あらたまの年のはつひはさしそめぬみ代をことほく門松の上に

秋田 細矢はる子
うれしくも仇しいくさのたひらきてことほきたてしとしの門松

岐阜 豊田ふゆ子
門松のみとりのかけにたゝすめは老もわかやくこゝちこそすれ

伊豫 廣田蕭子
千とせ經し門の老松立ちかへるとしのはしめは色新らしくみゆ

伊豫 廣田せき子
兄弟かかちときあけてかへりまゝ右にひたりに立つるかとまつ

伊豫 廣田重子
勳功たてゝかへりきまさむ大丈夫をむかへかほなる門のひめ松

肥後 友永つね子
年ほきの人をむかへてかと松のいろあたらしく見ゆる今朝かな

肥後 友永榮子
かと毎に立ならへたるふたもとのまつゆたかにも見ゆるとし哉

奈良 天野照子
門ことにたつるみとりの松のはにおひせぬちよの色そみえける

肥後 佐々有隣子
すめらきは千代よろつ代と門の松今日の榮えをいはひ立てつる

日向 岸上はる子
千代こめて松のみとりにならはむとたてゝそ祝ふ年のはしめに

大和 栗山俊子
やま里の賤かふせやも松立てゝかとあらたまのとしはきにけり

大和 栗山たか子
君か代を祝ひことほくかと松にまつひきそむるしめかさりかな

肥後 友永章子
かとことにたてならへられて山松もゆたかなる代の年をしるらむ

三重 舞田貞子
新玉のとし〳〵かとにたつれともあかぬは松のみとりなりけり

伊賀 佐々木まさ子
二もとの松に注連はへにしひかしくにのちきりも祝ふなりけり

伊豫 廣田政美子
紀念にと植ゑて征きにし君にけふときめくいろを見するかと松

上野 木暮千代子
年のたつあさひのとけき門ことに松のちとせのいろのさやけさ

三河 永井さい子
新玉のとしのはしめのかと松はさかゆくみよのすかたなりけり

豊後 月村花子
大君のひかりあまねくもろこしの原まて立てむ今朝のかとまつ

名古屋 木下鶴子
いまもなほむかしおほへて門毎に松たけたてゝいはひぬるかな

福井 岩橋花子
大御代のさかえとゝもに幾ちとせためしかはらぬかとのまつ竹

東京 林艶子
君か代の千代にたくへて門まつを飾りてとしをむかふうれしさ

東京 爾津梅子
にきはしく立わたしたる松かえに鳥もきなけりちよのはつこゑ

小田原 倉橋よし江子
しつこゝろなくつゝみうつ萬歳の素砲にのほるかとのまつかけ

大阪　島田代音子

君がよのひかりにもれぬ柴の戸にたて丶そいはふ千代のわか松
大阪　池田英子

家ことに若松立て丶いはへるはあらたまりぬるしるしなりけり
愛媛　樋口孝子

かきりなくめてたきものは門松の千年かはらぬ色にそありける
伊豫　樋口孝子

いく千とせことほくかとの松竹にはつ日の光りさしそめにけり
東京　佐野ふき子

きのふ見し市のちまたに引かへてみとり見わたす松かさりかな
東京　佐野とみ子

たゞわたすみやこ大路のかと松にみよのさかえの見ゆる年かな
神奈川　[illegible]田頁子

門ことの松しなけれはあらたまの年のはしめをたれかしらまし
越中　横谷八重子

新としにみさをたゝしき松と竹立て丶いはゝん君か八千代を
東京　松本まつ子

家毎にみとりの松をたてなへてにひとしいはふみよのとけさ
東京　田中千賀子

いく千代も變らぬ松のみとりさへ今年はわけてめでたかりけり
丹波　大槻とく枝子

ゆたかなる年のはしめの門松は千代に八千代にいやさかゆらん
東京　大澤小松子

たてわたす年のはしめの門松にみとりのほかのめうつしそなき
東京　山口琴子

にひ年のみとりの松を立なへて千代よろつよをいはひこそすれ
靜岡　竹内みつ子

門松のみとりにちよのいろ見えてさかえもしるきとしの初そら
東京　伊藤竹子

大みよのめくみにもれぬ家ごとににひ年いはふまつかざりかな
愛知　柳原しづ子

たちならふ深きときはのかと松は君かちとせをいはふなりけり
明石　大山恒子

あたらしき年のひかりに門松のいろさへ今朝はいやまさりけり
千葉　鎌田須賀子

あら玉をことほく門のひめ松の千代までかへぬみさをめでたき
東京　入江菊子

門松のみとり見わたすやちまたにさかえしらる丶としの初そら
東京　伊藤敏子

門松にゆふをりかけて家ことにいはふもみよのめぐみなりけり
常陸　佐藤やゑ子

さしいつる朝日のみはた門松にむすふや千代のはちめなるらん
千葉　鎌田清子

門まつもいく千代變へぬ色見せて御代のたのしさ何にたとへん
東京　[illegible]津櫻子

明わたるみよそめてたきときはなる門の松にもちよのことふき
仙臺　海老原櫻子

あら玉の年の始めをことほきて松たけ立て丶祝ふ今日かな
群馬　竹のふし子

ちよやちよかはらぬいろをしめ繩にむすひこめつ丶たてる門松
相模　[illegible]子茂子

君と親の千歳をこめてあらたまのとしをそいはふかとの小松に
鹿沼　金子とし子

千代八千代かはらぬ色をしめはへて御代ゆたかなるかとの姫松
三河　柳原きく子

さかえゆくみよをことほく門松のみとり深きにうれしかりけり
播磨　横田春枝子

はつ日かけのきのみはたにかゝやきて雄松雌松に風しつかなり

千代八千代かはらぬみどりいろ見せて家の門ことかざる松かな　伊豫　徳田春子

あらたまの年のほきごと門松のみどりのかげにいふぞたのしき　岐阜　山田ふさ子

追羽子

天

おひはごにこてふ追ふらむ心ちして
きぬずれの音優にやさしき
岩代國伊達郡小島村　菅野和子

地

少女子かそでのはかせに追羽子を
おくりむかふる春ぞたのしき
陸前國栗原郡若柳町　前田河千年子

人

乙女子のこゝろもそらに遊ぶらし
のどかにきこゆ追羽子のおと
薩摩國伊佐郡山野村字布計　松原みね子

秀逸

乙女子かとしの始めのうれしさも
そらに知らるゝ羽子のおと哉
肥後　友永章子

東京　福津梅子

あら玉のとしのはしめは何かたも
追はねのこゑのきこえぬはなし
東京　中島茂子

少めてにうちましりつゝ老の身も
むかしの春にかへるおひはね
大和　栗山俊子

一つ二つはねつく音もおもしろし
みやみこをとめのゑまひやさしき
相模　笹子茂子

餘念なく羽子追かはす少女子の
いさましこゝろとこしへもかな

老の身もわかやきにけり乙女子とひと日な羽子におそひ暮して　伊豫　樋口孝子

追羽　のおとにきはしきはつ春もゆたけき年のめくみなりけり　愛媛　樋口孝子

賑にしく皺よむ祭のはたとやみ隣家の垣をこゆる追羽子　伊豫　廣田政美子

なりくくは笑ひさゞめくこゑもしてのどかにひゞく追羽子の音　群馬　竹野ふし

追羽子の友みなさりてゆふくれをふたりとなりし筒井づゝかな　小田原　倉橋よし江子

音もまた追ひつおはれつ追羽子によそこゝろなき春もありしを　東京　大木光子

陸前　前田河みるな子

追はこにこゝろおくれぬ少女子の妙なるこゑのいさましきかな

能登　高森いち子

初東風なふりのたもとにふくませて羽子追ふをとめ笑美くしき

東京　青木たま子

をの子さへ打まへりつゝつくはれのおとしていとゝ賑はしき哉

愛媛　高橋茂子

垣こえし羽子のゆくへをたつれ來て見いでつるかゝる梅のはつ花

神奈川　中山菊子

あら玉のとしたつけふは門ごとにはやくも羽子の音ぞきこゆる

京都　奥谷登美子

つくはれの音にさゝめくこゑさえていつれ劣らぬ子等の追羽子

大阪　田中靜子

鞠あきてまた追羽子につかれはてしづかに立てる妹ゝつくしき

近江　久保治子

少女子の羽子つく音もけふのみはわけてのどかに聞えけるかな

相模　森田春子

袖なかうかはすをとめの追羽子のおともゝのどけきまつのうち哉

岡山　小山松枝子

新しき年をうれしみつく羽子の音ものどかにあそぶけふかな

東京　瀬藤ちよ子

あたらしき年を迎へてうなゐ子が羽子つく音のにぎはしきかな

肥前　藤松りか子

年たてばわかきにかへり乙女等とはねつきかはしあそぶ樂しさ

岐阜　松岡章子

乙女子のふり袖かろく追羽子にちりもくもらぬこゝろこそみれ

東京　岡田春子

まけじとてつきゐしはねをくやしくも吹おとしけり年のはつ風

東京　新野仲子

追羽子の音ものどかにきこゆなりとしたちかへるみやこ大路に

茨城　中根とく子

打ちむれて羽子つきかはす少女子の聲のどかなり年のはじめは

東京　星野千代子

初日かげうら〳〵みつる朝にはに追羽子きほふ子等ぞやさしき

長野　岡田千穗子

春の日のくるゝもしらて思ふどちおひ羽子つきて遊びけるかな

埼玉　横田政子

今日といへはみやこもひなも少女子が羽根に手鞠と遊ぶ御代哉

埼玉　横田やな子

年來ぬとあそふをとめもさまかへて君が代うたふ追羽子のおと

埼玉　横田秋子

少女子がこゝもかしこもつとひきて羽根つきかはす年のはつ空

栃木　宇梶燕子

をとめこが笑ひさゝめきつくはれの音にひとときは春をそふなり

相模　芙蓉子

立ち渡るかすみのうちにきこゆなりふもとの村のおひ羽子の音

津市　神田みよし子

かと松のかげにつとひてつく羽子の音にぎはしくあそぶ少女子

三重　茨木みす子

年たては羽子つき遊ぶ少女子がかぞへてうたふこゑぞゆたけし

岐阜　山田ふさ子

つくはれの數さへしらぬをさな子のなり〳〵たゆる音の靜けさ

岐阜　野田ふゆ子

たつ年の初日の影を身にうけて子らのつくはねうれしげにみゆ

肥後　佐々小琴子

里ごとにいはひかなづる追羽子のこゑにぎはしき朝日かげかな

大和　栗山たか子

をとめ子のおいらしく打はこいたのおとものどけき年の初そら

乙女子が袖ふりかひてつく羽子におのがむかしの偲ばるゝかな　伊賀 佐々木まさ子

追羽子につかれていこふ袖のうへに風のまに／＼梅のはなちる　日向 岸上はる子

あこかれて幼な時にも替らぬはれつゝくけふのこゝろなりなり　三重 舞田貞子

少女子が一い二い三いとつく羽子の空にこゝろも舞ひ昇るらむ　伊豫 廣田せき子

去年の春軒にかゝりしそのまゝにまた新らしき追羽子のこゑ　伊豫 廣田藻子

ひめぎみが贖衣の袖をひるがへしつく羽子かろく空に舞ひけり　伊豫 廣田重子

年つきの三つのはじめに四つ五つとつくものとけき羽子の音かな　肥後 友永榮子

いかはかりたのしかるらむ追羽子に乙女も年のはつよそひして　肥後 友永つれ子

をとめこがちよを數へてつくはれの豐けくみゆる君がみよかな　奈良 天野照子

ゑのころをふみしはつみに追羽子をつきそらしたる少女子の友　上野 木暮千代子

さしのぼる初日のかけに少女子はまちにまちたる追羽子をつく　奈良 山澤さよ子

打むれて袖もかろけに少めらかはれつくさまのおもしろきかな　三河 永井さい子

門ごとに立たる松は新玉の年をむかふるしるしなりけり　松山 上原のふ子

ひふみよとあくる少女か羽子はしもちよをかそふる始なるらむ　山口 村上操子

松山 上原のふ子

なと女子よその羽子かせよ打あけて年のはしめのなくさにはせむ　名古屋 木下鶴子

少女子か羽子つく歌の數きけはひとふたみよのかきりしられす　松山 田村多豆子

まりもあれと子等か心ののるわさは羽子の遊ひのほかなかりけり　東京 林艶子

貴人のかとへにふたりはらからのいやむつましく追羽子そする　東京 林環子

追羽子のおとかしましき風なぎしみやこ大路のはるのゆふくれ　佐賀 月村化子

戰捷の國のすがたも見えにけりおほ路せましときそふおひ羽子　東京 恩藏てつ子

かきそめの筆はとれとも羽子の音聞けばこゝろも空になりぬる　大阪 黒田代音子

たのしげに羽子つきかはす乙女子のこゝろも空に追めぐるらん　東京 山口琴子

里ことにうなゐはなりか打よりてむつましげなるおひはこの聲　神奈川 豐田眞子

數とりをわれにまかせていもうとが追ひゆく羽子を惜む夕かな　東京 松本まつ子

松立てゝいはふかとへにつどひきてつく追羽子のにきはしき哉　東京 田中千賀子

追羽子にあそびつかれてそのまゝに夢路にいりぬ春のうなゐ　丹波 犬槻とく枝

をとめこか胡てふの如くあちらこちらたのしく遊ふ追羽子の音　東京 伊藤とし子

年立といはふかどべにうちむれておひはねきそふ聲もにきはし　東京 大澤小松子

松たてし門につとひて里のこがまけじときそふおひはねのこゑ

孫の手にひかるゝ老の身をわすれをとめの群にこゝろやり羽子　伊賀　菊山かれ子

あたらしききぬきよそひてをとめ子が染ひてきそふ追はこの聲　東京　伊藤ふく子

あら玉の年たちぬれは少女子か羽子つくそでの風ものとけき　旭川　藤本とは子

吹く風に振のたもとをひるかへし羽子つくさまの愛らしきかな　明石　大山恒子

追羽子の歌ものどかにきこゆなりあらたまりぬる御代の光りに　千葉　鎌田須賀子

あたらしくきかざるきぬの袖ふりて追羽子きそふ聲さわくなり　東京　入江菊子

少女子とうなゐはなりも打むれてかしましきまできそふ追羽子　靜岡　竹内みつ子

朝またきうなゐはなりが打むれてはねつく音のいとまなけなる　東京　伊藤たけ子

かそいろもましりて羽子を追ふ妹のもすそに狂ふれこの愛らし　常陸　佐藤やゑ子

大みよのとしたつけさののとけさはよわにきこゆる追にこの聲　東京　佐野ふき子

年たちてのとけき門につとひきていそかしけなり追羽子のこゑ　東京　佐野ふき子

松竹をたてしみやこのやちまたにゆたかにひゝく追羽子のおと　上野　杉田繁子

あらたまる初日の影にをとめ子の羽子追ふすかたあいらしき哉　陸奥　相馬冬子

夕日かけ袖にかへしてをとめ等かおひ羽子きそふはつはるの門　神戸　足立淺子

乙女子の駒たろわさの追羽子はせこのかひなにかつまさりけり　秋田　細矢はる子

ふり袖のいろもゆたけき姉妹の羽子つくさまのむつましきかな　石狩　加藤壽惠子

初日かけさしそふ庭にうなゐ子の羽根つく音そのとかなりけれ　鹿沼　金子とし子

親の親この子のとものつとひきておひはねうとふこゑぞを樂しき　東京　岩谷淺子

さし昇る初日をうけてをとめ子の追羽子の音いとものどけき　愛知　國井みよし子

嬉しけにはれつきかはす乙女子の遊ふたもとにとしたちにけり　三河　柳原きく子

短文

編輯局同人選

地賞

蝶と菫

大阪府東成郡喜連村　佐々木あさ子

春日和の野道をそぞろありきに菫花を見つ、これを彼の君に送らばやとて、暫し摘む程に、美しき蝶の來りて、そと紫の花瓣に翼を收め、其の花心に接吻しぬ、嗚呼蝶よ、菫よ、共に行末長き幸福はあるなり、妾はそを摘むに得堪へざりき。

人賞

日記の一節

千葉縣君津郡小糸村鎌瀧　鎌田清子

我が家の正面に、見ゆる御山の頂に、夏も冬も變る事なく、いと睦げに立てる直き二本の松あり、我これを名付けて女夫松と呼ぶ、あはれ世の貴きより賤しきに至る迄、夫妻の間常に斯くあらむことを切に祈るになん。

今年の元旦

岐阜　松岡章子

おなじひんがしの山の端より出づる日も、いとうららかなる年のはじめ、征衣の袖に纏[illegible]して歸りきたる家の庭は、いづれかよろこびならざるべき、此日勇み立ちて門出せしを、永の別れとなりし人々の、心の中いかに悲しかるべき。

元日

豊後　月村花子

嗚呼嬉しい元日、床の上から厨の隅まで、駈け廻り、一先づ了しと、椽先に腰を降せば、早初日が門松を涼しく障子に寫して居る、吁昨年の今日は、坊と二人滿州の君を思ひ續けて居たが、など思ふ内、宮參りの父子、羞俯顔で、今歸つた「お母さん只今」

同

愛知　國井みよし

にはかに響き渡りし長仙寺の明の鐘、曉を告ぐる鶏の聲華かに初日の影、山の頂に輝き亘りぬ、門毎に飾りし松の間より、颯々とうちなびく日の御旗、昇る朝日に笑み舞ひ、國威のいや増榮を表し、若きも老も共に御酒くみかはし武士の凱旋を祝ふ、あゝ是ぞ誠に軍國の元旦なるよ。

初日の出

福井　岩橋花子

春秋同じ巡りながら、年の初日の影ばかり、世にたつとふべきものあらじ、松竹の緑色添へて、御代太平とぞ祝ふなる、屠蘇の盃ゆたかなり、大内山のかしこきより、伏家のいぶせき軒端にも、明けき光輝くらん、

新年

神奈川　中山菊子

み空は清く晴渡り、吹く神風は門松のあたりをそよ／＼と、軒にたのしき雀の聲、はや門に、ほぎごと傳ふ人々入來る、彼方にきこゆる羽子の音もにぎはしき折から、一聲高く郵便……、いそぎ手に取りしはがき數葉、皆互にくり返す新年の祝、

新年

近江　久保晴子

新玉の年を迎ふる目出たさ、久方の雲井の御有様は、掛まくも畏し、賤が住む山里までも、門毎に立たる松竹、千歳の色を見せ、日のみ旗輝き渡れる、云しらず樂しとも樂し、あはれ大君のみ惠尊さ、今更にうかばれて打出づる言葉もなし。

ためしなき新年

能登　高森一子

喜びの笑みに迎へられて、今し初日の光はさし昇りぬ、戰勝の第一年、平和克復の新年、日は麗かにして雀の聲も長閑なり、あゝ未だ苦てふものをつゆ知らずして、斯る目出たき年を迎へたる己は、いともいとも幸福にこそ、

年をむかえて

岡山　小山松枝子

新年といへばいつもながら、殊に今年ばかり樂しきはなし、平和克復して、御稜威はいやが上にも貴く、世界の視聽もこゝに注がれて、一層新しき道に進みゆくらむ、げに多望なるかな、かゝる

光榮ある年の始を祝ふわれらの幸多さよ、

御旗と門松　越路　松永繁子

（松）日出度年の始に亦も相見るもの哉、白波騒ぐ磯に、雲湧く峰に君をいたはしく思ひしを、嬉しや此の函居、越し方行末を語り給へ、

（旗）平和の聲、歡呼の響、去年にも増したる新年、来年は胡北の門邊に君が代を露かむ、懐しの君諸共に、松は緑に旗はあかれ色して、

福壽草　相摸　森田春子

時をも待たで、魁を旨とするこそ心せかるゝ業なれ、秋の名殘の消えぬに、福壽草の芽猪頭に顔の出けるを忽ち鉢にし、南窓を撰みてすゑたり、しける落葉に霜おく朝はまた見ぬにさはいへど初日に、開く姿を待つ心はまた樂み多かりし、

福壽草　能登　花菫女史

丁度妹が亡なつた一日前だ、此福壽草を植ゑるとき、妾が正月前だと言つたら、妹が正月に屹度咲く、と言て爭つたが、果して正月に咲いた、嗚々併し妹は居ない、今頃は何處に笑つて居るであらう、

初春の希望　能登　高森い・ち子

庭の紅梅が薫りそめた頃、兄様は栄ある位をさへ頂いて、芽出度凱旋遊ばしたので、紀念の爲に家族一同が梅、の香の滿ちてゐる我家庭で撮影した、あゝ是が今年の初夢であつた、私は此夢が事實の上に現れん事を希望するのである

梅　陸奥　相馬冬子

春さく花はあまたあれど梅こそいともなつかしけれ、吹すさふ寒風は肩をつんざき、雪さへいまだ消えはてぬに百花に先だちて咲き出づる様、げに勇士の潔き心にも似たりけり、古人が四君子の一つにかぞへけんも、げに宜なる哉、

山里の冬　播磨　横田春枝

八重葎茂りし秋もすぎがてに、み冬立そめてよりこゝに幾日、小鹿鳴く峯には霜の夜毎白う置きては、日頃住みなれたる山家もひとしほ寂さのます心地して、しかすがに秋の名殘のをしまるゝよあゝさむき風、こよひも響からく、

操の花　東京　槙野久美枝

春雨そぼ降る窓によりそひ、嘗はころびし櫻の一輪眺めやり、あゝ美くしゝ叫びしがふとかたえの松の緑したゝる色を見て、深き思ひに沈みぬ、あゝ花は嵐に散る時のあれ、八千代かはらぬ松こそはとこしへに女子の鑑ともすべき操の花ならんかし、

ゆふべ　三河　きく子

大空華やかに彩りし夕日影、今や西山に沈みて、鳥はねぐらに歸り夕告ぐる鐘の音淋しく、餘韻長し、郊試やさしき少女もいつしか見えずなりて、獨りほゝ笑む月の光りほのうすく、野川を流るゝ水の音のみいと靜かに聞ゆなり。

夕暮　長崎　森屋その子

青鷺のたぐひにや、物さびたる鳴聲引きて、御空を横に辰巳の方へ過ぎ去りぬ、あとは物音一つ聞えず、柑子は漸々夕陽色に濡れ果は空一面に黒ずみたる藍色の幕垂れ來りて、近精舍の鐘にかゝりぬ、

平和の神　愛媛　高橋茂子

云ふ事あとけなく愛らしく、あゝ何にかたとへん、小さきあの紅の唇より、父様母様と隔なくわらひ出でられては、長き月日の戎

は面白からぬ折とて、如何でか互に笑までやはあるべき、あゝこれぞ誠の平和の神とも云ひつべきや、

紀念の國旗

岩代　菅野和子

黑く裂けたる國旗と新らしきを交叉して建てる內より、屠蘇の匂ひ香はしく、折々勇敢男の笑聲と兒等が種々の聲ともれ來まが出征の留守居を淋しく飄へりしは此旗なりき、今老いたる父母と蜜柑餅に新年祝ふ賑さ如何、

歸省せし友に

東京　河瀨秀子

こき紫の御被布、柄よき御召物の神々しき御姿は御別申せし以來、度々妾が夢枕に立ち給へるうれしさよ、さるに昨夜のみはいかにも變りはて給ひし御有樣にて候ひき、あゝもしやと心かゝりのまゝに伺上候

ひがみ

東京　河瀨秀子

八歲計りなる小兒の唱歌する聲、いかにも愛らしかりければ、呼ひ入れて何かな與へんものと、手招きして呼びたる彼はすごき目ににらまへて走り去りぬ、あゝ不幸の兒や、如何なる家庭に育ちしかと、同情にたへざりき、

我が希望

大阪　田中靜子

我が希望として最愛の友たる女鑑の年毎月毎に榮えゆくをいのるや切なり、願くは敬愛せる記者の君よ、女鑑誌上に、讀者倶樂部を設けられん事を、

別れし友に

東京　田中千賀子

君よこゝに封じこめ參らすは忘れたまはじ、去年の秋御身と別れまゐらせし其時、紅きは妾が心にもと、からうじて植給ひし紅葉の主なき宿にもかく美しう染め出でしに、いとあはれ深う、せめては一葉なりとも、御目にかけたくてかくは、

落葉無情

東京　楨野久美枝子

この國に來て、落葉を集めて、父母君や姉君とたき火をして、樂しく語ったのも、夢のやう、あゝ父母君は早露ときえさせ給ひ、去年落葉の頃には、姉君と唯二人この國にきて、袖に時雨を降らしたのであつたが、それも幻となつて、あゝ今年は唯一人、こゝに思はず落葉無情と叫んだ。

新體詩

地賞

新年のうた

能登國輪島町　高森一子

彩りなしゝひんがしの、雲の扉をそとひらき、
初日の神の笑みませば、萬象こゝに新たなり。
平和の子らがとりぐに、君が代祝ふ其こゑは、
門べに立ちし松たけの、綠と共にいやしげし。
あゝ吹くこちのゆるうして、人の心ものどかなり
例へば戶每に揚げたる、み旗のしるしの圓き如。

人賞

新年

長崎市築町四四　森屋その子

あな心地よや心地よや、戰勝國のわが日本

この松竹にこの旗に、匂へる今朝の初日影
樺太滿洲北韓を、しめゆいてける我國の
恵の露に外國も、打靡きつゝおしなべて
大御光や仰ぐらん、あな心地よや心地よや

新年河　福井　岩橋定子

汀によするさゝ波も
千代とさゝやく心地して
のとけき春の川のおもに
初日ゆたかにうかぶかな

新年友　岡山　小山松枝子

初日の影をあふぎつゝ
ことはの花をさかせまし
空ものどかに梅かなる
窓に文机なしならべ。
きませよきませ我友よ
千代に八千代と君が代を
祝ひてあそばんもろ共に
いざや歌はんもろ共に。
たゆみがちなるこの胸も
つれに勵すまごゝろや
世は改まる今日の日も
わが友見ずば何かせむ。
樂しきことや數あれど
めくみの露のいや深く
心淸らにむつびあふ
年の始のうれしさよ。

福壽草　福井　岩橋花子

年立つあした花さきて
春をそへたる福壽草
色香は梅にゆづれども
高きこゝろはくらべ見ん

福壽草　千葉　鎌田壽賀子

其美を競ふもゝ草の
花をうしとや福壽草
後れてひとり笑みにけり
いともたのしく暖かき
ホームに花と愛しられつ
浮世の風も知らぬ顔
昨日も今日も變らざる
可愛ゆき笑みを洩らすなり
あはれ可愛ゆき福壽草
あはれ幸あるなれが身

月を眺めて　播磨　横田春枝子

霜夜の風の音すごく
ともし火細る此ゆふべ
窓の戸あけて眺むれば
中天高く月すみぬ
櫻の雲の色あわく
かすみも薫る春の夜に
親しき友と手をとりて
眺めし月も此月よ
夕顔たなの下涼み
若葉すゞしき夏の夜に
一家まとひて談りつゝ
眺めし月も此月よ
尾花の袖になく虫の
聲も哀れの秋の夜に
人なき庭に唯一人
眺めし月も此月よ
月はかはらぬ月ながら
世は浮雲のゆきかへり
定めわかたず日はすぎぬ
げに雲おしの早き世や

秋の夜　鹿沼　金子とし子

百戸の村の靜やかに
平和に眠る長き夜を
月にさえたる小夜きぬた
たが手枕に通ふらん
我たゞひとり高樓の
しづけきらんに身をよせつて
更けゆくさびを味へば
雁鳴き渡る西の空

暮秋　東京　星野千代

若葉にもゆる夏すぎて
こずえさびしき雜木立
あゝと烏の聲ふりて
丹ぬりの社殿夕日てる

振分髮の頃を忍びて　東京　槇野愛子

四季の眺めをたのしげに
理想の國を夢見つゝ
花下月前にさまよひし
あゝその頃やしのばるゝ

いへづと　大阪　黒田代音子

立田の姫の手すさびに
錦織り成す峰つゞき
高嶺の松はとこしへに
しらべ妙なる琴の音を
絶間もあらず響かせて
谷まをめぐる岩清水は
湧きながれのさゝやきに
望のいろをうかべつゝ
浮ばらさして流れゆく
ちりの都をへだてたる
此の深山路へをこたらで
朝日と共に登りきて
落葉をひろひ眞柴かり
夕づく日影たゆたへば
かたみに手をばとりかはし
麓へいそぐはらからの
幼なき影のけなげさよ
今し夕榮花やかに
みねの楓に照り添ひつ
またゝくひまに日は落ちて
仰ぐみそらに夕づゝの
見えそめぬればはらからは
日毎親しむながめとて
繪にも及ばぬけしきをも
名残を惜む色もなく
かりし眞柴を背に負て
越の里へかへりゆく
わらべが面はゆるまで
枝さし交はす細道に
分て色濃きもみぢばの
ふたりが前をさへぎりぬ
足を止めしはらからが
もろ手は枝にかけられて
あな美くしの山守よ
我にに許るせ只一枝
賤が伏屋にいたつきの
枕にふせる父上が
わびし心を慰さめん
手折し枝をそのまゝに
負へる眞柴にさし添へて
はやたそがれし山路を
いと勇ましく下りゆく
身にはつゞれをまとへ共
なやめる父を思ふなる
赤き心は錦にて
かへでもいかで及ぶべき

凶作の田面

群馬　竹乃ふし子

いづこの空にむら雀
今年は歳を送るらん
日頃遊びし此野をば
あはれと見ずやむら雀
稲田がはれる神風に
黄金の波はたゝずして
青きがまゝの立不動
刈りとるすべもなかく／＼に

はや木枯の風吹きて
なるこの音の物凄く
威をふりかれし柴山子には
空しく霜のおきたりな

小さき母

千葉　鎌田清子

こゝ未だ冬も知らぬ如
いと暖き裏庭に
眞晝のひかり背に受けつゝ
むしろ敷きてぞ幼子の
二人雛もて遊ぶなり
一人は恰も野邊に咲く
柔しき菫のそれの如
白く肥えたる御手に抱く
雛の君いと愛らしく
其身につけし衣物は
小さき御母とお揃ひの
目さむる計りの摸様なり
今父一人の母の君
其顔はいとまろやかに
赤きりんごのそれの如
眼まろくてさかしげに
小さき御口べ紅に
香ふうばらのそれに似て
もゆるが如きめりんすの
衣を着せたる雛抱き
チンネ／＼と歌ひつゝ
頬ずりするぞあどけなき

あはれ世上の姫君よ

大阪　池田英子

あはれ世上の姫君よ
姫と生れし御身こそ
貴き使命のとこやみを
てらす平和の神と知れ
あはれ世上の姫君よ
ひじりも御身の手にそだち
偉人も御身の手より出す
樂しからすや御身こそ
あはれ世上の姫君よ
高き使命のいや高き
つとめを盡せ起しへに
神は御身を護るぞや

哀れ幼子

愛媛　高橋茂子

悲しと未だ露知らず
父の吊ひ眼はしみ
喜ふ顔のあとけなさ
みては苦しゝ胸の内
泣く音しのひの袖たもと
涙の母をいぶかりて

尋ぬるさまのいぢらしさ
またも思ひのいやまして
外のみる目もいろともに
しばし涙にかき暮れぬ、

農夫

朝に露の草を分け
行きつゝもとりつ山田守
みのり豊けき穂みれは
うたひて穂の風なまつ

皐月

夕には群鶏の聲きゝて
賤かうき身ぞあはれなる
たのしとよろこひ歌をさへ
賤かうき身そあはれなる

折にふれての夢

泉州　福原董子

床しき花のかほる頃
胡蝶のむれに交りつゝ
うれしき節を諸共に
語り合ひつゝ手をとれは
戀しき人の影はなく
むすひつゝけし夢なりき

樂しき夫と只二人
幸ある身らが行末の
とやせん角とほゝえみて
燈火くらし此夕べ
あはれ淋しき獨寢の

短歌

地賞

初春　豊多摩郡千駄ヶ谷村　禰津みち子

ほの〴〵とあくるわしたは久かたの
雲ゐよりこそかすみ立なれ

人賞

初春霞　肥後國球磨郡多良木村　友永つね子

あつさ弓春はいつしかたつ田やま
たな引そむるあさかすみかな

[illegible]

新年河　播磨　松原みれ子
日のもとのかはてふかはに凱旋のはたかげ匂ふとしは立ちけり

新年河　和泉　福原董子
おほ君のさかゆくかけは五十鈴川きよきながれの水にこそ知れ

新年河　福井　岩橋花子
なかれ行きし月ひもけふはなしからておすかの川にくむや若水

新年河　東京　澁谷きく子
やま里のほそき小川のすゑまでも朝日てりそふけさののどかさ

新年河　埼玉　横田秋子
瓦やく今戸のけむりたなひきてすみ田がはらにとしやたつらむ

新年河　石狩　加藤滿惠子
いつもくむかどの小川の水なれど年立つ今朝は清くこそ思ふ

新年河　岐阜　松渕澄子
かちどきのこゑにあはせて五十鈴川くむ若水もすめる御代かな

新年河　愛媛　成田政美子
清けくもはつ日をうつす五十鈴川神代ながらのかげも見えけり

新年河　愛媛　成田蘭子
かきそめに染めし給ふでを長久にきよきながれの川にすゝがむ

新年河　相模　笹千茂子
日の本のひかりをうけて高麗の河すみわたりたる年やたつらん

新年　東京　岡田春子
波風もをさまりはてし大みよのとしのはじめぞのどけかりけり

新年梅　肥後　友永榮子
日のみはたなびく軒はにあら玉のとしのたち枝の梅さきにけり

新年鶴　大阪　黒田代音子
よろつ代もゆるがぬいはの松が枝に春をぞなのる鶴のもろこゑ

新年雪　陸奥　相馬冬子

あたらしき年のはしめにふる雪を榮ゆる御代のはなとみしかな

歳旦　神戸　足立淺子
はつ音とは思ひかけきやうくひすの聲にふしある呉たけのおく

若水　大和　栗山たか子
千代八千代榮ゆる御代をわかみつにうつして結ふ年のはしめに

若水　鹿沼　金子とし子
若水をすゝりにくみてはつはるの歌かくまとにあさひさすなり

試筆　岡山　小山松枝子
物みなのあらたまるてふけふの日はわか筆とるも樂しかりけり

早梅　肥後　友永つれ子
日あたりのよきかた枝より咲そめて春のこなたにかをる梅かな

早咲の梅　東京　槇野愛子
詩集手にみそのさまよふ少女子のたもとにかをる梅のはつはな

早梅　神奈川　中山菊子
めつらしな春をもまたて雪のうちに匂ひいてたる梅のはつ化

早梅　岡山　小山松枝子
なべて世におくるゝ宿に梅のみは春をもまたてさきいてにけり

梅　大阪　田中靜子
あらたまのとしのはしめに咲そめてかをり床しきうめのはつ化

初春　東京　飜津梅子
あつさ弓はるさりくれはいつしかにかけひの水のとけて流るゝ

春の初住吉の浦にて　東京　飜津文子
うちわたす海はら遠くかすむなり須磨も明石もかくれゆくまて

春霞　相模　鳥居富久子
春がすみたなびくそらにあふくかな雲もかゝらぬ雪のふしのね

閑居霰　岡山　横田春枝子
よふけてはとふ人もなきいほの戸をしは／＼たゝくたま霰かな

春曙　旭川　森木鳥羽子
うくひすの聲ものとかにほの／＼と霞みにけりな春のあけほの

初冬時雨　神奈川　市川ふじ子
五月雨におとゝぬ軒のたまみつはしゝかと降りくる時雨なりけり

雨冬時雨　清國　富成梓子
初しくれさそはさりせは常磐ゝなにをかふゆのしるしとはみむ

初時雨　相州　栗原はま子
そまかたく炭のけむりにさそはれて箱根の峯はしくれ初めけり

冬庭　薩摩　松原みれ子
菊はちり梅か香またきにはの面のまつとたけとに霜のはなさく

冬月　津　神田みよし子
雪ちりてさゆるひかりも身にしみぬゝくも間にこほる冬の夜の月

初雪　鹿沼　金子とし子
千代八千代君か代うたふこすゝめの羽かせにちれるさゝの白雪

社頭雪　上野　佐藤露子
華表なきのき端あはれのみやしろも冬のあしたの雪うつくしき
ふるゆきに軒もかたむくみやしろのたほれし華表銀蛇に似たり

社頭雪　伊豫　樋口季子
誰かためにまをてし人か朝またき雪ふみわけしあとそのこれる

社頭雪　河内　田中しづの子
鈴の音もけさにきこへす神さひし大庭しつかにゆきそ降りける

社頭雪　北海道　磯部服子
うふすなの杉の木たちの枝しけみとり居のおくは雪もつもらす

社頭雪　肥後　佐々有隣子
千はやふる加茂のやしろの大まへに清くもつもるけさのしら雪

氷始結　河内　田中しづの子
神かきのいかきのさくゝふりつもる雪の化こそさきにほひけれ

氷始結　北海道　磯部てる子
此あした庭の池の面にさゝ波のたゝぬを見れはうすらひにけり
池の面にうかふと見えし水くさのけさめつらしき薄こほりかな

氷始結　肥後　佐々小琴子

よもすからさえしあらしの末ならん朝戸のかけひこほり初たる

折にふれて　越後　松永しげ子

新米のあぢいちしろくおほえたり紅葉をわけしこはろ日のびる

折にふれて　能登　花萼女史

まゝならぬ浮世と我は怨ましなたゝわが身こそかなしかりけれ

同　能登　花萼女史

繪きぬのへ黄きくをうつす小春日を小鳥飛び／＼山茶花ちらす

折にふれて　陸奥　相馬冬子

きのふまて立田のにしきしのはせし庭のこすゑに雪はふりけり

折にふれて　伊豫　廣田薫子

なかれ淸き小川に月のかけ見つゝすまぬやこゝろ歌ひとつなき
風わたるゆふかり葉影月見えてこゝろゆらぐよおはしまの上に

月前懐　同

おもひわかしはし見る間に晴れ曇る月にこゝろのいとゞ亂るゝ

折にふれて　愛媛　高橋茂子

ゆく秋の色さへ見えてつれなくも風なきゆふへ紅葉ちるなり

暁　肥後　友永榮子

鳥が音にねさめて見ればびわれ戸のすきま白みて夜は明にけり

旅宿　大和　粟山たか子

古さとの夢またさめぬあかつきにきくもさむけきかれの音かな

鴛鴦　津市　神田みよし子

妹をよび背をかたらひて樂しけにあそへるをしの一つがひかな

讀書　岡山　小山松枝子

今むかし世のありさゝを文机にあつめてともにみるそたのしき

衾　奈良　天野照子

たらちねの母の恵みのあつふすま冴ゆる霜よもしられざりけり

靜女　清國　富成梓子

みよしのゝ雪よりふかき言の葉のにほひは花におとらさりけり

東京灣觀艦式祝　埼玉　櫛田秋子

祝砲のおとも雲ゐにとゝろきて千代のなみたつたけしはのうら

正五位松尾多勢子刀自のみ墓へまゐりて思ふことを　長野　岡田千穂子

ますらをもおよはぬ君がほまれこそよの人々のかゝみなりけれ

俳句

人賞

梅　大阪中之島二丁目　田中靜子

行き過ぎてまた見直すや梅の花

新年　川

しつかさは石狩川やはつ日の出　石狩　加藤壽惠子
船の月もはつ日にあけて隅田川
初日影戰後の土をてらしけり　能登　高森一千
元日やみしめなはにも風薫る
三賀日老のしはさへ延びにけり　東京　きく子
新妻や額に薔の御答禮
元日や隣り近所も改まり
眉長き老のきませる頭巾哉　大阪　柳政子
荒神の旅立つ日なり朝嵐
紫の雲の行方や神の旅
冬枯や大佛前の家二軒
蓬萊の稲もてくるや小作人
三ヶ日米の飯くふ山家哉
百挺の酒賣りつくす初荷哉
わが前にあたふた手鞠追ふてくる
書初めをかきおさめけり大晦　群馬　竹のふし子

恭賀新年

明治三十九年一月一日

株式會社 國光社

女鑑編輯局

投書家諸孃に告ぐ

本欄は才藻に富まるゝ諸孃が、常に歌文を投せらるゝによりて賑ひ、誌面爲に光彩を添ふるなり、去ながら往々達筆を揮はれ過ぎて讀み難きものあり、紙片に顯微鏡でも掛けねば見えぬ如きものあり、これまでは一々書直したれど、あまり煩に堪へぬより、以來は左の規則をつくり、それによらざるものは、歌文の善惡に拘らず、遺憾ながら撥書すべし、

投書規則

▽一　投稿者は歌文の側に一々宿所姓名を明記せられたし、單に名、又は號のみのものは採らず、

▽二　字體は楷書にして、おくり假名は平假名にせられたし、雜誌への原稿を手紙でも書かれるつもりにては困る、草書に變體いろはの多きものは採らず、

▽三　文も歌も、題の改まる毎に、用紙を改ること

この規則によれば葉書にても差支なし、相成るべくは半紙に認めて、開き封［第四種郵便物として］にておくられたし、兼題和歌『はがき』にてもよけれど、一題づゝ別に認められたし、一枚に數人の作を記したる如きは採らず、

投書はすべて女子に限り、以上の規則も、要するに女子らしき投書の仕方、所謂書生流にあらざるものを、其人柄とゝもに採りたき也、

新年號

女鑑 第十六年第壹號 附錄

▽元旦の膳頭子女に向つて面白く了得せしむべき訓言、

▽子女の遊戯にして、室内に於ては歌骨牌、室外に於ては追羽子以上、眞に當人に取りて趣味を感ずる如きもの、及び此の二つの遊戯に就ての意見、

▽其地方に於ける一月の儀式其他趣味ある風習、

▽其地方に於ける女子敎育の著しく進步したる點、

女鑑　第十六年第壹號　附録

(一)元旦の膳頭子女に向つて面白く了得せしむべき訓言、
(二)子女の遊戯にして、室内に於ては歌骨牌、室外に於ては追羽子以上、眞に當人に取りて趣味を感ずる如きもの、及び此二つに就ての意見、
(三)其地方に於ける一月の儀式、其他趣味ある風習、
(四)其地方に於ける女子教育の著しく進歩したる點、
本誌は前記諸題につき、各女學校長の高見を叩き、幸に左の諸君の解答を得たれば、こゝに掲載することゝはなしぬ、

○

岐阜縣立大垣高等女學校長　關藤十郎

(一)元旦は、一年の第一日にして、萬事の原始なり　陛下は、四方を拜して、國運の隆盛を祈らせ玉ひ國民は、祥旗を掲げて太平を祝せり、吾人豈將來の幸福を、祈願せずして可ならんや、殊に事を爲し功を遂げんとする者は、常に心掛けて、機會の到來を逸すべからず、一年内の、機會の自然に際會する者、日に於ては三百六十五日あり、月に於ては十二ケ月あり、時に於ては四時あり、其他學期、學年、大祭、日曜、旦暮、朝夕より、一物の起伏、一事の終始等、何れも皆機會ならざるはなし、商人や農夫や、日に其利を計り、月に其功を較するもの、皆機會に乘じて、事を爲さんとするなり、元旦は、機會の甚大なるもの、一年の事功を執りて計較せし、去年の翌日にして、將來の希望を、實行せんとする第一日なり、月と

時と、學期と學年と、總ての機會の輳合せる日なり、幸福も快樂も、目的も事業も、鍛錬も修養も、此日に躊躇せば、其機を逸せんとするなり、一年の計は元旦に在り、一日の計は朝に在り、一生の計は少壯の時に在りと、言敢て珍とするに足らざるも、亦是機會の到來を說けるもの、機會なる哉、機會なる哉、機會の眼を以てすれば、膳頭にも箸にも、雜煮にも香の物にも、確に機會の存在を認むべくして、凡善言美行大小事業の、為すべく行ふべきもの、蓋し山の如く海の如きもの有らん、

（二）福引、阿彌陀籤、球擣き、御手玉位か、趣味ある者ならんか、福引、阿彌陀籤は、相似たるものにて與に諧謔滑稽諷刺敎訓等、簡單なる趣向にて、吾も人も、隨分興味を感ずるもの、球擣き、御手玉の如きも、手の練習と運動とを併せて、中々に面白き遊戲なるべし、何雙六、花合せ等は、趣味十分なるべけれども、動もすれば弊害に陷り易きものなれば、何れも相當監督的の人なかるべからず、

歌骨牌は、記臆、注意、敏捷、協同等の氣風を養ひ、其歌詞は、訓育に資するに足り、殊に興味の深き、隨分寢食を忘るゝ程のものにて、我邦女子の遊戲として、適當上乘の者ならんか、唯今日廣く行はるゝ百人一首の如き、其歌は巧妙なるも、其意の敎育に適切ならざると、殊に戀歌の多きとは、成人には妨なきも、青年子女には、面白からざる者あり、若し適切なる歌詞名句を集めて、補修改作せば、必ずや一段の稗益を得て、唯に正月のみに、限らざる遊戲として、有數のものたらんか、唯妙齢男女の同席會合は、嚴禁せざるべからざるなり、

追羽子も、我邦の室外遊戲として、侮るべからざるもの、全身四肢の運動より、手腕の練習上、頗る有効なる者にて、西洋のバトミントンに比して、遜色なき物なり、今後研究工夫して、法則を制し規約を定め送るに矩あり受くるに序わらしめば、必ずや一層の妙趣効用わらんか、其簡單輕便にして、千變萬化の奇

趣に富むもの、蓋し得易からざる長所なり、

(三) 赴任後、未た當地の正月を實驗せざれば、慥なる事は述べ難きも、聞く所に因れば、元旦より三ケ日、七日十一日十五日等の儀式は、大抵東京風にて、反りて簡略なるが如し、其他別に、趣味ある風習とては有らざれど、唯所謂左義長の遺風として、十五日の早天に各〻飾りを携へて、社前に集り之を燒くと、老若男女、隨時炬燵に入りて、雜談優遊する位が、吾人の習慣より見て、寧ろ奇習なるが如く、思はるゝなり、

(四) 當地々勢の關係上、一般に京都の影響を受け、萬事優美上品を主とするの風は、往時より馴致せし處にて、女子の體格など、大抵優柔纎弱の方なりしも、女學校設立以來、之に入學する者には、盛に體操遊戲を課し、尙放課時間の、運動を奬勵せしより、自然に活潑强壯になり、今日にては、一般父兄か女學校に入れば、必ず强壯になるものと心得、之を以て何よりの利益と喜び居れり、是らは何人にも認め得べき、女子教育上の進歩なり、

尙當地一般の風儀も、從前に比して慥に進歩せり、今日女學生と云へば、何處にても、兎角の批評はあれど、夫は女子の行動が表面的になりて、世人の注目に觸れ易きより、彼是の沙汰あるにて、實際に於て、決して墮落せるに非ず、之を從前の女子が、裏面隱微の裏に、敗德汚行の多かりしに比して、慥に改善せられしを認む、現に交通不便にして、舊風遺俗の殘存せる僻地に入り、試に其女俗を視察すれば、實地之を檢するを得べし、

○

淡路高等女學校長　川路寛堂

(一) 吾々のこのやうに、靜かにたのしき間に、新年のよろこびを祝ふことが出來るのは、何によるかと

云へば、先づ神明の加護と皇室の稜威と、又父祖の餘惠とによるものなれば、神を敬ひ、君父を尊び、誠虔の念と忠孝の道とを、みがき勵むべきは申すまでもないことであるが取り分けて、この明治三十九年の元旦に於て、男女老幼皆深く考へなければならぬことがある、

その一つは經濟に關する事、

次の一つは外人に對する交際上の事、

である、そも一昨年より昨年にかけての、日露戰爭にて我國の受けたる損害は、人力の上にては四十余萬の戰死及び傷病者を出だし、金力の上にては拾餘億圓の戰費を失つたといふ、これ農、工、商等實業家の頭にうけたる打撃にて、國産の製出、國力の發展に大なる故障が生じたものといはねばならぬ、國家の富は、取りも直さず國民の榮である、國家にして避くべからざる出來事、しかも國家自衛の道の爲に、右の如き損害を犧牲に供したりとせば、國民たるものいかなる工夫によつて、之が補ひをなすべきか、之については政府にても、それ〴〵方案があらうけれど、國民たるものも國民として、各個に之に處する考へがなくてはなるまい、

そこで思ふに、吾々個人は自ら有する體力と、財力とを成るべく有効的に、將た經濟的に使用して、所謂

いろは道歌（十二）

物ずきは得手に流るゝみちびきぞ　義理と情にうとくなりつゝ

善となり惡となるのもおのれから　こゝろ一つの向しだいなり

すべなくて朝寐晝寐や夜あそびの　呑くひずきは詮すべもなし

歌としては面白からぬ歌もあれど　敎と見ば捨られぬ儘（記者）

塵つもりて山を爲すと云ふ、諺の精神を忘れず、苟も人のため世のためなること、即社會の功益となるべき事がらに逢はゞ、勢力を惜まずして盡されよ、而して誰しも忽にし易き時間、この時間を徒消することなく、各々その業をはげまるゝ時は、涓滴集りて紅海をなす譬への通り、國力養成の上に自ら偉大の効果を來すに相違ないものであらう、學生の學業を勉むるにも此精神を以てせば、間接に國利を計る所以の道に當るのである、

又金錢は、よし有り餘る身分なりとも、徒らに衣食の奢侈に費してはならぬ、此頃の學生は男女に限らず流行を追うて姿態を作り、或は不用なる學用品を求むる弊害なしとせず、若しこの間より幾分を剩し得て東北凶作地の貧民救助に當てたならば、彼等の體力を存養することが出來て、將來の國産製出の上に、一の利益を與へたことゝなるのである、

無論青年子女たるものは、未だ資産を有するものでないから、事を爲すとても又金錢を用ゐるとても、經濟的にした處が大したことでもないであらう、けれども國民擧つてこの精神でおれと要求すべき時勢に立ちては、心ばかりも斯くあらねばならぬのである、況や全國幾百萬の青年子女たるもの、その多數が斯く堅固なる精神を持つたならば、必ず侮るべからざる勢力を釀すは明かである、

さて又この度の戰勝については、世界の人の心を動かし、歐米文明國人をして、我が同胞を尊敬せしむる機會を作れり、吾々國民の大幸何物か之に如かんや、見よ平和回復後歐米の名士、交々渡來して或は遊覽に、或は調査に從ふもの少からざるにあらずや、又我國民の爲すあるに足る力量あるを認めたれば、歐米の資本は我國公私の團體に、流入せらるゝ傾向を現はせり、爾後いよ〳〵年數を歷るに從ひてます〳〵渡來の人數を增し、內外人交際の親密を來すことは明かである、然るに國民にして交際上の禮儀をかへり見

ず、東洋流の豪傑然として、無作法極まる行ひをなして、これらの外人に接しなば、彼等の折角おこしかけた親愛の念は、忽ち消去つて復た元の輕侮の心となるであらう、さる時は戰勝の餘威にて收め得たる無量の精神的報償も、無効に歸するに至る道理なれば、自他共に交際上の禮儀を重んじ、決して紳士たり、淑女たる行爲を汚す事なく、殊に他邦人を親愛して、自らも彼に侮られぬやうに立ちまはるが肝要である月日のたつのは早いもので、ぐづ〳〵して居る内に、來年再來年となり人の子女たるもの、却つて人の親たる身分の來るものであれば、今よりよく〳〵心すべきことである、

(二) 新年などの女子の遊戯には、歌がるた又は追羽子が都鄙ともに行はるれど、歌がるたについては衞生上の注意と、男女間の監督とだに行き屆かば、最もよろしきものと思ひます、歌がるたは古歌を諳んずる便を得、追羽子は運動を助くる益あるのみならず、二つとも甚だ趣味あるものと云ふべし、只々追羽子は、公園又は學校運動場の如き處にて爲さしむることを欲す、街路などにてなせば自他の防害ともなり、危險に出合ふこともあるべし、されど斯く公園などに群集して行はしむる時は、時ならぬ賑ひを表はして新年祝賀の意を、一層强からしむることが出來るであらう、

(三) 當淡路地方には、正月の儀式等に特別に趣味ありと思ふものなし、又各地と異りたることの記すべきを見ず、

(四) 當洲本にて女子教育の著しく進歩したる點は、都會の地と異りて、一般に高等女學生の質朴なりとおもふことです、これ一方からいへば進歩にあらずして、不進歩の結果と見るべしと雖、女子教育の理想に照せば、寧ろ進歩といふべからむ、學業に於ても概して勉强心ありて、存外進歩の狀あり、當學校特殊の點は生徒の、水泳を能くすることなり、

山形縣女子師範學校長
山形縣立高等女學校長　津田元德

○

(一)目出度新年の始め、特に光榮ある戰後第一年の、明治三十九年を祝ふべき辭は筆紙に盡せない位で、又此光輝ある大御代に生れたる吾々が、年の始めより、守るべく、勤むべき事も、書き盡せない位であるが、其中の、最も第一と思ふことは、別して婦人の心掛くべき第一は

△福祿壽

の三であると思ふ、福祿壽は、七福神の唯一として、昔から尊崇されてある位で、今更事改めて言はずともであるが、我國の人々は特に戰後の光榮ある吾人は皆此福祿壽の三德を備へた人になつて貰いたいのである、然るに、家庭の誰も彼も此三德を備ふるに至ると否らさるとは、全く、婦人の考へ一つにあるのである、例へば

△家政の整理

が甘く行けば、家庭の人は、皆此福祿壽になれるのである、全國の壯年婦人が、二千萬人として、一日に三錢づゝ餘分の働きをするか、又は三錢づゝの節約をしても、一日に六十六萬圓となり、一ヶ月には千八百萬圓となり、一年には二億萬圓以上となるのである、

一ペンス(四錢)を年五分の重利法にて、耶蘇降誕と同時に貸附たとせば、該金額は毎十四年に倍數となるから、現今迄には、　純金の地球が一億五千萬個餘も出來る勘定となるのである、一シルリングを、年六分の重法利で貸附けたとせば、右の期限間には、

全太陽系より大なる金塊が得らるゝのである、日露戰爭の終結に、十幾億圓の償金を取るとか、取なかつた、とかで騒ぐ樣な國民ではならないのである、二十億三十億の金の爲に、媾和するとか、しなければならないとか、云ふ樣な國富ではならないのである、十億に近き財産を有する、カーチギー（米人）或はバンダールビルト（米人）五億に近き富めるモルガン（米人）や、ロスチャイルド（佛人）に驚く樣ではならないのである、岩崎や住友は、日本では普通の家産であると云ふ樣にならなければならないのである、



又家庭の教育が充分であれば其子弟皆何れも福祿壽になれるのである、一國の大臣大將は愚か、世界の大宰相、宇内の英傑と尊崇せらるゝのみならず、幾千年の後までも、人の儀表となり、幾億萬の蒼生に信仰せらるゝ、釋迦とも、孔子とも、基督ともなるばかりでなく、眞に神に通じ、神に等しき人間の典型をもつくる事が出來るのである、

我朝の武内宿禰は、三百の齡を重ね、英國の僧、ラウデンエビソン（紀元一四四〇年の人）は、二百十歳の長壽を得、獨人、トーマスケルルン（一五八八年に死す）は、二百七歳の榮華を夢み、伯爾西の都に百七

十八歳の老翁（一八七三年調査）ありとて、驚く樣ではならないのである、予の家にも山城國の住鐵石軒吉之と云ふ人が、百十七歳にて、壽の字を盃の臺に、書き記したのが大切にされてあるのを見ても、又衞生の途が、進んだ爲に、西洋各國の大都市では、人の平均壽命が年々歳々多くなるのを見ても、教育衞生を充分にすれば、

百歳の壽老人となる

事は容易なのである、

どうか、婦人方の力によつて、一家は素よりの事、一郡一國滿天下の人が、此の如き福祿壽となりたいのである、なれる事は受合であるから、奮勵して其最善を盡したいものである、大學にも、

富は家を潤し、德は身を潤す、心廣く體胖かなり、

とある、誠にかくありたきものであります、之を以てめで度新年の祝ひ言といたします、

○

神奈川縣立高等女學校長　新原俊秀

（一）伊藤仁齋先生元日の歌に、『一年を皆けふの日の心地して、長閑に世をば過してし哉』とあるが如く、常に心を純潔平和に保ち、萬づ堪忍を專らとして、不平苦情をならさず日々元日の心持にて人にも交り、仕事をも勵みなば、生涯幸福にして、一家團欒の樂を享受し、我身も德に進み出世もすべきなり、さてこそ井上博士の翻案せられたる如く、元日は出世の旅の一里塚ともいひつべけれ、

（二）子女の遊戲中室内にてはピンポン、室外にては庭球こそ、歌骨牌追羽子以上健全且つ活動的にして、趣味を感ずることも、決して後者に讓らざるものなり、但相當の臺又はコートを要するが故に、後者の如

く容易に且つ一般に行はれ難き憾ありといへども、學校生徒の如きは日時を期して、之を行ふの便あるべし、追羽子は優美にして最も婦女子の遊戲に適するものなれば、成るべく盛んに行はれんことを、望まし、歌骨牌は有形無形共、不健全なる分子を含むが故に、意注を要すること世俗に定論ありといへども、多年種々の遊戲を凌ぎ來りて、年々盛に行はるゝを見れば、尙棄て難き趣味のあればなるべし、

○

茨城縣女子師範學校長
茨城縣立水戸高等女學校長　本田嘉種

(二)室內に於ては歌骨牌の外音樂、例へば風琴ヴァイオリン琴、又有益なる書物、其他ピンポン等
室外に於ては追羽子の外、ロンテニス毬等、
歌骨牌はよき方法にて行へば、心身に益する點多きも、若し思慮なく多人數の集會に亂用すれば、又敗德に陷る恐れあるを以て、從來水戸地方に行はるゝ明倫歌集の如きものにつき、婦人は婦人の集りに於てなし、且つ衞生上をも考へ廣き札の上等にて行はゞ、いと可ならん、
追羽子は新空氣の中にてせば、心身の爽快を覺ゆるよき遊びなり、
(三)床飾りとして御鏡餅飾をなし、神々に供御すわりを備へ、外には門松を立て家の入口には、しめ飾をなし中央には御飾を結び付く、
献立としては長熨斗、屠蘇（御盃御銚子）をすゝめ、御食摘御雜煮等の式あり、其內容に至りては其地位身分に應じて各々差異あり、
(四)(イ)女子教育を志望するものゝ增加、
(ロ)女子體格の進步したる點

(ハ)高等女學校を卒業し、補習科に一年入りて、其修學を終へたるものは、小學校本科正敎員の資格を得るを以て女子敎育の增加したる事

(ニ)二十九年五月より、當女子師範學校卒業生を出すに至りしこと

○

熊本縣八代高等女學校長　宮地欣吉

(一)一年の事は元旦にあり、是れは皆人の熟知する所なり

世の中の事は正月の餅のヨゴーダゴツ、是は當地方の言葉にして、世の中は正月の餅のユガンダ如く、角丸い事ばかりなし、故に辛棒が緊要なりと云ふことなり、

元旦の雜煮を愉快に食へば、年中の家食事は容易に消化すべし、是れは愚按の言葉にして、元旦より家族樂しく暮せば、一年中の一家の仕事は、好く丸く治まるべしとの意なり

(二)室內に於ては歌骨牌、イロハダトヘ(當地に於てイロハカルタの事を云ふ)雙六、トランプ等あり、室外に於て追羽子、手鞠、テニス等は本人に取りて、趣味を感ずる如きものなり、右の遊戲に就て意見を述べんに、歌骨牌は戀歌の意味を知得せしむる時は害ありと雖も、唯無意味に暗記力を養成する爲に、使用するときは害なからんと信ず、又野卑ならざるイロハタトヘは、敎育上の益あるべし、雙六も敎育的の事を記したるものならば、宜しかるべく『トランプ』は之を以て賭博等に用ひず、

親睦の用具に使へば害なかるべし、去りながら此等の遊戯を爲して、夜を徹する如きは害ありとす、室外に於て追羽子、手鞠、テニス等は勝者が負者の顔面に墨汁を塗抹して快哉と呼び、拍手喝采する如きに至りては害あれども、唯に運動のためにするは差支なかるべしと信ず、

(三)當地方に於ては、學校諸役所の外は總て舊暦を使用す、家々により儀式は少異あれども、大略元旦に其家の主人早く起きて若水を汲み、家内の者之を用ふ、家族集りてお目出たふと挨拶し、後に煎茶を呑み小梅の漬物、吊し柿等を食す。

次に吸物を出し、屠蘇酒を飲む、次に雜煮を喰ふ、雜煮を食するは三ケ日、又は五ケ日間續く家もあり、

雜煮の中へは菜、海老、スルメ、芋、コンブ、大根、蒲鉾等七品とか、九品とか十一品とかを入るなり、

年始の來客には、三方臺に長熨斗をのせ出す、次に煎茶に吊し柿、阿部川餅(當地にては)キナコ餅を出す、

長熨斗臺を用ゐず、勝栗、昆布、ホンダハラ等を臺に載せて出す家もあり、次に數の子をそへて屠蘇酒を出す、

二日は主人が、神前に向つて掃子を持して久と云ふ字を、三回空中に書きて掃初めをなす家あり、

書初め及び買初めは、皆二日になすなり、買初には十六文の錢を以て、物を買ふと云ふ、

門松は松の内飾り置く、七日の七草粥、又その時七草ナヅ菜と庖丁を以て打つこと、十一日の具足開きのこと、十五日粥のこと等家々によりて少差あるべし、一月中に親類の内にて互に日を期して、交々甲の家は他の乙丙丁の家族を招待して、終日愉快に樂ましむることあれば、乙の家は他の甲丙丁の家族を他日を期して招待して樂ましむると云ふ如きことあり、

(四)二三年前までは女子は、高等小學校まで進むべきものすら少數なりしが、近年に至りては高等小學のみならず高等女學校までも續け、猶其上高等女學校を卒業したるものは、高等の學校に入りて修養するものあり、又當地に於て小學教師となれるものあり、故に一般に女子の進取の氣象發達したりと云ふべし、

○

岐阜縣岐阜高等女學校長　荻原忠作

(一)元旦は三始とて、年の始、月の始、日の始なり、始といふ文字は、女偏に台の旁なるが、台は『われ』『うしなふ』『よろこぶ』など訓ず、今『われ』は女子を指すものとして、始といふ文字の組立よりして考ふるに、われのよろこびて所謂春風駘蕩といふ有樣ならんは、家族輯睦國家泰平の始となるべく、われをうしなひて義務を守らず、本文を盡さゞるときは、不和合不整理の家庭の始ともなり、亂臣賊子相繼ぐべき國家の否運の始ともなるべし、而して女子は平和の神と呼ばるゝ程なれば、今日元旦の膳頭に座する女子は、須らく始の字の組立に心して、本日本月は勿論本年の家庭と國家との、愈隆昌ならんことを祈り、而して之が始原は女性にあることを思ひ、其本文を盡して、平和を齎らさんことに留意すべし、

(二)女子の遊戯なる歌骨牌と、追羽子とは年頭の遊戯として、久しく且つ廣く行はれ來れるものにて、其用具の手輕にして、其準備の簡單なるはかく歡迎せらるゝ原因なるべし、談笑の間に相和らぎ、俯仰の間に相親しましむべき、價値多き遊戯なり、但し幼年女兒の爲には『十六むさし』『いろは歌骨牌』『双六』の如き更に分り易きものを與へざれば、彼等に適せざるべきや論ずるを要せざるなり、余は歌骨牌の歌詞の選定に注意を加へて、之を年頭室内遊戯の巨擘と推さんとするものなり、又羽子に至りては室外遊戯として、殆ど間然する所なしと信ずるものなり、夫れ年頭は雨雪の時に屬し、長夜の候に際す歌骨牌は、此間の

無聊を慰め、我を忘れて娯樂せしむるものなり、若し餘り夜を更さしめさず、又朋侶の選擇に過ち無らしめば、此遊戯の爲に弊害を招來せずして、其價値をのみ收むることを得ん、羽子は俯仰するの點よりして肺を運動せしめ、且つ輕き身體各部の運動となり、延きて血行の上に好狀態を持ち來たし、かゝみ勝ちなる女子の爲には、其姿態を一變すべからしむる程の好戯なり、敢て年頭といはず、常時奬勵すべき遊戯なるべし、

(注意)以上二項單に女子に就てのみ述べたり、御發題の子女と意義相異るが如きも、已に上述の如くせり、更に筆を執り直す餘間なし、幸に早呑込みを宥恕したまへ、

(三)一日　早起産神に詣で、歸りて佛壇の前にて祖先の靈に對して、經文を一誦し次に家族相並びて、年頭祝詞を述べ、屠蘇を酌み雜煮を食し、次に廻禮に出掛く、

二日　三日　雜煮のみ

七日　七種といふ名のみ殘りて、粥を炊く家すらなし、

十四日　産神社頭にて左義長を執行す、新年試筆を燃して、手の上るを卜する事、各地に行はるゝものと同じきが如し、又此火にて餅を燒きて食へば、夏病せずとの言ひ傳へありて、社頭大に賑ぎ合ふ、

十五日き二十日　ともに何の企てもなし、

概して一月の儀式すべて簡略なり、趣味ある風習とては、右の左義長のみならん、

(四)これぞと言ひあぐる程のものなし、音曲挿花茶道は盛なるが如し、されど、女子敎育と見んは如何あらん、

口繪解說

◎新年河　日光大谷川の上流、山青く水清き所、一たび此所に至れば、俗腸忽ち洗はるべし

◎明正天皇御宸翰　通俗御茶禮の勅額にして、正二位柳原紀光卿の類聚せられたるものなり

◎孝明天皇御宸翰　孝明天皇陛下より、從一位柳原光愛卿に賜はりたるもの

◎德川公爵家の繁榮　德川慶喜公の一門會合せらるゝ所

◎追羽子　某貴族の春の遊を撮影したるもの

◎家庭の六景　鏑木清方氏の筆にて、其プログラムに曰く、通學、奏樂、結婚、旅行、割烹、育兒、

◎園田邸の園遊會　上の小さき八圖中、東郷、片岡、上村、三將軍あり、花の如き令孃この會合を潤色す、

◎歌かるた　前掲追羽子の對をなして、長閑なる春の遊びを演じたるものなり、

◎名所河　右の上は日光大谷川、其下は同含滿淵、左の上は青山穩田の里川、其下は箱根宮城野、

◎風流紙部屋　德川慶喜公の觀賞する所、この部屋は屏風の如く疊まるゝなり、

◎鶴と龜　龜は小さくて見難けれど、慥に池の中の岩の上に遊べるなり、所は南都の興福寺、

◎正誤　本文の令孃寫眞中、▲▲子毛とあるは、▲▲毛利の誤植なり、

定價

一册	前金貳拾錢
三册三ヶ月分	前金五拾七錢
六册半年分	前金壹圓拾四錢
拾貳册一年分	前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行	金三拾錢
半頁三十二行	金八圓
一頁六十四行	金拾貳圓
表紙一頁	金拾六圓

（色刷は特に御相談に應ず）

御注文規定

一切前金の事（但郵劵代用一割增の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貳丁目貳拾壹番國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件に返信料御送附あるべし

明治三十八年十二月廿九日印刷

明治三十九年一月一日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　株式會社國光社

右代表者　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　橋本忠次郎

印刷人　東京市京橋區築地二丁目二十番地　河本龜之助

發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　株式會社國光社

（電話新橋二六三九番）

（電話新橋特八八番）

女學及家庭書類

- 島田佳矣・野口駿尾 共著 ◎ 女子技藝 編物模樣圖案 全五冊 定價 松ノ巻四十錢 櫻ノ巻六十錢 藤ノ巻五十錢 菊ノ巻五十五錢 梅ノ巻五十六錢 郵税各二錢
- 棚橋絢子著 ◎ 女道叢話 全 定價金三十錢 郵税金四錢
- 三輪田眞佐子著 ◎ 女子之本分 全 定價金二十五錢 郵税金四錢
- 三輪田眞佐子著 ◎ 女子處世論 全 定價金二十錢 郵税金四錢
- 磯部武者五郎著 ◎ 家計簿記法 全 定價金十五錢 郵税金二錢
- 藤野天城著 ◎ 女子小觀 全 定價金二十錢 郵税金四錢
- 堀內新泉著 ◎ 女樂師 全 定價金卅五錢 郵税金六錢
- 松川霓州著 ◎ 結婚と家庭 全 定價金十五錢 郵税金四錢
- 堀內新泉著 ◎ 家庭の鑑 全 定價金十八錢 郵税金四錢
- 女鑑編輯局編 ◎ 女鑑編 ひめかゝみ 全 定價金二十五錢 郵税金四錢

- 梅澤清一著 ◎清少納言と紫式部 全 定價金卅五錢 郵稅金六錢
- 澁谷愛著 ◎萬國女子風俗 全 定價金二十五錢 郵稅金四錢
- 堀內新泉著 ◎少女讀本 全三冊 定價各金十八錢 郵稅各金四錢
- 大町桂月著 ◎常盤御前 全 定價金十三錢 郵稅金二錢
- 小林雨搭著 ◎勾當の內侍 全 定價金十三錢 郵稅金二錢
- 濱田㢘著 ◎袈裟御前 全 定價金十三錢 郵稅金二錢
- 國府犀東著 ◎靜御前 全 定價金十三錢 郵稅金二錢
- 長田偶得著 ◎顔世御前 全 定價金十三錢 郵稅金二錢
- 杉谷正隆著 ◎家庭訓戒修身百首 全 定價金二十錢 郵稅金四錢
- 高瀬眞卿著 ◎學校家庭修身一夕話 全 定價六十錢 特價並三十八錢 郵稅八錢 六錢
- 指原乙子著 ◎女子文章軌範 全 定價金三十錢 郵稅金四錢

文部省檢定濟教科書類及參考書類

- ◎中等漢文讀本　全五冊　內堀維文校閲 國光社編輯所編纂　定價金一圓五十錢 小包料金十五錢
- ◉イージー、レッスンズアンド、コンポジション　全一　慶應義塾大學部講師 宮森麻太郎著　定價金五十五錢 郵税金六錢
- ◉モーア、レッスンズ、イン、グランマー アンド、コンポジション　全二冊　宮森麻太郎著　定價金一圓十五錢 郵税金十二錢
- ◎中等習畫帖（色鉛筆 水彩着色 並）　全八冊　小林萬吾著　定價金一圓九十二錢 郵税金十錢
- ◎中等習畫帖（鉛筆畫）　全八冊　小林萬吾著　定價金一圓三十五錢 郵税金十錢
- ◎法制經濟教科書（法制之部 經濟之部）　全二冊　高橋正熊 松本敬共著　定價各金六十錢 郵税各金六錢
- ◎中等日本文典　全一　大宮兵馬著　定價金五十五錢 郵税金八錢
- ◎中等國語讀本　全十冊　國光社編輯所編纂　定價金二圓二十錢 郵税金卅錢
- ◎國語漢文假字遣法　全一　大宮兵馬著　定價金十八錢 郵税金二錢
- ◎中等國文學史　全一　大林弘一郎著　定價金六十錢 郵税金八錢
- ◎中等生理衛生新教科書　全一　矢島喜源次著　（檢定出願中）
- ◎中等習字帖　全三冊（檢定出願中）　國定教科書揮毫者 內大臣秘書官 日高秩父書　上中下各金十三錢 送料各金二錢
- ◎高等女學校用 動物學新教科書　全一　川村理助著　定價金五十錢 郵税金六錢

川村理助著	高等女學校用 植物學新教科書	全	定價金五十錢	郵稅金六錢
川村理助著	高等女學校用 生理衞生新教科書	全	定價金五十錢	郵稅金六錢
東京府第一高等女學校教諭 市川源三著	高等女學校用 教育學教科書	全	定價金五十錢	郵稅金六錢
市川源三著	高等女學校用 國史教科書	全二冊	定價金各五十錢	郵稅金各六錢
阿多廣介 園田竹熊 共著	女子補習讀本	全二冊	定價一卷廿五錢 二卷卅錢	郵稅各六錢
阿多廣介 原田長松 共著	小學理科教授書	全四冊	定價金二圓二十錢	郵稅金十五錢
同著	小學理科摘要	全四冊	定價金各十錢	郵稅金各二錢
平野秀吉著	國語聲音學	全	定價金六十錢	郵稅金八錢
文學士遠藤隆吉著	公民心得	全	定價金卅五錢	郵稅金六錢
鈴木龜壽著	實驗理科教授法	全	定價金五十五錢	郵稅金八錢
石田鐵郎著	水產製造論	全	定價金一圓廿錢	郵稅金十錢
	討露戰史	第一編 第二編	定價金卅錢 定價金四十錢	郵稅金六錢 郵稅金八錢
西主一 野木衞佐美 合著	海軍遊戲法	全	定價金二十錢	郵稅金四錢
岡部時太郎 森田廣吉 共編	教育適用 舞踏遊戲法	全	定價金廿三錢	郵稅金四錢

再版

理學博士坪井正五郎先生講述

人類學講義

菊版洋裝全一冊
定價金壹圓拾錢
郵稅十錢

吾人の祖先は如何にして出現せしか出現せし當初は如何なる狀態なりしか如何にして文明の端緒は開かれしか如何にして今日の複雑なる社會を組織するに至りしか是れ人類學上最も趣味ある研究なるべし本書は我國に於て人類學の泰斗たる坪井博士の極めて平易なる言文一致にて講述せられし者なれば創世紀の人の說、人類一種論と人類多種論、諸種族系統の探り方、人類の大別小別、日本種族・人類の本源地・人猿同祖論、等あらゆる人類に關する要件を網羅せられたり歷史及人類を研究する人々には座右缺く可らざるの良書たるを信ず

再版

發行所
東京市京橋區築地二丁目
株式會社 國光社
《電話新橋八八・二六九三》

女鑑

明治三十九年一月一日發行　毎月一回一日發行　第拾六年第壹號　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

東京築地株式會社國光社印刷